

大竹西遺跡

第3次調査

—八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告—

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

大竹西遺跡

第3次調査

—八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告—

2008年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



調査地周辺(西上空から)



鉄剣出土状況(西から)



鉄剣 A 面



鉄剣 B 面
1/2

はしがき

大阪府東部に位置する八尾市は、河内平野のほぼ中央部にあり、東に大阪府と奈良県の境を画する生駒山地、南に羽曳野丘陵、西に上町台地の景観をみる地域であります。この河内平野には数多くの遺跡が存在し、私たちの祖先が残した文化財が埋蔵されています。これらのかげがえのない文化財を開発による破壊から守り、後世に永く伝承させることが現在に生きる我々の大きな責務と認識しております。

そこで私共では、こうした消滅の危機にさらされている埋蔵文化財を、一つでも多く後世に伝えるため、事業者のご理解とご協力をいただきつつ、事前に発掘調査を行い、その記録保存に努めている次第であります。

このたび、平成8年度に実施しました大竹西遺跡(第3次)の公共事業に伴う発掘調査の整理が完了し、報告書として刊行することになりました。

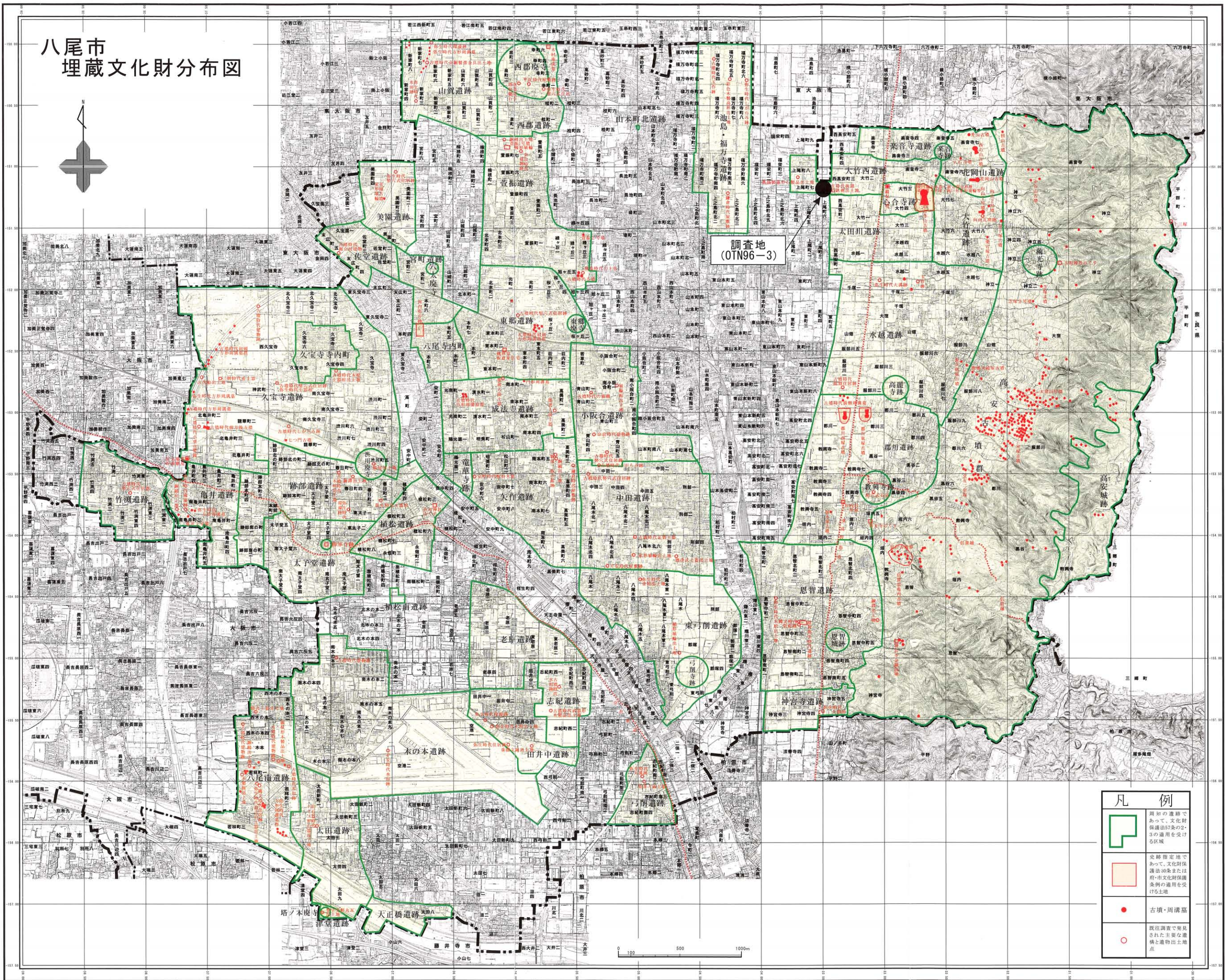
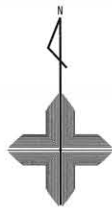
本書が地域史解明はもとより、埋蔵文化財の保護及び啓発・普及の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様方に心より御礼申し上げますとともに、今後、尚一層のご理解とご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

平成20年1月

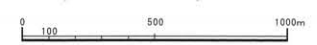
財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 岩 崎 健 二

八尾市 埋蔵文化財分布図



調査地
(OTN96-3)

凡 例	
	周知の遺跡であって、文化財保護法第37条の2-3の適用を受ける区域
	史跡指定地であって、文化財保護法第30条または府・市文化財保護条例の適用を受ける土地
	古墳・溝溝墓
	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点



例 言

1. 本書は大阪府八尾市上尾町七丁目1番地内で実施した八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する大竹西遺跡第3次発掘調査(OTN96-3)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成8年8月19日～平成9年3月31日にかけて、西村公助・樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約2,000 m²である。
1. 現地調査にあたっては、下記の方々の参加を得た。(敬称略、五十音順)
秋山典子、朝田 要、市森千恵子、岡部和志、岸田靖子、坂田典彦、佐藤哲也、妹尾真由美、辰野五津子、田中慎太郎、辻野優子、中西明美、中村百合、西岡千恵子、西田真紀、西村和子、松井三千子、松尾 実、松田真希子
1. 内業整理は、現地調査終了後随時実施し、平成20年1月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務については、以下の通りである。(敬称略、五十音順)
〈遺物実測〉 板野行信、市森、岩沢玲子、小野沢健二、岸田、小林範彰、沢村妙子、田島和恵、辻野、中西、中村、西岡、西村(和)、水木純司、村本恵一郎、山内千恵子
〈図面トレース〉 中西、西岡、市森
〈遺物写真撮影〉 西村(公)
1. 本書の作成にあたっては、西村(公)・樋口が執筆を行い、文責はそれぞれ文末に記した。編集は西村(公)・樋口が行った。
1. 本調査では、出土した鉄剣について、X線透過試験と顕微鏡観察を(財)元興寺文化財研究所に、またX線CTによる撮影を奈良国立文化財研究所にそれぞれ依頼し、自然科学的な分析を試みた。さらに、以下の各位に、大竹西遺跡の自然科学的検討を委託・依頼し、玉稿を賜った。記して厚く感謝の意を表す(敬称略)。なお、原稿は、現地調査終了直後に頂いたもので、当時の原稿をそのまま掲載した。

第4章 自然科学分析

第1節 大竹西遺跡出土の鑄造鉄剣の保存処理 (財)元興寺文化財研究所 村田忠繁

第2節 大竹西遺跡出土鉄剣の埋蔵環境に関する自然科学的解析

核燃料サイクル開発機構 三ツ井誠一郎・住友金属鉱山(株) 永井 巖

第3節 石材・砂礫の分析 八尾市立曙川小学校教諭 奥田 尚

第4節 大竹西遺跡第3次調査(OTN96-3)に伴う花粉分析(概報)

(株)川崎地質 渡辺正巳

第5節 大竹西遺跡の弥生一古墳時代埋没河道堆積物と河川地形

(財)東大阪市文化財協会 松田順一郎

1. 鉄剣および板状木製品の保存処理については、(財)元興寺文化財研究所に委託した。

1. 調査および本書作成の過程では、下記の方々から、有益な御指導、御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。(敬省略、団体五十音順、団体内五十音順、団体名および所属は調査時のもの)
森岡秀人(芦屋市教育委員会)、村上恭通(愛媛大学)、都出比呂志(大阪大学)、大野 薫・瀬垣田佳男・山田隆一(大阪府教育委員会)、藤岡達也(大阪府教育センター)、橋本 久・村川行弘(大阪経済法科大学)、井上智博((財)大阪府文化財調査研究センター)、渡邊昌宏(大阪府立弥生文化博物館)、尾崎 誠・木沢直子・村田忠繁((財)元興寺文化財研究所)、河野一隆・野島永((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)、網田龍生(熊本市教育委員会)、池淵俊一(島根県埋蔵文化財センター)、肥塚隆保(奈良国立文化財研究所)、濱田延充(寝屋川市教育委員会)、松田順一郎((財)東大阪市文化財協会)、川越哲志(広島大学)、赤澤徳明(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、奥田 尚(八尾市立曙川小学校)
1. 現地調査および本書作成にあたっては、八尾市教育委員会文化財課ならびに、(財)八尾市文化財調査研究会職員諸氏の協力を得た。
1. 調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

凡 例

1. 本書で用いた方位は国土座標第VI座標系の座標北を示す。
1. 本書で用いた標高はすべて T.P.(東京湾平均海面) + 値(m)である。
1. 本書に掲載した地図は、八尾市教育委員会発行の 16,000 分の 1 の八尾市埋蔵文化財分布図-平成 19 年度版-、国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図、八尾市発行の 2,500 分の 1 地形図(平成 8 年 7 月編纂)を使用した。
1. 遺構名は下記の通りに表示し、遺構番号の前に冠した。
土坑—SK、小穴—SP、溝—SD、落ち込み—SO、河川—NR、畦畔—畦畔、水田—水田
1. 遺構番号は、3桁ないし4桁の数字で表記した。上1桁については遺構検出面を示し、以下の桁は遺構の検出番号を表す。
1. 遺構実測図の縮尺は、平面図が 1/40 と 1/600、断面図が 1/20 と 1/40 を基調とした。
1. 遺物実測図の縮尺は、土器は 1/4 に統一したが、その他については適宜縮尺を設定した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
縄文土器・弥生土器・土師器・瓦器・石製品・鉄製品—白、須恵器—黒、木製品—斜線
1. なお本書で使用している土器の器種分類や編年はおもに下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をそのつど提示することは割愛した。
縄文土器—家根祥多 1994「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
弥生土器—寺沢 薫・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅰ—』木耳社
寺沢 薫・森岡秀人編著 1990『弥生土器の様式と編年—近畿編Ⅱ—』木耳社
正岡睦夫・松本岩雄編著 1992『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社

土師器— 田辺昭三他 1963『船橋』平安学園考古学クラブ

須恵器— 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ

瓦 器— 百瀬正恒・近江俊秀・尾上 実・森島康夫 1995「各地の土器様相 7. 近畿」「土器・陶磁器 6. 瓦器碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

1. 土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編 1989『新版標準土色帖 9 版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修を用いた。
1. 遺構は、土坑、小穴、溝、河川、落ち込み、畦畔、水田の順に記載する。また、出土遺物は、各面から検出した遺構および基本層序ごとに記載する。
1. 文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号はすべて一致する。
1. 写真図版の縮尺は不同である。

目次

巻頭図版 1 調査地周辺 鉄剣出土状況	
巻頭図版 2 鉄剣A面 鉄剣B面	
はしがき	
八尾市埋蔵文化財分布図	
例言	
凡例	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯と方法	7
第1節 調査に至る経過	7
第2節 調査経過(調査日誌抄録)	8
第3節 調査の方法	10
第3章 調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 検出遺構と出土遺物	15
第1面	15
第2面	18
第3面	31
第4面	36
第5面	51
第6面	57
第7面	80
遺構に伴わない出土遺物	94
第4章 自然科学分析	103
第1節 大竹西遺跡出土の鑄造鉄剣の保存処理 (財)元興寺文化財研究所 村田忠繁	103
第2節 大竹西遺跡出土鉄剣の埋蔵環境に関する自然科学的解析 核燃料サイクル開発機構 三ツ井誠一郎・住友金属鉱山(株) 永井 巖	108
第3節 石材・砂礫の分析 八尾市立曙川小学校教諭 奥田尚	113
第4節 大竹西遺跡第3次調査(OTN96-3)に伴う花粉分析(概報)(株)川崎地質 渡辺正巳	128
第5節 大竹西遺跡の弥生—古墳時代埋没河道堆積物と河川地形 (財)東大阪市文化財協会 松田順一郎	136
第5章 まとめ	152

挿 図 目 次

第 1 図	大竹西遺跡周辺の遺跡分布図	2
第 2 図	調査地周辺図	4
第 3 図	地区割図	10
第 4 図	北壁地層断面図	13・14
第 5 図	畦畔 101～畦畔 105 断面図	16
第 6 図	第 1 面検出遺構平面図	17
第 7 図	第 2 面検出遺構平面図	24
第 8 図	第 2 面東部検出遺構平面図	26
第 9 図	S O 201 杭検出状況平面・立面図	27
第 10 図	S O 201 出土遺物実測図(1)	28
第 11 図	S O 201 出土遺物実測図(2)	29
第 12 図	S O 201 出土遺物実測図(3)	30
第 13 図	S D 301 遺物出土状況図	32
第 14 図	第 3 面検出遺構平面図	33
第 15 図	S D 301～S D 303 出土遺物実測図	34
第 16 図	第 4 面検出遺構平面図	38
第 17 図	S D 401～S D 403 平・断面図	39
第 18 図	S D 401 出土遺物実測図(1)	40
第 19 図	S D 401 出土遺物実測図(2)	41
第 20 図	S D 401 出土遺物実測図(3)	42
第 21 図	S D 401 出土遺物実測図(4)	43
第 22 図	S D 401 出土遺物実測図(5)	44
第 23 図	S D 402 出土遺物実測図(1)	48
第 24 図	S D 402 出土遺物実測図(2)	49
第 25 図	S D 403 出土遺物実測図	50
第 26 図	N R 501 出土遺物実測図	52
第 27 図	第 5 面検出遺構平面図	53
第 28 図	S K 501・N R 501 平・断面図	54
第 29 図	S K 501 出土遺物実測図(1)	55
第 30 図	S K 501 出土遺物実測図(2)	56
第 31 図	S K 602 平・断面図	57
第 32 図	S K 603 平・断面図	58
第 33 図	第 6 面検出遺構平面図	59
第 34 図	S K 614 平・断面図	60
第 35 図	第 6 面西部検出遺構平面図	61

第36図	S K602・S K603・S K614・S D615 出土遺物実測図	62
第37図	NR601 平・断面図	69・70
第38図	NR601 出土遺物実測図(1)	72
第39図	NR601 出土遺物実測図(2)	73
第40図	NR601 出土遺物実測図(3)	74
第41図	NR601 出土遺物実測図(4)	75
第42図	NR601 出土遺物実測図(5)	76
第43図	NR701 出土遺物実測図(1)	81
第44図	第7面検出遺構平面図	82
第45図	NR701 出土遺物実測図(2)	84
第46図	NR701 出土遺物実測図(3)	85
第47図	NR701 出土遺物実測図(4)	86
第48図	NR701 出土遺物実測図(5)	87
第49図	NR701 出土遺物実測図(6)	88
第50図	第V層～第VIII層出土遺物実測図	96
第51図	第XI層出土遺物実測図(1)	98
第52図	第XI層出土遺物実測図(2)	99
第53図	第XIV層出土遺物実測図	102

表 目 次

第1表	第1面畦畔一覧表	16
第2表	第1面水田一覧表	16
第3表	第2面土坑一覧表(1)	18
第4表	第2面土坑一覧表(2)	19
第5表	第2面小穴一覧表(1)	19
第6表	第2面小穴一覧表(2)	20
第7表	第2面小穴一覧表(3)	21
第8表	第2面溝一覧表	22
第9表	SO201 出土遺物観察表	25
第10表	SO201 出土杭法量表	25
第11表	SD301 出土遺物観察表	35
第12表	SD302 出土遺物観察表	35
第13表	SD303 出土遺物観察表	35
第14表	SD401 出土杭法量表	37
第15表	SD401 出土遺物観察表(1)	45
第16表	SD401 出土遺物観察表(2)	46
第17表	SD401 出土遺物観察表(3)	47

第 18 表	S D402 出土杭法量表	48
第 19 表	S D402 出土遺物觀察表	50
第 20 表	S D403 出土遺物觀察表	50
第 21 表	N R 501 出土遺物觀察表	52
第 22 表	S K 501 出土遺物觀察表	52
第 23 表	S K 602 出土遺物觀察表	58
第 24 表	S K 603 出土遺物觀察表	58
第 25 表	S K 614 出土遺物觀察表	60
第 26 表	第 6 面土坑一覽表	63
第 27 表	第 6 面小穴一覽表(1)	64
第 28 表	第 6 面小穴一覽表(2)	65
第 29 表	第 6 面小穴一覽表(3)	66
第 30 表	S D615 出土遺物觀察表	66
第 31 表	第 6 面檢出溝一覽表	67
第 32 表	N R 601 出土杭法量表	68
第 33 表	N R 601 出土遺物觀察表(1)	71
第 34 表	N R 601 出土遺物觀察表(2)	77
第 35 表	N R 601 出土遺物觀察表(3)	78
第 36 表	N R 601 出土遺物觀察表(4)	79
第 37 表	N R 701 出土遺物觀察表(1)	80
第 38 表	N R 701 出土遺物觀察表(2)	89
第 39 表	N R 701 出土遺物觀察表(3)	90
第 40 表	N R 701 出土遺物觀察表(4)	91
第 41 表	N R 701 出土遺物觀察表(5)	92
第 42 表	N R 701 出土遺物觀察表(6)	93
第 43 表	第 V 層出土遺物觀察表(1)	94
第 44 表	第 V 層出土遺物觀察表(2)	95
第 45 表	第 VI 層出土遺物觀察表	95
第 46 表	第 VII 層出土遺物觀察表	95
第 47 表	第 VIII 層出土遺物觀察表	95
第 48 表	第 XI 層出土遺物觀察表(1)	100
第 49 表	第 XI 層出土遺物觀察表(2)	101
第 50 表	第 XIV 層出土遺物觀察表	102

写 真 目 次

写真 1	第 1 次調査地	7
写真 2	報道取材状況	9

写真 3	現地説明会	9
写真 4	現地説明会遺物見学風景	9
写真 5	花粉分析サンプル採取作業状況	9
写真 6	第Ⅵ層形成過程調査状況	10
写真 7	第2面東部測量状況	18
写真 8	第2面東部掘削状況	18
写真 9	S O 201調査状況	23
写真10	S O 201調査状況	23
写真11	S O 201杭取り上げ状況	23
写真12	第3面調査状況	32
写真13	S D 301出土遺物撮影状況	32
写真14	第4面調査状況	37
写真15	第4面測量状況	37
写真16	第4面実測状況	37
写真17	第4面掘削状況	37
写真18	S K 501調査状況	51
写真19	第6面西部調査状況	79
写真20	第6面西部調査状況	79
写真21	N R 601掘削状況	79
写真22	N R 601調査状況	79
写真23	N R 701掘削状況	93
写真24	N R 701断面撮影状況	93

図 版 目 次

図版 1	調査地遠景 調査地遠景
図版 2	調査地近景 調査前の状況
図版 3	第1面全景 水田106内足跡検出状況
図版 4	畦畔101断面 畦畔102断面 畦畔103断面 畦畔104断面 畦畔105断面
図版 5	第2面東部全景 第2面東部全景
図版 6	S O 201杭検出状況全景 S O 201杭検出状況 S O 201杭1～杭11検出状況 S O 201杭16～杭20検出状況 S O 201杭31～杭34検出状況
図版 7	第3面東部全景 第3面東部全景
図版 8	S D 301 S D 301遺物出土状況【遺物番号14】 S D 301遺物出土状況【遺物番号15】
図版 9	第4面全景 S D 401～S D 403
図版10	S D 401断面 S D 401遺物出土状況【遺物番号52・S 3・S 5】 S D 401遺物出土状況【遺物番号59】
図版11	S D 402断面 S D 402杭1～杭5検出状況 S D 403遺物出土状況【遺物番号77】

- 図版 12 第 5 面東部全景 第 5 面東部全景
- 図版 13 S K 501
- 図版 14 S K 501 断面 A-A' B-B' S K 501 断面 A-A' S K 501 断面 B-B'
- 図版 15 第 6 面西部全景 第 6 面西部全景
- 図版 16 S K 602 断面 S K 603 S K 603 遺物出土状況
- 図版 17 第 6 面東部全景 NR 601 全景
- 図版 18 NR 601 西部断面 NR 601 東部断面
- 図版 19 NR 601 遺物出土状況【遺物番号 102】 NR 601 遺物出土状況【遺物番号 108】 NR 601 遺物出土状況【遺物番号 112】 NR 601 遺物出土状況【遺物番号 132】 NR 601 遺物出土状況【遺物番号 135】 NR 601 北西側杭検出状況 NR 601 杭 10 検出状況 NR 601 杭 11～杭 13 検出状況
- 図版 20 第 7 面全景 NR 701 遺物出土状況【遺物番号 147】 NR 701 遺物出土状況【遺物番号 148】 NR 701 遺物出土状況【遺物番号 157】 NR 701 遺物出土状況【遺物番号 137】
- 図版 21 S O 201 出土遺物(1)
- 図版 22 S O 201 出土遺物(2)
- 図版 23 S D 301～S D 303 出土遺物
- 図版 24 S D 401 出土遺物(1)
- 図版 25 S D 401 出土遺物(2)
- 図版 26 S D 401 出土遺物(3)
- 図版 27 S D 401～S D 403 NR 501 S K 501 出土遺物
- 図版 28 S K 501 出土遺物
- 図版 29 S K 501 出土遺物
- 図版 30 S K 501 出土遺物
- 図版 31 S K 501 出土遺物 X線透過撮影
- 図版 32 S K 501 出土遺物 X線CT撮影
- 図版 33 S K 603 S K 614 出土遺物
- 図版 34 NR 601 出土遺物(1)
- 図版 35 NR 601 出土遺物(2)
- 図版 36 NR 601 出土遺物(3)
- 図版 37 NR 701 出土遺物(1)
- 図版 38 NR 701 出土遺物(2)
- 図版 39 NR 701 出土遺物(3)
- 図版 40 NR 701 出土遺物(4)
- 図版 41 第Ⅶ層 第Ⅷ層 第Ⅺ層出土遺物
- 図版 42 第Ⅺ層出土遺物
- 図版 43 第Ⅺ層 第Ⅻ層出土遺物

第1章 遺跡の位置と環境

八尾市は、大阪府の中央東に位置する。本市は、地形的には生駒山地西側斜面から扇状地にかけての東部、河内平野の広がる西部、羽曳野丘陵の北端に位置する南部に区分できる。この内、本市の大部分は西部の河内平野に占められる。

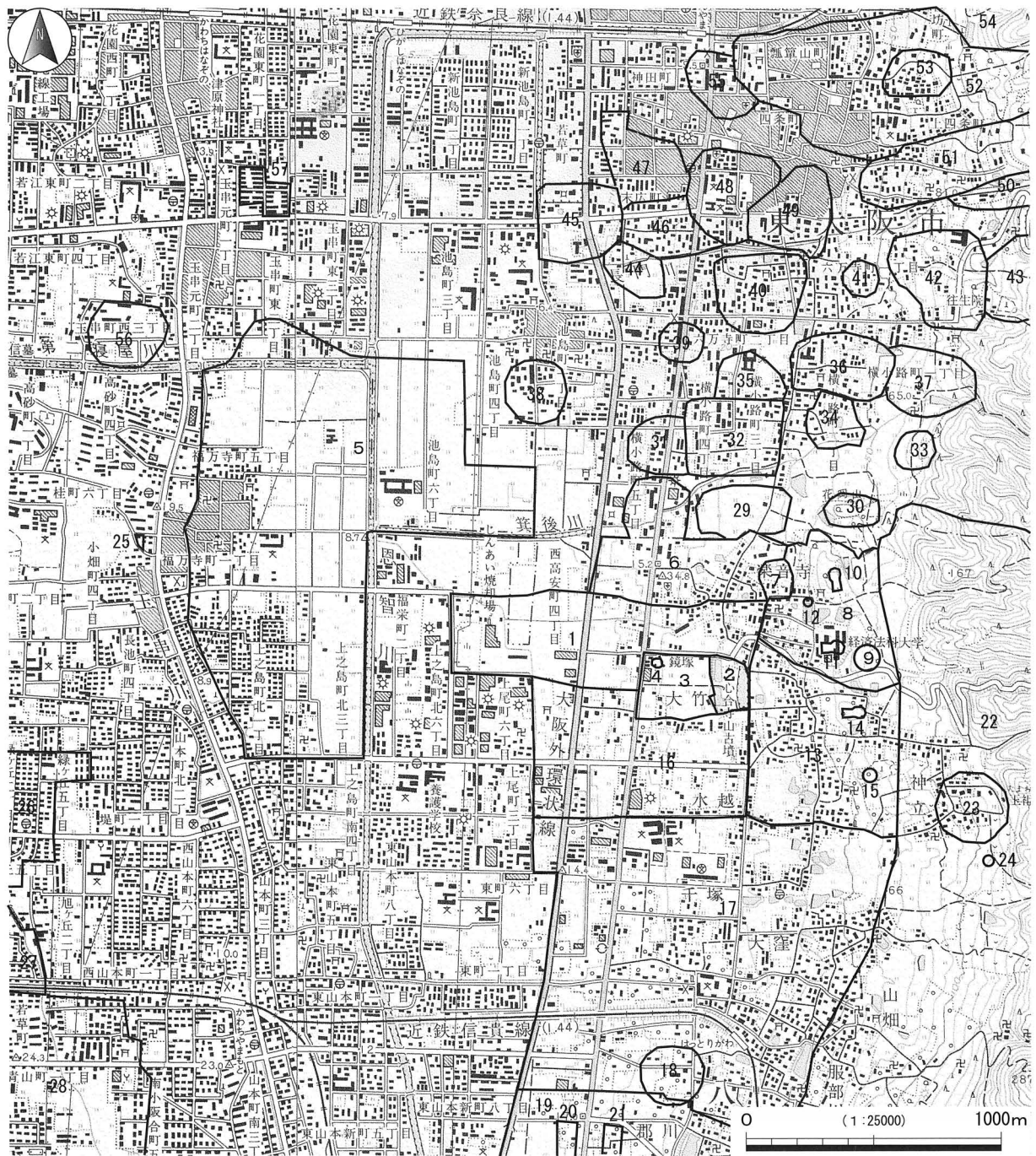
河内平野には、長瀬川と玉串川を中心に、恩智川、楠根川、平野川などの大小さまざまな規模をもつ河川が北または北西へ貫流している。当平野は、これらの河川が運んできた土砂の堆積によって形成された沖積地で、低地や自然堤防状微高地が展開し、農作物が実る肥沃な土壌が広がっていたと想像される。しかし、河川が氾濫すると、農作物が浸水の被害に遭い、それだけにとどまらず、居住域にまで及ぶ深刻な被害が度々あった。実際、発掘調査でもこれを裏付ける資料が多く検出されている。肥沃な土壌＝低い土地であることから災害が起りやすい、危険と隣り合わせの平野に人々は住んでいたと言える。

大竹西遺跡は、八尾市の北東部に位置し、生駒山地の山麓から西側に広がる扇状地と、河内平野の沖積地に立地している。本遺跡の範囲は、八尾市大竹を中心に東西1.2km、南北0.3kmとされている。当遺跡の標高は、東部の心合寺山古墳が所在している付近で、T.P. +34m前後と最も高く、西側に向かって緩やかに傾斜し、国道170号線付近でほぼ平坦になり、T.P. +9.5mを測る。さらに西部の標高は、7.0～7.5mを測り低くなる地形である。今回の調査地は、本遺跡の西部にあり、恩智川の東側と箕後川の南側に位置する。

本遺跡周辺では、旧石器時代の生活の痕跡は見つかっていない。本市内では、羽曳野丘陵の北端から平野部にかけて位置する八尾南遺跡で後期旧石器時代の遺物が出土(福田1989)しており、人々が活動しはじめることが判明している。

縄文時代草創期～中期にも本遺跡周辺では生活の痕跡は見つかっていない。中期末～後期中葉にかけては、生駒山地の西側の扇状地上に位置する水越遺跡で居住域を確認している(滔1997・成海2001)。また、同地形上に位置する楽音寺遺跡では、後期の遺構や包含層を確認している(高萩1984)。さらに、同地形上に位置する馬場川遺跡(坂田2000)や太田川遺跡(坪田1994)でも後期～晩期の遺構や遺物が出土している。このことから同時期の遺跡は、生駒山地西側の扇状地に分布していることが判明している。一方、池島・福万寺遺跡では、後期～晩期の遺物を確認している(井上2002)が、人々の活動が活発に行われた痕跡はいまだ判明していない。

弥生時代には平野部に遺跡が出現している状況が確認でき、活況を呈し始める。本遺跡では弥生時代前期頃から人々の生活が始まる。居住していた場所の特定までには至っていないが、前期の墓域を検出している(原田2007)ことから、近隣に居住域が存在する可能性がかなり高い。本遺跡北西に近接している池島・福万寺遺跡では前期の水田を検出している(井上2002)。弥生時代中期には、本遺跡や池島・福万寺遺跡で水田を検出している。また、水越遺跡では、中期の居住域を確認している(西村1997)。



- | | | | |
|------------|-----------|-----------------|-----------|
| 1 大竹西遺跡 | 16 太田川遺跡 | 31 西代遺跡 | 46 段上遺跡 |
| 2 心合寺山古墳 | 17 水越遺跡 | 32 馬場川遺跡 | 47 五合田遺跡 |
| 3 心合寺跡 | 18 高麗寺跡 | 33 浄土寺跡 | 48 縄手遺跡 |
| 4 鏡塚古墳 | 19 郡川遺跡 | 34 貝花遺跡 | 49 上六万寺遺跡 |
| 5 池島・福万寺遺跡 | 20 郡川西塚 | 35 北屋敷遺跡 | 50 五里山古墳群 |
| 6 楽音寺遺跡 | 21 郡川東塚 | 36 半堂遺跡 | 51 花草山古墳群 |
| 7 楽音寺跡 | 22 高安古墳群 | 37 浄土寺谷古墳群 | 52 山畑古墳群 |
| 8 大光寺山遺跡 | 23 蘭光寺跡 | 38 池島東遺跡 | 53 山畑遺跡 |
| 9 花岡山遺跡 | 24 芝塚古墳 | 39 コモ田遺跡 | 54 客坊山遺跡群 |
| 10 西の山古墳 | 25 山本町北遺跡 | 40 船山遺跡 | 55 市尻遺跡 |
| 11 花岡山古墳 | 26 萱振遺跡 | 41 桜井古墳群 | 56 玉串遺跡 |
| 12 大石古墳 | 27 東郷遺跡 | 42 岩滝山遺跡(往生院城跡) | 57 花園遺跡 |
| 13 大竹遺跡 | 28 小阪合遺跡 | 43 往生院金堂跡 | |
| 14 向山古墳 | 29 西の口遺跡 | 44 下六万寺遺跡 | |
| 15 愛宕塚古墳 | 30 萩山古墳 | 45 北鳥池遺跡 | |

遺跡の名称および範囲は2001. 3『大阪府文化財分布図』大阪府教育委員会編を参考とし、主な遺跡、古墳、寺跡を抽出した。

第1図 大竹西遺跡周辺の遺跡分布図

後期には本遺跡や、池島・福万寺遺跡、太田川遺跡、水越遺跡、馬場川遺跡、岩滝山遺跡などで遺構や遺物の検出があり、集落の存在が明らかになっている。なかでも生駒山地の標高60～100m付近に存在している岩滝山遺跡では、後期初頭から後期後半に続く居住域を確認している(芋本1999)。このことから弥生時代後期には、標高約100m付近から西側に広がる扇状地上および、さらに西へ広がる河内平野に集落が存在している状況が明らかになってきた。

続く後期末～古墳時代にかけては、西の口遺跡で壺棺墓をおよび溝を検出しており(菅原1989)、当時の墓域が存在していることが明らかになっている。

古墳時代には、当遺跡の東方の扇状地上に前期の西の山古墳、花岡山古墳が、中期の心合寺山古墳、鏡塚古墳が築かれる。特に、心合寺山古墳では、史跡整備に伴う発掘調査が行われ、墳丘は三段築成であること、西側のくびれ部には造り出しが存在していること、後円部の埋葬主体は粘土槨であることなどが判明している(消他2001)。本遺跡では同時代前期(布留式期)の土坑が検出され、瑪瑙製の鍬形石製品が出土している(原田2007)。また、池島・福万寺遺跡では、前期の遺構(廣瀬2007)および中期後半～後期の遺構を検出している(井上2002)。後期には、西の口遺跡で後期初頭の掘立柱建物などの遺構を検出しており、居住域の存在が明らかになっている(菅原1989)。しかし、居住域の発見は少なく、その詳細は不明な点が多い。

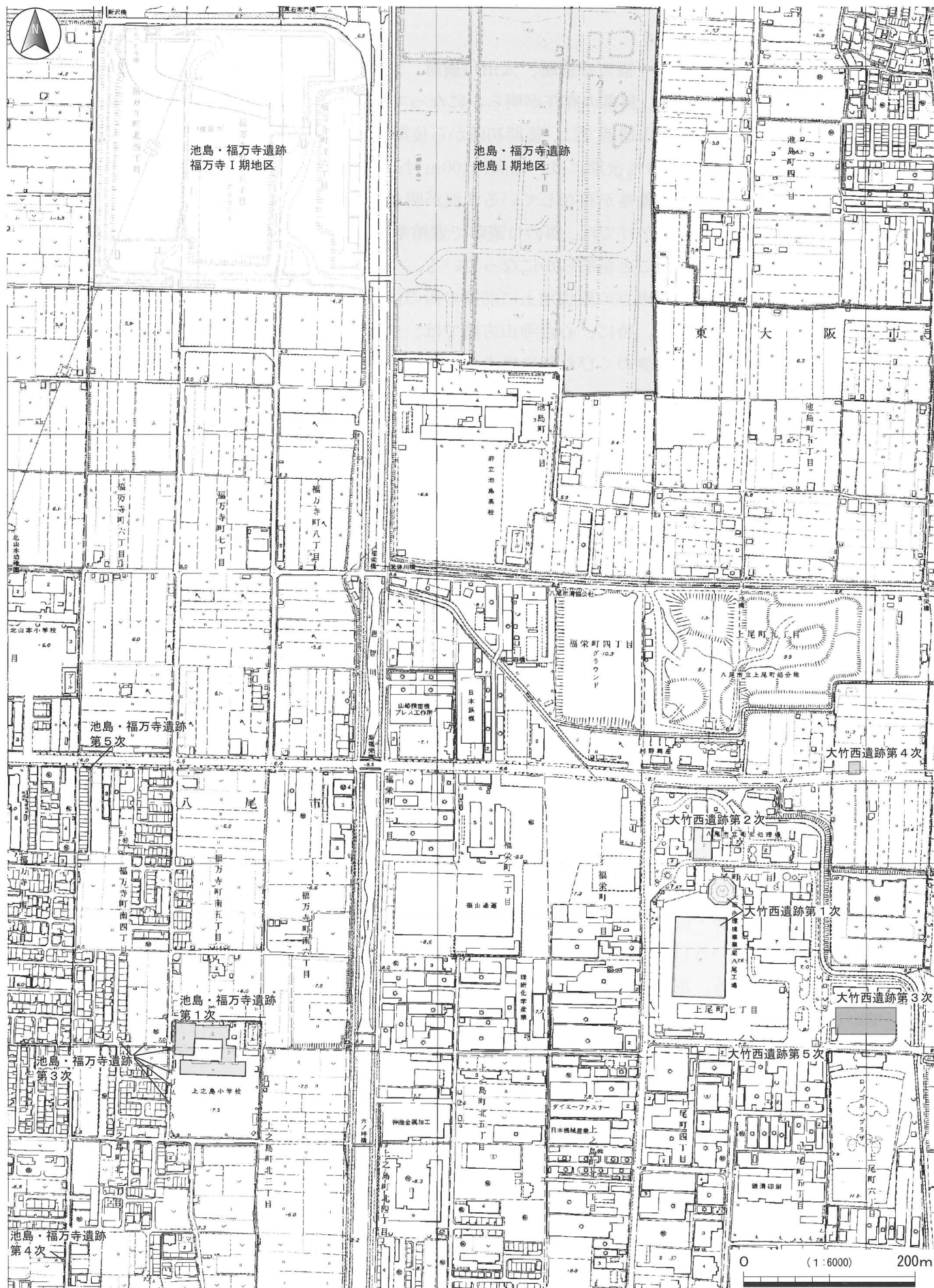
また、古墳時代後期には、大石古墳や芝塚古墳のような横穴式石室をもつ古墳が生駒山地西側の山麓から扇状地にかけて数多く築かれる。芝塚古墳は、両袖式の横穴式石室で石棺三基および多数の土器や鉄製品が見つかった(高萩1993)。大石古墳は、無袖式の横穴式石室で、玄室からは装飾器台の他、多くの土器および鉄製品の出土があった(坪田1995)。

奈良時代には、本遺跡の東側に存在している心合寺山古墳の南西側に大竹廃寺(心合寺跡)が造営される。寺域などの詳細は不明な点が多いが、奈良～平安時代の瓦が寺域推定地から出土しているほか、心合寺山古墳からも白鳳～奈良時代の瓦が出土している。また、大竹廃寺から南へ約1.4kmには郡川廃寺(高麗寺跡)があり、この場所からは、奈良時代前期～後期にかけての遺物が多数出土している。

本遺跡周辺では平安時代には条里が施行され、計画的な水田開発と水田経営があったと推定されており、このことを示す水田が池島・福万寺遺跡から検出されている(井上2002)。

鎌倉時代には池島・福万寺遺跡で遺構や遺物の検出があり、屋敷跡や里道が存在していることが明らかになっている(米田1990)。同時代には前時代に引き続き池島・福万寺遺跡では条里の水田が検出されている。花岡山遺跡では居住域(中井他1988・原田1989)と墓域(成海1997)を検出している。また、岩滝山遺跡では鎌倉～室町時代の遺構が検出されている(芋本1999)。

江戸時代以降、当遺跡周辺では主に水田が維持されてきた。現在、住宅や工場などの建物が立ち並び水田が減少していくなかでも、条里地割の水田が所々で残っており、八尾市福万寺や東大阪市池島町一帯では、のどかな田園風景を見ることができる。(西村)



第 2 図 調査地周辺図

参考文献

- ・原田 修 1981 「第2章 馬場川遺跡の調査」『馬場川遺跡・上六万寺遺跡 山畑66号墳調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報22 東大阪市教育委員会
- ・高萩千秋 1984 「7 楽音寺遺跡」『昭和58年度事業概要報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告5 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・1987 『西の口遺跡第1次発掘調査概要-市立縄手中学校分校建設工事に伴う第1次調査-』 (財)東大阪市文化財協会
- ・1988 『八尾市史(前近代編)』八尾市役所
- ・中井秀樹・山本 昭・田中賢人 1988 『河内花岡山遺跡』大阪経済法科大学考古学研究報告第9集 花岡山遺跡学術調査団編
- ・福田英人 1989 『八尾南遺跡-旧石器出土第3地点- 大阪府文化財調査報告書第36輯』大阪府教育委員会
- ・原田昌則 1989 「Ⅲ花岡山遺跡(第1次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告22 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・菅原章太 1990 「西の口遺跡第2次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1989年度』 (財)東大阪市文化財協会
- ・米田敏幸 1990 『福万寺遺跡』一上之島町北3丁目22-1の調査-(財)八尾市文化財調査研究会報告24 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋他 1992 「大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1993 『高安古墳群 芝塚古墳-八尾市神立1081の農業用地道路新設工事に伴う古墳の発掘調査報告一』 (財)八尾市文化財調査研究会報告38 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1994 「Ⅲ太田川遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃 1996 『史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業調査報告1 八尾市教育委員会
- ・消 齋 1997 「19. 水越遺跡(95-582)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告36平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・西村公助 1997 「V 水越遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1997 「IV花岡山遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告57』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・芋本隆裕 1999 『岩滝山遺跡第5次調査発掘調査概要』 (財)東大阪市文化財協会
- ・消 齋 1997 「水越遺跡(95-582)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・小野久隆他 2000 『東大阪市・八尾市所在 池島・福万寺遺跡1(98-3・99-1調査区)-寝屋川流域下水道八尾枚岡幹線(第3工区)下水管渠築造工事に伴う発掘調査報告書一』 (財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第48集 (財)大阪府文化財調査研究センター

- ・坂田典彦 2000 「第25章 馬場川(第11次)・西代遺跡の調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告』 - 平成11年度-東大阪市教育委員会
- ・藤城泰 中西克宏 2000 『岩滝山遺跡第6次調査発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会
- ・樋口 薫 2001 「IV大竹西遺跡(第4次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・五井若葉他 2001 『楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書』 (財)東大阪市文化財協会
- ・成海佳子 2001 「II 水越遺跡第7次調査(MK2000-7)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告2 平成12年度』 八尾市教育委員会 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・滔 斎他 2001 『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書-史跡整備に伴う発掘調査の概要-』八尾市文化財調査報告45 史跡整備事業調査報告2 八尾市教育委員会
- ・井上伸一 2002 『共同住宅建設に伴う楽音寺遺跡第3次発掘調査報告書』 (財)東大阪市文化財協会
- ・井上智博 2002 『八尾市・東大阪市所在 池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区)―一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第79集 (財)大阪府文化財センター
- ・高萩千秋他 2003 「II 楽音寺・大竹西遺跡(第2次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告76』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2006 「池島・福万寺遺跡(第3次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告86』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2006 「池島・福万寺遺跡(第4次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告86』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2006 「池島・福万寺遺跡(第5次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告86』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・廣瀬時習 2007 『東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在 池島・福万寺遺跡3―恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書―(池島I期地区)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第158集 (財)大阪府文化財センター
- ・原田昌則他 2007 『大竹西遺跡第1次発掘調査報告書』―大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う― (財)八尾市文化財調査研究会報告94 (財)八尾市文化財調査研究会

第2章 調査の経緯と方法

第1節 調査に至る経過

大竹西遺跡は、八尾市域の北東部に位置している。当遺跡の付近一帯は、前章で述べたように古来より人々の生活が営まれてきた地域である。近世以降、特に大和川付け替え以降は、水田以外にも綿を栽培するなど、近年まで農村の風景を残していた。

現在の大竹西遺跡近辺では、昭和45年に八尾市東部を南北に貫く国道170号線(大阪外環状線)が開通、大阪府東部を南北に結ぶ交通、物流の要衝として、今なお発展し続けている。

このような状況下、昭和63年に大阪市環境事業局から上尾町7丁目地内に所在する八尾工場建替えの事業計画が出された。その旨を受けた八尾市教育委員会(以下市教委と記す)は、事業計画予定地から北西約800mの地点に縄文時代晩期～近世まで連続と続く遺構を検出した池島遺跡・福万寺遺跡(東大阪市・八尾市)が位置すること、また東約150mに位置する八尾学園敷地内においても埋蔵文化財が検出されていることなどから、当該地においても未だ知られざる遺跡が存在する可能性が高いとして、遺構確認調査の実施が必要と判断し、平成元年に市教委による遺構確認調査が実施された。その結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代前期の遺物包含層が確認された。この調査の結果を受けた(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)は、平成2年6月～平成4年7月にかけて、工場本体部分と煙突部分の約9,000㎡について発掘調査を実施した【大竹西遺跡第1次調査】(写真1)。

さらに平成3年12月～平成4年1月には、第1次調査地に北接する上尾町8丁目地内において衛生処理場更新工事に伴う発掘調査(OTN91-2)が研究会により行われた。両発掘調査の結果、上尾町一帯に縄文時代～近世にかけての複合遺跡が存在することが判明した。

今回の調査は八尾市立屋内プール建設に伴い実施したものである。建設の対象地域である上尾町7丁目地内は、『八尾市埋蔵文化財分布図』に記載されている埋蔵文化財包蔵地「大竹西遺跡」に全域が包括されている。そのため上記事業における埋蔵文化財の取扱いについて、事業主体である八尾市、文化財保護の行政機関である市教委、調査担当機関である研究会の三者は協議を行なった。その結果、発掘調査を実施するにあたっては、本事業における埋蔵文化財の取扱い全般を協定書で定めることとした。協定書は、八尾市・市教委・研究会の三者で締結し、発掘調査は、協定に基づき、研究会が八尾市から委託を受けて実施した。

今回の調査は研究会が大竹西遺跡内で行った発掘調査の第3次調査にあたる。調査地は、第1次調査地の東隣りに位置する。調査区は、東西幅71m・南北幅28.66mで、調査総面積は約2,000㎡を測る。

現地調査は、平成8年8月19日～平成9年3月31日まで行い、報告書作成に伴う整理業務は現地調査終了後、平成20年1月31日まで随時実施した。(樋口)

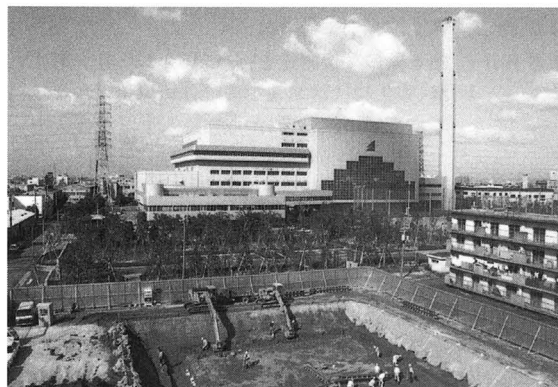


写真1 第1次調査地(南東から)

第2節 調査経過

調査日誌抄録 平成8年～平成9年(1996年～1997年)

- 8月19日 機械掘削スタート。
- 9月10日 引き続き機械掘削。東壁の堆積土層断面の精査・分層スタート。
- 9月12日 引き続き機械掘削。並行して側溝掘りも始まる。東壁の堆積土層断面実測スタート。
- 9月18日 引き続き機械掘削。北壁の堆積土層断面の精査・分層スタート。
- 9月19日 引き続き機械掘削。北壁の堆積土層断面実測スタート。
- 9月24日 第1回月例工程会議。
- 9月25日 引き続き機械掘削。南壁の堆積土層断面の精査・分層スタート。
- 10月1日 引き続き機械掘削。岡田清一技師来訪。
- 10月3日 本日をもって機械掘削終了。第1面平面精査スタート。
- 10月4日 調査地の東部において南一北方向に直線的に伸びる畦畔を検出する。原田昌則・成海佳子・岡田・森本めぐみの4技師来訪。
- 10月7日 八尾市建築総務課の坂本公彌氏来訪。
- 10月9日 調査地の東半分については第1面検出完了。
- 10月11日 第1面の平板測量を行う(S=1/50)。近畿大学出版広報部による大学入試パンフレット用の写真撮影のために、文芸学部大脇潔助教授が考古学ゼミ所属の学生とともに来訪。
- 10月14日 大雨で調査は中止。現場事務所の北側天井から雨漏り。応急処置を行う。
- 10月15日 第1面平面精査。南一北方向に伸びる畦畔を検出した。岡田技師来訪。
- 10月16日 第1面の遺構検出終了。全景写真撮影に備え、平面精査・白線引きを行う。
- 10月16日 第1面の遺構検出終了。全景写真撮影に備え、平面精査・白線引きを行う。
- 10月17日 第1面の全景写真撮影を行う。その後、畦畔の断ち割り調査を行う。成海・古川晴久の2技師来訪。第2面検出に向けて人力掘削再開。
- 10月22日 午前、近畿大学藤田義成氏来訪。午後、(財)大阪府文化財調査研究センターの井上智博技師他8名の方々が来訪。第1面検出の畦畔について助言をいただく。
- 10月28日 第2面の平面精査・遺構掘りを行う。性格不明の遺構がドッサリでビックリ。
- 10月29日 第2回月例工程会議。
- 11月6日 第6面の平板測量を行う(S=1/50)。第XVI層(弥生時代前期～中期の自然河川【NR701】堆積土層に相当)内から弥生式土器が多数出土。出土状況の写真撮影や実測を行う。
- 11月18日 第2面の平面精査・遺構掘りを行う。午後、(財)大阪府文化財調査研究センターの井上技師他6名の方々が来訪。第XVI層について助言および御教示をいただく。
- 11月19日 第2面の平板測量を行う(S=1/50)。
- 11月22日 午後、大阪市環境事業局八尾工場の片桐氏、西田氏、地元代表の坂本氏他数名が視察に来られる。坪田真一・岡田・森本の3技師来訪。
- 11月26日 第3回月例工程会議。
- 11月28日 第2面・第6面の遺構検出終了。全景写真撮影に備え、平面精査・白線引きを行う。午後、当研究会主催の遺跡見学バスツアー参加者20数名が来訪。同じころ大阪市環境事業局八尾工場の職員の方々と地元の自治会の方々15名が視察に来られる。
- 11月29日 第2面・第6面の全景写真撮影を行う。正午、ヘリコプターによる第1回目の航空測量・撮影を行う。
- 12月2日 第2面検出遺構の平・断面図面作成を行う。
- 12月3日 第3面検出に向けて人力掘削再開。
- 12月16日 第3面の検出終了。平板測量を行う(S=1/50)。午後、第3面の全景写真撮影。
- 12月18日 第4面検出に向けて人力掘削再開。
- 12月25日 第4面の平板測量を行う(S=1/50)。その後、全景写真撮影に備え、平面精査を行う。午前、原田・森本の2技師来訪。
- 12月27日 仕事納め。午前中は西壁の堆積土層断面実測を行う。午後、現場事務所の大掃除。
- 1月6日 仕事始め。
- 1月7日 第4面の調査再開。
- 1月9日 午前、第4面において航空測量・撮影を実施するため平面精査を行う。正午、ヘリコプターによる第2回目の航空測量・撮影を行う。
- 1月10日 第5面検出に向けて人力掘削再開。
- 1月28日 第4回月例工程会議。午後2時半頃、2B地区において鉄剣が完形で出土。工程会議出席のため現場を訪れていた市教育委員会米田敏幸氏の指示のもと慎重に調査を進める。当研究会の技師も急遽駆けつける。
- 1月29日 昨日発見された鉄剣の平面精査を行う。その結果、鉄剣は板状の木製品の上に置かれていることが判明した。また、本鉄剣が遺構に伴うものかを確認するためにトレンチを入れる。市教育委員会文化財課の金田照雄課長補佐、酒斎技師来訪。市歴史民俗資料館の尾崎良史・李熙連伊の両氏来訪。市建築総務課坂本氏来訪。
- 1月30日 昨日設置したトレンチの壁面土層観察の結果、本遺構は土坑の中に埋置されたものであることが判明。午前、大阪経済法科大学村川行弘・橋本 久の両教授来訪。
- 1月31日 鉄剣出土地点周辺を精査。鉄剣に伴う別の遺構の有無を確認する。市教育委員会米田・酒両技師来訪。原田・岡田・森本の3技師来訪。
- 2月3日 鉄剣出土状況平・断面実測図(S=1/10)を作成する。午後、大阪府教育委員会山田隆一技師来訪。原田・成海両技師来訪。
- 2月4日 第5面検出遺構の調査再開。午後、花粉分析調査の打合せのため、川崎地質塾の渡邊正巳氏来訪。
- 2月5日 市教育委員会米田氏来訪。
- 2月6日 鉄剣出土以来、鉄剣が埋置されていた土坑の層位的な関係が明らかになる。午後、大阪府立弥生文化博物館の渡邊昌宏氏来訪。鉄剣についての貴重な御意見を頂く。

- 2月7日 市立曙川小学校の奥田 尚氏来訪。
- 2月10日 午後2時から市役所の市政記者クラブにおいて、鉄剣出土についての事前レクチャー開催。
- 2月12日 午後2時から本調査地において、今回出土した鉄剣について報道発表を行う。新聞社やTV各社が多数訪れる(写真2)。午後2時をもって報道は解禁。各TV局は夕方のニュース番組において、鉄剣について大々的に放送した。
- 2月13日 本日の各新聞社朝刊の一面は、大竹西遺跡の鉄剣で一色?。明後日行われる現地説明会に向けての準備を始める。八尾警察署と現地説明会当日の交通整理について打合せを行う。米田氏来訪。
- 2月15日 現地説明会開催。今にも雨が降り出しそうな天候にも関わらず、500名を越える見学者が訪れた。見学者のほとんどは大阪府下にお住まいの方々であったがなかには遠路はるばる岡山県や茨城県からお越しの方もおられた。午後4時、説明会は無事終了(写真3・4)。
- 2月17日 第5面の全景写真撮影を行う。午後、川崎地質(株)の渡辺氏来訪。花粉分析用のサンプルを採取する(写真5)。
- 2月18日 第6面検出に向けて人力掘削再開。
- 2月19日 第6面の遺構掘りを始める。午後、動力炉・核燃料開発事業団(現核燃料サイクル開発機構)の三ツ井誠一郎氏・住友金属鉱山(株)の永井巖氏他二名来訪。鉄剣出土地点周辺の土壌の鉱物成分組成について調査される。
- 2月25日 第6面の全景写真撮影を行う。
- 3月1日 本調査地において低湿地遺跡研究会開催。参加者10数名。各研究者が第XVI層についてどのようにして形成されたのか意見を述べあった。
- 3月6日 (財)東大阪市文化財協会の松田順一郎技師来訪。
- 3月7日 第6面の調査終了。最終掘削深度に向けて人力掘削再開。(財)東大阪市文化財協会の松田順一郎氏、関西大学大学院生辻 康男氏来訪。第XVI層の形成過程を調査される(写真6)。
- 3月10日 市教育委員会米田氏、当研究会の高萩千秋係長来訪。鉄剣の保存処理を施すため、鉄剣を(財)元興寺文化財研究所に持参する。第7面(弥生時代前期~中期の自然河川)の検出にとりかかる。
- 3月11日 第7面の調査を行う。午後、第7面の全景写真撮影を行う。
- 3月12日 大阪府立大学の藤岡達也氏来訪。第XVI層の形成過程を調査される。
- 3月17日 調査地の中央付近において東一西方向に長いトレンチを設置し、下層確認調査を実施。川崎地質(株)の渡辺氏、土壌サンプリング採取のために来訪。(財)大阪府文化財調査研究センターの井上技師・岡本茂史技師来訪。(財)東大阪市文化財協会の松田順一郎氏来訪。
- 3月21日 鉄剣について、奈良国立文化財研究所の肥塚隆保技官に分析を依頼する。
- 3月25日 大阪府立大学の藤岡氏他3名来訪。第XVI層の形成過程を調査される。
- 3月31日 本日をもって調査終了。(樋口)



写真2 報道取材状況(南東から)



写真3 現地説明会(北東から)



写真4 現地説明会遺物見学風景



写真5 花粉分析サンプル採取作業状況(西から)

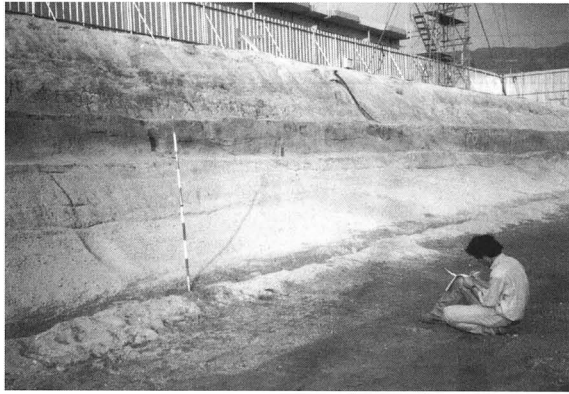


写真6 第XVI層形成過程調査状況(南東から)

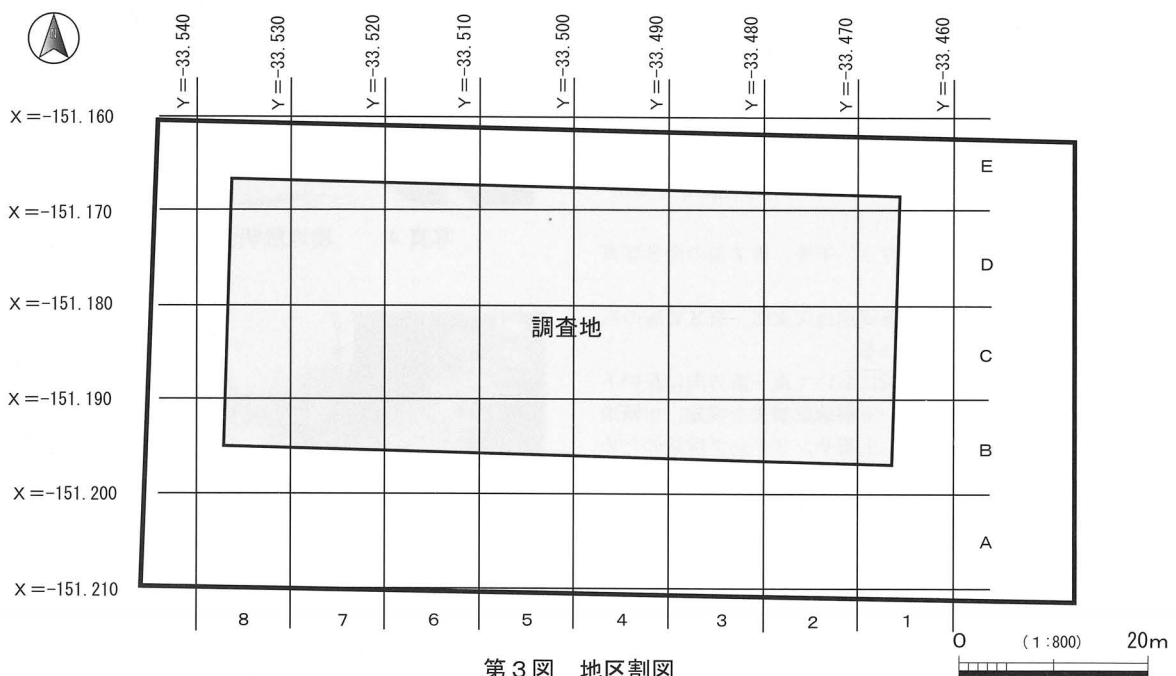
第3節 調査の方法

調査は、現地表(T.P.+7.5m前後)下2.2m前後までを機械掘削とし、以下現地表下4.3m(T.P.+3.2m)前後までの2.1mを人力で掘削、平面的な調査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。さらに最終遺構面調査終了後、下層確認を行うため、調査地中央に東西約40m、幅約1.5mのトレンチを設定し、下層の堆積状況についての調査を行った。なお、調査に際しては、オープンカット工法を採用したため、鋼矢板打設等の土留めは施されておらず、安全面を考慮して壁面に45度の傾斜をつけて掘削を行

った。したがって、掘削終了時点の面積は、東西幅63.00m、南北幅20.66mの約1,300m²である。調査においては、国土座標第VI座標系を基準とした地区割りを設定した。調査地の南東隅を調査基準点(X=-151.210 Y=-33.460)とし、東西80m、南北50mの範囲を、10mメッシュで40地区に区画する方法を採用した。地区の呼称は、南東隅を起点として1区画の北西隅の交点を優先させ、東西方向を算用数字(東から1~8)、南北方向をアルファベット(南からA~E)で示し、1A~8E地区と表記した。

遺構の平面実測については、ヘリコプターやクレーンによる写真測量と平板測量を併用して行った。また、必要に応じて遺物出土状況図の作成も行った。さらに、遺構の断面についても必要に応じて図化した。

各遺構および壁面については写真撮影(24×35mm白黒ネガ、カラーリバーサル、カラーネガ・6×7cm白黒フィルム)による記録保存を実施した。(樋口)



第3図 地区割図

第3章 調査成果

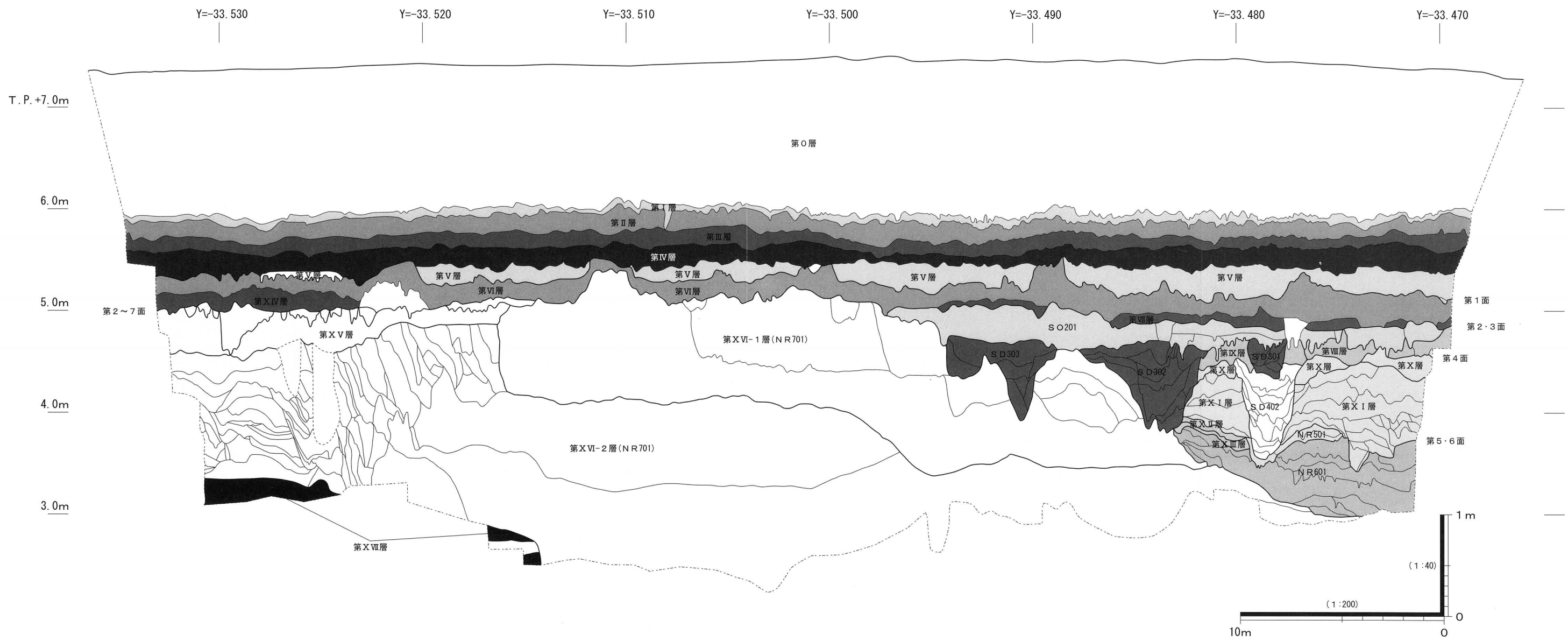
第1節 基本層序

本調査地は、大阪市環境事業局八尾工場敷地内の南東部分に位置する。発掘調査開始直前の状況は、ほぼ平らに整地が行われ、既存の構築物等はまったく存在していなかった。現地表面の標高は7.4～7.9mを測り、北西から南東に向かうにつれ緩やかに標高を上げている。この大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う整地以前は、閑静な田園風景を多く残す地域環境であったようである。事実、この層厚1.5m前後を測る整地土層を削除したところ、水田耕作により攪拌を受けた土層を確認している。以下T.P. +5.1m前後までの0.4～0.9mは、調査区全域において水平な土層堆積状況が認められ、平安時代末期～昭和年代にかけては主に農耕を中心とした生産域として利用されていたようである。一方、T.P. +3.4～5.1mの1.7mについては、河内平野に存在する他の遺跡同様、旧大和川が織り成す沖積作用の影響で堆積土層は複雑に形成されている。特に調査地の大部分が、弥生時代前期～古墳時代中期にかけての河川堆積物で充填されており、その層序は極めて複雑である。この自然河川は、時代が下るにつれてその規模を縮小させながら河床を西から東に移動させているようである。

なお本調査では、150を越える堆積土層を確認したが、本報告では、その内の調査区内に普遍的に存在する土層や、各遺構面を構成する堆積土層を抽出して基本層序とした。その結果、18層におよぶ基本層序を確認することができた。以下、各堆積土層について概説していく。

- 第0層 大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う整地土層である。層厚は1.5～1.6mを測る。
- 第I層 N2/0黒色粘質土。炭化物を多量に含んだグライ化土層である。攪拌を著しく受けているため土層の締まりは悪い。水田耕作土層で、層厚0.02～0.1mを測る。
- 第II層 5BG4/1暗青灰色粘質土。炭化物を含むグライ化土層である。土層の締まりは極めて不良である。これは攪拌を受けているためと思われる、第I層同様水田耕作土層であった可能性が高い。層厚0.1～0.3m。
- 第III層 5BG3/1暗青灰色粘質土。グライ化土層である。第I層・第II層同様、土層の締まりは著しく悪く、したがって本層も攪拌を被っているものと思われる、水田耕作土層であった可能性が高い。層厚0.04～0.24m。
- 第IV層 10GY4/1暗緑灰色粘土。室町時代中期(15世紀後半)頃の土器片を含む自然堆積土層である。層厚0.02～0.34m。調査では、本層までが機械掘削の対象である。
- 第V層 10G4/1暗緑灰色粘質土。酸化鉄分を多く含む自然堆積土層である。本層は、鎌倉時代末期～室町時代(14～15世紀初頭)に比定される遺物を含む。層厚0.06～0.34m。
- 第VI層 5BG4/1暗青灰色粘土。本層の上方はマンガン斑の沈着が著しく、またシルト～細粒砂が顕著に混在しており、攪拌が認められる。土層の締まりも不良である。平安時代末～鎌倉時代(12～13世紀初頭)にかけての土壌化層と推測され、上面において当該時期の生産関連遺構を検出した(第1面)。層厚0.05～0.52m。
- 第VII層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土。調査地の東部にのみ存在する、酸化鉄分やマンガンの沈着の著しい堆積土層である。本層は、古墳時代中期～平安時代後期(5～12世紀)にかけての遺物包含層である。層厚0.02～0.24m。

- 第Ⅷ層** 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混粘土。調査地の東部にのみ存在する土壌化層である。マンガンの沈着が認められる。本層上面において、古墳時代中期(5世紀頃)に比定される遺構群を検出した(第2面)。層厚0.05~0.32m。
- 第Ⅸ層** 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト。調査地の東部にのみ存在する土壌化層である。本層上面において、弥生時代後期後半(2世紀末~3世紀初頭)に比定される遺構群を検出した(第3面)。層厚0.05~0.3m。
- 第Ⅹ層** 10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土。調査地の東部にのみ存在する土壌化層である。上方では細粒砂混粘土ブロックが顕著に混在する。本層上面において弥生時代後期前半(1世紀前半~2世紀前半)の遺構を検出した(第4面)。層厚0.05~0.25m。後述する湿地帯の様相を呈する**第ⅩⅠ層**の土壌化した部分が本層に該当すると推測される。
- 第ⅩⅠ層** 5B4/1暗青灰色シルト混粘土。調査地の東部にのみ存在する。粘土~シルト優勢の薄層並行ラミナ層である。非常に穏やかな水流堆積環境下で形成された土層である。土層内からは弥生時代後期前半頃(1世紀前半~2世紀前半)の遺物が出土した。層厚0.2m。
- 第ⅩⅡ層** 10BG4/1暗青灰色シルト混粘土。調査地の東部にのみ存在する。炭化物が散在する粘土層で、上方は土壌化している。本層上面において弥生時代後期初頭(1世紀初頭)の遺構を検出した(第5面)。層厚0.05~0.1m。
- 第ⅩⅢ層** 10YR5/1褐灰色シルト混粘土。調査地の東部にのみ存在する。薄層並行ラミナで形成された堆積土層である。層厚0.05~0.1m。
- 第ⅩⅣ層** 7.5Y4/1灰色粘質土。調査区の西部にのみ存在する、酸化鉄分やマンガンの沈着が顕著な堆積土層である。本層は、弥生時代後期~古墳時代中期(1~5世紀)にかけての遺物包含層である。層厚0.1~0.25m。
- 第ⅩⅤ層** 2.5Y6/6明黄褐色~10BG6/1青灰色極細粒砂混シルト。調査区の西部にのみ存在する、酸化鉄分を含む堆積土層である。後述する弥生時代前期~中期(前3~1世紀)頃に機能していたと推測される自然河川の埋土(第ⅩⅥ層)の土壌化した部分が本層にあたる。上面において弥生時代後期初頭(1世紀初頭)の遺構群を検出した(第6面)。
- 第ⅩⅥ層** 5Y6/1灰色~2.5Y5/6黄褐色シルト~細礫。調査地のほぼ全域で認められる河川堆積土層である。本層はさらに上下2層(第ⅩⅥ-1層・第ⅩⅥ-2層)に分層が可能である。第ⅩⅥ-1層は、調査地の中央部に存在する河川堆積土層である。西方においては細粒砂中心のラミナが顕著で、中央~東方においては粗粒砂優勢の堆積相を呈する。第ⅩⅥ-2層は、東端部を除く調査地のほぼ全域に認められる河川堆積土層である。西方においてはシルト~細粒砂を主体とするラミナ層で、中央~東方では細礫~中礫優勢の堆積土層でそれぞれ形成されている。第ⅩⅥ-1層からは弥生時代中期に比定される土器が、また第ⅩⅥ-2層からは縄文時代晩期~弥生時代前期の土器が出土した。
- 第ⅩⅦ層** 7.5YR2/1黒色粘土。調査地の西部にのみ確認された堆積土層である。植物遺体や炭化物を多量に含む粘土層である。顕著なラミナは認められない。したがって、極めて閉塞した湿地帯のような環境下で形成された土層と推測される。(樋口)



第4図 北壁地層断面图

第2節 検出遺構と出土遺物

本調査で検出した遺構は、平安時代後期～鎌倉時代前期にかけての畦畔・水田(第1面)、古墳時代中期の土坑・小穴・溝・落ち込み(第2面)、弥生時代後期後半の溝(第3面)、弥生時代後期前半の溝(第4面)、弥生時代後期初頭の土坑・河川(第5面)、弥生時代後期初頭の土坑・小穴・溝・河川(第6面)、縄文時代晩期～弥生時代中期末の河川(第7面)である。

第1面では、ほぼ等間隔に並ぶ南北方向の畦畔5条(畦畔101～畦畔105)で区画された水田を6筆(水田101～水田106)検出した。水田106には、人と動物の足跡が見つかった。第2面では、東部で土坑23基(S K 201～S K 223)、小穴126個(S P 2001～S P 2126)、溝17条(S D 201～S D 217)の遺構群を検出した。またこの遺構群の西では落ち込み1箇所(S O 201)を検出した。落ち込み内には列を成す杭を打ち込んだ痕跡を確認した。第3面では、東部で南西～北東方向に平行に伸びる溝3条(S D 301～S D 303)を検出した。S D 302とS D 303は、ほぼ並行に伸びている。S D 301からは、完形の遺物が数点出土した。第4面では、東部で南西～北東方向の溝3条(S D 401～S D 403)を検出した。S D 401とS D 402は、並行に伸びている。S D 401からは数多くの土器が出土した。第5面では、東部で土坑(S K 501)と河川(N R 501)を検出した。S K 501からは鉄剣が出土した。第6面では、西部で土坑23基(S K 601～S K 623)、小穴79個(S P 601～S P 679)、溝19条(S D 601～S D 619)の遺構群を検出し、また、東部では河川1条(N R 601)を検出した。N R 601からは数多くの土器が出土した。第7面では、川幅60m以上の規模をもつ河川1条(N R 701)を検出した。この河川が埋没した後、自然堤防が形成され、堤防上に弥生時代後期の居住域を構築している環境であったことが判明した。以下では第1面～第7面で検出した遺構の内、特筆すべきものについて概説を行う。

第1面(平安時代後期～鎌倉時代前期)

第VI層上面で検出した遺構面である。調査地全域において、畦畔5条(畦畔101～畦畔105)と畦畔に区画された水田6筆(水田101～水田106)を検出した。

畦畔(畦畔)

畦畔101～畦畔105

各畦畔は南北方向に直線に伸び、北側と南側は調査区外に至るため全容は不明である。検出した畦畔の幅は2.5～3.6m、断面形状は台形で、高さ0.1～0.25mを測る。畦畔の東西の間隔は、畦畔102と畦畔103の間が約13.0mと広く、畦畔103と畦畔104の間が約10.5mと狭い。平均すると約11.6mを測る。各畦畔の詳細については一覧表にまとめた。

水田(水田)

水田101～水田106

水田面の標高は、西側の水田106がT.P. +5.4m、東側の水田101がT.P. +5.2mを測り、西から東へ低くなる。作土は5BG4/1暗青灰色粘土で、シルト～細粒砂が顕著に混在しており、攪拌を受けている。畦畔105より西側では、作土と上面の第V層との間に洪水砂が薄く堆積している部分が認められた。水田106では、この砂に覆われた足跡を多数検出した。足跡は、良好に遺存しており、人間のものと判別できるもののほか、円形や不定形のものが認められる。この砂は、水田106のみ認められることから、調査地の西側より供給されたもので、この方向に河川が存在した可能性が高い。

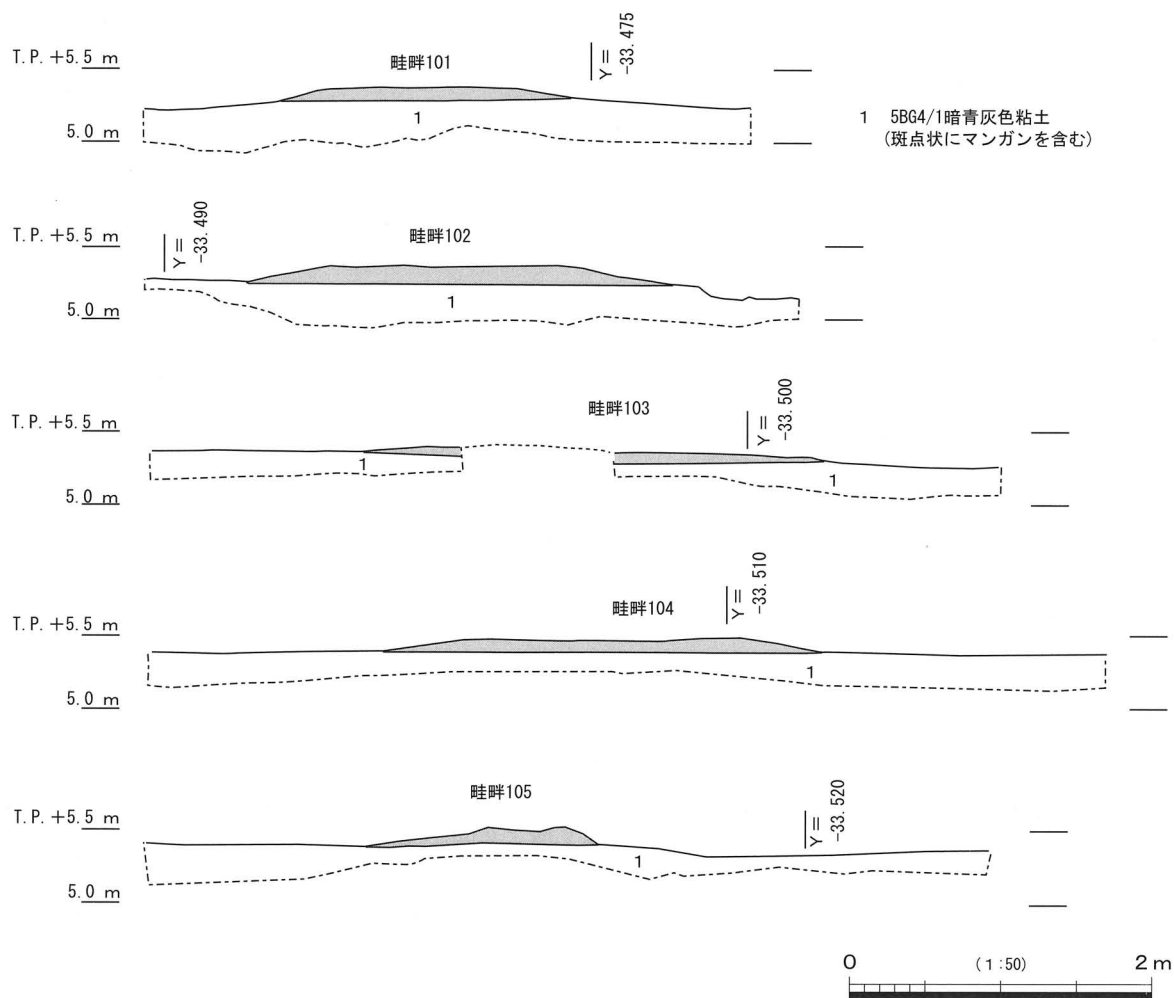
この水田の時期は、水田を覆う第V層内から13～14世紀にかけての遺物が、さらに第VI層内から12世紀後半～13世紀前半頃の遺物が出土していることから、平安時代後期～鎌倉時代前期頃に比定できる。水田の詳細については一覧表にまとめた。(西村)

第1表 第1面畦畔一覧表

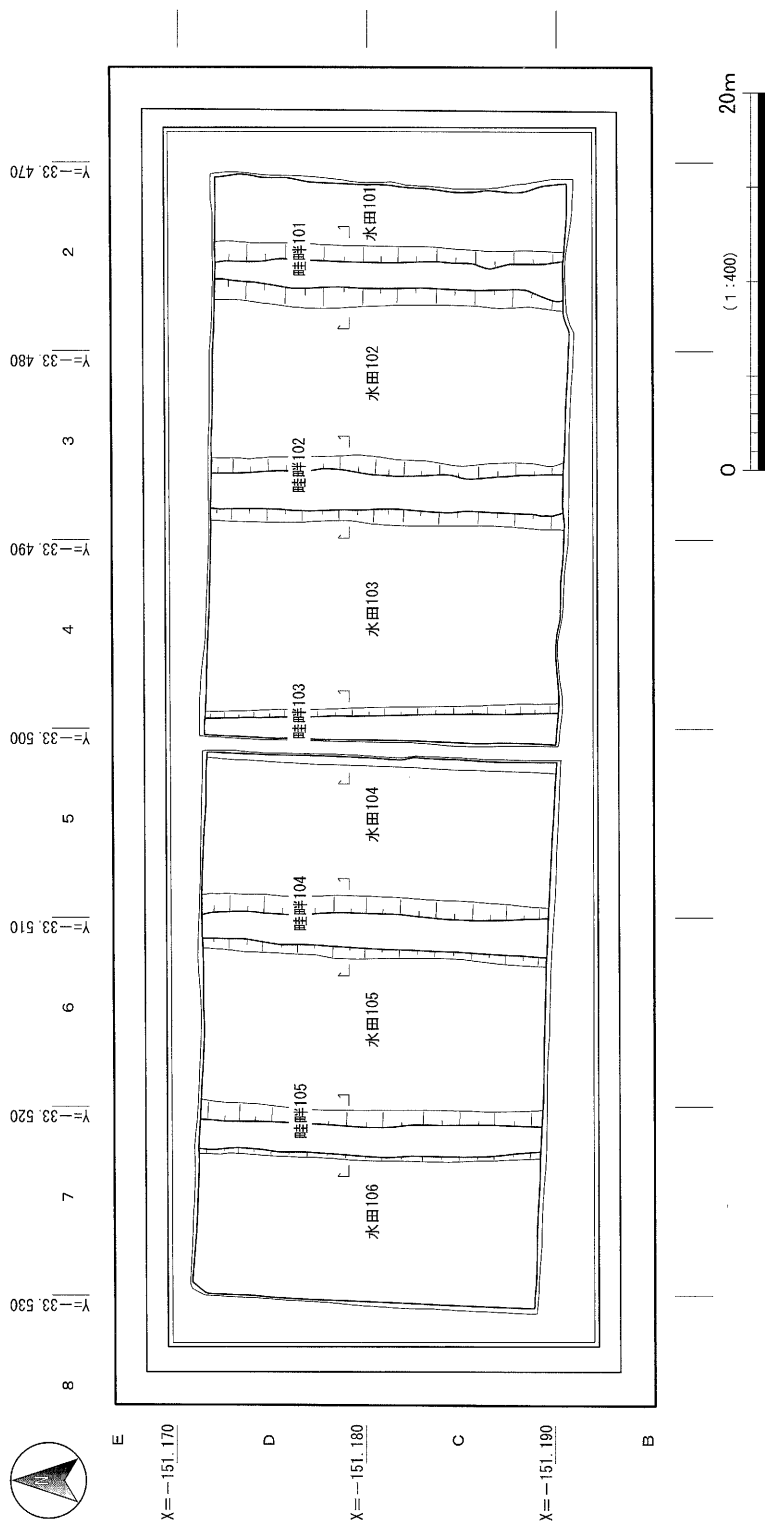
遺構番号	地区	平面形状	下幅 (m)	上幅 (m)	検出長(m)	断面形状	高さ (m)	堆積土
畦畔101	2B～D	南北方向に直線に伸びる	3.1～3.4	0.8～2.0	18.0	台形	0.2	水田耕作土の第VI層を盛り上げる
畦畔102	3B～D	南北方向に直線に伸びる	3.2～3.6	1.7～2.2	18.2	台形	0.25	水田耕作土の第VI層を盛り上げる
畦畔103	4・5B～D	南北方向に直線に伸びる	2.6～3.8	0.8～1.6	18.2	台形	0.06	水田耕作土の第VI層を盛り上げる
畦畔104	5・6B～D	南北方向に直線に伸びる	2.9～3.4	1.2～2.0	18.0	台形	0.18	水田耕作土の第VI層を盛り上げる
畦畔105	7B～D	南北方向に直線に伸びる	2.5～2.8	1.3～1.7	18.3	台形	0.1	水田耕作土の第VI層を盛り上げる

第2表 第1面水田一覧表

遺構番号	地区	形状	規模 (m)	耕作土	区画する畦畔
水田101	1B～D・2B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.0以上、東西幅約3.2以上	第VI層	畦畔101の東側がこの水田。水田の東と北と南は調査区外に至る。
水田102	2B～D・3B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.3以上、東西幅11.5	第VI層	畦畔101と畦畔102で区画。水田の北と南は調査区外に至る。
水田103	3B～D・4B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.2以上、東西幅13.0	第VI層	畦畔102と畦畔103で区画。水田の北と南は調査区外に至る。
水田104	5B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.2以上、東西幅11.2	第VI層	畦畔103と畦畔104で区画。水田の北と南は調査区外に至る。
水田105	6B～D・7B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.3以上、東西幅11.0	第VI層	畦畔104と畦畔105で区画。水田の北と南は調査区外に至る。
水田106	7B～D・8B～D	南北方向に長い長方形	南北幅18.3以上、東西幅約8.0以上	第VI層	畦畔105の西側がこの水田。水田の西と北と南は調査区外に至る。



第5図 畦畔101～畦畔105断面図



第6図 第1面検出遺構平面図

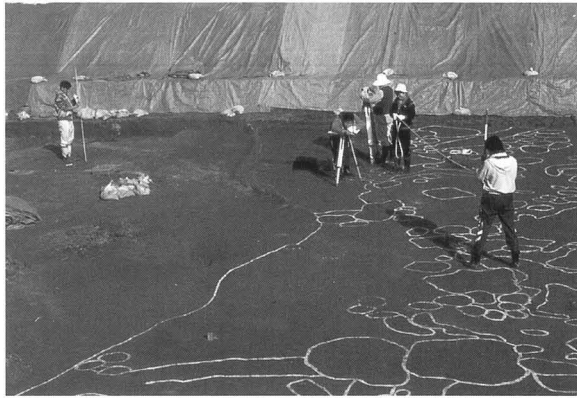


写真7 第2面東部測量状況(南から)



写真8 第2面東部掘削状況(南から)

第2面(古墳時代中期)

第Ⅷ層上面で検出した遺構面である。調査地中央～東部において、土坑23基(SK201～SK223)、小穴126個(SP2001～SP2126)、溝17条(SD201～SD217)、落ち込み1箇所(SO201)を検出した。これらの遺構群は調査地東部で検出した。遺構面の標高は、北西がT.P. +4.9m前後、南東がT.P. +5.0m前後を測り、北西へ向かって若干低くなる。検出した遺構の時期は、SO201内から出土した須恵器から古墳時代中期頃と考えられる。

土坑(SK)

SK201～SK223

平面形状は概ね楕円形や不定形に、断面形状は概ね逆台形、皿状、V字形に分けられる。SK201・SK202・SK207・SK210・SK212・SK213・SK218・SK220・SK221・SK223には底面に凹凸がある。深さは0.04～0.15mを測る。埋土はSK206が2層である他は単一層で、各土坑内からの遺物の出土はなかった。各土坑の検出状況からは規模や方向などの規則性は見受けられず遺構の性格は不明である。検出した各土坑の詳細については一覧表にまとめた。

第3表 第2面土坑一覧表(1)

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
SK201	2B	SP2002に切られ、南側は調査区外に至るため全容は不明である。	0.7	0.39	逆台形 底面に凹凸あり	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SK202	2C	楕円形 SP2032・SK203～SK205に切られる。SD206を切る。	1.2	1.16	逆台形 底面に凹凸あり	0.12	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK203	2C	楕円形 SK202を切る。SK204に切られる。	0.6	0.41	皿状	0.07	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK204	2C	楕円形 SK202・SK203・SK205を切る。	0.6	0.34	皿状	0.11	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SK205	2C	隅丸方形 SK202・SD210を切る。SK204・SP2035に切られる。	1.21	1.10	逆台形	0.14	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SK206	2C	楕円形 SK205に切られる。SD208・SD209を切る。	1.17	1.02	逆台形	0.09	上から2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土、2.5Y3/1黒褐色粘土
SK207	2C	不定形 SD211・SP2045に切られる。	1.11	0.76	皿状 底面に凹凸あり	0.14	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SK208	2C	東側は調査区外で全容は不明である。	0.91	0.63	皿状	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK209	2C	不定形	0.76	0.65	皿状	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK210	2C	SP2058～SP2060に切られる。東側は調査区外で全容は不明である。	2.7	1.10	皿状 底面に凹凸あり	0.1	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK211	2C	楕円形 SP2066を切る。	1.3	0.48	皿状	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SK212	2C	楕円形	0.87	0.65	皿状 底面に凹凸あり	0.13	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK213	2D	楕円形	0.6	0.47	逆台形 西側に凹凸あり	0.15	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK214	2D	楕円形 SK215に切られる。	0.6	0.34	V字形	0.15	2.5Y3/1黒褐色粘土
SK215	2D	楕円形 SK214を切る。	0.61	0.42	V字形	0.15	2.5Y3/1黒褐色粘土

小穴(S P)

S P 2001～S P 2126

小穴の平面形状は大きく円形、楕円形、隅丸方形、不定形の4種類に、断面の形状は皿形、逆台形、U字形の3種類に分類できた。S P 2016・S P 2019・S P 2028・S P 2051・S P 2064・S P 2075・S P 2103・S P 2109・S P 2110・S P 2111・S P 2112は、深さ0.1m以上0.2m未満で、0.2m以上のものはない。埋土が2層のものはS P 2010・S P 2025・S P 2042で、それ以外は単一層である。各小穴からの遺物の出土はなかった。S P 2006・S P 2042・S P 2010は一段深くなる断面形状を呈することから、柱穴の可能性はあるが、いずれも柱根は残っていなかった。また周りの小穴との配列にも規則性は認められず、建物などの施設は復原することはできなかった。なお、検出した各小穴の詳細については一覧表にまとめた。

第4表 第2面土坑一覧表(2)

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
S K 216	2D	不定形	1.02	0.60	皿状	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S K 217	2D	楕円形	0.65	0.48	逆台形	0.12	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S K 218	2D	楕円形 S K 219・S D 217を切る。	0.69	0.62	逆台形 底面に凹凸あり	0.11	2.5Y3/1黒褐色粘土
S K 219	2D	楕円形 S K 218に切られる。S D 217を切る。	1.3	0.89	皿状	0.2	2.5Y3/1黒褐色粘土
S K 220	2C	楕円形	0.70	0.57	V字形 底面に凹凸あり	0.12	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S K 221	2C	楕円形	1.43	1.17	逆台形 底面に凹凸あり	0.15	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S K 222	2C	西側はS O 201に切られ、全容は不明である。	2.29	0.97	皿状	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S K 223	2C	楕円形	1.89	0.6	逆台形 底面に凹凸あり	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土

第5表 第2面小穴一覧表(1)

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
S P 2001	2B	円形 南側は調査区外	—	—	0.35	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2002	2B	円形 S K 201を切る。	—	—	0.26	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2003	2B	円形	—	—	0.14	逆台形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2004	2B	楕円形	0.4	0.32	—	皿状形	0.03	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2005	2B	円形	—	—	0.21	逆台形	0.05	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2006	2B	円形	—	—	0.26	逆台形	0.08	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2007	2C	楕円形	0.18	0.12	—	皿状形	0.03	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2008	2C	円形	—	—	0.07	皿状形	0.01	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2009	2C	円形	—	—	0.11	皿状形	0.02	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2010	2B	円形	—	—	0.37	皿状形	0.08	上から2.5Y3/1黒褐色粘土・5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2011	2B	楕円形	0.47	0.16	—	逆台形	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2012	2C	円形	—	—	0.13	皿状形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2013	2C	円形	—	—	0.15	皿状形	0.01	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2014	2C	楕円形	0.36	0.31	—	逆台形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2015	2C	楕円形 S P 2016に切られる。	0.36	0.21	—	逆台形	0.06	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S P 2016	2C	楕円形 S P 2015を切る。	0.49	0.38	—	逆台形 底面に凹凸あり	0.10	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2017	2C	楕円形	0.39	0.29	—	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S P 2018	2C	楕円形	0.49	0.24	—	皿状形	0.06	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S P 2019	2C	円形	—	—	0.36	U字形	0.11	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S P 2020	2C	楕円形	0.30	0.24	—	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S P 2021	2C	円形	—	—	0.33	皿状形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2022	2C	円形	—	—	0.30	逆台形 中央がくぼむ	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2023	2C	楕円形 東側は調査区外。	0.50	0.23	—	逆台形 底面に凹凸あり	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2024	2C	楕円形	0.29	0.25	—	皿状形	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2025	2C	円形	—	—	0.28	皿状形	0.04	上から2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土・5Y5/1灰色シルト混粘土
S P 2026	2C	円形	—	—	0.26	皿状形	0.03	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2027	2C	楕円形	0.21	0.14	—	皿状形	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土

第6表 第2面小穴一覧表(2)

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
SP2028	2C	楕円形 SP2029に切られる。	0.44	0.28	—	逆台形	0.10	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2029	2C	楕円形 SP2028を切る。	0.34	0.27	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2030	2C	円形	—	—	0.20	U字形	0.07	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2031	2C	楕円形	0.14	0.11	—	皿状形	0.03	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2032	2C	円形 SK202を切る。	—	—	0.32	皿状形	0.06	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2033	2C	楕円形	0.27	0.23	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2034	2C	楕円形	0.40	0.32	—	皿状形	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2035	2C	楕円形 SK205を切る。	0.29	0.26	—	皿状形	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2036	2C	楕円形	0.30	0.18	—	皿状形	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2037	2C	楕円形	0.46	0.24	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2038	2C	円形	—	—	0.20	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2039	2C	円形 SP2040を切る。	—	—	0.27	皿状形	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2040	2C	楕円形 SP2039に切られる。SD211を切る。	0.42	0.30	—	皿状形	0.06	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2041	2C	円形 SP2042に切られる。	—	—	0.23	皿状形	0.06	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2042	2C	楕円形 SP2041を切る。	0.36	0.27	—	皿状形 東側がくぼむ	0.09	上から2.5Y3/1黒褐色粘土、5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2043	2C	楕円形	0.38	0.28	—	皿状形 底面に凹凸あり	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2044	2C	楕円形 SP2045を切る。	0.45	0.39	—	皿状形	0.08	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2045	2C	楕円形 SK207を切る。SP2044に切られる。	0.47	0.34	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2046	2C	楕円形	0.35	0.30	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2047	2C	楕円形	0.35	0.22	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2048	2C	円形 SP2049を切る	—	—	0.18	皿状形	0.01	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2049	2C	楕円形 SP2048・SP2050に切られる。	0.35	0.25	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2050	2C	円形 SP2049を切る。SP2051に切られる。	—	—	0.29	逆台形	0.09	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2051	2C	円形 SP2050を切る。	—	—	0.32	逆台形	0.10	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2052	2C	楕円形	0.60	0.49	—	皿状形 底面に凹凸あり	0.08	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
SP2053	2C	楕円形	0.23	0.20	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2054	2C	楕円形 SP2055に切られる。	0.40	0.28	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2055	2C	楕円形 SP2054を切る。	0.48	0.27	—	皿状形 中央がくぼむ	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土
SP2056	2C	円形	—	—	0.15	皿状形	0.03	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2057	2C	円形	—	—	0.19	逆台形	0.04	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2058	2C	円形 SK210を切る。	—	—	0.20	逆台形	0.05	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2059	2C	楕円形 SK210を切る。	0.44	0.21	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2060	2C	楕円形 SK210を切る。SP2061を切る。	0.51	0.43	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2061	2C	楕円形 SP2060に切られる。	0.49	0.41	—	皿状形	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土
SP2062	2C	楕円形	0.41	0.27	—	皿状形 中央がくぼむ	0.04	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2063	2C	楕円形 SP2064を切る。	0.50	0.39	—	皿状形	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2064	2C	楕円形 SP2063に切られる。	0.50	0.37	—	皿状形 中央がくぼむ	0.12	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2065	2C	楕円形 SP066を切る。	0.40	0.29	—	皿状形	0.04	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2066	2C	楕円形 SP2065・SK211に切られる。SP2067を切る。	0.35	0.31	—	逆台形	0.06	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2067	2C	楕円形 SP2066に切られる。	0.22	0.20	—	皿状形	0.04	2.5Y4/4オリブ褐色粘質土
SP2068	2C	楕円形	0.49	0.47	—	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色粘土
SP2069	2C	楕円形	0.29	0.23	—	皿状形 中央がくぼむ	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2070	2C	楕円形	0.38	0.24	—	皿状形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
SP2071	2C	楕円形	0.45	0.41	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2072	2C・D	楕円形 SP2073～SP2075に切られる。	0.44	0.26	—	逆台形	0.08	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2073	2D	楕円形 SP2072を切る。SP2074に切られる。	0.32	0.30	—	皿状形	0.06	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2074	2D	楕円形 SP2072・SP2073を切る。	0.28	0.22	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2075	2D	楕円形 SP2072を切る。SP2076に切られる。	0.40	0.37	—	逆台形 西側がくぼむ	0.10	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP2076	2D	円形 SP2075を切る。SP2077に切られる。	—	—	0.35	逆台形	0.09	2.5Y3/1黒褐色粘土

第7表 第2面小穴一覧表(3)

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
S P 2077	2D	円形 S P 2076を切る。	—	—	0.33	逆台形 中央がくぼむ	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2078	2D	楕円形 S P 2079を切る。	0.36	0.27	—	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2079	2D	楕円形 S P 2078に切られる。	0.26	0.18	—	逆台形	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2080	2D	楕円形	0.33	0.16	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2081	2D	楕円形	0.39	0.26	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2082	2D	楕円形	0.50	0.40	—	皿状形	0.05	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2083	2D	円形	—	—	0.14	皿状形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2084	2D	円形 S P 2085に切られる。	—	—	0.20	皿状形 東側がくぼむ	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2085	2D	円形 S P 2084を切る。	—	—	0.15	皿状形 西側がくぼむ	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2086	2D	円形	—	—	0.26	逆台形	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2087	2D	楕円形 S D 213を切る。	0.48	0.34	—	皿状形 底面に凹凸あり	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2088	2D	円形	—	—	0.24	皿状形	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2089	2D	楕円形	0.45	0.30	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2090	2D	楕円形	0.44	0.35	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2091	2D	楕円形	0.39	0.25	—	皿状形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2092	2D	円形	—	—	0.37	皿状形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2093	2D	楕円形	0.36	0.29	—	皿状形 東側がくぼむ	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2094	2D	楕円形	0.30	0.27	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2095	2D	楕円形	0.33	0.27	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2096	2D	楕円形 S P 2097を切る。	0.27	0.25	—	皿状形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2097	2D	楕円形 S P 2096・S P 2098に切られる。	0.32	0.25	—	皿状形	0.03	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2098	2D	楕円形 S P 2097を切る。	0.39	0.21	—	逆台形	0.07	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2099	2D	楕円形	0.45	0.31	—	皿状形	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2100	2D	楕円形	0.46	0.30	—	皿状形 中央がくぼむ	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2101	2D	円形	—	—	0.38	逆台形	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2102	2D	楕円形	0.35	0.31	—	逆台形	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2103	2D	楕円形 S D 217を切る。	0.49	0.32	—	逆台形	0.10	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2104	2D	楕円形 S P 2105を切る。	0.32	0.20	—	逆台形	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2105	2D	楕円形 S P 2104に切られる。	0.23	0.20	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2106	2D	楕円形	0.23	0.22	—	皿状形	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2107	2D	円形 S P 2108を切る。	—	—	0.23	皿状形	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2108	2D	楕円形 S P 2107に切られる。	0.41	0.33	—	逆台形	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2109	2D	楕円形	0.40	0.38	—	逆台形	0.16	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2110	2D	楕円形 S P 2111に切られる。	0.50	0.33	—	逆台形	0.11	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2111	2D	楕円形 S P 2110を切る。	0.50	0.33	—	逆台形	0.13	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2112	2D	楕円形	0.43	0.35	—	逆台形	0.10	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2113	2D	楕円形	0.33	0.31	—	皿状形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2114	2D	円形	—	—	0.18	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2115	2D	楕円形	0.43	0.37	—	逆台形	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2116	2D	円形	—	—	0.28	皿状形 中央がくぼむ	0.09	2.5Y3/1黒褐色粘土
S P 2117	2D	楕円形	0.49	0.30	—	皿状形 東側がくぼむ	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2118	2D	楕円形	0.42	0.39	—	皿状形 底面に凹凸あり	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2119	2D	楕円形 S P 2120に切られる。	0.50	0.38	—	皿状形	0.08	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2120	2D	楕円形 S P 2119に切られる。	0.50	0.32	—	逆台形	0.09	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2121	2D	楕円形	0.40	0.37	—	皿状形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2122	2D	楕円形 S P 2123・S P 2124に切られる。	0.32	0.24	—	皿状形	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 2123	2D	楕円形 S P 2122を切る。	0.32	0.22	—	皿状形	0.04	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2124	2D	楕円形 S P 2122を切る。	0.41	0.39	—	皿状形	0.05	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2125	2D	楕円形	0.42	0.38	—	皿状形	0.06	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S P 2126	2D	楕円形 S D 216に切られる。	0.38	0.24	—	逆台形	0.08	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土

第8表 第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅 (m)	総長 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土
S D 201	2B	南西-北東方向に直線に伸びる。S D 202に切られる。南側は調査区外。	0.25~0.75	1.3以上	U字形	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 202	2B	南西-北東方向に曲がり伸びる。S D 201を切る。南側は調査区外。	0.26~0.38	1.85以上	皿状	0.13	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 203	2B	東西方向にやや曲がり伸びる。東側は調査区外。	0.13~0.26	0.85以上	逆台形	0.05	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S D 204	2B・C	南東-北西方向に直線に伸びる。東側は調査区外。	0.18~0.21	0.66以上	皿状	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土
S D 205	2C	南東-北西方向に直線に伸びる。	0.27~0.38	1.17	皿状	0.08	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土
S D 206	2C	南西-北東方向に蛇行して伸びる。S K 202に切られる。	0.10~0.25	1.34	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 207	2C	東西方向に直線に伸びる。	0.32~0.35	1.19	皿状	0.04	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S D 208	2C	南北方向に直線に伸びる。S K 206に切られる。	0.23~0.4	0.8	皿状	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 209	2C	東西方向に伸び、西側は屈曲する。S K 206に切られる。	0.27~0.48	2.83	逆台形	0.08	2.5Y3/1黒褐色砂礫混粘土
S D 210	2C	南東-北西方向に蛇行して伸びる。S K 205に切られる。	0.12~0.22	1.08	皿状	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 211	2C	南北方向に蛇行して伸び、南側はL字に曲がる。S D 212. S P 2040に切られる。S K 207を切る。	0.10~0.36	1.73	皿状	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 212	2C	南東-北西方向に直線に伸びる。S D 211を切る。東側は調査区外。	0.18~0.86	2.66以上	逆台形	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 213	2D	東西方向に蛇行して伸びる。S P 2087に切られる。	0.13~0.34	3.52	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S D 214	2D	南西-北東方向に伸び、西端はL字に曲がる。東側は調査区外。	0.18~0.33	1.76以上	皿状	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S D 215	2D	南西-北東方向に直線に伸びる。東側は調査区外。	0.21~0.27	0.79以上	皿状	0.07	2.5Y3/1黒褐色粘土
S D 216	2D	南西-北東方向に直線に伸びる。S P 2126を切る。	0.46~0.72	3.6以上	皿状	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
S D 217	2D	南北方向に伸び、北側はL字に曲がる。S K 218. S K 219. S P 2103に切られる。	0.14~0.28	1.2	逆台形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土

溝(S D)

S D 201~S D 217

溝は、直線的に伸びるもの、蛇行するもの、弧状、折曲するもの4種類に大別でき、その幅は、0.1~0.86mを測る。断面形状はU字形、皿状、逆台形で、深さ0.04~0.13mを測る。埋土は単一層で、各溝内からの遺物の出土はなかった。溝の平面的な分布状況には方向や規模などの規則性は見受けられず遺構の性格は不明である。検出した各溝の詳細については一覧表にまとめた。

落ち込み(S O)

S O 201

2~6 B~D地区で検出した。南西-北東に伸び、やや弧を描く平面形状を呈し、幅は約20mを測る。遺構は東側でS K 222を切る。断面形状は丸みのある皿形で、深さ約0.45mを測る。埋土は、滞水状態時に堆積したと推測される粘土を主体とした8層から成る。この落ち込みは、弥生時代後期後半から古墳時代中期頃まで機能していた。(※S O 201の西側の肩は、調査中、掘りすぎたため検出できて

いない。後に壁面の観察を行い検討した結果、およそ南西―北東方向に西側の肩が存在していることが判明した。)

3・4C 4D地区では木杭列を検出した。杭は南東～北西の約18m×2mの範囲に53本(杭1～53)打ちこんでいた。杭には、丸木が52本と角材が1本あり、両者ともに先端を削り尖らせている。途中で折れているものがほとんどで、先端のみが残っている杭もあった。杭は、列を意識して打設されていることから、何らかの構築物であったと推測される。

本遺構からは弥生時代後期中頃から古墳時代中期頃の土器、石器、木杭、自然木が出土した。このうち図化し記載したものは土器1～13、石器S1、木杭W1～W10である。

1は須恵器の杯蓋で、TK23型式に比定。2は須恵器の杯身で、MT15型式に比定できる。3は須恵器の杯身で、TK23～TK47型式に比定できる。4は土師器の甕で、口縁部内面に横方向のハケ、体部外面は斜方向にハケを施す。内面はナデており、粘土接合の痕跡が残る。

5・6は土師器の高杯で、5は椀形の杯部の高杯である。7～9は弥生時代後期の壺。7の口縁端部には円形竹管を押圧する浮文が、8の口縁端部には横方向に凹線を施した後、円形竹管を押圧する浮文を施している。10は弥生時代後期以前の壺の底部と思われ、混入した可能性が考えられる。11～13は弥生時代後期の甕で、11・12の口縁部は面をもつ。12・13の外面はタタキを施す。S1は板状に加工している石である。W1～W10は木杭で、W7が最も長く、79.5cmを測る。(西村)



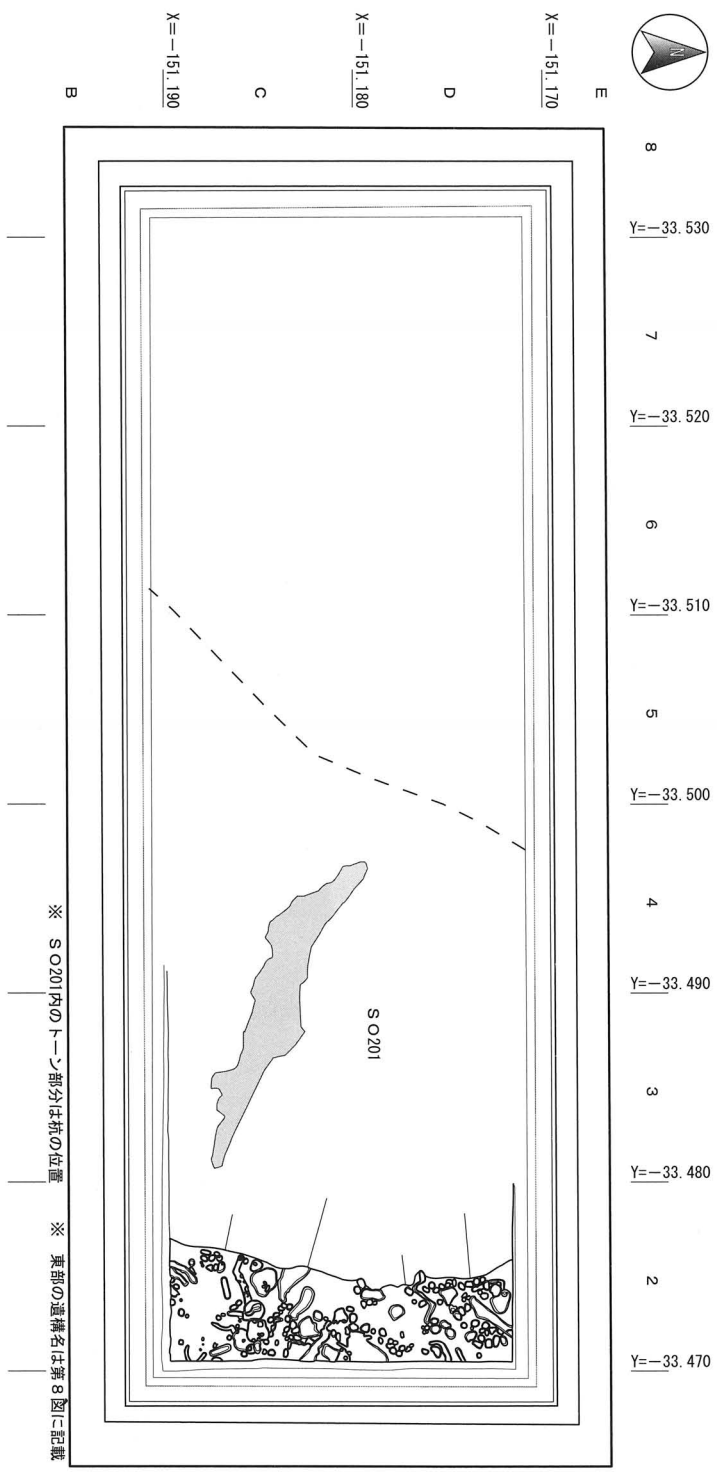
写真9 SO201調査状況(東から)



写真10 SO201調査状況(南から)



写真11 SO201杭取り上げ状況(東から)



第7図 第2面検出遺構平面図

第9表 S O201出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
1 21	須恵器 杯蓋 口縁部	口径11.4	中央がやや窪む天井部からやや外側に伸びる口縁部。端部は丸い。口縁部内外面および体部内面回転ナデ。体部外面上位回転ヘラケズリ。	N8/0灰白色	0.5mmの砂粒を含む	良好	
2 21	須恵器 杯身 口縁部	口径14.4	外上方へ伸びる受部。たちあがりは内傾し、端部は内側に傾斜する面を持つ。たちあがりおよび受部内外面回転ナデ。体部内面回転ナデ。外面回転ヘラケズリ。	N6/0灰色	1mmの砂粒を含む	良好	
3	須恵器 杯身 受部		外上方へ伸びる受部。受部内外面回転ナデ。体部内面回転ナデ。外面回転ヘラケズリ。	N6/0灰色	1mmの砂粒を含む	良好	
4 21	土師器 甕 口縁部	口径13.0	外上方へ伸びる口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部内面ハケナデのちヨコナデ。外面ヨコナデ。体部内面ナデ。粘土接合痕あり。外面ハケナデ。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
5	土師器 高杯 口縁部	口径13.5	碗形の杯部。口縁部は内傾し伸び、端部は丸く終わる。口縁部、杯部内外面ヨコナデ。	5YR7/6橙色	1～2mmの砂粒を含む	良好	
6 21	土師器 高杯 裾部	裾径8.0	柱状の脚部から裾はゆるやかに広がる。端部は丸く終わる。脚部内外面ナデ。内面にシボリ目あり。裾部内外面ナデ。内面に指頭圧痕あり。	5YR7/8橙色	1～2mmの砂粒を含む	良好	
7 21	弥生土器 壺 口縁～頸部	口径20.6	外上方へひらく頸部から外反する口縁部。端部は下方へ肥厚し面をもつ。端面に円形浮文を貼り付ける。浮文上には竹管を押圧する。口縁部内外面ヨコナデ。頸部内外面ナデ。	10YR6/1褐灰色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
8	弥生土器 壺 口縁部	口径20.4	外上方へ外反する口縁部。口縁端部は上下に拡張させ面をもつ。端面には凹線文を2条施し、円形浮文を貼り付ける。浮文上には円形竹管を押圧する。内外面ともヨコナデ。	10YR6/3 にぶい黄褐色	1～4mmの砂粒を含む	良好	
9 21	弥生土器 壺 頸部～体部		球形の体部。直しぎみからやや外傾して伸びる頸部。体部内面ハケナデのちナデ。指頭圧痕あり。外面ハケナデ。頸部内外面ハケナデ。	5YR6/6橙色	1～4mmの砂粒を含む	良好	
10	弥生土器 壺 底部	底径6.5	やや突出する平底。体部から底部内外面ナデ。底部内面に指ナデによる痕跡あり。	2.5Y3/1黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
11	弥生土器 甕 口縁部	口径17.2	「く」の字に屈曲し外反する口縁部。端部は面をもちやくぼむ。体部内面ハケナデ。外面ナデ。口縁部内面ハケナデのちヨコナデ。外面ヨコナデ。	7.5YR5/4 にぶい褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	
12 21	弥生土器 甕 口縁～体部	口径17.5	肩のほらない体部から「く」の字に屈曲し外上方へ伸びる口縁部。端部は面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面下位ナデ。中位～上位ハケナデ。外面右上がりのタタキ。下位に煤付着。	10YR4/3 にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
13	弥生土器 甕 底部	底径5.5	突出する平底。体部内面横方向のハケナデ。外面右上がりのタタキ。	2.5Y5/3黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
S 1 21	石製品	長さ45.1 幅8.8 厚み2.6	細長い板状に加工しているもので、幅は狭く、厚みも薄い。	10Y7/1灰白色			

第10表 S O201出土杭法量表

掲載番号 図版番号 杭番号	断面 形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	先端形状	掲載番号 図版番号 杭番号	断面 形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	先端形状
W 1 22 杭 4	丸	78.9	6.5		六角形	W 6 22 杭 20	丸	75.0	6.2		六角形
W 2 22 杭 6	長方形	64.8	長辺7.6 短辺3.8	3.8	三角形	W 7 22 杭 32	丸	79.5	6.3		四角形
W 3 22 杭 8	丸	72.5	6.6		五角形	W 8 22 杭 34	丸	68.2	4.9		五角形
W 4 22 杭 16	丸	44.3	6.6		六角形	W 9 22 杭 41	丸	64.0	4.2		六角形
W 5 22 杭 19	丸	63.7	8.0		七角形	W 10 22 杭 42	丸	69.6	7.1		五角形



Y = -33.480

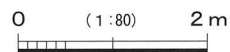
Y = -33.470

X = -151.180

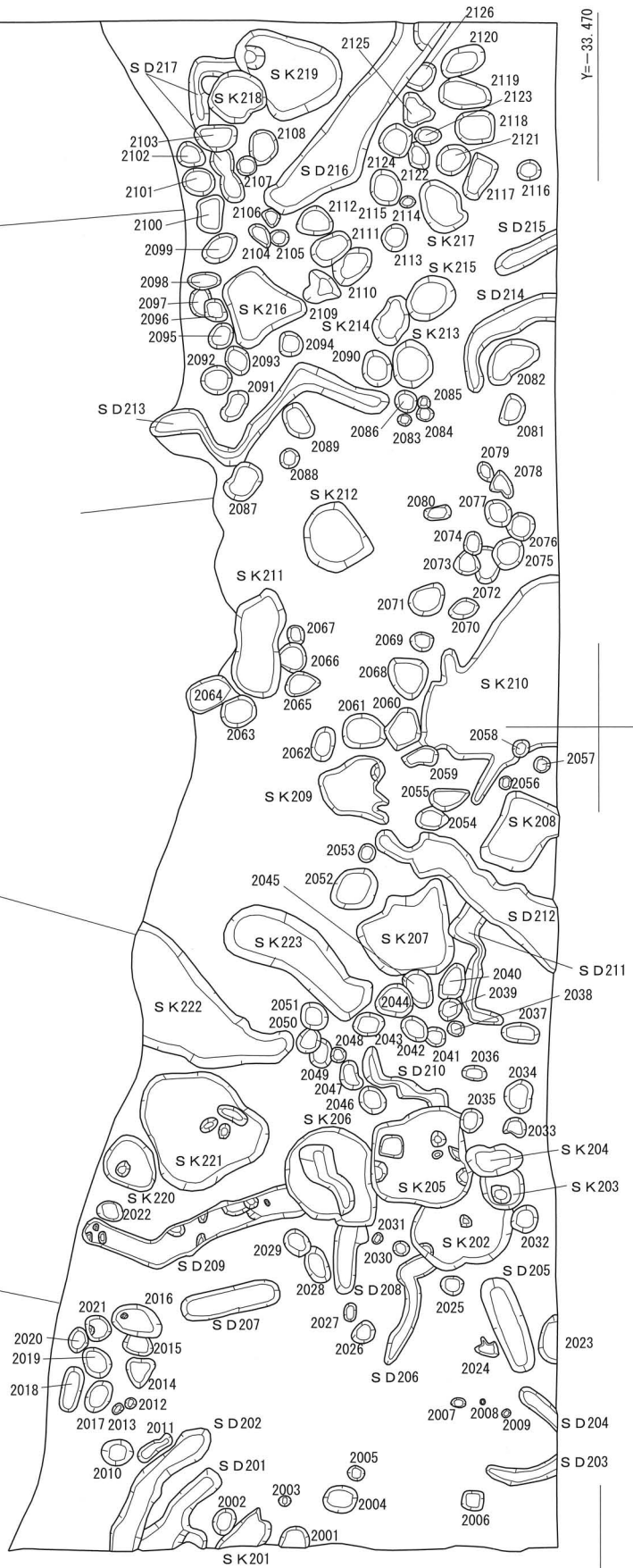
S O 201

X = -151.190

※小穴番号はS P を省略



第 8 図 第 2 面東部検出遺構平面図



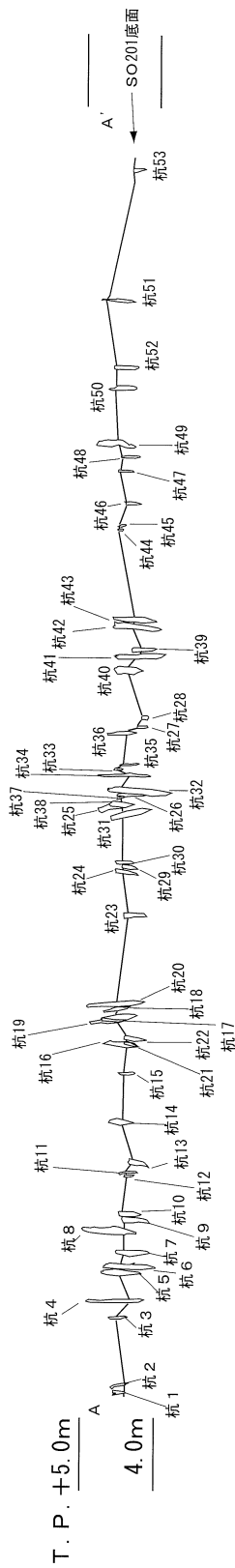


Y = -33.490
X = -151.180

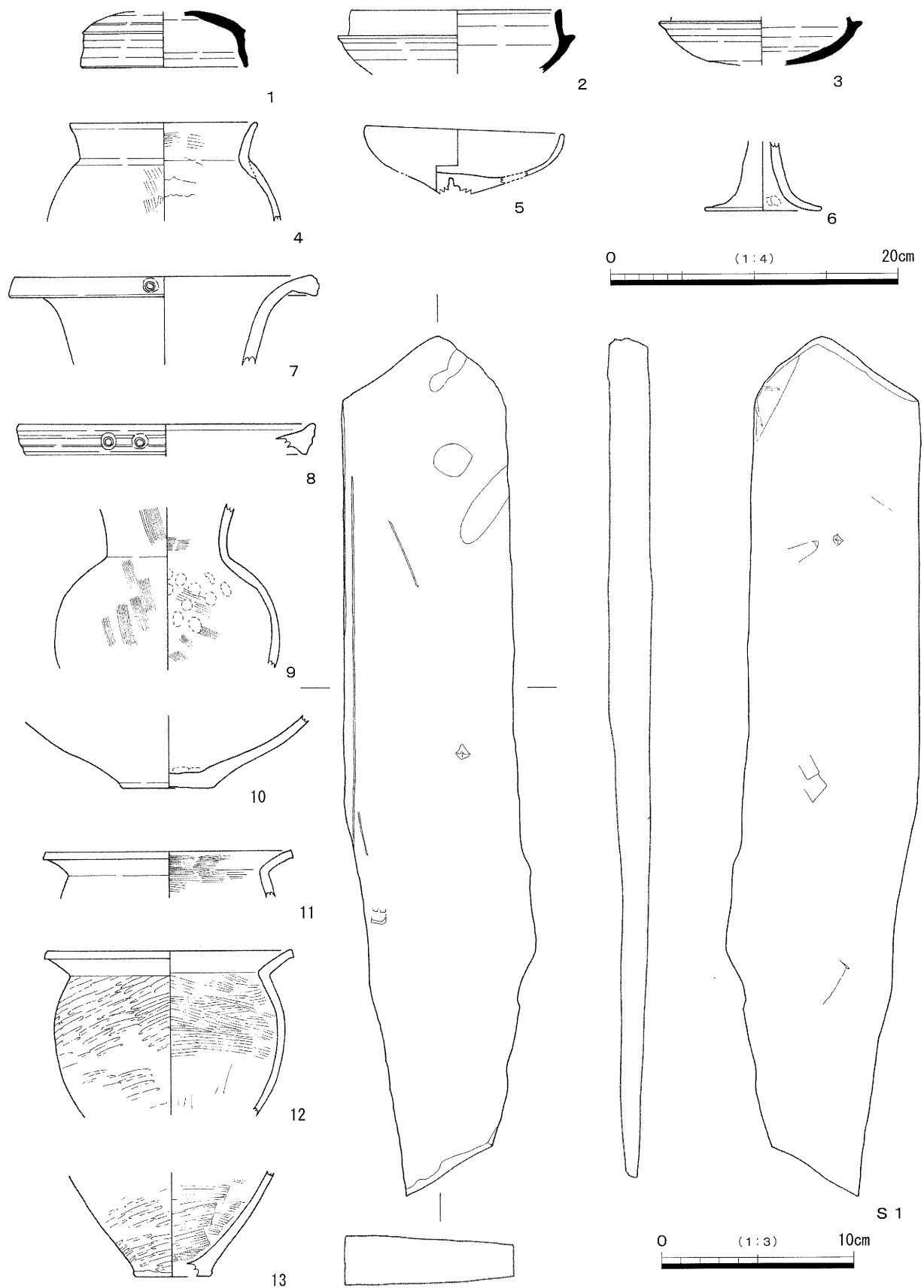
Y = -33.480
X = -151.180

桩1 桩2 桩3 桩4 桩5 桩6 桩7 桩8 桩9 桩10 桩11 桩12 桩13 桩14 桩15 桩16 桩17 桩18 桩19 桩20 桩21 桩22 桩23 桩24 桩25 桩26 桩27 桩28 桩29 桩30 桩31 桩32 桩33 桩34 桩35 桩36 桩37 桩38 桩39 桩40 桩41 桩42 桩43 桩44 桩45 桩46 桩47 桩48 桩49 桩50 桩51 桩52 桩53

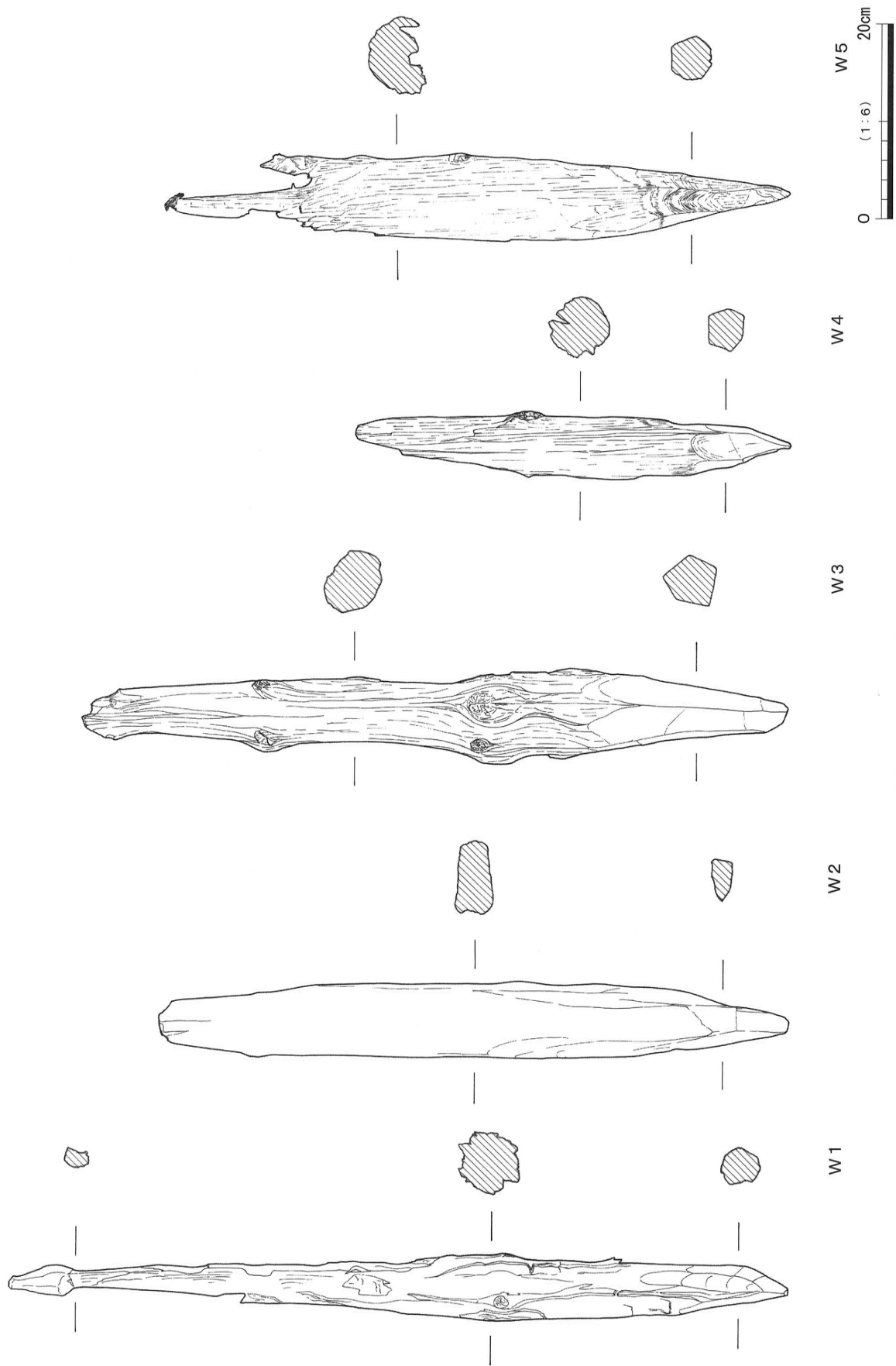
Y = -33.500
X = -151.180



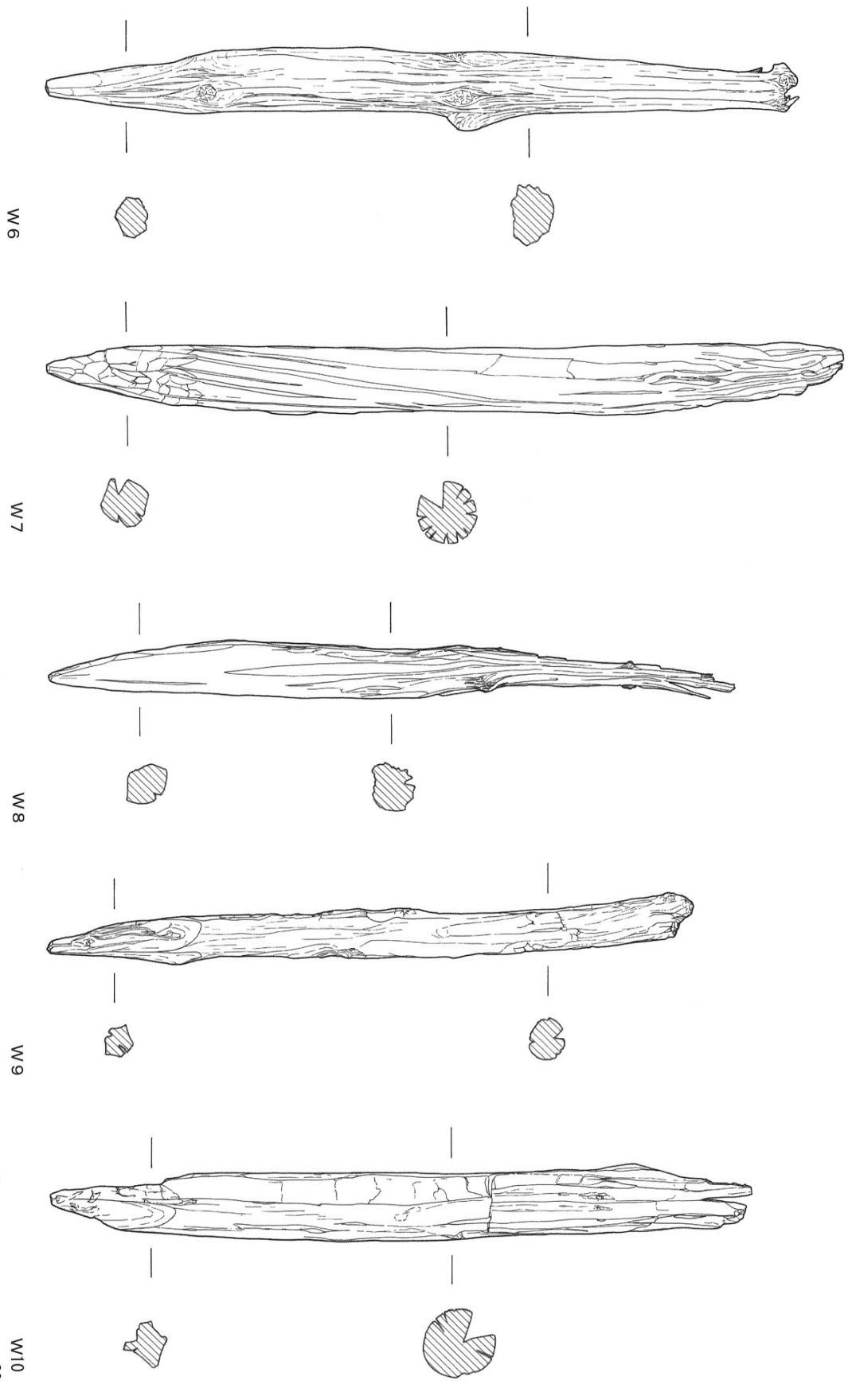
第9图 SO201桩检出状况平面·立面图



第10図 S O201出土遺物実測図(1)



第11图 SO201出土遺物実測図(2)



第12图 SO201出土遗物素描图(3)

第3面(弥生時代後期後半)

第IX層上面で検出した遺構面である。調査区の東部において弥生時代後期後半頃の溝を3条(S D301～S D303)検出した。中央部から西部では同時期の遺構の検出はなかった。

溝(S D)

S D301

2 C・D地区で検出した。平面形状は、北側が調査区外に至るため、全容は不明であるが、南北方向に伸びた後、南においてはやや西に曲がり終息する。検出長12.1m、幅約3.1mを測る。断面形状は皿形で、深さ約0.45mを測る。埋土は、7層を確認した。大きく上中下の3枚に分かれる。下位は粘土が、中位はシルトが堆積する。上位は人為的に埋めたと推測できる粘土のブロック土が堆積している。溝の底からは弥生時代後期後半の土器14・15が出土した。

14は長頸壺で、頸部と体部の境界は明瞭なくびれをもっていない。15は、体部中位が大きくふくらむ甕である。外面は磨耗してわかりにくい、タタキを全面に施している。15は河内VI-1様式に比定できる。

S D302

3 C・D 4 B・C地区で検出した。平面形状は、南西-北東へ伸び、幅2.6～5.5mを測る。断面形状は皿形で、深さ0.9mを測る。埋土は、15層を確認した。大きく上中下の3枚に分かれる。下位はシルト～細砂が優勢で、ラミナを確認できるところがある。一方、中位は細砂～粗砂が優勢で、流水堆積を示している。上位は滞水状態を示す粘土が堆積していた。溝内からは弥生時代後期の土器16～21が出土した。

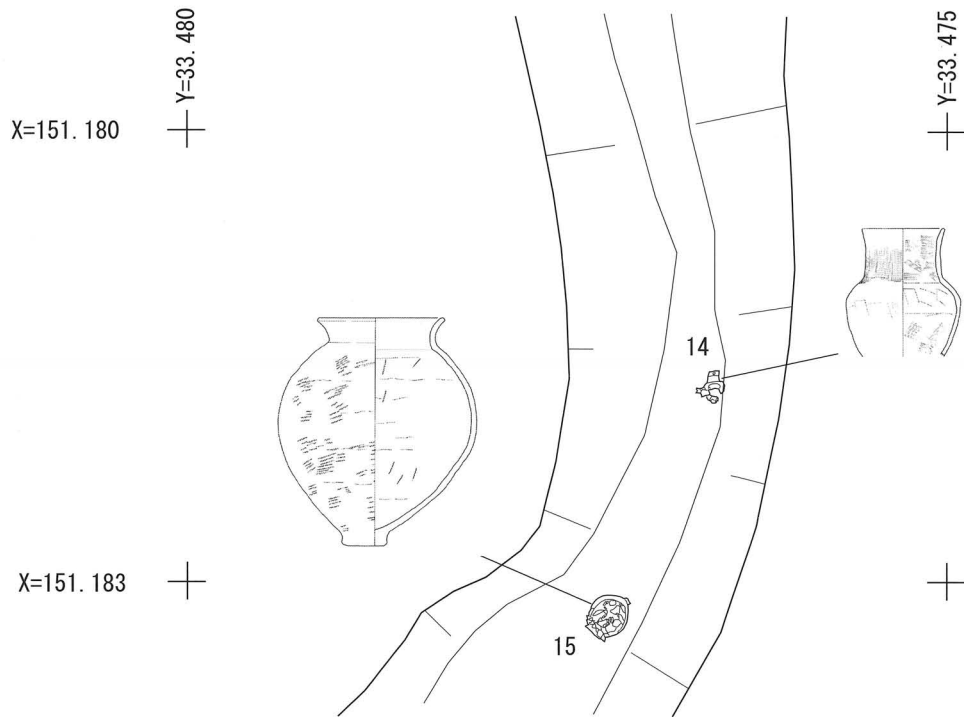
16は広口壺で、頸部は直立し口縁部は外反する。端部は平坦面を形成し、凹線状にくぼむ。17は広口壺で、口縁端部に凹線文と竹管円形浮文を施す。円形浮文内には赤色顔料を塗布している。18は壺の体部で、中位に最大径をもつ。19は壺の底部で、突出する平底である。20は甕で、外面にタタキを施し、内面にヘラケズリを施す。21は、甕の底部で、外面に右上がりのタタキを施す。

S D303

4 B・C・D 5 B・C地区で検出した。平面形状は、南西-北東へ伸び、幅5.5～6.3mを測る。断面形状は皿形で、深さ0.7mを測る。埋土は8層を確認した。大きく上下の2枚に分かれる。下位は中礫混細礫が認められ、流水に伴う堆積状況を示しているが、上位は、粘土を主体とする堆積状況であることから、全体的には滞水している時期が多かったと思われる。溝内からは、弥生時代前期～後期の土器22～29が出土した。

22～27は、弥生時代後期である。22は広口壺で、口縁端部に凹線文と円形浮文を施す。円形浮文内には赤色顔料を塗布している。23は長頸壺で、体部は丸味を呈し、直立する頸部と外反ぎみの口縁部が付く。24は外傾ぎみに直立する口頸部を成す長頸壺である。25は壺の底部で、上げ底を呈す。26・27は甕の底部で外面に右上がりのタタキを施す。28は弥生時代中期の広口壺である。口縁端部にキザミ目を施す。29は弥生時代前期の壺である。体部の削り出し凸帯上に沈線を1条施す。28と29は下層の砂層を削って本遺構が掘られていることから混入品と考えられる。

なおS D302とS D303は、下部に存在している河川内の埋土と誤認したため、掘りすぎてしまい平面では検出できてない。後の検討の結果、溝の方向はおおよそ南西-北東方向であることが判明した。また、出土遺物は、堆積層位と地区毎に取り上げた平面的な遺物の出土分布を元に検討し、確実に溝内から出土した遺物であると判断できるものについて掲載した。(西村)



※遺構内番号は遺物番号
※遺物実測図=1:10

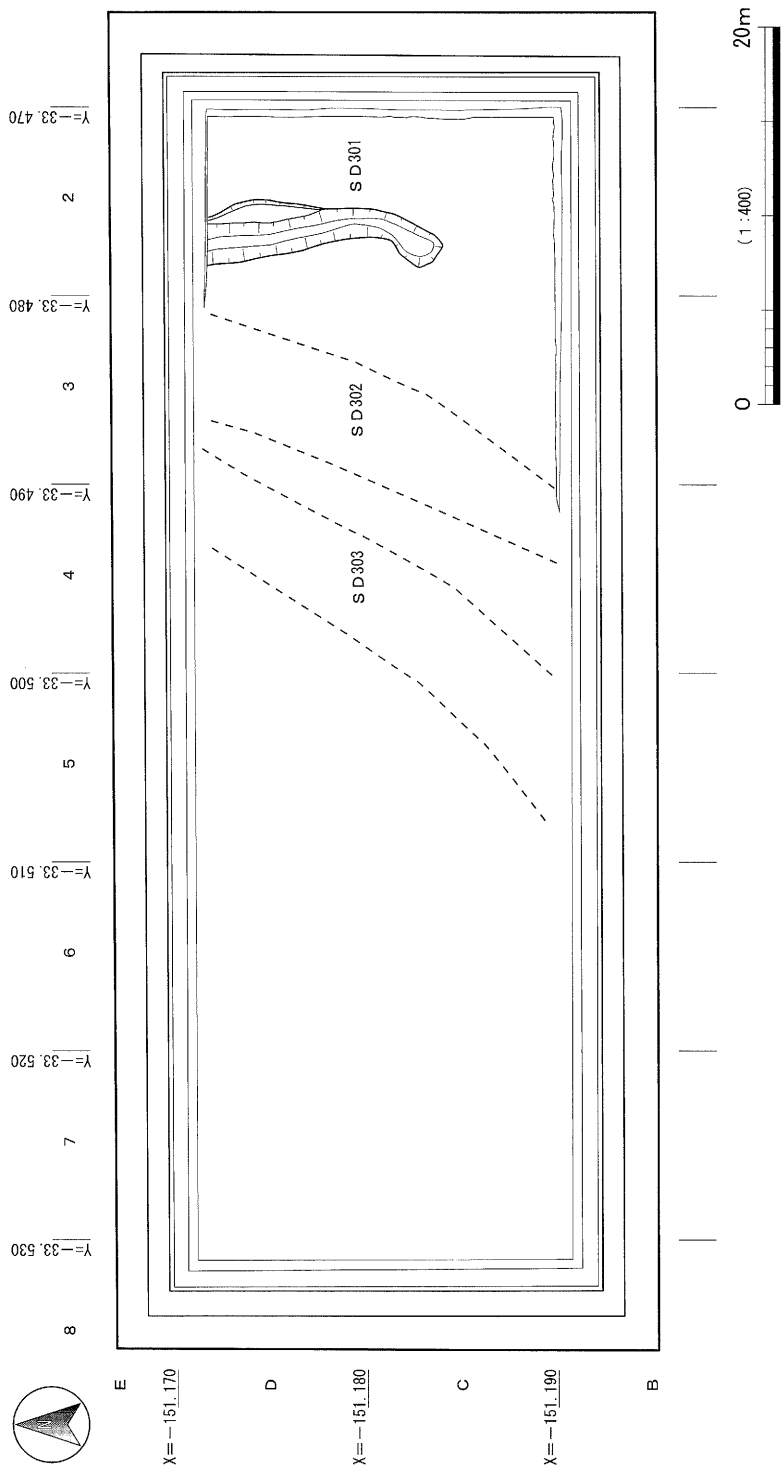
第13図 SD301遺物出土状況図



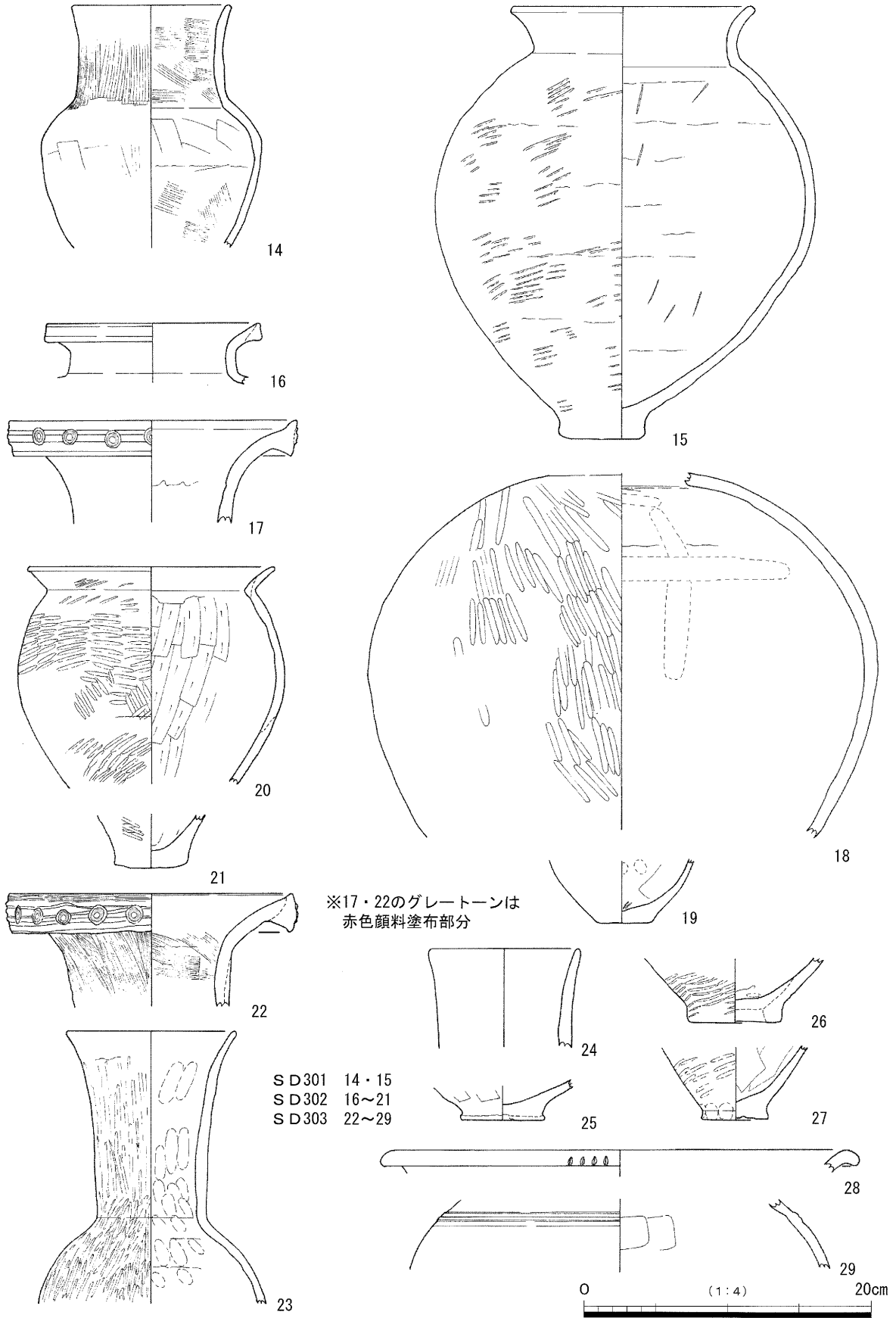
写真12 第3面調査状況(南から)



写真13 SD301出土遺物撮影状況(東から)



第14図 第3面検出遺構平面図



※17・22のグレートーンは
赤色顔料塗布部分

- S D 301 14・15
- S D 302 16~21
- S D 303 22~29

第15図 S D 301~S D 303出土遺物実測図

第11表 S D301出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
14 23	弥生土器 長頸壺 口縁部～体 部上位	口径10.6	体部上位がややはり出す。直立する頸部。外反する口縁部。端部は丸く終わる。頸部と体部の境界は明瞭なくびれをもっていない。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。体部内面下位はハケナデ、上位はヘラナデを施す。中位には粘土接合痕がある。外面はハケナデを施す。	5YR4/3 にぶい赤褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
15 23	弥生土器 甕 完形	口径16.4 器高30.5 底径6.0	突出する平底の底部。体部中位が張り出す。口縁部は直立ぎみにやや外反する。端部は丸みのある面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はナデを施し、接合痕とヘラ状工具の痕跡が残る。外面はタタキを施し、粘土接合痕がある。	2.5Y5/3 黄褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	

第12表 S D302出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
16	弥生土器 壺 口縁部	口径14.4	やや内側に傾き、直立する頸部。口縁部は外上方へ外反して伸びる。端部は上下に少しだけ肥厚し平坦面を形成する。凹線状にくぼむ。口縁部および頸部内外面はヨコナデを施す。	7.5YR6/4 にぶい橙色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
17 23	弥生土器 広口壺 口縁～体部 上位	口径19.8	外上方へ伸びる頸部。口縁部は外反し、端部は上下に肥厚し平坦面を形成する。端面に凹線文を2条施した後、円形浮文を貼り付ける。浮文内には円形竹管を押圧する。浮文の竹管部分には赤色顔料を塗布している。頸部内外面はナデを施し、粘土接合痕がある。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
18 23	弥生土器 壺 体部上位		頸部との界は突帯状に少し盛り上がる。やや体部中位がはりだす。球形の体部。体部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面はヘラミガキを施す。	7.5YR5/ にぶい褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
19	弥生土器 壺 底部	底径4.6	突出ぎみの平底。体部は球形を呈すると思われる。体部内面はユビナデを施し、板状工具による圧痕が残る。外面はナデを施す。	10R5/6赤色	1～3.5mmの 砂粒を含む	良好	
20 23	弥生土器 甕 口縁～体部 下位	口径16.8	最大径は体部中位より上側にある。口縁部は外上方へ外反する。端部は外側につまみ、丸く終わる。体部内面はヘラケズリを施す。外面。上位には右上がりから横方向のタタキを施す。中位には左上がりのタタキを施す。下位は右上がりのタタキを施す。口縁部内面はヨコナデ、外面はタタキのちヨコナデを施す。	10YR6/3 にぶい黄褐色	1～2.5mmの 砂粒を含む	良好	
21	弥生土器 甕 底部	底径5.0	突出する平底。内面ナデ。板状工具による圧痕が残る。外面は左上がりのタタキを施す。外面全体には煤が付着している。	10YR8/4 浅黄橙色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	

第13表 S D303出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
22 23	弥生土器 広口壺 口縁部	口径19.8	直立する頸部で、外反する口縁部をもつ。端部は上下へ肥厚する。口縁端面は凹線文を3条と竹管円形浮文を施す。竹管内に赤色顔料を塗布している。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	0.5～1mmの 砂粒含む	良好	
23 23	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径11.7	丸味のある体部。やや外側へ直立ぎみに立ち上がる頸部から外反する口縁部。口縁部内外面ヨコナデを施し、粘土接合痕がある。体部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。頸部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	10YR4/3 にぶい黄褐色	0.5～2mmの 砂粒を含む	良好	
24	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径10.0	やや外傾きぎみに直立する頸部。口縁部は少しだけ外反する。端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y7/2 灰黄色	1～1.5mmの 砂粒を含む	良好	
25	弥生土器 壺 底部	底径5.8	やや突出する上げ底の底部。内外面はナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	0.5～1mmの 砂粒を含む	良好	
26 23	弥生土器 甕 底部	底径5.6	突出する平底。体部から底部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面は右上がりのタタキを施す。	7.5YR7/4 にぶい橙色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
27	弥生土器 甕 底部	底径4.7	突出する平底。体部内面はナデ、外面はタタキを施す。底部内外面はナデを施し、指頭圧痕がある。	10YR4/2 灰黄褐色	0.5～5mmの 砂粒含む	良好	
28	弥生土器 広口壺 口縁部	口径33.2	外反する口縁部。端部は垂下し丸く終わる。端部にキザミ目を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR5/4 にぶい黄褐色	1～4mmの 砂粒含む	良好	
29	弥生土器 壺 体部		丸味のある体部。体部上位にケズリ出し突帯を施す。突帯内に1条沈線を施す。体部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	0.5～5mmの 砂粒含む	良好	

第4面（弥生時代後期前半）

第X層上面で検出した遺構面である。調査地の東部で、溝3条（SD401～SD403）を検出した。溝（SD）

SD401

2B～D地区で検出した。本遺構は、北西部でSD403に切られるほか、南側と北側が調査区外に及んでいるため全容は不明である。平面形状は南西－北東方向に直線に伸び、検出長17.5m、幅2.5～4.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.65mを測る。埋土は20層を確認した。埋土は大きく上下2枚に分けることができる。下位は植物遺体を含む粘土が主体で、溝の底に0.15～0.2mの厚みで堆積している。上位はシルト～細砂が主体で、ラミナを確認できるところがある。下位からは、弥生時代後期前半の土器、石器、木杭、自然木が出土した。出土状況は、散在していたが、東肩から底にかけては部分的に多く出土している。土器は、ほぼ完形に復元できる個体が見られる。木杭は、やや緩やかにカーブする部分の溝底で検出した。この杭はほぼ垂直に打ち込んでいる。杭の頭は溝底より数センチ出ている。この杭に近接する溝底からは、丸木が出土した。出土遺物のうち図化し掲載したものは土器30～72、石器S2～6、木杭W11・W12である。

30～46は、壺である。30は広口壺で、端部は下方に粘土を貼り付け、平坦面を形成する。31は広口壺で、河内V-3様式に比定できる。32は広口壺で、口縁部外面に1条の沈線を施す。33は短頸壺で、端部には凹線文を施す。34は口縁端面に凹線を施し、凹線上には赤色顔料を塗布している。35は長頸壺で、ヘラによる記号がある。河内V-2様式頃に比定できる。36は長頸壺で、体部上位にU字形の粘土を貼りつける。37は長頸壺で、頸部の下位に二条+ α の沈線文を施す。38は長頸壺で、丸味のある体部で、体部と頸部には明瞭なくびれがある。河内V-3様式に比定できる。39は長頸壺で、頸部と体部の界に半裁竹管文を2条施す。40の体部最大径は下位にある。ヘラミガキは、下位が縦方向、中位が横方向、上位が縦方向に施される。41は内外面ともナデのみで仕上げられており粗雑に作られている。42・43は突出する平底。44は体部中位に断面三角形の突帯を施す。45は無頸壺の蓋で、端面と口縁部外面に凹線文を施す。裾には2個1対の円孔が2ヶ所あけられている。46とセットになると思われる。46は無頸壺で、口縁部は肥厚し丸く終わる。体部下方にふくらみをもつ。

47～53は、甕である。47は「く」の字に外反する口縁部。体部内外面にハケナデを施す。河内V-1様式頃と思われる。48は「く」の字に外反し、端部は、平坦面を形成する。体部外面は、ナデを施すのみで、表面に凹凸が残る。内面もナデやヘラナデのみで、粘土接合痕が見られる。49は丸味のある体部から外反する口縁がつく。外面の全面にタタキを施す。河内V-2様式に比定できる。50は受け口状口縁で、端部は平坦面を形成する。51は、体部中位から上位がはり出す。外面にタタキを施した後、中位にハケナデを施す。52は、突出する平底をもち、外部全面にタタキを施す。53は、突出する底部で、底面はヘラケズリを施す。外面にタタキの後ハケナデを施す。

54～64は、高杯である。54・56は、屈曲部に稜をもつ。54は、口縁部外面に縦方向のヘラミガキを施す。55・57は、外反する口縁部で、端部は平坦面を形成する。58の口縁端部は平坦面を形成し、面の中央は凹線状にくぼむ。59は楕形の高杯。中空の脚部で円板充填法を用いている。裾部が広がる特徴を持ち、河内V-2様式に比定される。61は中空の筒状の脚部である。62の端部は、上方に拡張し、平坦面を形成する。裾部には、5個の円孔を施す。63はキザミ目を施す突帯を貼り付け

る。粘土接合の痕跡が見られるため、屈曲しさらに下方へ広がる器形になると思われる。64はミニチュアの高杯と思われる。

65～69は、鉢である。65～68は短く外反する口縁部を呈す。河内V-3様式に比定できる。

70～72は、器台である。70は、端面に3条の凹線を施し、円形浮文を貼り付ける。口縁部内外面には赤色顔料を塗布している。71の端面には凹線文を3条施し、円形浮文を貼り付ける。河内V-3様式に比定される。72の端面には4条の凹線を施し、竹管円形浮文を施す。

S2は敲き石で、断面隅丸方形の棒状を呈す。S3～S6は、用途不明の石で、S6の一部には煤が付着している。

W11・W12は木杭で、長さ約1.4mを測る。溝の時期は、出土遺物にやや古い様相のものが混在しているが、概ね河内V-3様式頃に比定できる。

第14表 S D401出土杭法量表

掲載番号 図版番号 杭番号	断面形状	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	先端形状
W11 27 杭1	三角形	135.8	11.2	4.8	四角形
W12 27 杭2	四角形	134.5	12.6	4.5	四角形



写真14 第4面調査状況(南から)



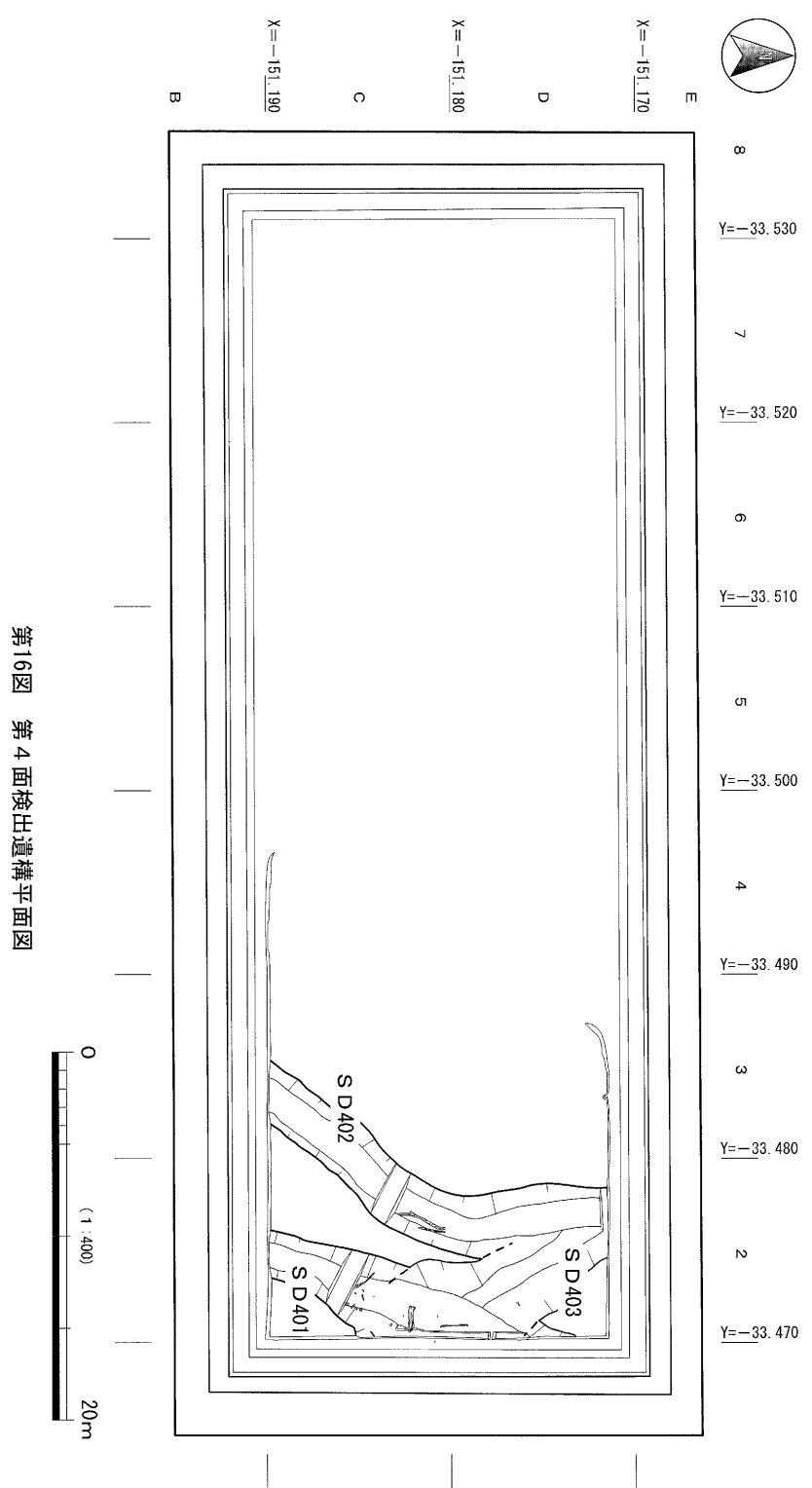
写真15 第4面測量状況(北東から)



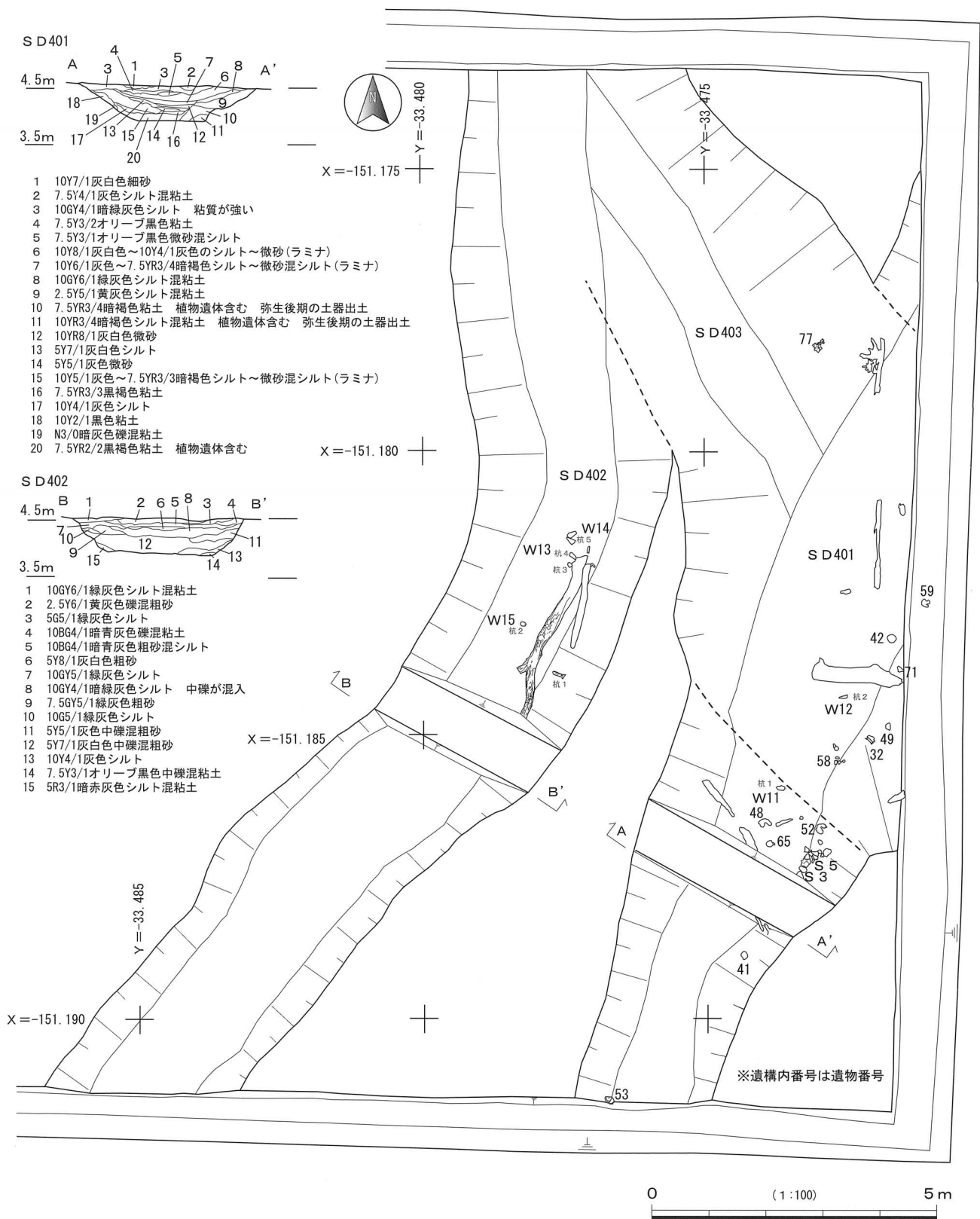
写真16 第4面実測状況(南から)



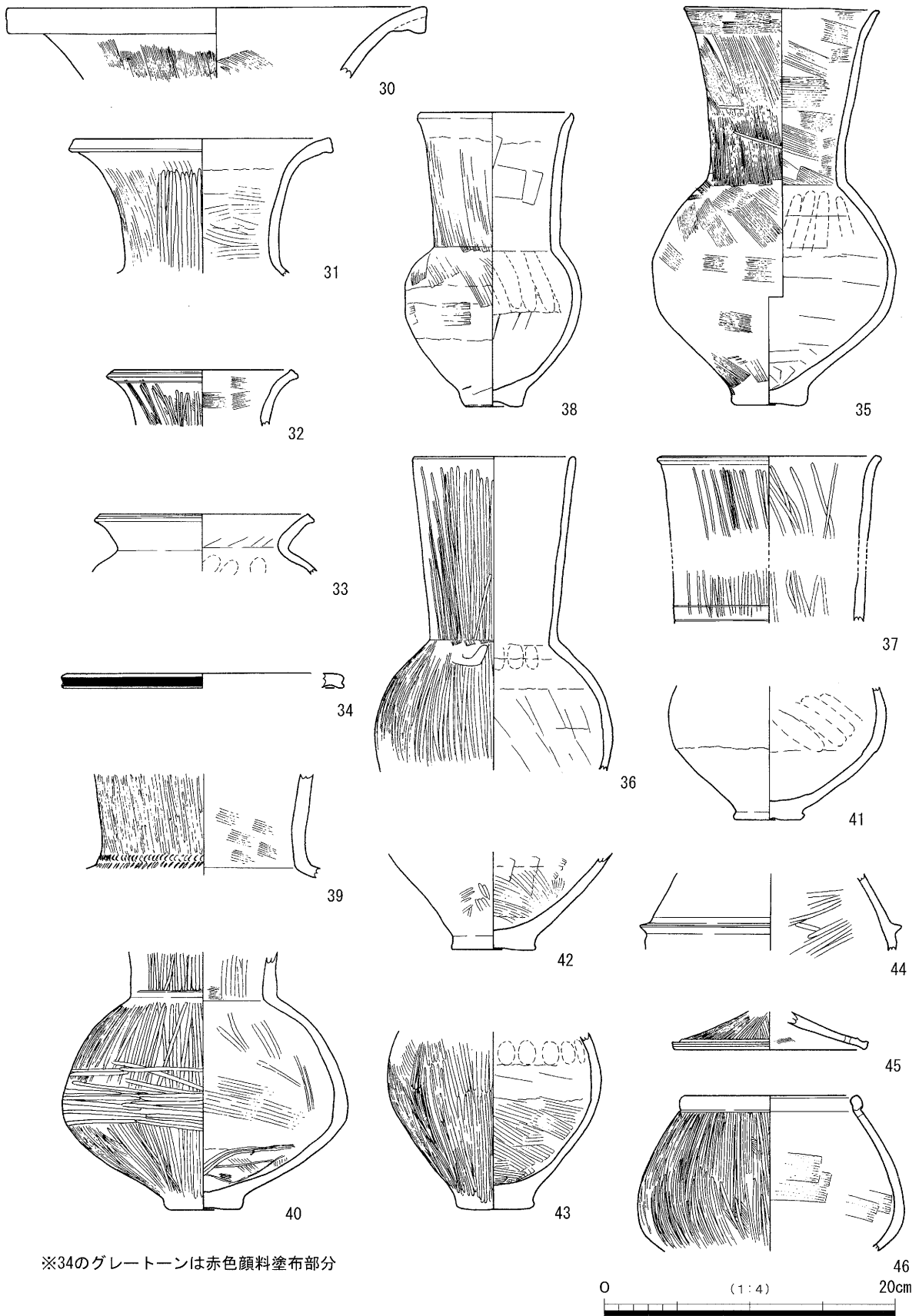
写真17 第4面掘削状況(南から)



第16図 第4面検出遺構平面図

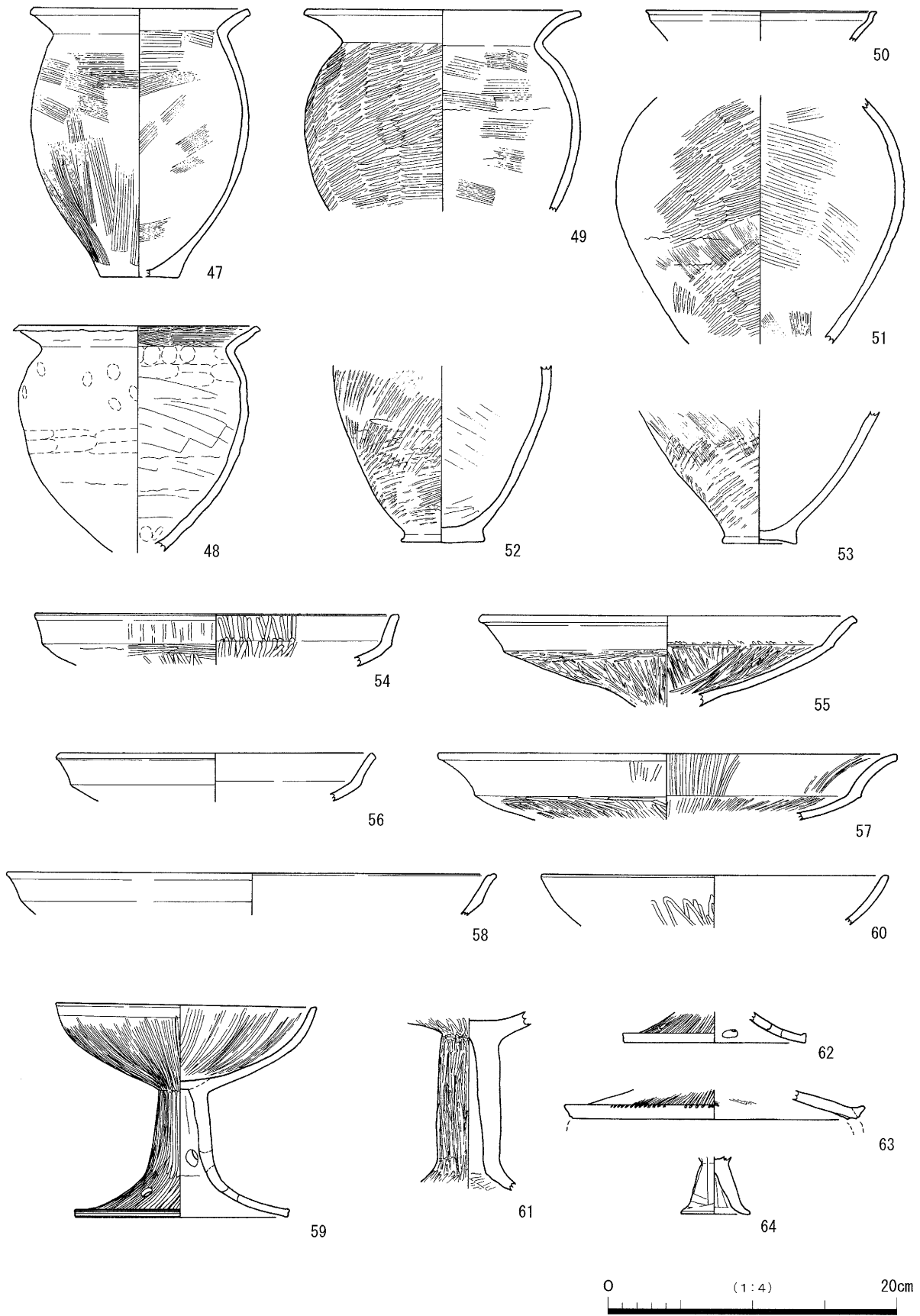


第17図 SD401~SD403平・断面図

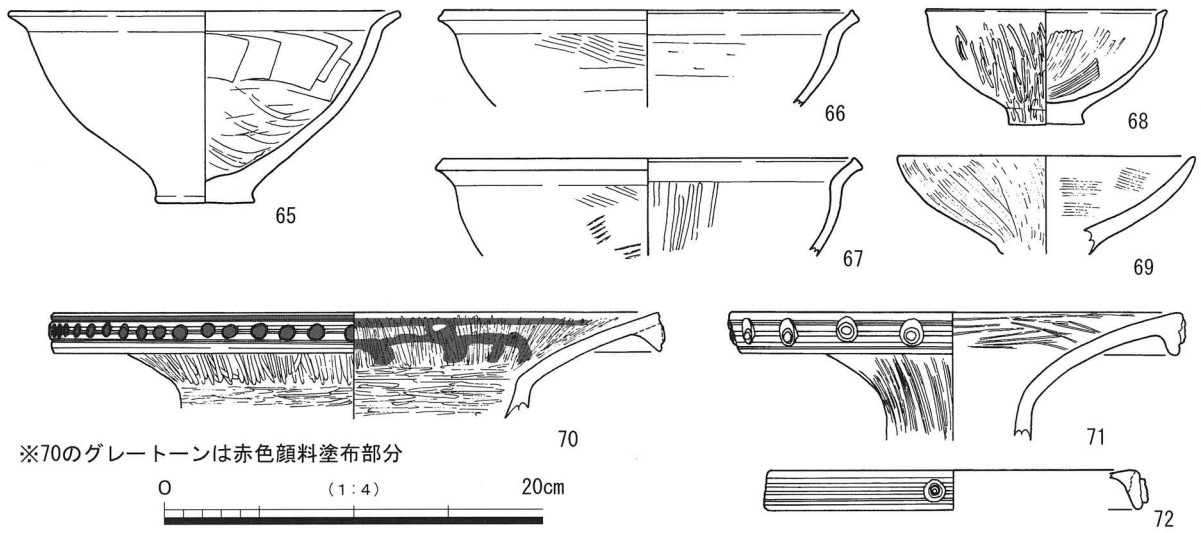


※34のグレートーンは赤色顔料塗布部分

第18図 S D401出土遺物実測図(1)

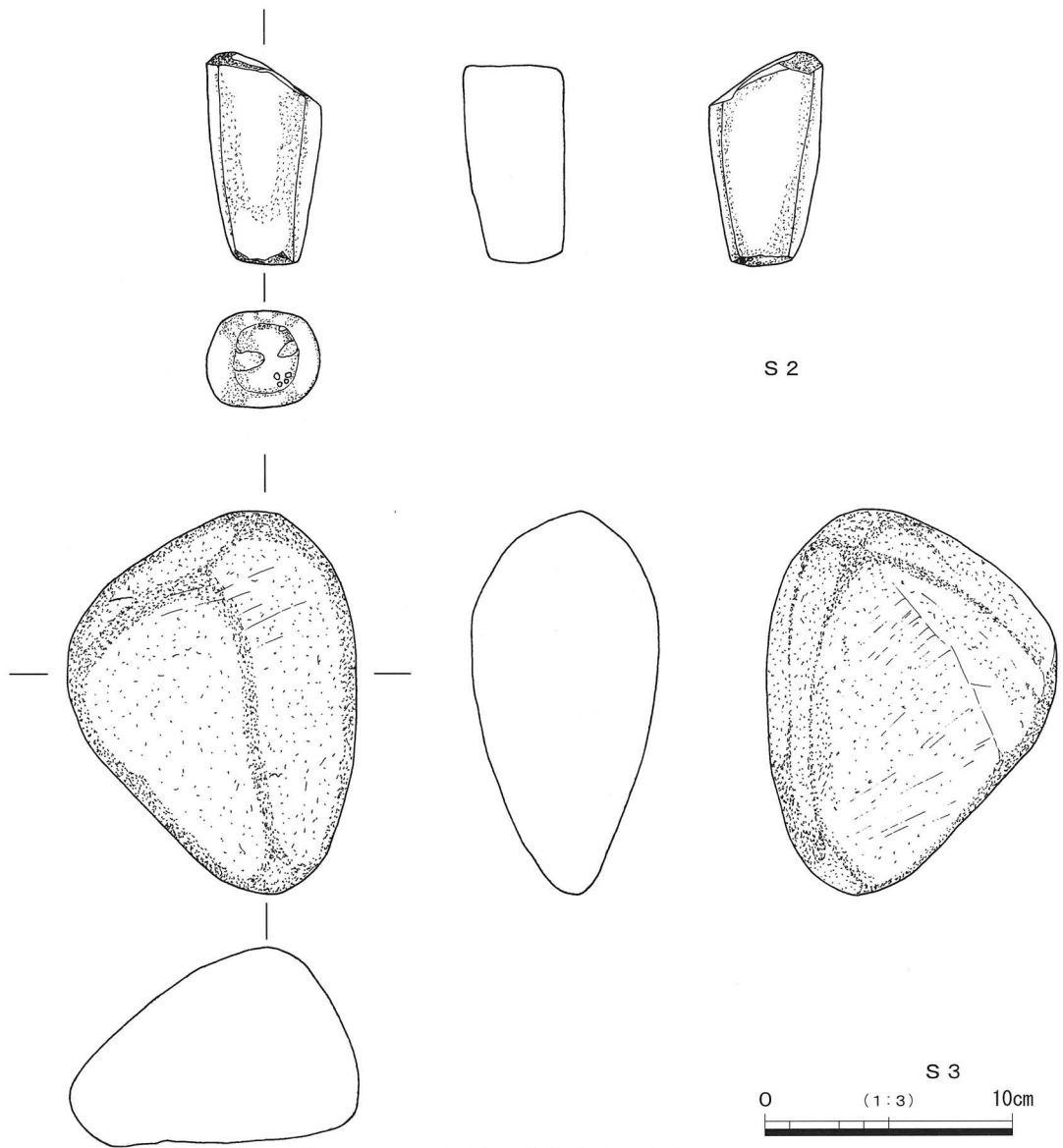


第19图 SD401出土遺物実測図(2)

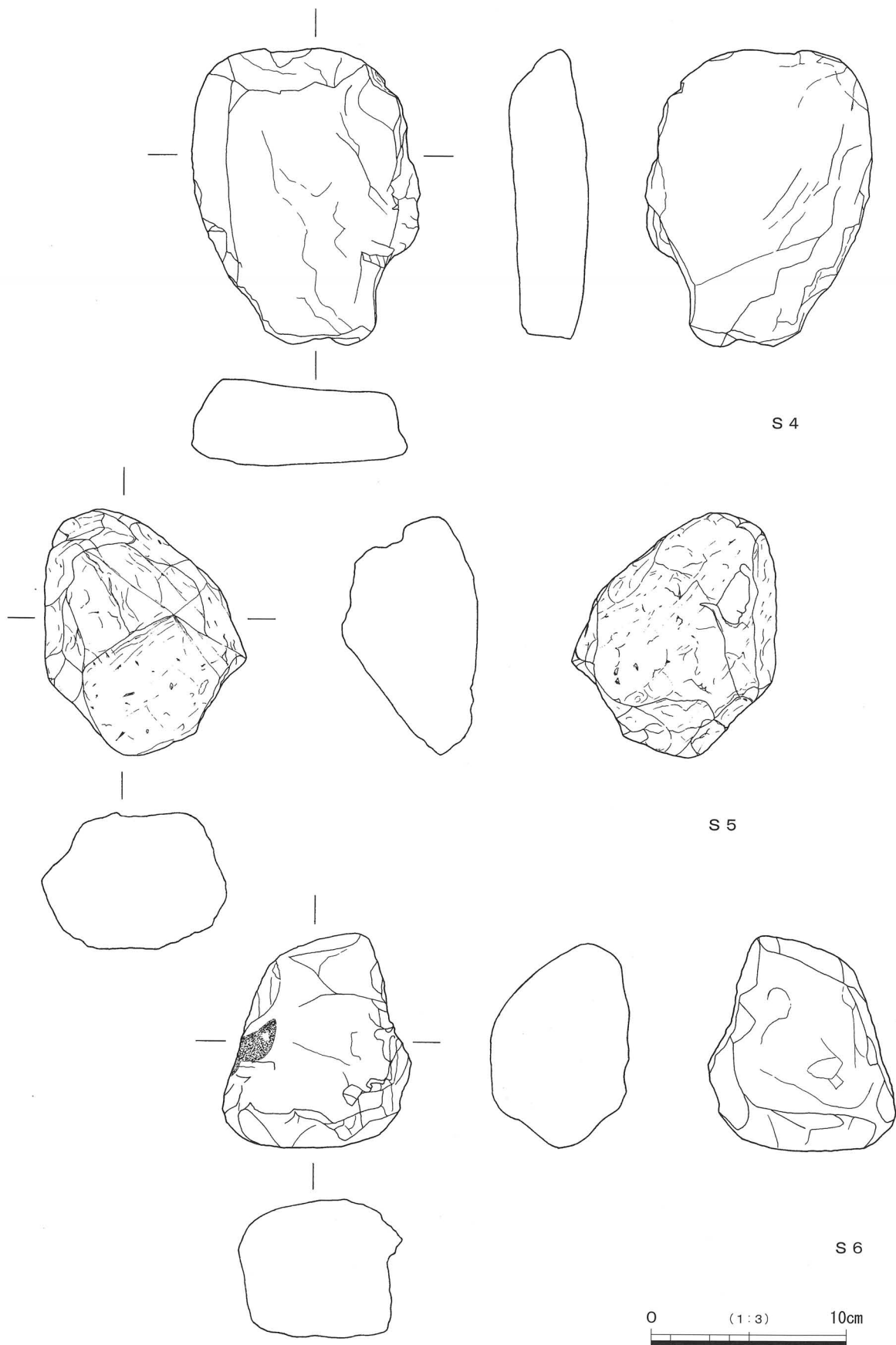


※70のグレートーンは赤色顔料塗布部分

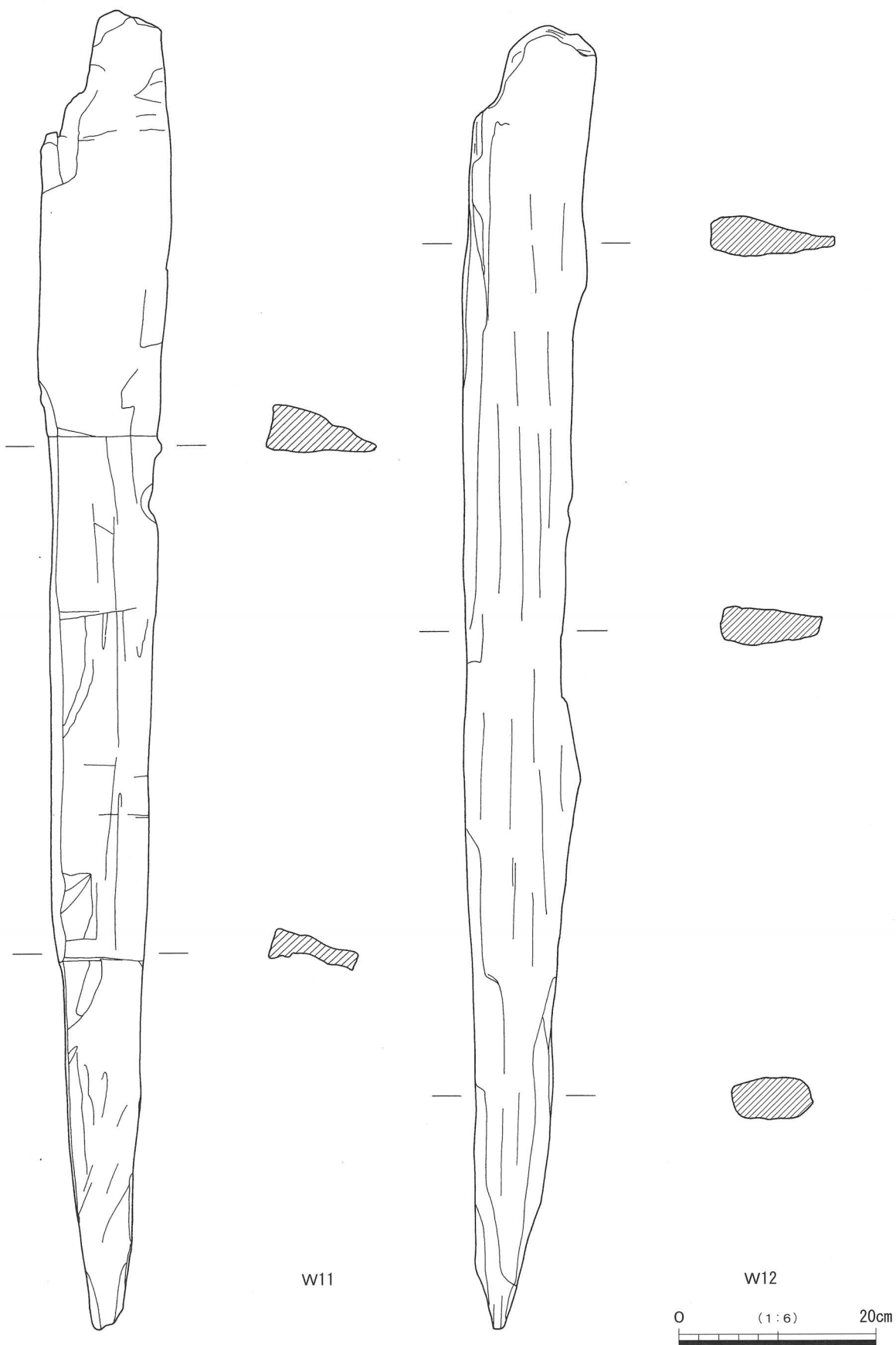
0 (1:4) 20cm



第20図 S D 401出土遺物実測図(3)



第21図 SD401出土遺物実測図(4)



第22図 S D401出土遺物実測図(5)

第15表 S D401出土遺物観察表(1)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
30	弥生土器 広口壺 口縁部	口径29.0	ゆるやかにひらく口縁部。端部は下方に肥厚し平坦面を形成する。口縁部外面下方にキザミ目を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	
31	弥生土器 広口壺 口縁部	口径11.8	外側にひらく頸部。外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面はハケナデを施し、粘土接合痕がある。外面はハケナデのちへらミガキを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
24	弥生土器 壺 口縁部	口径13.2	外反する口縁部。端部は上下方へつまみ出し面をもつ。端面に1条凹線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデ、外面はハケナデのちへらミガキを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
33	弥生土器 壺 口縁部	口径15.1	外反する口縁部。端部は下方へつまみ出し面をもつ。端面に凹線を1条施す。口縁部内面はヘラナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外面はナデを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
34	弥生土器 広口壺 口縁部	口径19.4	外反しほぼ水平にひらく口縁部。端部は下方へつまみ出し面をもつ。端面に1条の凹線を施す。端面に赤色顔料を塗布している。口縁部内面はナデ、外面はヨコナデを施す。	2.5Y3/1 黒褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
35	弥生土器 長頸壺 完形	口径13.5 器高27.4	突出する上げ底の底部。体部中位が張り出す扁平な球形を呈す。直立からやや外側に開く頸部。口縁部は外反する。端部は丸く終わる。頸部外面に直線に2条のへら描きによる記号文を施す。口縁部・頸部内外面はハケナデを施す。体部内面下位は板ナデ。上位はユビナデを施す。外面はハケナデを施す。底部内面は板ナデ、外面ナデを施す。	2.5Y6/3 にぶい黄色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
24	弥生土器 長頸壺 口縁部～ 体部下位	口径11.2	球形の体部。直線的に外傾して伸びる口頸部。口縁部は丸く終わる。体部上位にU字形の粘土を貼りつけている。口縁部と頸部内面はナデ、外面はへらミガキを施す。体部内面はへらケズリのちユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面はハケナデのち縦方向のへらミガキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
37	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径15.4	直線的にやや外傾し伸びる。口縁部は外反し、端部は平坦面を形成する。頸部の下方に2条+αの沈線文を施す。口縁部内外面はヨコナデのちへらミガキを施す。頸部内外面はへらミガキを施す。	5YR4/2 灰褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
38	弥生土器 長頸壺 完形	口径10.3 器高20.4 底径4.0	丸味のある体部で、直上に伸びる頸部からやや外反する口縁部。端部は上方へつまみ上げぎみに終わる。体部と頸部に明瞭なくびれがある。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面は板ナデ、外面はハケナデを施し、内外面ともに粘土接合痕がある。体部内面上位はユビナデ、下位はナデを施す。外面中位から上位はハケナデを施し、粘土接合痕がある。下位はナデを施す。	7.5Y5/3 にぶい褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
39	弥生土器 壺 頸部		直立からやや外側に向かって立ちあがる頸部。頸部と体部の界に半裁竹管文を施す。頸部内面はハケナデ、外面へらミガキを施す。体部内外面はナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1～8mmの砂粒を含む	良好	
40	弥生土器 壺 体部～底部	底径5.3	突出するあげ底の底部。下膨れの体部をもち、体部最大径は下方にある。体部上位から屈曲し直立ぎみに外側へのびる頸部。頸部内面はハケナデのちへらミガキ、外面はへらミガキのちハケナデを施す。体部内面はハケナデのちへらミガキ、外面はへらミガキを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
41	弥生土器 壺 体部中位～ 底部	底径4.6	体部中位が膨らむ球形で、底部はあげ底である。体部内面下位はナデ、中位はユビナデ、外面はナデを施す。体部中位の内外面に粘土接合痕がある。底部内外面はナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1～6mmの砂粒を含む	良好	
42	弥生土器 壺 体部下位～ 底部	底径5.7	突出する平底の底部。外上方へゆるやかにひらく体部。体部から底部内面はハケナデを施す。体部外面はへらミガキを施す。底部外面はナデを施す。	7.5Y5/4 にぶい褐色	0.5～4mmの砂粒を含む	良好	
43	弥生土器 壺 体部中位～ 底部	底径5.5	突出する平底の底部。球形の体部。体部内面上位はへらナデとユビナデを施し、粘土接合痕がある。下位はハケナデを施す。外面はハケナデのち縦方向のへらミガキを施す。底部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
44	弥生土器 壺 体部		体部中位が張り出す。体部中位に張り付け突帯を施す。体部内面はへらミガキ、外面はナデを施す。	2.5Y2/1黒色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
45	弥生土器 壺用蓋 裾部	裾径13.1	平たく低い体部からゆるやかにひらく裾部。端部は面をもつ。端面と口縁部外面に凹線文を施し、2個1対の円孔をあけている。裾部内面はハケナデ、外面はへらミガキを施す。	7.5YR7/3 にぶい橙色	1mm以下の砂粒を含む	良好	

第16表 S D401出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
46 25	弥生土器 無頸壺 口縁部	口径11.9	口縁部は肥厚し丸く終わる。体部は下方にふくらみをもつ。口縁部に2個1対の円孔をあけている。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	5YR7/3 にぶい橙色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
47 25	弥生土器 甕 口縁部～体部下位	口径15.3 器高18.6 底径5.4	平底の底部。肩があまりはらない体部。口縁部は「く」の字に外反する。端部は下方へつまみ出し平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はハケナデを施す。	5YR4/4 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
48 25	弥生土器 甕 口縁部	口径16.2	上位が張り出す体部。口縁部は「く」の字に外反する。端部は平坦面を形成する。口縁部内面はハケナデ、外面はナデを施し、粘土接合痕がある。体部内面はヘラナデとユビナデを施し、粘土接合痕がある。中位から下位には煤が付着している。	5YR5/6 明赤褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	
49 25	弥生土器 甕 口縁部	口径18.8	丸みのある体部で、外反する口縁部。端部は丸味のある面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ。体部内面はハケナデを施し、粘土接合痕がある。外面はタタキを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
50	弥生土器 甕 口縁部	口径16.0	受け口状口縁部で、端部は面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	0.5～2mmの砂粒含む	良好	
51	弥生土器 甕 体部上位～下位		体部中位から上位が張り出す。内面はハケを施す。外面はタタキを施す。中位にタタキのちハケナデを施す。粘土接合痕がある。	5YR3/3 暗赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
52	弥生土器 甕 体部中位～底部	底径5.6	突出する平底の底部。内湾して伸びる体部。体部内面はヘラナデ、外面はタタキを施し、粘土接合痕がある。一部に黒斑あり。底部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。	10YR4/3 にぶい黄褐色	1～4mm程度の砂粒含む	良好	
53 25	弥生土器 甕 底部	底径5.2	突出する底部で、底面はヘラケズリを施し、上げ底状を呈す。外上方へ開く体部。体部内面はナデ、外面はタタキのちハケナデを施す。	10YR5/4 にぶい黄褐色	0.5～1mm程度の砂粒含む	良好	
54	弥生土器 高杯 口縁部	口径25.3	内湾ぎみにひらく杯部。杯部から屈曲し外反ぎみにひらく口縁部。屈曲部に稜をもつ。口縁部は外側へやつまみ出す。上部に面をもつ。口縁部内外面はヨコナデのち縦方向のヘラミガキを施す。杯部内外面はヘラミガキを施し、外面には粘土接合痕がある。	5YR4/3 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒含む	良好	
55 26	弥生土器 高杯 口縁部	口径25.5	ゆるやかにひらく杯部。屈曲し外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。杯部内外面はヘラミガキを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	0.5～1mm程度の砂粒含む	良好	
56	弥生土器 高杯 口縁部	口径21.5	内湾ぎみにひらく杯部。杯部から屈曲し外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。杯部内外面はナデを施す。	5YR4/2 灰褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
57	弥生土器 高杯 口縁部	口径31.8	内湾ぎみにゆるやかにひらく杯部。外上方へ外反する口縁部。端部は下方へつまみ出し丸みのある面をもつ。口縁部および杯部内外面はヘラミガキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
58	弥生土器 高杯 口縁部	口径34.0	外反する口縁部。端部は平坦面を形成し、面の中央葉は凹線状にくぼむ。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
59 26	弥生土器 高杯 完形	口径18.0 器高14.9 裾径14.6	ゆるやかに内湾する杯部。端部は面をもつ。筒状からやや外側にひらく脚部。裾部はゆるやかにひらく。端部は上下にややつまみ出し面をもつ。裾部に上下2段3個スカシ孔あり。杯部内外面はヘラミガキを施す。脚部内面シボリ目あり。外面はヘラミガキを施す。裾部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR7/8 橙色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
60	弥生土器 高杯 口縁部	口径24.1	内湾しゆるやかにひらく浅い椀形の杯部。口縁部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
61	弥生土器 高杯 脚部		中空の筒状の脚部。脚部から屈曲しひろがる裾部にいたる。杯部内外面はヘラミガキを施す。脚部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。裾部内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y4/2 暗灰黄色	1mm以下の砂粒を含む	良好	

第17表 S D401出土遺物観察表(3)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
62	弥生土器 高杯 裾部	裾径12.5	ゆるやかに外反しひらく裾部。端部は、上方に拡張し、平坦面を形成する。裾部に5ヶ所円孔あり。裾部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。端部内外面はヨコナデを施す。	5YR6/6橙色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
63	弥生土器 高杯 裾部	裾径19.6 +α	裾部はゆるやかにひらく。粘土接合の痕跡がみられるため屈曲し、さらに下外方へ広がる器形になると思われる。屈曲部にはキザミ目を施した突帯を施す。突帯上には 裾部内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
64	弥生土器 高杯 裾部	裾径4.8	裾部は脚部から屈曲し外へ伸びる。端部は丸く終わる。脚部内面はナデを施し、シボリ目がある。外面はヘラナデを施す。裾部内外面はナデを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
65 26	弥生土器 鉢 口縁～底部	口径20.7 器高10.2 底径5.2	内湾ぎみに上外方へ伸びる体部から短く外反する口縁を呈す。端部は面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。底部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。	5Y5/2 灰オリーブ色	1mmの砂粒を含む	良好	
66	弥生土器 鉢 口縁部	口径21.6	内湾してひらく体部。体部から屈曲し外反する口縁部。端部は上下へつまみ出し面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリを施す。外面はハケナデのちヘラナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
67	弥生土器 鉢 口縁部	口径21.8	内湾してひらく体部。体部から屈曲し外反する口縁部。端部は上下方へつまみ出し面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラミガキを施す。外面下位はタタキ、上位はハケナデを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
68 26	弥生土器 鉢 口縁～底部	口径12.8 器高6.1 底径4.0	体部が内湾ぎみに伸び、短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部および底部内外面はヘラミガキを施す。	5YR4/4 にぶい赤褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
69	弥生土器 鉢 口縁部	口径15.9	突出する平底を持つものである。内湾気味にゆるやかにひらく体部。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はハケナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
70 26	弥生土器 器台 口縁部	口径32.6	有段口縁の装飾器台。口縁端部は垂下させ、端面に3条の凹線を施し、円形浮文を貼り付ける。円形浮文と最上位の凹線および口縁部内面には赤色顔料を塗布している。口縁部上位内外面は縦方向のヘラミガキ、下位内外面横方向のヘラミガキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	0.5～2mm砂粒を含む	良好	
71 26	弥生土器 器台 口縁部	口径24.0	直立する脚部から屈曲し、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。端部は垂下し、端面には凹線文を3条施し、円形浮文を貼り付ける。浮文には円形竹管を押しやる。口縁部内外面はヘラミガキを施す。端面はヨコナデを施す。	5YR5/6 明赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
72 26	弥生土器 器台 口縁部	口径19.6	外反しほぼ水平にひらく口縁部。端部は下方に肥厚し面をもつ。端面は4条の凹線を施し、竹管円形浮文を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR3/1 黒褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
S 2 26	石 敲き石	長さ8.6 幅3.0～ 4.6 厚み4.3	断面隅丸方形の棒状を呈す。幅が狭くなる方の面には敲打痕がのこる。全体に煤 (N5/0灰色) が付着	10Y6/1灰色			
S 3 27	石 用途不明	長さ15.4 幅11.7 厚み8.0	平面形状も断面形状も三角形である。全面磨いたようで、表面はなめらかである。B面の一ヶ所に尖った物を研いだと思われる溝が残る。	10G4/1 暗緑灰色			
S 4	石 用途不明	長さ15.3 幅11.6 厚み4.1	平面形状は丸みのある長方形で、断面形状は長方形である。加工した痕跡はない。	N8/0灰白色			
S 5	石 用途不明	長さ12.5 幅10.3 厚み7.0	平面形状は五角形に近い形で、断面形状は台形である。A面にやや平らな面があり、この部分は研磨されている。	10GY6/1 緑灰色			
S 6 27	石 用途不明	長さ11.1 幅9.6 厚み7.0	平面形状は五角形で、断面形状は台形である。A面の一部には煤 (N3/0暗灰色) が付着している。	10GY6/1 緑灰色			

S D402

2C・D 3B・C地区で検出した。本遺構は北側でS D403に切られ、南側と北側は調査区外に及んでいるため全容は不明である。平面形状は、南西―北東方向に直線に伸び、南西から約14m付近で北へ曲がる。検出長20.5m、幅2.75～3.2mを測る。断面形状は逆台形を呈し、深さ1.0mを測る。埋土は11層を確認した。溝の底に砂が堆積した後に粘土が薄く堆積する。その上に砂やシルトが主体となる層が堆積している。溝のほぼ中央では自然の木と思われる丸木が出土した。丸木は長さ約3m、径約0.2mの小枝を切り落とした幹の部分で、底に横になった状態で置かれていた。また、底には垂直に打ち込んでいる木杭を5本（杭1～杭5）検出した。溝内からは弥生時代後期中頃の土器が出土した。土器の表面はほとんど磨耗していないため、この場に捨てられた可能性が高いと考えられる。

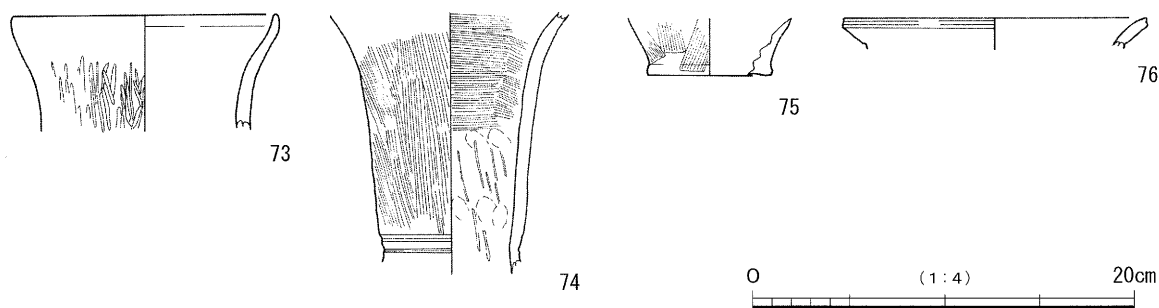
第18表 S D402出土杭法量表

掲載番号 図版番号 杭番号	断面形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	先端形状
W13 27 杭4	長方形	90.5	14.0	5.6	六角形
W14 27 杭5	長方形	98.5	14.2	4.4	六角形
W15 27 杭2	六角形	78.5	10	9.0	七角形

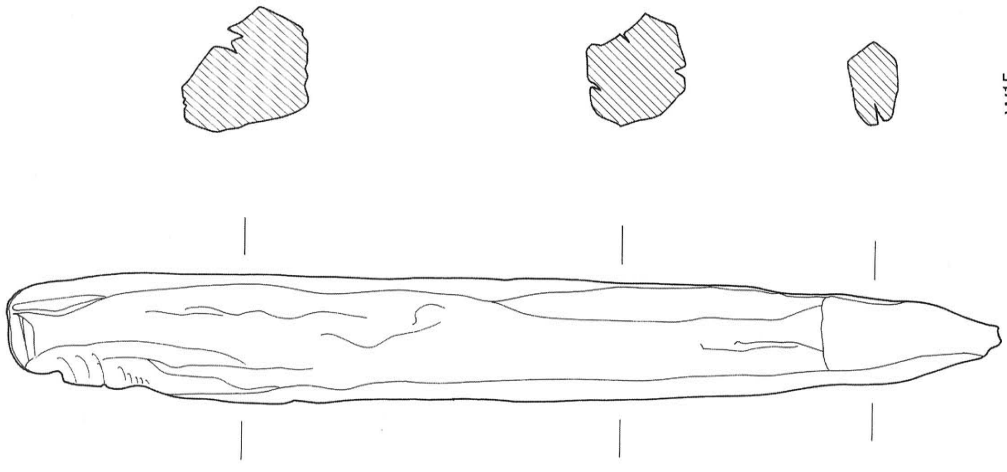
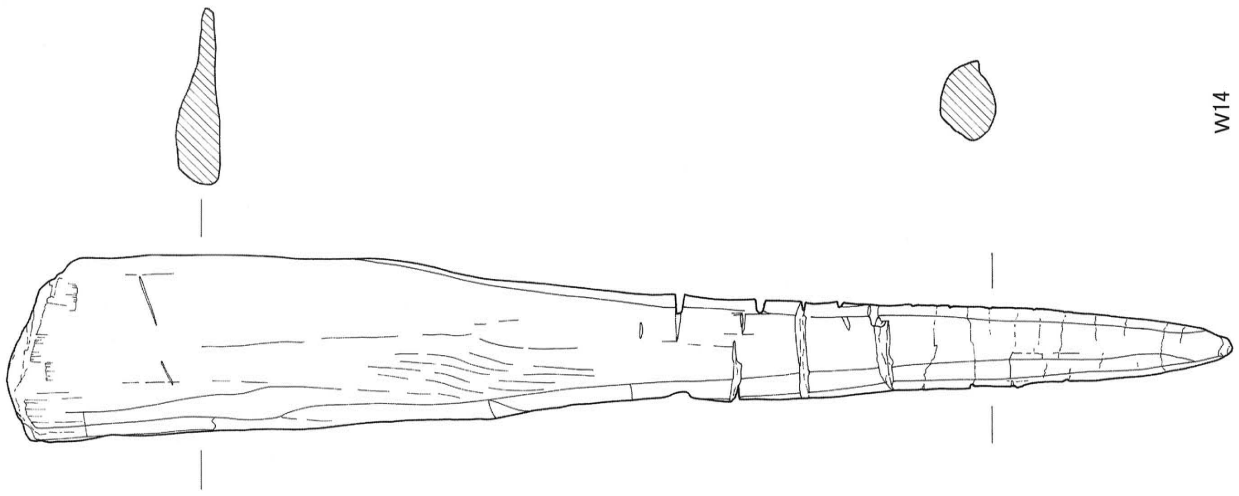
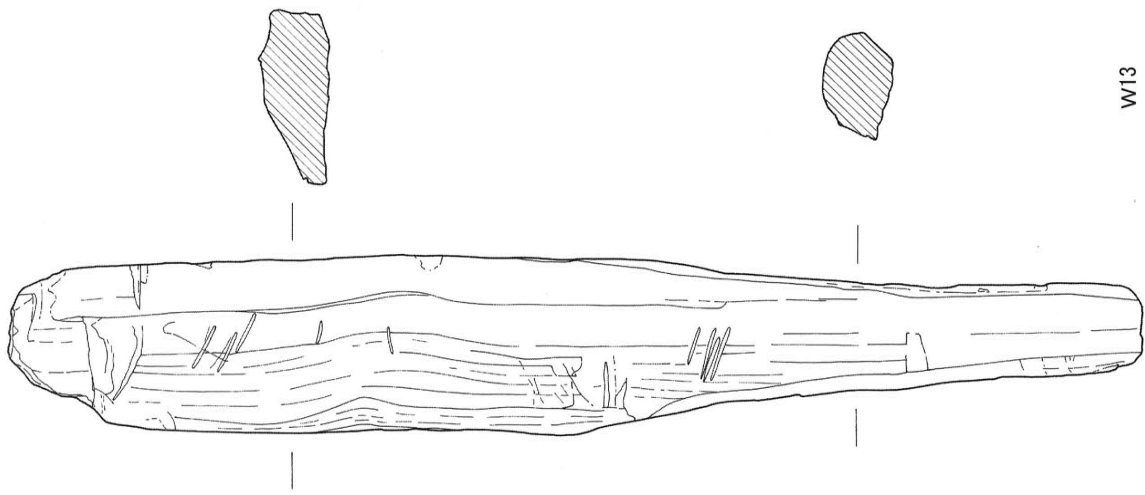
時代後期中頃の土器が出土した。土器の表面はほとんど磨耗していないため、この場に捨てられた可能性が高いと考えられる。

出土した遺物のうち図化し掲載したものは土器73～76、木杭W13～W15である。

73・74は、長頸壺である。73は、口縁部は内湾してひらき、端部は丸く終わる。74は、外側に直立しながら伸びる頸部で、外反して伸びる口縁部に至ると思われる。頸部下位に2条の凹線を施す。75は、突出する壺の底部である。76は、甕の口縁部で、端面は凹線状にくぼむ。W13～W15は木杭で、長さ78～98cmを測る。



第23図 S D402出土遺物実測図(1)



第24図 S D 402出土遺物実測図(2)

第19表 S D 402出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
73	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径14.1	直立ぎみからやや外側にひらく頸部。口縁部は内湾してひらき、 端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面 はナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	0.5～1mm程度 の砂粒を含む	良好	
74	弥生土器 長頸壺 頸部		外側に直立しながら伸びる頸部。口縁部は欠損しているが、外 反して伸びる口縁部に至ると思われる。頸部下位に凹線を2条 施す。頸部内面下位はユビナデとヘラケズリ、上位はハケを施 す。外面はハケを施す。	10YR5/4 にぶい黄褐色	0.5～2mm程度 の砂粒を含む	良好	
75	弥生土器 壺 底部	底径6.4	突出する底部。内面剥離の為調整不明。外面はハケナデを施す。	5Y5/4 オリーブ色	0.5～1mm程度 の砂粒を含む	良好	
76	弥生土器 甕 口縁部	口径16.1	外反する口縁部。端部は面をもつ。端面は凹線状にくぼむ。口 縁部内外面はヨコナデを施す。外面には煤が付着している。	7.5YR5/4 にぶい褐色	0.5～3mm程度 の砂粒を含む	良好	

第20表 S D 403出土遺物観察表

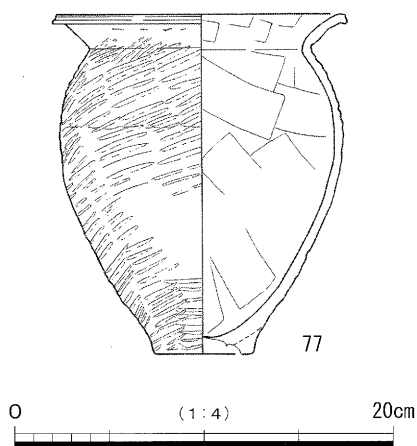
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
77 27	弥生土器 甕 口縁部～ 底部	口径15.5 底径5.2	突出する底部からやや肩のはる体部を呈す。口縁部は外反し 面をもち、端面は凹線状にくぼむ。体部外面はタタキを施す。 口縁部内面はヘラナデのちヨコナデ、外面は「叩き出し」の後ヨ コナデを施す。体部内面はヘラナデ、外面はタタキを施し、粘 土接合痕がある。	2.5YR4/6 明赤褐色	0.5～1mmの砂 粒含む	良好	

S D 403

2 C・D地区で検出した。南東側と北西側は、調査区外
に及んでいるため全容は不明である。本遺構は北側でS D
402、南側でS D 401を切る。平面形状は、南東―北西方向
に直線に伸び、検出長15.0m、幅4.6mを測る。断面形状
はU字形で、深さ0.4mを測る。埋土は5層を確認した。
下位に砂と粘土が堆積し、上位にシルトが堆積している。
溝の東肩で、弥生時代後期中頃の土器が出土した。

出土した遺物のうち図化し掲載したものは土器77であ
る。

77は甕で、突出する底部からやや肩のはる体部を呈す。
口縁部は外反し面をもち、端面は凹線状にくぼむ。体部外
面はタタキを施す。(西村)



第25図 S D 403出土遺物実測図

第5面(弥生時代後期初頭)

第ⅩⅡ層上面で検出した遺構面である。調査地東部において、土坑1基(S K 501)と河川1条(N R 501)を検出した。

土坑(S K)

S K 501

2 C 地区検出の土坑である。本土坑は、上部をN R 501に削平されるほか、東部をS D 402に切られているため全容は不明であるが、概ね南西-北東方向に主軸を有する隅丸方形の平面形状を呈していた可能性が高い。検出規模は、幅

(南東-北西長)0.6m以上、長さ(南西-北東長)1.2m以上である。断面は、浅い皿形を成し、深さは0.05mを測る。埋土は、オリブ黒色細砂混粘土である。土坑内からは、鉄剣1点(F 1)、板状木製品1点(W16)が、弥生時代後期初頭に帰属する土器細片(79・80)とともに出土した。

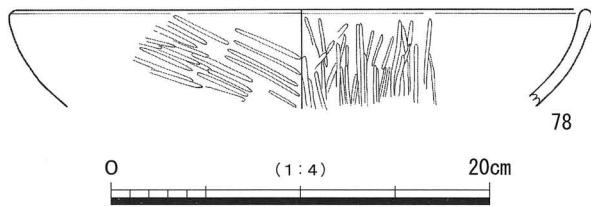
F 1は鉄剣である。鉄剣は、土坑底に水平に敷いた板状木製品(W16)上に、切先を南西方向に向けて水平に置かれていた。鉄剣は完形品で、遺存状態は良好であったため、細部の特徴も詳細に観察できた。法量は、剣長35.8cm、剣身長33.7cm、剣身幅3.6cm、剣身厚0.6cm、茎長2.1cm、茎幅1.8cm、重さ225gである。直線的に伸びる剣身中央には、鏑が認められる。このため剣身断面は、概ね扁平な菱形を呈するが、鏑から刃先にかけての一部には、研磨に起因する内湾する箇所も見受けられた。剣身基部には、関が形成される。関は、先端が若干丸みを持つものの、ほぼ直角に屈曲する。関の左右それぞれの屈曲点付近には、柄を固定するための目釘孔が、各1個穿孔される。目釘孔はほぼ円形を呈し、目釘孔径はA面径が各0.4cm、B面径が各0.3cmを測る。茎は、剣身に比して非常に短い。断面は扁平な六角形を呈する。なお、関から茎付近には、輪郭線に沿って、小さな段差や甲張りのよう突起部分の存在することを確認した。本鉄剣は、科学的な分析の結果、鑄造品であることが明らかになった。詳細は、第4章において玉稿を賜っているので、そちらを参照されたいが、関から茎付近の段差や突起、あるいは目釘孔径の差異などは、鑄造品であるがゆえに生じた痕跡である可能性も考えられる。なお、目釘孔については、鑄型による成形と、鑄造後に穿孔されたものの2つの可能性が考えられる。後者の場合、A面径がB面径に比して大きいことから、A面側から穿孔されたことが予測される。

W16は羽子板を縦に二分したような形状を呈する板状木製品である。法量は、幅2.5~5.2cm、長さ39.3cm、厚さ0.3~0.8cmである。断面は、概ね扁平な長方形を成す。扁平に加工が施された以外には、特に加工は行われぬ。先述した鉄剣を収めた鞘の可能性も考えられるが、決定打に欠ける。なお、(財)元興寺文化財研究所による当木製品の保存処理に伴う樹種同定の結果、ヒノキであることが明らかになった(註1)。

79・80は弥生土器の細片である。79は長頸壺の口頸部である。若干外傾する口頸部の外面には縦位ヘラミガキが、内面には横~斜方位方ハケナデがそれぞれ施される。80は甕の底部。底部は突出し、概ね平底を呈する。外面には右上がりのタタキが、内面には斜位ヘラケズリが行われる。両者の帰属時期は弥生時代後期初頭に求めることが可能である。(樋口)



写真18 S K 501調査状況(東から)



第26図 NR501出土遺物実測図

河川(NR)

NR501

2・3B 2・3C 2D地区で検出した。遺構の南側と北側は調査区外にあり、全容は不明である。平面形状は、南西から北東方向に伸び、調査地のほぼ中央で屈曲し北に向かう。この河川はSK501を切る。検出した幅は約5.5mで、

断面形状は皿状を呈し、深さ約0.3mを測る。埋土は、5Y4/1灰色粗粒シルト～粗砂混粘土、5B4/1暗青灰色粘土～5B6/1青灰色シルト、5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土である。一部ラミナが認められるので、緩やかな流れはあったようではあるが、基本的には粘土が溜まる後背湿地のような環境であったと思われる。本遺構からは弥生時代後期初頭頃の壺や高杯(78)の細片が出土した。

78は高杯の杯部である。内外面にはヘラミガキを施している。(西村)

第21表 NR501出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
78	弥生土器 高杯	口径30.0	ゆるやかに内湾しながら伸びる口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内面は縦方向のヘラミガキ、外面は左上がりのヘラミガキを施す。	10YR6/4 にぶい黄橙色	0.5～1mm の砂粒を含む	良好	
27	口縁部						

第22表 SK501出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
79	弥生土器 長頸壺		頸部は上外方へ伸びる。内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	0.5～1mm の砂粒を含む	良好	
27	頸部						
80	弥生土器 甕	底径5.2	突出する平底の底部。底部内面はケズリ、外面は右上がりの太筋のタタキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	0.5～4mm の砂粒を多量に含む	良好	
27	底部						
F1	鉄剣	剣長35.8、剣身長33.7、剣身幅3.6、剣身厚0.6、茎長2.1、茎幅1.8、重さ225g、目釘孔A	直線的に伸びる剣身中央には、鑄が認められる。剣身断面は、概ね扁平な菱形を呈す。剣身基部には、関が形成される。関は、先端が若干丸みを持つもの、の、ほぼ直角に屈曲する。関の左右それぞれの屈曲点付近には、柄を固定するための目釘孔が、各1個穿孔される。目釘孔はほぼ円形を呈す。茎は、剣身に比して非常に短い。断面は扁平な六角形を呈する。	暗青灰色			
28～32		目釘孔A 右・左径0.4、 B面右・左径0.3					
W16	板状木製品	長さ39.3 幅2.5～5.2 厚さ0.3～0.8	羽子板を縦に二分したような形状を呈する板状木製品である。扁平に加工が施された以外には、特に加工は行われない。				
30							

註1 大竹西遺跡出土木製品の樹種同定報告

財団法人 元興寺文化財研究所 木器保存研究室 木沢 直子

1、試料 板状木製品(W16)

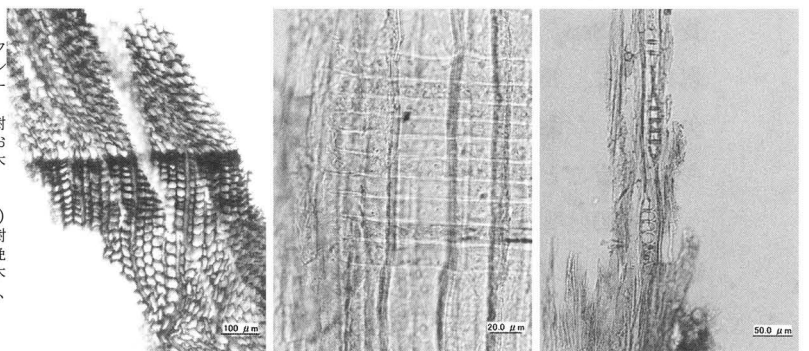
2、同定方法 樹種同定に必要な木口面(横断面)、板目面(接線断面)、柁目面(放射断面)の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

3、同定結果 各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(II)に従った。* 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Sieb. et Zucc. Endl.

(ヒノキ科 Cupressaceae) (ヒノキ属 *Chamaecyparis*)
仮道管と樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材である。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。いずれの早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は柁目面において晩材部に確認できるが、木口面の顕微鏡写真では見えにくい。分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個、時に3個見られる。放射組織は単列で2～9細胞高である。

参考文献

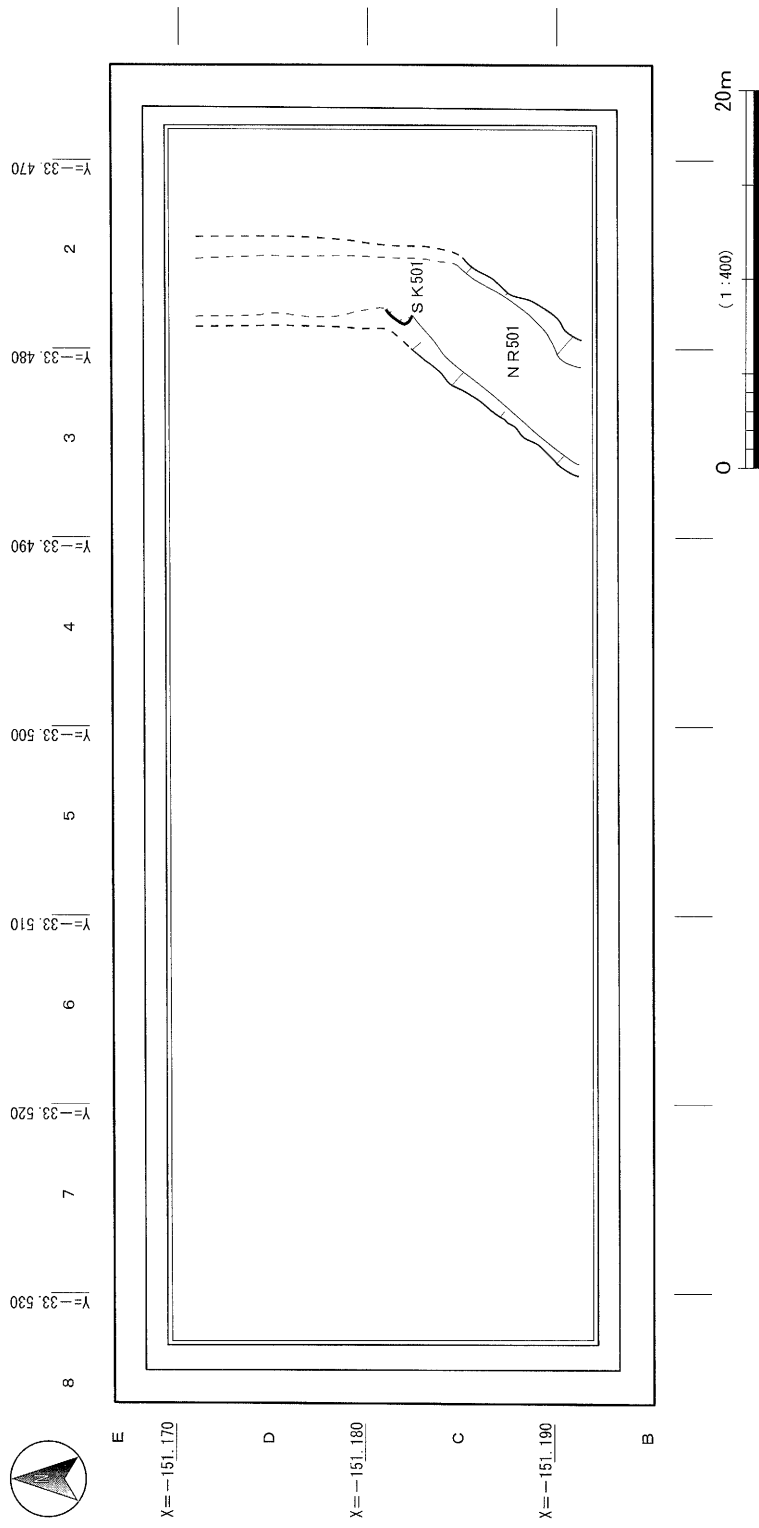
- 北村四郎・村田源 『原色日本植物図鑑・木本編』II 1979年
島地謙・伊東隆夫 『図説木材組織』 1982年



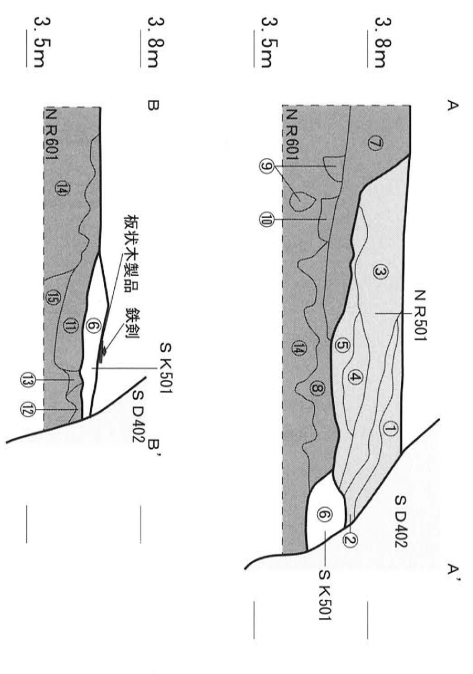
木口面

柁目面

板目面



第27図 第5面検出遺構平面図

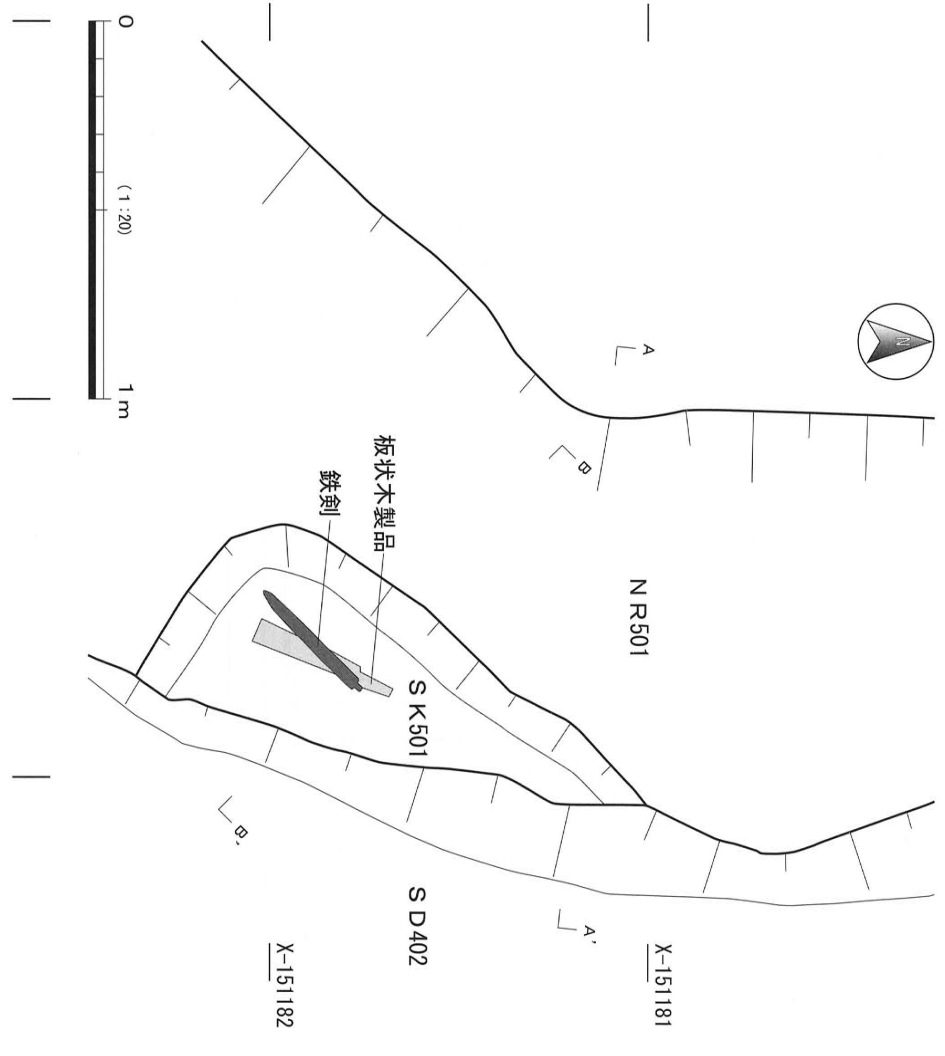


Y-33480

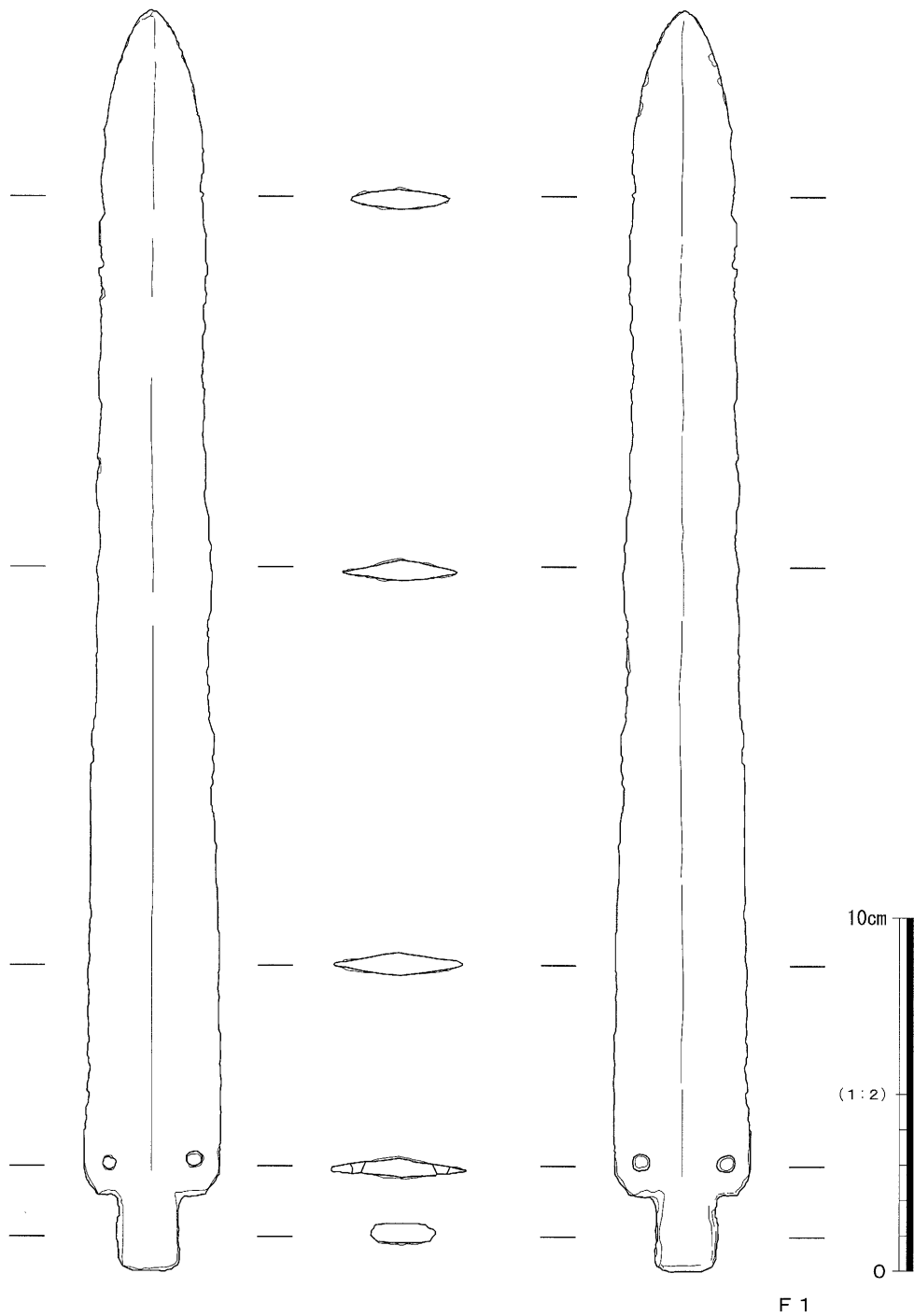
Y-33479

Y-33478

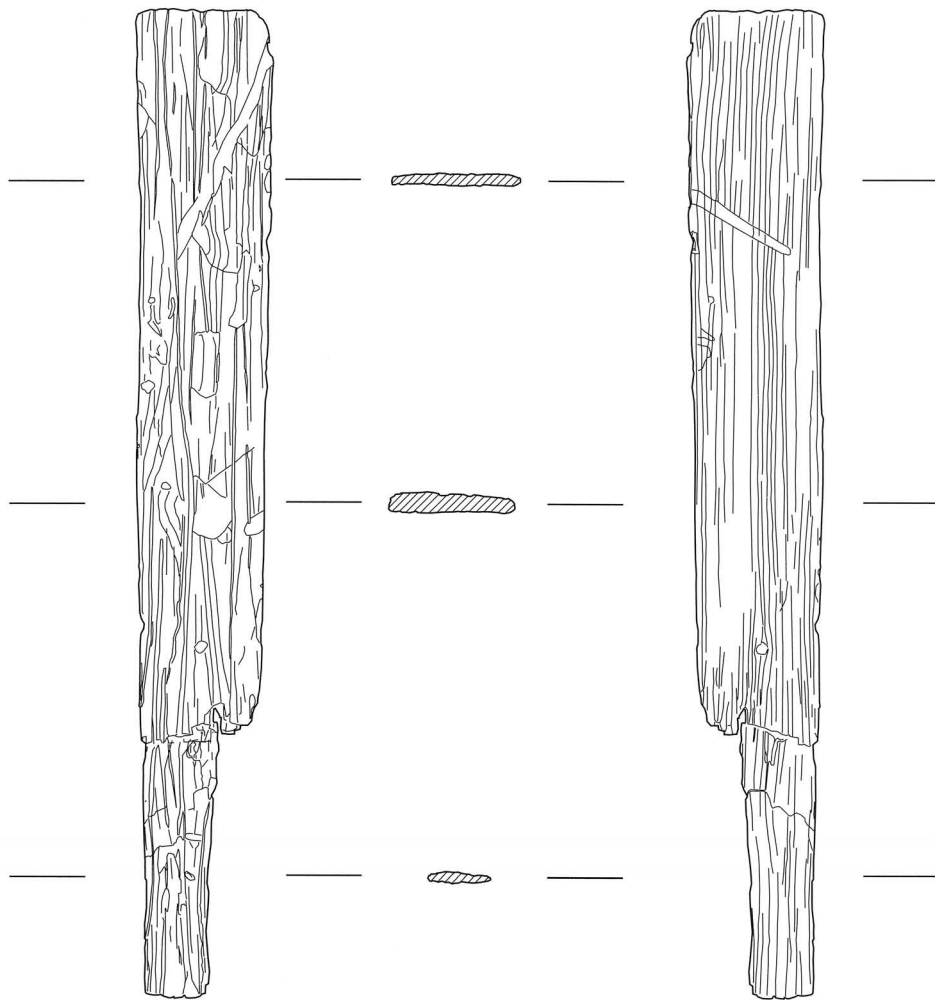
- N R 501埋土
- ① 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト
 - ② 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト(ラミナ)
 - ③ 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト(植物遺体を少量含む)
 - ④ 2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混じりシルト
 - ⑤ 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土(植物遺体を極少量含む)
- S K 501埋土
- ⑥ 7.5Y3/1オリーブ黒色細砂混じり粘土
- N R 601埋土
- ⑦ 10Y3/2オリーブ黒色細砂(ラミナ)
 - ⑧ 7.5Y4/1灰色細砂
 - ⑨ 7.5Y5/2灰オリーブ黒色細砂(細様を含む)
 - ⑩ 10Y3/1オリーブ黒色細砂(植物遺体を含む)
 - ⑪ 10Y4/1灰色細砂
 - ⑫ 7.5Y4/2灰オリーブ黒色細砂
 - ⑬ 10Y4/2オリーブ黒色細砂
 - ⑭ 7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混じり細砂
 - ⑮ 7.5Y3/1オリーブ黒色シルト



第28図 S K 501・N R 501平・断面図



第29図 S K 501出土遺物実測図(1)



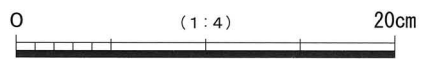
W16



79



80



第30図 SK501出土遺物実測図(2)

第6面(弥生時代後期初頭)

XV層上面で検出した遺構面である。土坑23基(SK601~SK623)、小穴79個(SP601~SP679)、溝19条(SD601~SD619)を検出した。これらの遺構は、調査区西部で密集して検出し、中央部では、遺構は存在しなかった。また、東側では自然河川1条(NR601)を検出した。東側と西側との遺構検出面の高低差は約1.0mを測り、西側が高く、東側が低い。

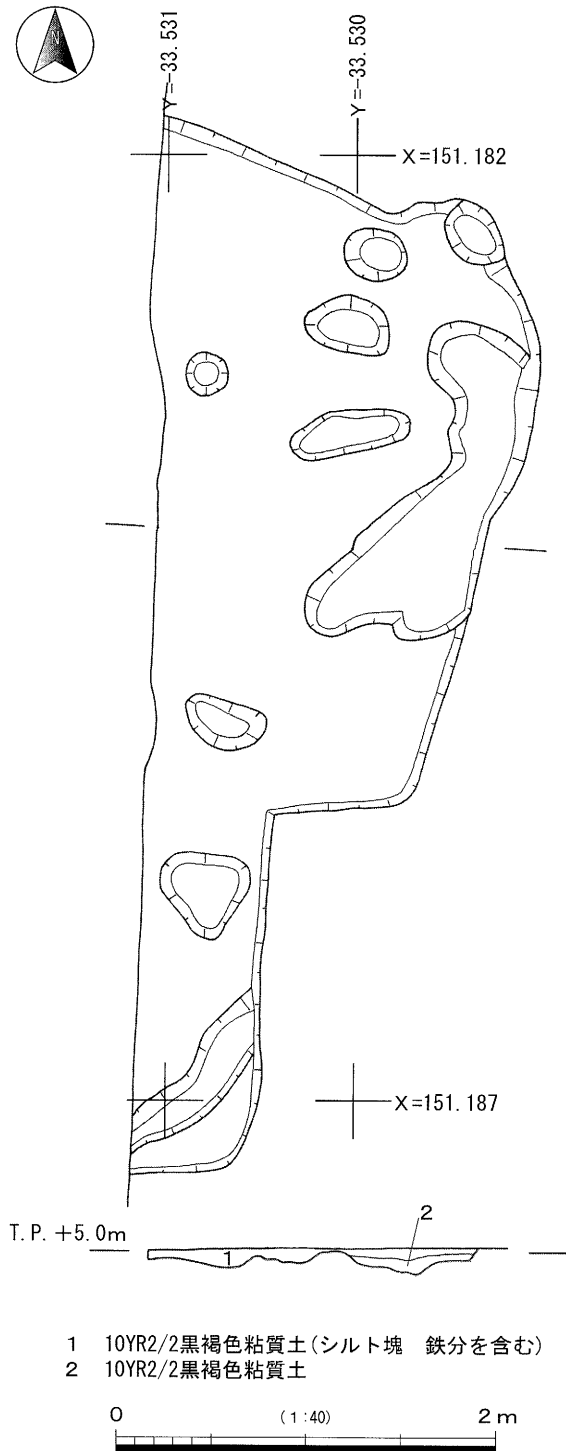
土坑(SK)

SK601~SK623

検出した土坑には、調査区外に至るため全容は不明なものがあるが、平面形状は、概ね楕円形(SK601・SK603・SK606~SK621)、不定形(SK602・SK604・SK605)、隅丸方形(SK622・SK623)に分類できた。規模は長径0.64~5.64m、短径0.33~4.33mを測る。断面形状は逆台形(SK601~SK603・SK605・SK606・SK608~SK612・SK614・SK616~SK623)、皿状(SK604・SK607・SK615)、U字形(SK613)があり、底面に窪みのある土坑がほとんどである。深さは、0.02~0.25mを測り、埋土は単一のもの(SK604~SK613・SK615~SK621)、2層のもの(SK602・SK603)、3層のもの(SK601・SK614・SK622・SK623)がある。遺物はSK602・SK603・SK606・SK614・SK622から弥生時代後期の土器の破片が少量出土した。検出した遺構群は、分布範囲や規模、主軸の方向などから規則性を見出すことはできなかった。したがって、遺構群の性格は不明である。

SK601

7C地区で検出した。本遺構はSP608・SD601を切り、SK603に切られる。平面形状は楕円形で、長径1.6m、短径1.58mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面には、凹凸の窪みがある。深さ0.16mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を含む)、5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を極く少量含む)、10G6/1青灰色シルト(粘質土・塊を含む)で、弥生時代後期初頭に比定される壺や甕の破片が出土した。



- 1 10YR2/2黒褐色粘質土(シルト塊 鉄分を含む)
- 2 10YR2/2黒褐色粘質土

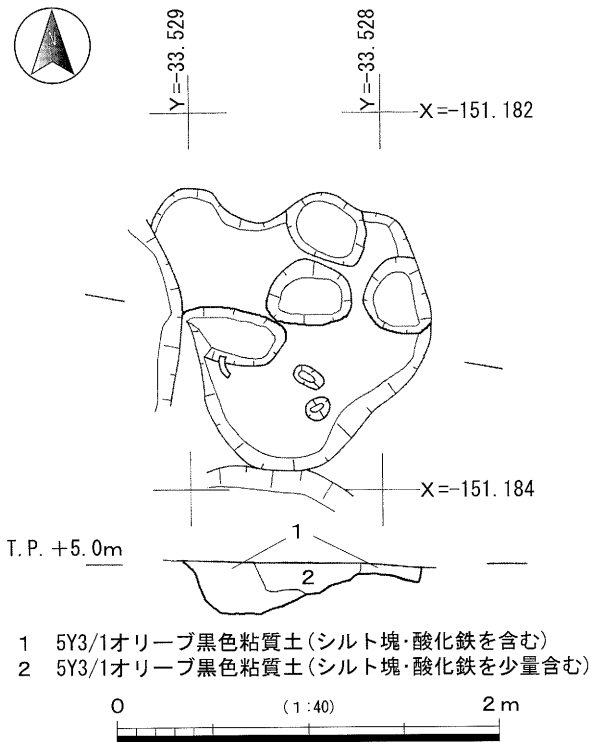
0 (1:40) 2 m

第31図 SK602平・断面図

S K 602

7・8C地区で検出した。本遺構はS K 603・S K 616・S D 603・S D 617・S D 618を切り、西側は調査区外に至る。平面形状は不定形で、長径5.59m、短径2.06mを測る。断面形状は、逆台形を呈する。底面は、浅く平坦を成し、不定形の窪みが数箇所見られる。深さ0.14mを測る。埋土は10YR2/2黒褐色粘質土(シルトのブロックや酸化鉄を含む)、10YR2/2黒褐色粘質土で、弥生時代後期初頭の土器81、石器S 7が出土した。

81は甕で、体部内面は、ヘラケズリを施す。S 7は、滑らかな面が一面ある。



第32図 S K 603平・断面図

S K 603

7C地区で検出した。本遺構はS K 601を切り、S K 602に切られる。平面形状は楕円形で、長径1.48m、短径1.27mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面に凹凸がある。深さ0.17mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・酸化鉄を含む)、5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・酸化鉄を少量含む)である。遺構内の西部にある窪みの底から長頸壺83が、その上に水差形土器82が重なって出土した。82・83ともに、底部を欠損している。82は、体部上位に環状の把手が付く。全体に粘土接合の痕跡が顕著に見られる。83は、中位が張り出す丸味のある体部で、体部上位に右上がりの列点文を施す。82・83ともに弥生時代後期初頭(河内V-O様式)に比定できる。

第23表 S K 602出土遺物観察表

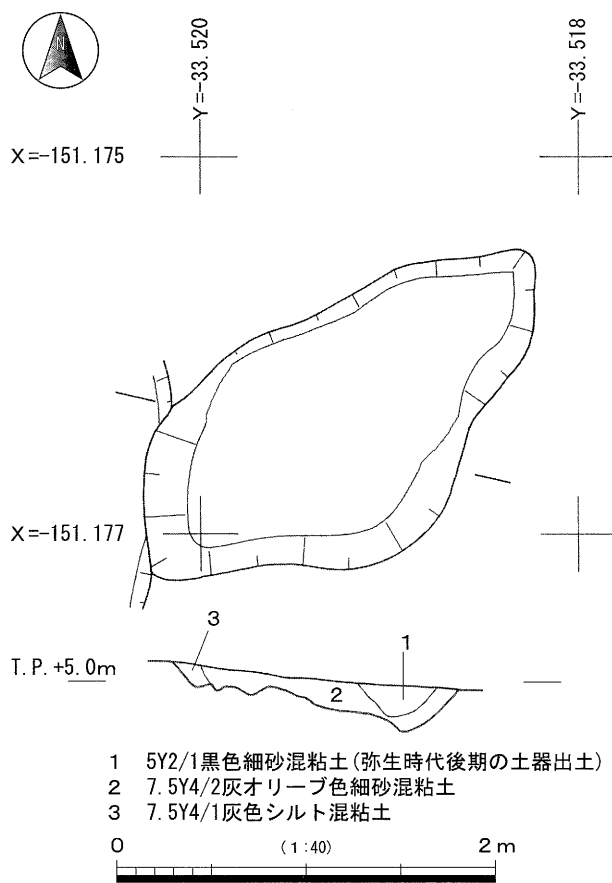
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
81	弥生土器 甕 口縁部	口径15.5	外反する口縁部。端部は下方へつまみ出し丸く終わる。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。外面ヨコナデ。	10YR4/2 灰黄褐色	2.5 mm 以下の砂粒を含む	良好	
S 7	石 用途不明	長さ14.8 幅11.0 厚み6.2	平面形状は三角形、断面形状は台形である。滑らかな面が一面あることから砥石かと思われる。	N8/0灰白色			

第24表 S K 603出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
82 33	弥生土器 水差形土器 口縁部	口径9.5	短頸壺に把手をつけた器形。体部の張りはあまりなくゆるやかに内傾し立ち上がる頸部から内湾ぎみに外へひらく口縁部。端部は尖りぎみに終わる。体部上位に環状の把手が付く。口縁部内面横方向のヘラミガキ。粘土接合痕あり。外面ヘラミガキ。体部内面ヘラケズリのちナデ。ユビオサエが残る。外面ヘラミガキ。粘土接合痕あり。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1 ~ 2 mmの砂粒を	良好	
83 33	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径11.5	丸味のある体部。やや外側にひらきぎみに立ちあがる頸部から外反する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。体部上位にヘラによる列点文を施す。口縁部内面ハケナデのちナデ。外面ハケナデのちヘラミガキ。体部内面ヘラナデおよびヘラケズリ。工具の痕跡あり。粘土接合痕あり。外面ハケナデのちヘラミガキ。粘土接合痕あり。	10YR5/4 にぶい黄褐色	1 ~ 3 mm以下の砂粒を多量に含む	良好	



第33図 第6面検出遺構平面図



第34図 SK614平・断面図

S K606

7C地区で検出した。平面形状は楕円形で、長径1.18m、短径1.13mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面に凹凸がある。深さ0.08mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(シルト塊を含む)で、本土坑からは、弥生土器と思われる甕の体部の破片が少量出土した。遺物は破片であるため詳しい時期は不明である。

S K614

6・7D地区で検出した。本遺構はSD607を切る。平面形状は、楕円形で、長径2.63m、短径1.52mを測る。断面形状は、逆台形を呈し、底面に凹凸がある。深さ0.25mを測る。埋土は5Y2/1黒色細砂混粘土、7.5Y4/2灰オリーブ色細砂混粘土、7.5Y4/1灰色シルト混粘土である。本土坑からは、弥生時代後期初頭に比定される土器84・85が出土した。84は長頸壺で、頸部と体部のくびれが明瞭である。体部上位に右上がりの櫛描列点文を施す。85は鉢で、突出する平底を呈す。体部外面に縦位のヘラミガキを施す。

S K622

7C・D地区で検出した。本遺構はSP631・SD606を切り、SP643に切られる。平面形状はやや南北に長い隅丸の方形で、長径2.97m、短径2.92mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底面には小穴状の窪みがある。深さ0.15mを測る。埋土は7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土、5Y4/1灰色粘土、5Y2/2オリーブ黒色シルト混粘土で、内部からは弥生土器と思われる甕の体部の破片が少量出土した。遺物は破片で図化することができなかつたため詳しい時期は不明である。本遺構は検出した土坑の中でも比較的大型のものである。

第25表 SK614出土遺物観察表

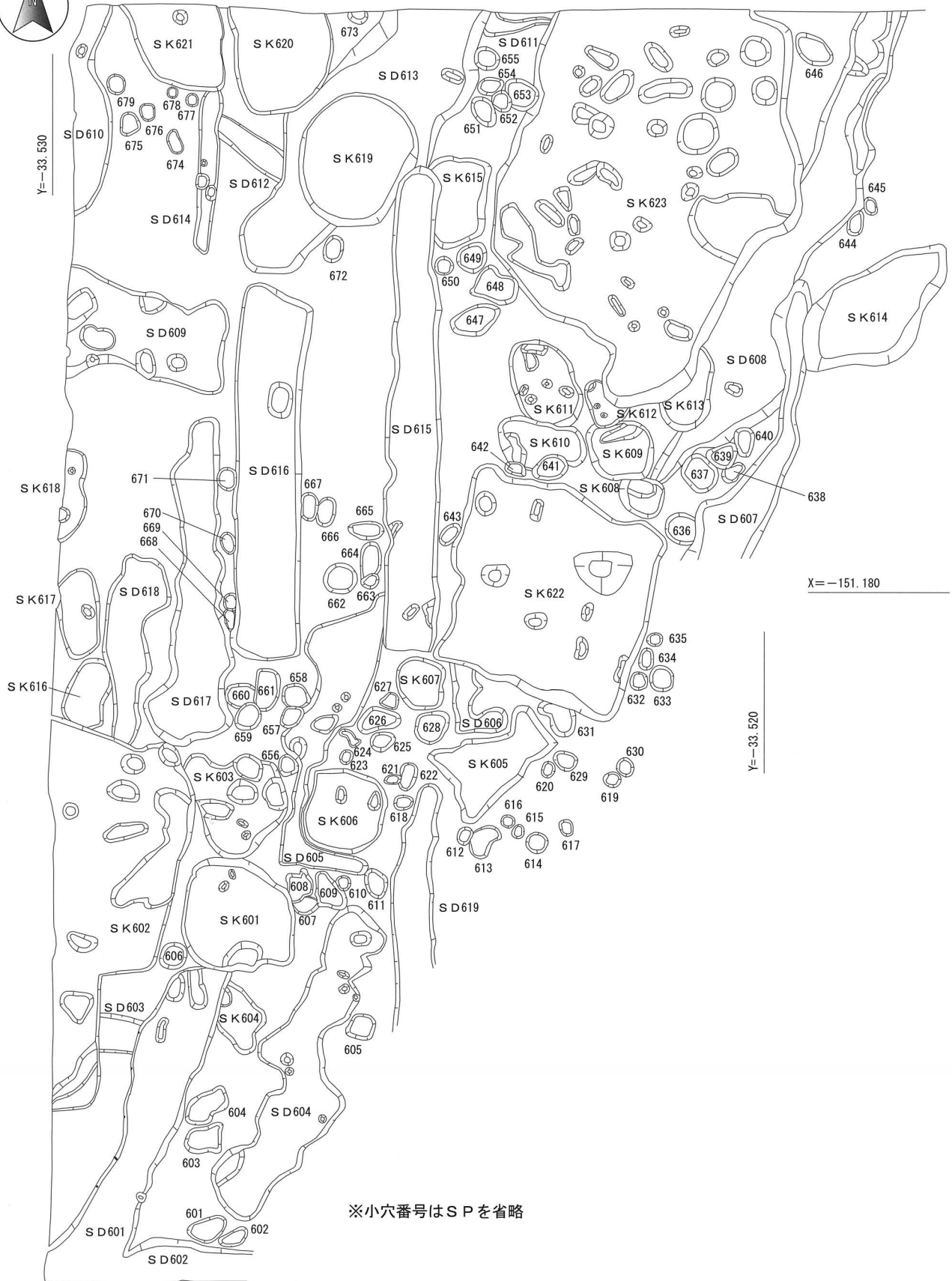
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
84 33	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径12.0	直立からやや外傾し立ち上がる頸部。口縁部はやや外反する。端部は外へつまみ丸く終わる。頸部外面上位に列点文を施す。口縁部内面にユビオサエのちハケナデ。外面ヨコナデ。頸部内面にハケナデのちナデ。外面ハケナデ。体部内外面ナデ。口縁部から頸部の一部に黒斑あり。	10YR5/3 にぶい黄褐色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	
85 33	弥生土器 鉢 口縁部	口径15.6 器高7.0 底径4.6	突出する平底の底部。内湾ぎみに外側へひらく体部。口縁部は外反する。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。外面に縦位のヘラミガキを施す。底部内外面ナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	



Y = -33.530

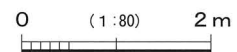
X = -151.180

Y = -33.520

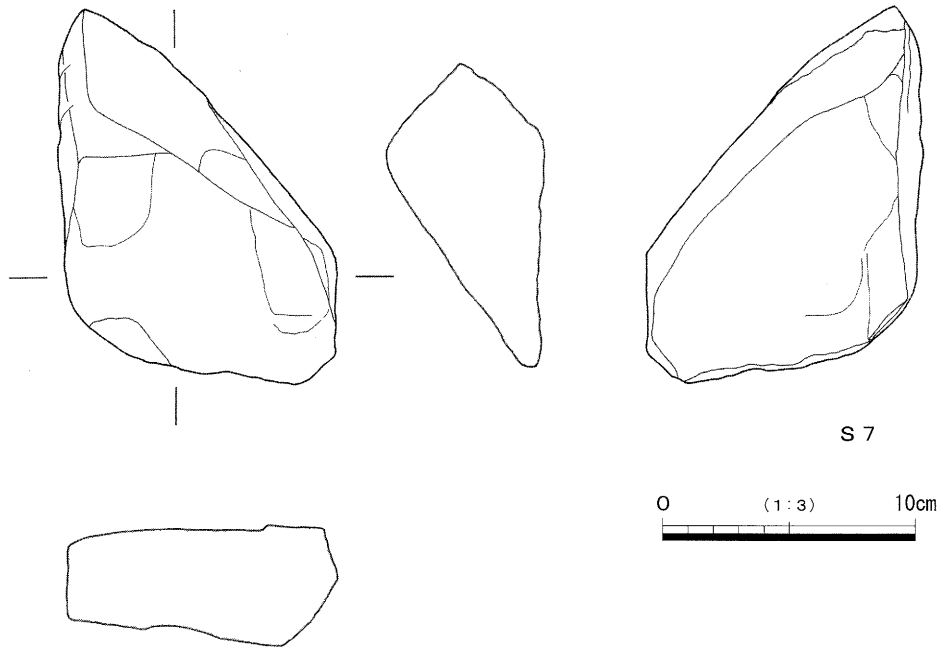


※小穴番号はSPを省略

X = -151.190



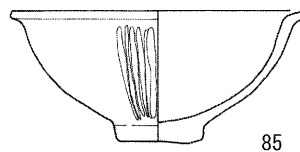
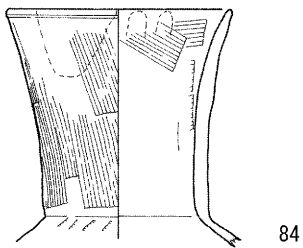
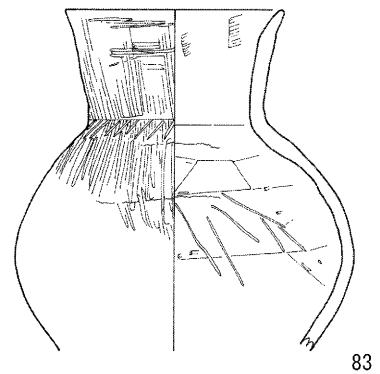
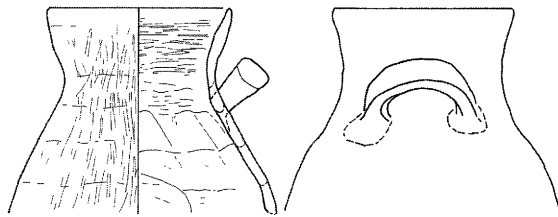
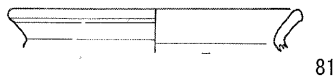
第35図 第6面西部検出遺構平面図



S 7

0 (1:3) 10cm

S K 602	81	S 7
S K 603	82	83
S K 614	84	85
S D 615	86	



0 (1:4) 20cm

第36図 S K 602 · S K 603 · S K 614 · S D 615出土遺物実測図

第26表 第6面土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土
SK601	7C	楕円形 SP608・SD601を切る。SK603に切られる。	1.60	1.58	逆台形 底面に小穴状の窪み、凹凸あり	0.16	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を含む) 5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を極く少量含む) 10G6/1青灰色シルト(粘質土・塊を含む)
SK602	7・8C	不定形 SD603・617・618を切る。SK603・616を切る。西側は調査区外	5.59	2.06	逆台形 底面に凹凸あり	0.14	10YR2/2黒褐色粘質土(シルト塊鉄分を含む) 10YR2/2黒褐色粘質土
SK603	7・8C	楕円形 SK601を切る。SK602に切られる。	1.48	1.27	逆台形 底面に凹凸あり	0.17	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を含む) 5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を極く少量含む)
SK604	7C	不定形 SD601に切られる。	1.03	0.68	皿状形 中央が窪む	0.09	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊・鉄分を極く少量含む)
SK605	7C	不定形	1.59	0.93	逆台形 中央が窪む	0.12	2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘質土(シルト砂が混る)
SK606	7C	楕円形	1.18	1.13	逆台形 底面に小穴状の窪み、凹凸あり	0.08	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(シルト塊を含む)
SK607	7C	楕円形	0.75	0.67	皿状形	0.08	2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土(シルト塊を多く含む)
SK608	7D	楕円形 SD608を切る。SK609に切られる。	0.64	0.57	逆台形	0.12	7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を含む)
SK609	7D	楕円形 SK608を切る。SK612に切られる。	0.91	0.82	逆台形	0.16	7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を含む)
SK610	7D	楕円形 SP641・SP642に切られる。SK611を切る。	1.29	0.7	逆台形	0.09	5Y3/2オリーブ黒色粘質土(鉄分を極少量含む)
SK611	7D	楕円形 SK610に切られる。	1.17	0.94	逆台形 底面に小穴状の窪み、凹凸あり	0.20	5Y3/2オリーブ黒色粘質土(シルト塊を含む。鉄分を極少量含む)
SK612	7D	楕円形 SK609を切る。SK623に切られる。	0.70	0.55	逆台形 底面に小穴状の窪みあり	0.09	5Y3/2オリーブ黒色粘質土
SK613	7D	楕円形 SD608を切る。SK623に切られる。	1.24	0.72	U字形	0.17	5Y3/2オリーブ黒色粘質土
SK614	6・7D	楕円形 SD607を切る。	2.63	1.52	逆台形 底面に凹凸あり	0.25	7.5Y4/1灰色シルト混粘土 7.5Y4/2灰オリーブ色細砂混粘土 5Y2/1黒色細砂混粘土
SK615	7D	楕円形 SD615に切られる。	1.22	0.9	皿状形	0.12	10Y4/1灰色粘質土
SK616	8C	楕円形 SD618・SK602に切られる。	0.96	0.60	逆台形	0.09	5Y3/2オリーブ黒色粘質土
SK617	8C・D	楕円形 西側は調査区外	1.30	0.62	逆台形 底面に小穴状の窪みあり	0.07	5Y3/2オリーブ黒色粘質土
SK618	8D	楕円形 西側は調査区外	1.33	0.33	逆台形	0.02	5Y3/2オリーブ黒色粘質土
SK619	7D	楕円形 SD613を切る。SD615に切られる。	1.9	1.66	逆台形 底面に凹凸あり	0.14	5B4/1暗青灰色シルト混粘土
SK620	7D	楕円形 SD613を切る。北側は調査区外	1.5	1.4	逆台形 底面に凹凸あり	0.12	5B2/1青黒色シルト混粘土
SK621	7D	楕円形 SD614を切る。北側は調査区外	1.22	1.29	逆台形	0.13	5Y2/2オリーブ黒色粘質土
SK622	7C・D	隅丸方形 SP631・SD606を切る。SP643に切られる。	2.97	2.92	逆台形 底面に小穴状の窪みあり	0.15	7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土 5Y4/1灰色粘土 5Y2/2オリーブ黒色シルト混粘土
SK623	7D	隅丸長方形 SP648・SP653に切られる。SK612・SK613・SD608・SD601を切る。北側は調査区外	5.64	4.33	逆台形 底面に小穴状の窪み、凹凸あり	0.23	10YR4/6褐色細砂混粘土 5Y5/1灰色粘質土 5Y2/2オリーブ黒色シルト混粘土

小穴(S P)

S P 601～S P 679

小穴の平面形状は大きく円形、楕円形(楕円のものは長径と短径の差が10cm以上のもの)に分類できた。断面形状は皿形、逆台形、U字形である。S P 631・S P 632・S P 636・S P 637・S P 639・S P 640・S P 665が深さ10cm以上20cm未満で、20cm以上のものはなく非常に浅い掘りこみである。埋土が2層の小穴はS P 632・S P 638・S P 639・S P 642・S P 647・S P 652・S P 668・S P 672・S P 679で、それ以外は単一層である。各小穴からの遺物の出土はなかった。S P 631・S P 642・S P 666は一段深くなる掘り形で、S P 638には浅い窪みがある。以上の4個が断面形状から柱穴の可能性があるが、いずれも柱は残っていなかった。また、まわりの小穴との配列にも規則性はなく、建物などの施設は復原できなかった。遺構の埋土は類似することから短期間に埋められた可能性が高いと思われる。なお、小穴の詳細は一覧表にまとめた。

第27表 第6面小穴一覧表(1)

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土
S P 601	7 C	楕円形	0.54	0.35	—	皿状 東側が窪む	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(酸化鉄を極小含む)
S P 602	7 C	楕円形	0.44	0.23	—	逆台形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 603	7 C	楕円形	0.50	0.36	—	皿状	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 604	7 C	楕円形	0.50	0.34	—	皿状 底面に凹凸あり	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 605	7 C	円形	—	—	0.36	皿状	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 606	7 C	楕円形	0.38	0.35	—	皿状	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 607	7 C	楕円形 S P 608・S P 609・S K 606に切られる。	0.37	0.26	—	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 608	7 C	楕円形 S K 601に切られる。S P 607を切る。	0.49	0.44	—	皿状 西側が窪む	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 609	7 C	楕円形 S P 610に切られる。S P 607・S D 604を切る。	0.58	0.42	—	皿状	0.08	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(酸化鉄・シルト塊を含む)
S P 610	7 C	円形 S P 609を切る。	—	—	0.21	皿状 東側が窪む	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 611	7 C	楕円形	0.44	0.33	—	皿状	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 612	7 C	楕円形 S P 613を切る。	0.26	0.20	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
S P 613	7 C	楕円形 S P 612に切られる。	0.48	0.30	—	逆台形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
S P 614	7 C	円形	—	—	0.30	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 615	7 C	楕円形	0.20	0.17	—	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 616	7 C	円形	—	—	0.19	皿状	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 617	7 C	楕円形	0.23	0.18	—	皿状	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 618	7 C	楕円形	0.27	0.21	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 619	7 C	円形	—	—	0.23	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 620	7 C	楕円形	0.22	0.18	—	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 621	7 C	楕円形 S P 622を切る。	0.24	0.14	—	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 622	7 C	楕円形 S P 621に切られる。	0.40	0.24	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 623	7 C	楕円形	0.21	0.17	—	皿状	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 624	7 C	楕円形	0.31	0.12	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 625	7 C	楕円形	0.35	0.27	—	皿状 西側が窪む	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 626	7 C	楕円形	0.61	0.31	—	皿状 中央が窪む	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 627	7 C	楕円形	0.23	0.22	—	逆台形	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 628	7 C	楕円形	0.47	0.46	—	皿状 底面に凹凸あり	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 629	7 C	楕円形	0.34	0.27	—	逆台形	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 630	7 C	楕円形	0.27	0.24	—	皿状	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 631	7 C	楕円形 S K 622に切られる。	0.46	0.36	—	皿状 北西側が窪む	0.14	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 632	7 C	楕円形	0.25	0.24	—	U字形	0.13	上から5Y3/1オリーブ黒色粘質土・5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)・5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 633	7 C	楕円形	0.36	0.34	—	皿状	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
S P 634	7 C	楕円形	0.31	0.20	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 635	7 C	楕円形	0.23	0.19	—	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
S P 636	7 D	楕円形 S D 607に切られる。	0.44	0.43	—	逆台形 中央が窪む	0.10	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)

第28表 第6面小穴一覧表(2)

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土
SP637	7D	楕円形 SD608を切る。	0.50	0.43	—	逆台形	0.12	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP638	7D	楕円形 SP639に切られる。	0.35	0.19	—	逆台形 西側が窪む	0.06	上から5Y3/1オリブ黒色シルト(シルト・砂を含む)・5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP639	7D	楕円形 SP638とSD608を切る。	0.42	0.34	—	逆台形	0.13	上から 5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)・5Y3/1オリブ黒色シルト(シルト・砂を含む)
SP640	7D	楕円形 SD608を切る。	0.41	0.27	—	逆台形	0.14	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP641	7D	楕円形 SK610を切る。	0.50	0.35	—	皿状 中央が窪む	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP642	7D	楕円形 SK610を切る。	0.31	0.20	—	皿状 東側が窪む	0.06	上から 5Y3/1オリブ黒色粘質土・5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP643	7D	楕円形 SK622を切る。	0.36	0.21	—	逆台形	0.08	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP644	6D	楕円形 SD608を切る。	0.36	0.22	—	皿状	0.03	7.5Y3/2オリブ黒色粘質土
SP645	6D	楕円形	0.26	0.18	—	皿状	0.01	7.5Y3/2オリブ黒色粘質土
SP646	6・7D	楕円形	0.59	0.38	—	逆台形	0.09	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP647	7D	楕円形	0.73	0.42	—	皿状 底面に凹凸あり	0.08	上から 5Y3/1オリブ黒色粘質土(鉄分を多量に含む、シルト塊を含む)・5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP648	7D	楕円形 SK623を切る。	0.61	0.39	—	皿状 底面に凹凸あり	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP649	7D	楕円形	0.45	0.42	—	皿状	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP650	7D	円形	—	—	0.26	皿状	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP651	7D	楕円形	0.46	0.30	—	皿状	0.09	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP652	7D	楕円形 SP653・SP654を切る。	0.31	0.28	—	逆台形	0.08	上から5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)・7.5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP653	7D	楕円形 SP652に切られる。	0.51	0.42	—	皿状	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP654	7D	楕円形 SP652に切られる。	0.37	0.26	—	逆台形 東側が窪む	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP655	7D	楕円形 SD613を切る。	0.36	0.31	—	皿状 東側が窪む	0.06	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP656	7C	円形 SD605を切る。	—	—	0.30	皿状	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP657	7C	楕円形 SP658・SD605を切る。	0.30	0.27	—	皿状	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP658	7C	楕円形 SP657に切られる。SD605を切る。	0.42	0.35	—	皿状	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP659	7C	楕円形 SP660・SP661を切る。	0.39	0.36	—	皿状	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP660	7C	楕円形 SP659・SP661に切られる。	0.41	0.34	—	皿状	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP661	7C	楕円形 SP659に切られる。SP660を切る。	0.58	0.34	—	皿状	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP662	7C・D	楕円形	0.48	0.43	—	皿状 底面に凹凸あり	0.05	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP663	7C・D	楕円形 SP664を切る。	0.26	0.19	—	皿状 底面に凹凸あり	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP664	7D	楕円形 SP663に切られる。	0.57	0.29	—	皿状	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP665	7D	楕円形	0.50	0.26	—	皿状	0.10	5Y3/1オリブ黒色粘質土
SP666	7D	楕円形 SP667に切られる。	0.42	0.24	—	皿状 西側が窪む	0.07	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP667	7D	楕円形 SP666を切る。	0.40	0.23	—	皿状 底面に凹凸あり	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP668	7C	楕円形 SP669とSD616とSD617に切られる。	0.29	0.14	—	皿状	0.03	上から5Y3/1オリブ黒色粘質土・5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP669	7C	楕円形 SP668を切る。SD616に切られる。	0.25	0.17	—	皿状	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP670	7D	楕円形 SD616を切る。	0.32	0.21	—	皿状	0.03	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP671	7D	楕円形 SD616・SD617を切る。	0.33	0.27	—	皿状	0.04	5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP672	7D	楕円形	0.39	0.27	—	逆台形	0.06m	上から5Y3/1オリブ黒色粘質土・5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP673	7D	楕円形 北側は調査区外	0.27	0.17	—	逆台形		5Y3/1オリブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)

溝(SD)

SD601～SD619

溝は、直線的に伸びるもの(SD601～SD603・SD607・SD609・SD612～SD619)、蛇行するもの(SD604・SD605・SD608・SD610・SD611)、L字に曲がるもの(SD606)に分類できた。幅は、0.14～1.73mを測る。断面形状は、逆台形(SD601～SD605・SD607・SD609・SD610・SD612～SD619)、U字形(SD606・SD611)、V字形(SD608)に分けられ、深さは、0.03～0.14mを測り、全体的に浅い。埋土は、単一のもの(SD601～SD606・SD609・SD611・SD612・SD614～SD617)と2層(SD607・SD608・SD610・SD613・SD618・SD619)に分かれる。遺物は、SD601とSD615から弥生土器と思われる破片がごく少量出土だけである。各溝を充填していた埋土は、類似することから、同時期に廃絶した可能性が考えられる。

SD601

7・8C地区で検出した。本遺構はSK604・SK603を切り、SK601に切られ、南側でSD602と合流する。遺構の西側と南側は調査区外に至り、遺構の全容は不明であるが、概ね南西-北東方向に直線に伸び、検出長4.66m、幅0.48～1.02mを測る。断面は逆台形を呈し、深さ0.07mを測る。埋土は5Y3/1オリーブ黒色粘質土で、弥生土器と思われる壺の体部の破片が少量出土した。

SD615

7C・D地区で検出した。本遺構はSK615・SK619・SD605・SD613を切る。南北方向に直線に伸びる。検出長6.84m、幅0.59～0.81mを測る。断面は逆台形を呈し、深さ0.05mを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色粘土で、弥生時代後期の土器86が出土した。86は壺の底部である。

第29表 第6面小穴一覧表(3)

遺構番号	地区	平面形状	長径(m)	短径(m)	径(m)	断面形状	深さ(m)	埋土
SP674	7D	楕円形	0.35	0.19	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SP675	7D	楕円形	0.34	0.27	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SP676	7D	楕円形	0.25	0.22	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP677	7D	楕円形	0.19	0.18	—	皿状	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP678	7D	円形	—	—	0.15	皿状	0.02	5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)
SP679	7D	楕円形	0.29	0.26	—	逆台形	0.06	上から5Y3/1オリーブ黒色粘質土・5Y3/1オリーブ黒色粘質土(シルト塊を多量に含む)

第30表 SD615出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量(cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
86	弥生土器 壺 底部	底径5.8	上げ底の突出する底部。内面ヘラナデ、外面ヘラミガキのちハケナデを施す。内面に黒斑あり。	10YR5/2 灰黄褐色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	

第31表 第6面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	検出長 (m)	幅 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土
SD601	7・8C	南西から北東方向へ直線に伸びる。SK601に切られる。SK604・SD603を切る。SD602と合流。西側、南側は調査区外。	4.66	0.48～1.02	逆台形	0.07	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD602	7・8C	東西方向へ直線に伸びる。SD601と合流。西側、南側は調査区外。	2.90	0.68以上	逆台形	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD603	7・8C	東西方向に直線に伸びる。SK602とSD601に切られる。	0.53	0.53	逆台形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD604	7C	南西から北東方向へ蛇行。SP609に切られる。	4.74	0.56～1.02	逆台形	0.05	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD605	7C	南西から北東方向へ蛇行。SP656～SP658に切られる。	4.21	0.14～1.07	逆台形	0.06	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD606	7C	南北方向に伸びる。南側はL字に東へ曲がる。SK622に切られる。	0.97	0.25～0.72	U字形	0.12	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD607	7D	南西から北東方向へ直線に伸びる。SP636を切る。SK614・SD608に切られる。	4.09	0.22～1.04	逆台形	0.07	2.5Y3/1黒褐色粘土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD608	6・7D	南西から北東方向へ蛇行。SP637・SP639・SP640・SP644・SK608・SK613・SK623に切られる。北側は調査区外。	7.56	0.25～0.85	V字形	0.10	2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土 5Y5/1灰色シルト混粘土
SD609	7・8D	東西方向へ直線に伸びる。西側は調査区外。	2.22以上	1.22	逆台形	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土
SD610	7.8D	南北方向へ蛇行。北側と西側は調査区外。	3.0以上	0.56以上	逆台形	0.14	2.5Y3/1黒褐色粘土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD611	7D	東西方向へ蛇行。SK623・SD613に切られる。北側は調査区外。	0.90以上	0.09～0.36	U字形	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD612	7D	南東～北西方向へ直線に伸びる。SD613・SD614に切られる。	1.25	0.42～0.33	逆台形	0.04	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD613	7D	南西～北東方向へ直線に伸びる。SP655・SK619・SK620・SD615に切られる。SD611・SD612を切る。北側は調査区外。	4.98以上	0.98～1.73	逆台形	0.14	2.5Y3/1黒褐色粘土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD614	7D	南北方向へ直線に伸びる。SK621に切られる。SD612を切る。	2.30	0.29	逆台形	0.03	5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD615	7C・D	南北方向へ直線に伸びる。SK615・SK619・SD605・SD613を切る。	6.84	0.59～0.81	逆台形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
SD616	7C・D	南北方向へ直線に伸びる。SP667・SP668・SP669・SD617を切る。SP670・SP671に切られる。	5.30	0.8～1.0	逆台形	0.05	2.5Y3/1黒褐色粘土
SD617	7C・D	南北方向へ直線に伸びる。SP668を切る。SP671・SK602・SD616に切られる。	4.64	0.43～1.22	逆台形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土
SD618	7・8C・D	南北方向へ直線に伸びる。SK602に切られる。SK616を切る。	2.69	0.34～0.9	逆台形	0.09	2.5Y3/1黒褐色粘土、7.5Y3/1オリーブ黒色粘質土
SD619	7C	南北方向へ伸びる。	3.57	0.36～0.61	逆台形	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土 5Y3/1オリーブ黒色粘質土

河川(NR)

NR601

調査地の東部(2~4B・C 2・3D地区)のT.P.+6.5m前後において検出した。南西―北東方向にゆるやかに円弧を描きながら伸びる溝で、幅は20m以上を測る。断面形状は皿状で、深さは0.5m以上を測る。埋土は、36層を確認した。黄灰色～青灰色の細砂混粘土、細砂、シルト混粘土等で構成されており、淀んでいる時の堆積状況を示す粘土や、流水堆積の砂やシルトが交互に堆積していた。本遺構からは、土器や石器および自然木が散在した状況で出土した。出土した土器は、圧倒的に破片が多く、完形に復元できるものはなかった。しかし、土器の表面は、ほとんど磨耗を受けてないため、この場所に捨てた可能性が高いと考えられる。木杭は、合計18本(杭1~杭18)検出した。杭1~杭15は、西肩とさらにその外側にほぼ垂直に打ち込んでおり、杭の先端は、河川以前の堆積土まで達している。検出した状況から、2列を意識し打ち込んだ可能性が考えられる。また、自然木は、加工用として貯木していた可能性が考えられる。

本遺構から出土した遺物のうち、図化し掲載したものは、土器87~135、石器S8~S10、木杭W17~W24である。

87~115は壺である。87~89は、端面に凹線を施す。95は、体部外面に直線文と波状文を施す。98は、口縁部内外面に凹線文とヘラ記号を施す。99は、体部外面にヘラ先による圧痕を6個施す。102~104の体部外面には、貼り付け突帯、鋸歯文、三重竹管文を沈線であざ渦巻き文風に見せたもの、半裁竹管文を施す。102~104は、文様構成から同一個体の可能性が高い。文様構成が類似するものには、巨摩瓜生堂遺跡の沼状遺構上層から出土した壺がある。この壺は河内V-O様式に比定されている。したがって、102~104も同時期のものと考えられる。105は体部外面に列点文を施す。94・106は、体部外面に赤色顔料を塗布している。

107は扁平な体部で、竹管文を施す。108は大型の壺で、突出する底部をもつ。

116~126は甕である。116は右上がりのタタキ、117は左上がりのタタキを施す。121~126は突出する平底で、125・126には底面中央に孔があげられている。

127~134は高杯である。127は波状文を施す。130は内湾する楕形。133は脚部と裾部の境にキザミ目を施し、裾部にスカシ孔が6箇所ある。外面に赤色顔料を塗布。裾には粘土の貼り付けの痕跡があり、さらに下方に広がる器形になると思われる。134は円筒状の柱状部で、下端に沈線1条施す。杯部との接合部には、円板充填法を用いている。

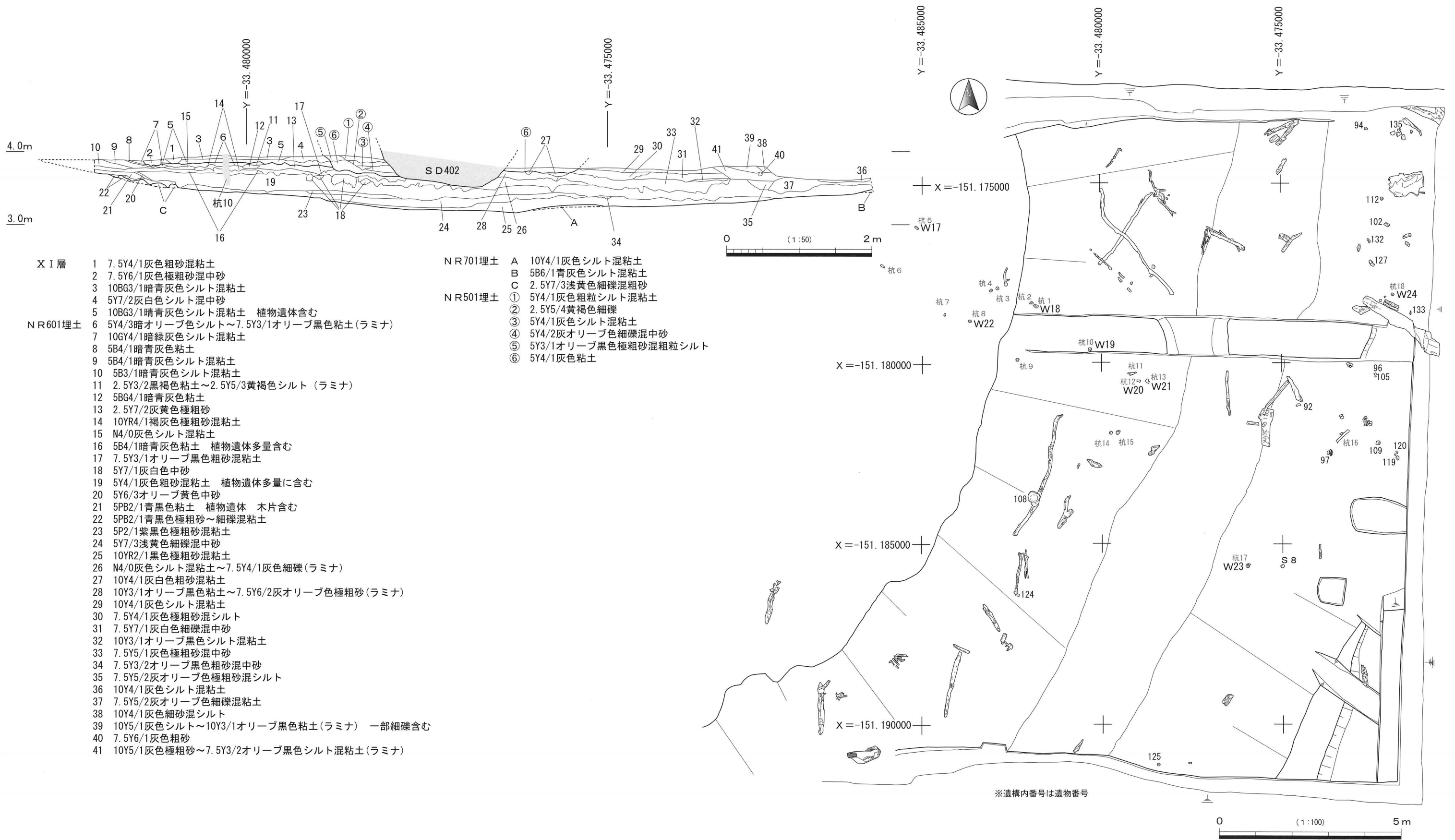
135は用途不明の土製品で、形状は弧状に曲がる棒状である。部分的に赤色顔料を塗布している。土製勾玉か？。

S8は用途不明の石。S9は砥石で、角柱状を呈す。S10は一部に煤が付着している。

W17~W24は、長さ64.8~89.2cmを測る。(西村)

第32表 NR601出土杭法量表

掲載番号 図版番号 杭番号	断面形状	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	先端形状
W17 36 杭5	長方形	74.7	9.1	2.9	五角形
W18 36 杭1	長方形	83.7	13.2	2.1	三角形
W19 36 杭10	七角形	64.8	8.1	8.0	六角形
W20 36 杭12	長方形	79.9	9.7	2.7	四角形
W21 36 杭13	三角形	83.6	10.4	3.7	四角形
W22 36 杭8	台形	69.5	10.0	5.6	七角形
W23 36 杭17	長方形	89.2	7.1	4.8	六角形
W24 36 杭18	六角形	74.4	8.8	8.7	八角形

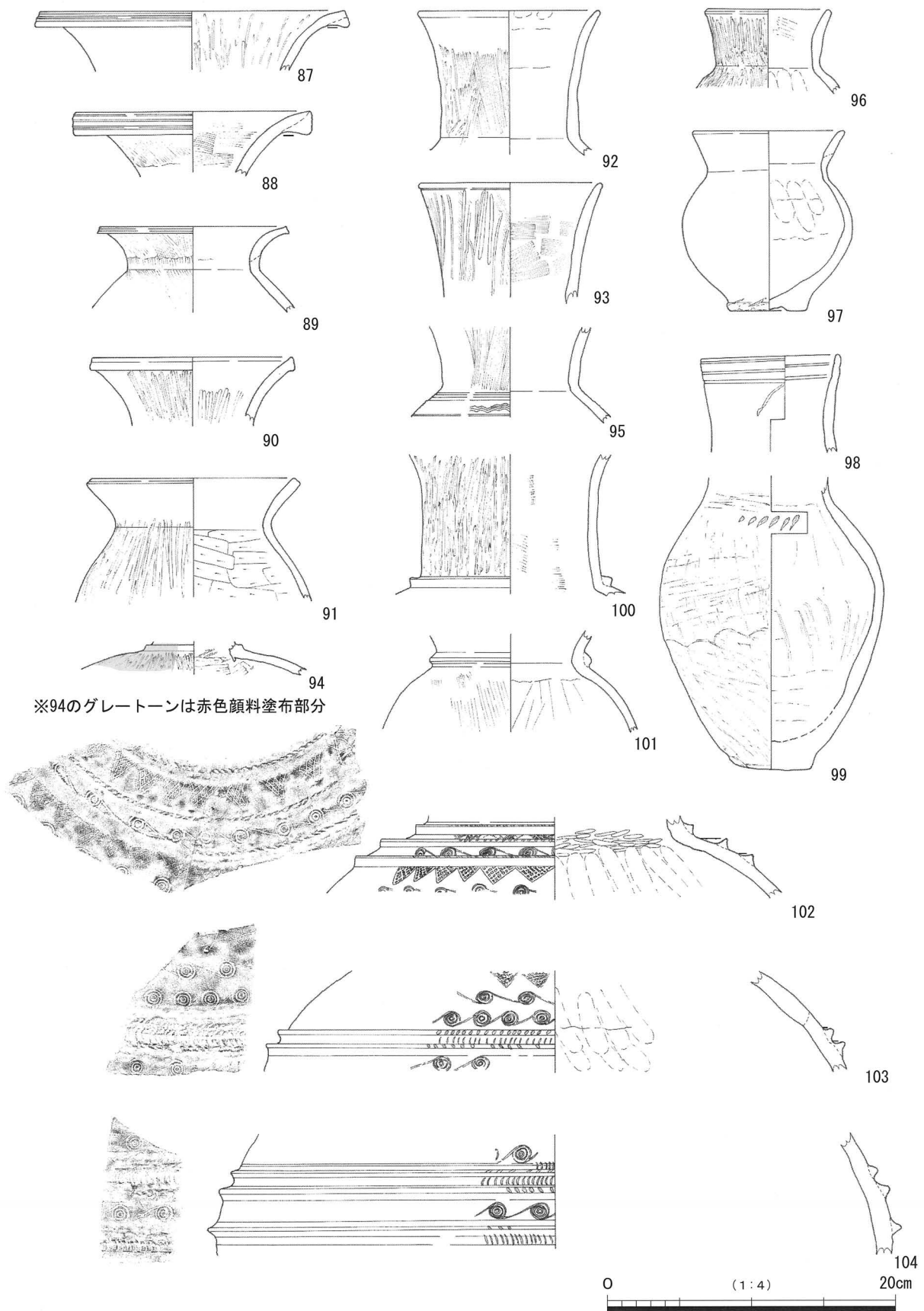


- X I 層
- 1 7.5Y4/1灰色粗砂混粘土
 - 2 7.5Y6/1灰色極粗砂混中砂
 - 3 10BG3/1暗青灰色シルト混粘土
 - 4 5Y7/2灰白色シルト混中砂
 - 5 10BG3/1暗青灰色シルト混粘土 植物遺体含む
 - 6 5Y4/3暗オリーブ色シルト~7.5Y3/1オリーブ黒色粘土(ラミナ)
 - 7 10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土
 - 8 5B4/1暗青灰色粘土
 - 9 5B4/1暗青灰色シルト混粘土
 - 10 5B3/1暗青灰色シルト混粘土
 - 11 2.5Y3/2黒褐色粘土~2.5Y5/3黄褐色シルト(ラミナ)
 - 12 5BG4/1暗青灰色粘土
 - 13 2.5Y7/2灰黄色極粗砂
 - 14 10YR4/1褐色灰色極粗砂混粘土
 - 15 N4/0灰色シルト混粘土
 - 16 5B4/1暗青灰色粘土 植物遺体多量含む
 - 17 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂混粘土
 - 18 5Y7/1灰白色中砂
 - 19 5Y4/1灰色粗砂混粘土 植物遺体多量に含む
 - 20 5Y6/3オリーブ黄色中砂
 - 21 5PB2/1青黒色粘土 植物遺体 木片含む
 - 22 5PB2/1青黒色極粗砂~細礫混粘土
 - 23 5P2/1紫黒色極粗砂混粘土
 - 24 5Y7/3浅黄色細礫混中砂
 - 25 10YR2/1黒色極粗砂混粘土
 - 26 N4/0灰色シルト混粘土~7.5Y4/1灰色細礫(ラミナ)
 - 27 10Y4/1灰白色粗砂混粘土
 - 28 10Y3/1オリーブ黒色粘土~7.5Y6/2灰オリーブ色極粗砂(ラミナ)
 - 29 10Y4/1灰色シルト混粘土
 - 30 7.5Y4/1灰色極粗砂混シルト
 - 31 7.5Y7/1灰白色細礫混中砂
 - 32 10Y3/1オリーブ黒色シルト混粘土
 - 33 7.5Y5/1灰色極粗砂混中砂
 - 34 7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂混中砂
 - 35 7.5Y5/2灰オリーブ色極粗砂混シルト
 - 36 10Y4/1灰色シルト混粘土
 - 37 7.5Y5/2灰オリーブ色細礫混粘土
 - 38 10Y4/1灰色細砂混シルト
 - 39 10Y5/1灰色シルト~10Y3/1オリーブ黒色粘土(ラミナ) 一部細礫含む
 - 40 7.5Y6/1灰色粗砂
 - 41 10Y5/1灰色極粗砂~7.5Y3/2オリーブ黒色シルト混粘土(ラミナ)
- NR601埋土
- NR701埋土
- NR501埋土
- A 10Y4/1灰色シルト混粘土
B 5B6/1青灰色シルト混粘土
C 2.5Y7/3浅黄色細礫混粗砂
- ① 5Y4/1灰色粗粒シルト混粘土
② 2.5Y5/4黄褐色細礫
③ 5Y4/1灰色シルト混粘土
④ 5Y4/2灰オリーブ色細礫混中砂
⑤ 5Y3/1オリーブ黒色極粗砂混粗粒シルト
⑥ 5Y4/1灰色粘土

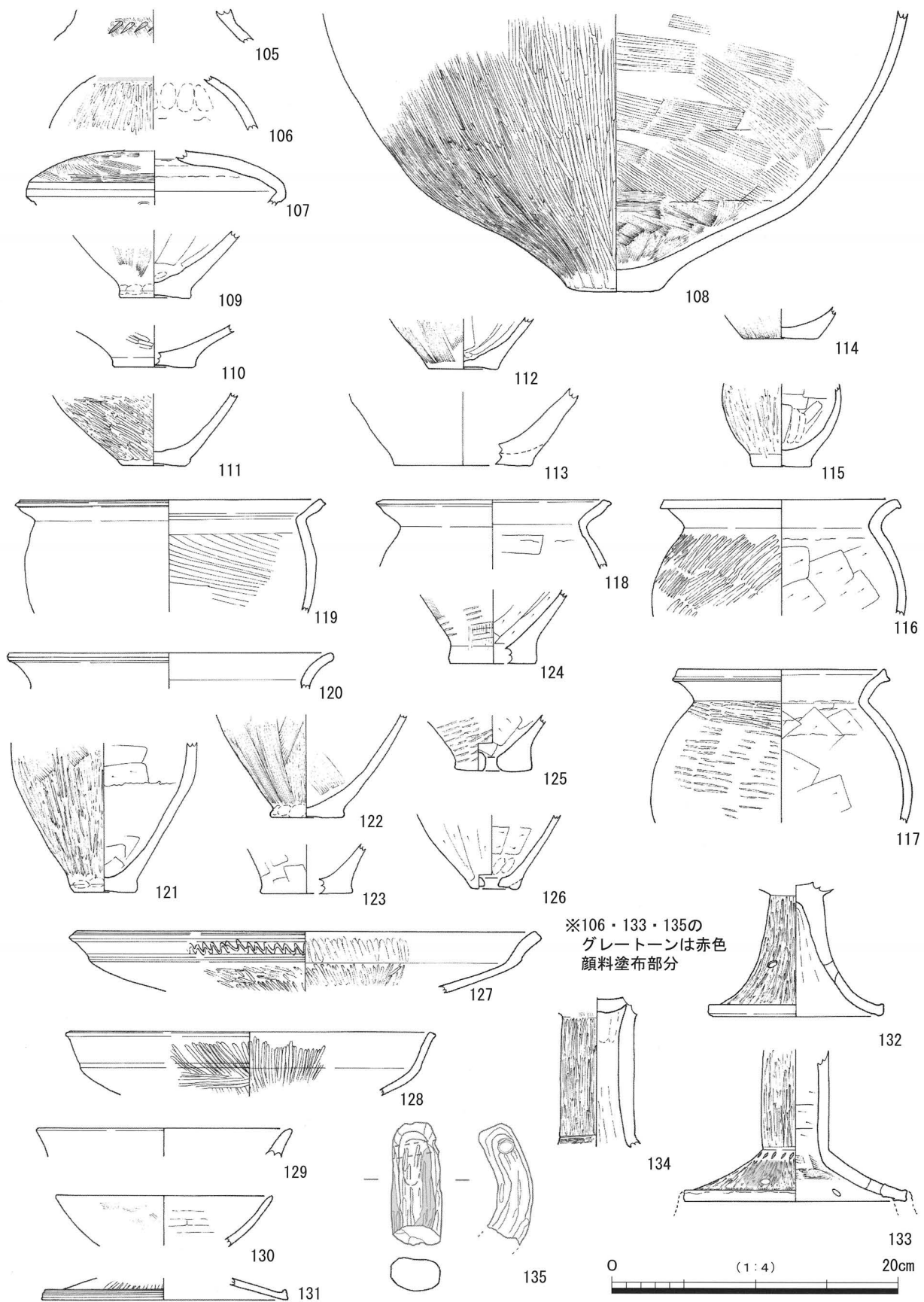
第37図 NR601平・断面図

第33表 NR601出土遺物観察表(1)

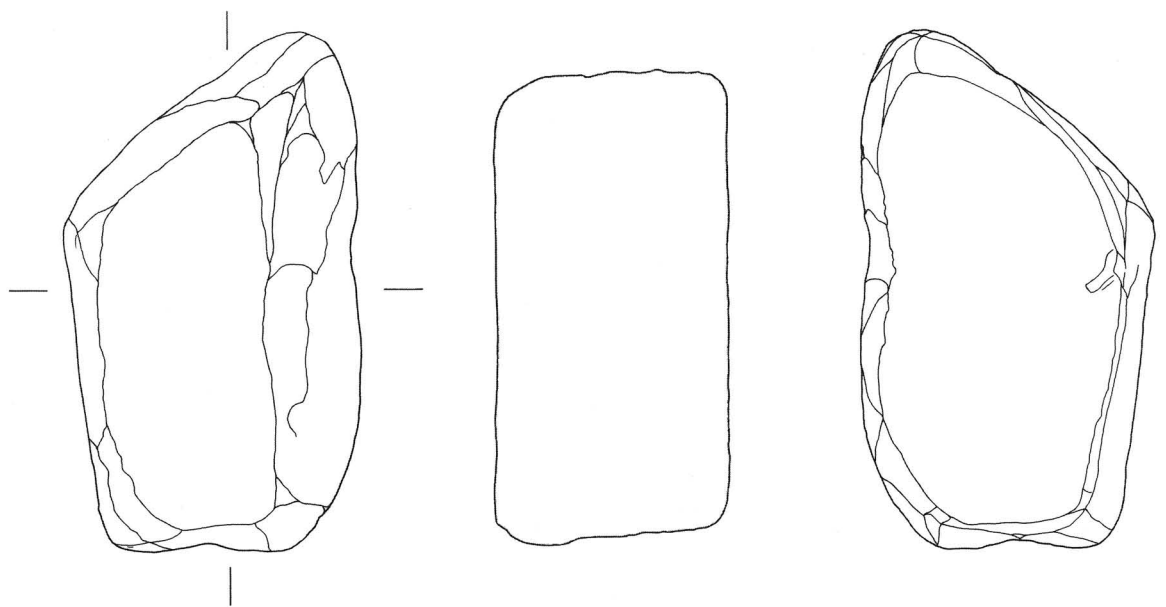
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
87	弥生土器 壺 口縁部	口径21.0	外反する口縁部。端部は下方へ肥厚し面をもつ。端面に2条沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面はヘラミガキ、外面はナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
88	弥生土器 壺 口縁部	口径16.2	外反する口縁部。端部は下方に肥厚し面をもつ。端面に3条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。	5YR6/6 褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
89	弥生土器壺 口縁～体部 上位	口径13.2	体部からゆるやかに屈曲し直立ぎみから外側へ伸びる頸部。口縁部は外反する。端部は上下へつまみ出し面をもつ。端面に凹線を1条施す。口縁部内面はヨコナデ。粘土接合痕あり。外面はハケナデで、粘土接合痕がある。体部内面はナデ、外面はハケナデを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
90	弥生土器 壺 口縁部	口径13.8	外反する口縁部。端部は上下へつまみ出し面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はヘラミガキを施す。	2.5Y6/3 にぶい黄色	2mm以下の砂粒を少量含む (長石・雲母)	良好	
91 34	弥生土器 壺 口縁～体部 上位	口径14.0	ややふくらむ体部。外反する口縁部。端部は面をもつ。端面は中央部がくぼむ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキを施す。	7.5Y4/1 灰色	2mm以下の砂粒を	良好	
92	弥生土器 長頸壺 口縁～頸部	口径12.7	外側へ直線的にひらく頸部。外反する口縁部。口縁部内外面はヨコナデを施す。内面にユビオサエあり。頸部内面はナデを施し、粘土接合痕がある。外面はハケナデ後ヘラミガキを施す。体部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR4/3 にぶい赤褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
93	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径12.4	外反する口縁部。端部は丸く終わる。端部外面に沈線状のくぼみがある。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面はハケナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	
94	弥生土器 長頸壺 頸部～体部 上位		体部から屈曲し直立ぎみからやや外側に伸びる頸部。体部と頸部の界に1条の突帯文を施す。頸部内面はハケナデのちナデ、外面はヘラミガキを施す。突帯文以下体部上位に赤色顔料を塗布している。	7.5YR5/4 にぶい褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
95 34	弥生土器 壺 頸部～体部 上位		体部から屈曲し外側へ直線的に伸びる頸部。体部上位に櫛描直線文と波状文を施す。頸部内面はナデ、外面はハケナデを施す。体部内外面はナデを施す。	2.5Y4/2 暗灰黄色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	
96	弥生土器 壺 口縁部	口径8.8	肩の張る体部上位から外反ぎみにひらく。口縁部は外反し丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はヘラミガキを施す。体部内面はユビナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR6/4 にぶい橙色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
97	弥生土器 壺 完形	口径10.6 器高12.5 底径5.2	突出する上げ底状の底部。球形の体部。外反ぎみにひらく口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデのちナデ、外面はユビオサエのちナデを施す。	7.5YR4/2 灰褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
98 34	弥生土器 長頸壺 口縁部	口径9.4	直立する頸部。口縁部はやや外側に内湾ぎみにのび端部は丸く終わる。口縁部外面に3条、内面に2条の凹線を施す。頸部外面にヘラ記号あり。頸部および口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	4mm程度の砂粒を含む	良好	
99 34	弥生土器 壺 体部上位～ 底部	底径5.8	縦長の器形で、体部上位が張り出す。体部上位にヘラ先による圧痕を6個施す。頸部にヘラ状工具の圧痕あり。体部内面下位はナデ、中位はハケナデ、上位はナデを施し、シボリ目がある。外面下位はヘラケズリ後ヘラミガキ、中位はヘラミガキ後ハケナデ、上位はハケナデを施す。	5Y5/2 灰オリーブ色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
100	弥生土器 壺 頸部～体部 上位		頸部は体部上位から屈曲しやや内側に伸びる。体部と頸部の境に1条突帯文を施す。頸部内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。体部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	5YR5/2 灰褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
101	弥生土器 壺 肩部～体部		ふくらみのある丸い体部。頸部は体部上位から屈曲し外反する。体部と頸部の界に突帯文を1条施す。頸部内外面はナデを施す。また、粘土接合痕が見られる。体部内面はナデ、外面はハケナデを施す。	2.5YR3/6 暗赤褐色	0.5mm程度の砂粒を含む	良好	



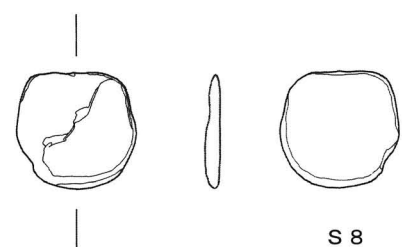
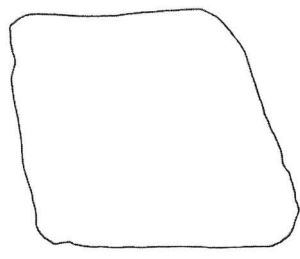
第38図 NR601出土遺物実測図(1)



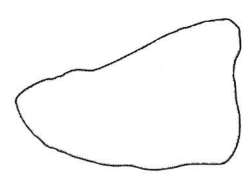
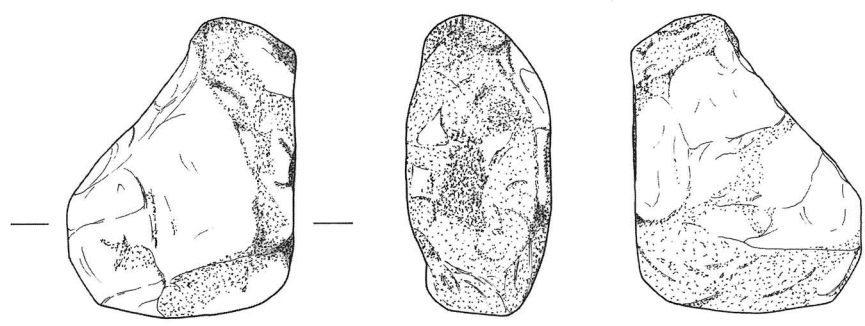
第39図 NR601出土遺物実測図(2)



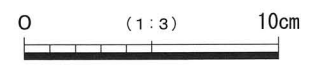
S 9



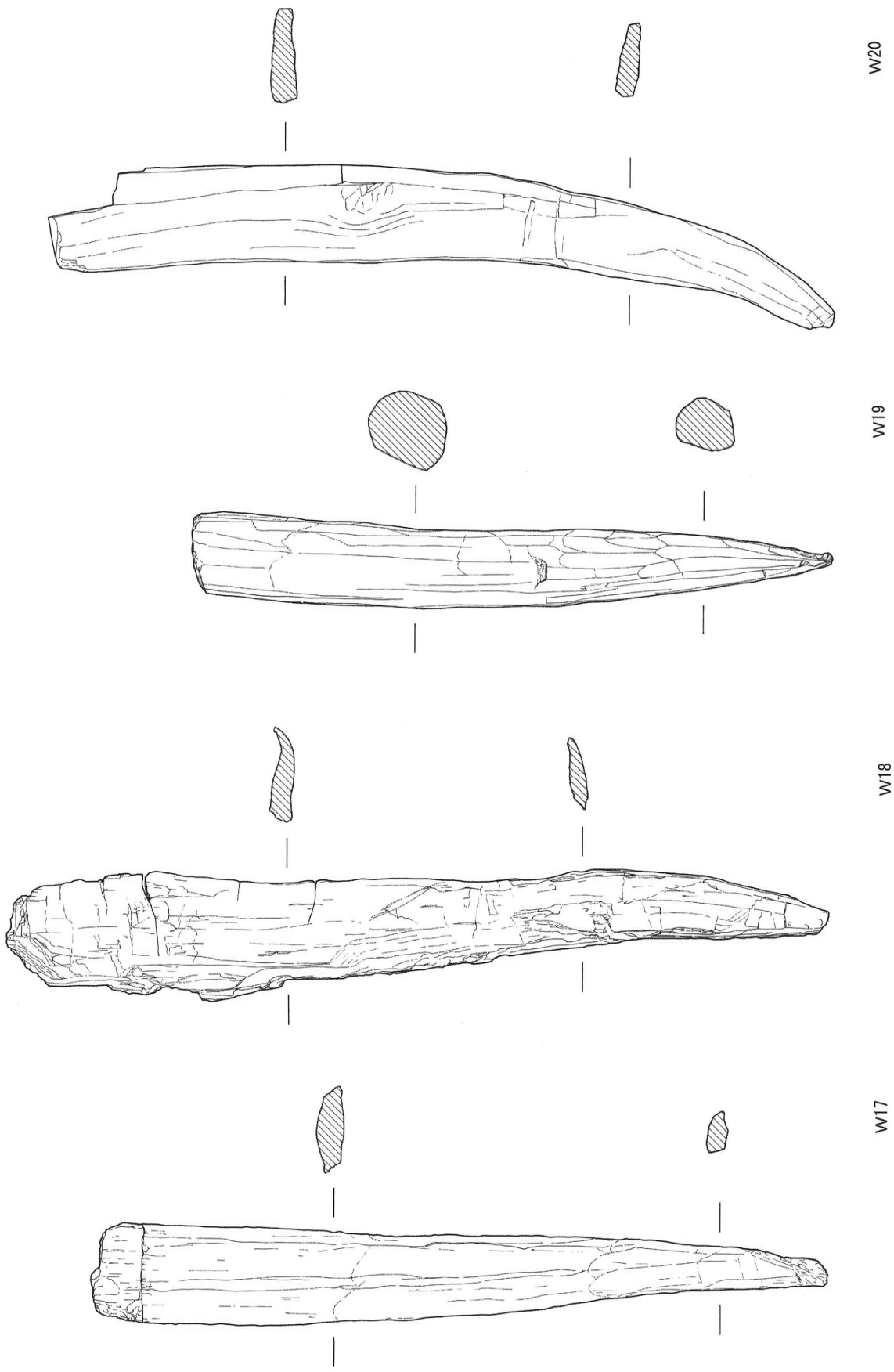
S 8



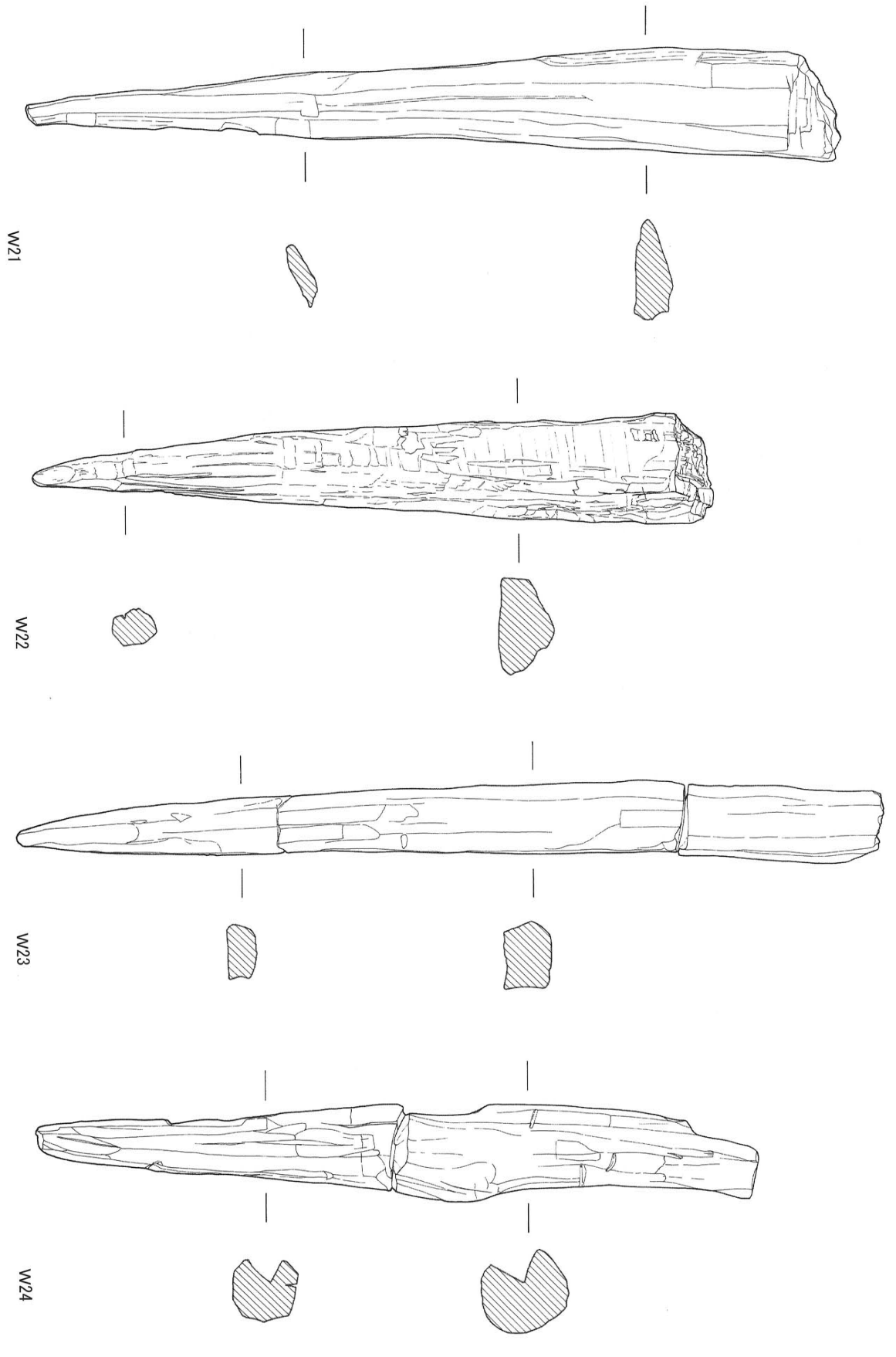
S 10



第40图 NR601出土遺物実測図(3)



第41図 NR601出土遺物実測図(4)



第42圖 N R 601出土遺物実測図(5)

第34表 NR601出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
102 34	弥生土器 壺 体部		頸部外面に断面三角形の貼り付け突帯（突帯上は刻み目）を施し、以下鋸歯文、断面三角形貼り付け突帯（突帯上は刻み目）、三重竹管文を左上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたもの、断面三角形貼り付け突帯（突帯上は刻み目）、鋸歯文、三重竹管文を左上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたものを施す。内面上位にはヘラミガキを、下位にはユビナデを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	
103 34	弥生土器 壺 体部		外面に、上から鋸歯文、三重竹管文を左上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたもの、三重竹管文を右上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたもの、断面三角形貼り付け突帯（突帯上は刻み目）を2条（突帯の間には半裁竹管文をC字形に施す）、三重竹管文を右上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたものを施している。内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。	7.5YR5/3 にぶい褐色	0.5mm程度の砂粒を含む	良好	
104 34	弥生土器 壺 体部		体部外面に、上から三重竹管文を右上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたもの、半裁竹管文を逆C字形、断面三角形貼り付け突帯（突帯上は刻み目）を2条（突帯の間には半裁竹管文をC字形に施す）、三重竹管文を右上がりの沈線をつなぎ渦巻き文風に見せたもの、断面三角形貼り付け突帯（突帯上は刻み目）を1条、半裁竹管文を逆C字形に施す。内面はナデを施す。	7.5YR4/2 灰褐色	1～6mmの砂粒を含む	良好	
105 34	弥生土器 壺 頸～肩部		体部上位に列点文を施す。頸部内外面ナデを施す。体部内面はナデ、外面はハケナデを施す。	5YR2/1 黒褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
106 35	弥生土器 壺 体部		球形の体部。体部上位にヘラ先による刺突文を施し、赤色顔料を塗布する。体部内面はユビオサエのちナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR6/6 橙色	0.5mm程度の砂粒を含む	良好	
107	弥生土器 壺 体部上位		外面に円形竹管文を施す。内面はナデ。粘土接合痕がある。外面はハケナデを施す。	2.5YR4/3 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
108 35	弥生土器 大型壺 体部下位～ 底部	底径6.7	突出する平底。扁平な球形をもつ体部。体部内面はハケナデを施し、粘土接合痕がある。外面はヘラミガキを施す。	7.5YR4/2 灰褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
109	弥生土器 壺 底部	底径5.0	突出する上げ底状の底部。体部内面はヘラケズリ、外面ハケナデを施す。底部は内外面ナデを施し、ユビナデが残る。	10YR3/2 黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	
110	弥生土器 壺 底部	底径5.8	突出する上げ底の底部。体部内面はナデ、外面ヘラミガキを施す。底部内外面はナデを施す。	10YR5/3 にぶい褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	
111	弥生土器 壺 底部	底径4.5	上げ底の底部。体部内面はナデを施す。全体に黒斑あり。外面はヘラミガキを施す。底部は内外面ナデを施す。	10YR6/4 にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
112 35	弥生土器 壺 底部	底径4.8	突出する平底の底部。体部内面はヘラケズリ、外面ハケナデを施す。底部内面はユビナデ、外面はナデを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
113	弥生土器 壺 底部	底径9.6	平底の底部。体部および底部は内外面ナデを施す。	10YR3/1 黒褐色	0.5～5mmの砂粒を含む	良好	
114	弥生土器 壺 底部	底径5.2	上げ底の底部。底部内面はナデ、外面ハケナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	3mm以下の砂粒を少量含む	良好	
115	弥生土器 壺 体部中位～ 底部	底径4.0	突出する上げ底の底部。球形の体部。体部内面はヘラナデのちユビナデ、外面ヘラミガキを施す。底部内外面はナデを施す。	5Y7/3 浅黄色	4mm以下の砂粒を多量含む	良好	

第35表 NR601出土遺物観察表(3)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
116 35	弥生土器 甕 口縁部	口径16.8	やや丸みのある体部。外反する口縁部。端部は下方へつまみ出し面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリを施し、粘土接合痕がある。外面は右上がりのタタキを施す。	N2/0黒色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
117 35	弥生土器 甕 口縁～体部 中位	口径14.5	丸みのある体部。外反する口縁部。端部は上下につまみ出しくぼむ面をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面はヘラケズリを施し、粘土接合痕がある。外面は左上がりのタタキを施す。外面には煤が付着している。	10YR4/3 にぶい黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
118	弥生土器 甕 口縁部	口径16.4	外上方へやや内湾ぎみに伸びる。端部は外へつまみ出し、面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。	5YR4/3 にぶい赤褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
119 35	弥生土器 甕 口縁部	口径21.6	丸く内湾する体部。外反ぎみにひらく口縁部。端部は下方へややつまみ出し、面をもつ。端面に凹線を1条施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	2.5YR5/6 明赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好	
120	弥生土器 甕 口縁部	口径22.7	外反する口縁部。端部は外へややつまみ出し、丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰色	1.5mm以下の砂粒を含む	良好	
121	弥生土器 甕 体部中位～ 底部	底径4.3	突出する底部。ゆるやかに内湾する体部。体部内面中位はヘラケズリを施し、粘土接合痕がある。下位はヘラナデを施す。外面はハケナデのちヘラミガキを施す。底部内面はヘラナデ、外面はユビオサエのちナデを施す。	7.5YR4/3 褐色	1～6mmの砂粒を含む	良好	
122	弥生土器 甕 底部	底径5.2	突出する平底の底部。体部および底部内面はハケナデ、体部外面はハケナデを施す。底部外面はユビナデを施す。	5YR4/2 灰褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
123	弥生土器 甕 底部	底径6.2	突出する平底の底部。底部内面はナデ、外面はヘラナデを施す。	10R4/4 赤褐色	2mm以下の砂粒を少量含む	良好	
124	弥生土器 甕 底部	底径6.2	突出する平底。内面はヘラケズリ、外面は右上がりタタキのちハケナデを施す。	2.5Y4/1 黄灰色	1mm以下の砂粒を含む。	良好	
125 35	弥生土器 甕 底部	底径5.4	突出する平底。底面中央に1個孔あり。内面はヘラケズリ、外面は右上がりタタキを施す。	5YR4/4 にぶい赤褐色	1.5mm以下の砂粒を含む。	良好	
126 35	弥生土器 甕 底部	底径3.3	突出する上底の底部。底部中央に1個孔あり。体部内外面はヘラケズリを施す。底部内面はユビナデを施す。外面には煤が付着している。	2.5Y5/3 黄褐色	1～2mmの砂粒を含む	良好	
127 36	弥生土器 高杯 口縁部	口径36.0	斜めにひらく杯部から稜をもって外反する口縁部。端部は面をもつ。端部に凹線を施す。口縁部外面に波状文が施され、下方に凹線を施す。口縁部内面はヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。杯部内面はヘラミガキ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	5YR4/2 灰褐色	0.5mm程度の砂粒を含む	良好	
128	弥生土器 高杯 口縁部	口径25.9	内湾ぎみにゆるやかに開く杯部から屈曲し、外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部内外面ヨコナデのちヘラミガキ。杯部内外面ヘラミガキ。	5YR5/2 灰褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
129	弥生土器 高杯 口縁部	口径17.6	外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。	5YR4/4 にぶい赤褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
130	弥生土器 高杯 口縁部	口径15.0	内湾してゆるやかにひらく杯部。口縁部はとがりぎみに丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。杯部内面はヘラナデ、外面はハケナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
131	弥生土器 高杯 裾部	裾径17.2	ゆるやかに開く裾部。端部は上方へつまみ出し面をもつ。端部は凹線を2条施す。裾部内面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	1mm程度の砂粒を含む	良好	
132 36	弥生土器 高杯 脚部～裾部	裾径12.3	ゆるやかに外反する脚部。裾は上方へつまみ出し面をもつ。裾部に2ヶ所スカシ孔あり。裾部内外面はヨコナデを施す。脚部内面はナデを施し、シボリ目がある。外面はヘラミガキを施す。杯部内外面はナデを施す。	5YR4/2 灰褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
133 36	弥生土器 高杯 脚部～裾部	裾径15.6	中位がややふくらむ円筒形の脚部。裾部は屈曲し外方へ開く。裾の端に粘土の痕跡が見られるため、屈曲をもってさらに下方へひろがる器形になると思われる。裾部上位にキザミ目を施す。中位には6ヶ所円形のスカシ孔がある。屈曲部には突帯を1条施す。外面に赤色顔料を塗布している。脚部内面はヘラケズリ、外面ヘラミガキを施す。裾部内面はハケナデ、外面上位はヘラミガキ。下位はハケナデを施す。	10YR4/4 赤褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	

第36表 NR601出土遺物観察表(4)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
134	弥生土器 高杯 脚部		円筒形の脚柱部。脚柱部下端沈線を1条施す。内面はユビナデを施し、シボリ目がある。外面はヘラミガキを施す。杯部と脚部の接合は円板充填である。	5Y4/2 灰オリーブ色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
135 36	用途不明土 製品	現 存 長 8.6 幅3.5 厚み2.2 孔 長 径 1.2 短径0.9	弧状に曲がる棒状の土製品で、断面は隅丸の方形である。端部は面をもつ。端部付近に1ヶ所貫通する楕円形の孔あり。全面にヘラミガキを施す。部分的に赤色顔料を塗布。土製勾玉か？	10YR5/2 灰黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
S 8	石 用途不明	長さ4.5 幅4.6 厚み0.6	平面形状は隅丸の方形、断面形状はレンズ状である。両面ともに磨いている。	5Y7/2灰白色			
S 9 36	砥石	長さ19.9 幅11.2 厚み9.0	平面形状は長方形で、断面形状は菱形である。磨いた痕跡が2面あり、このはやや窪んでいる。	10Y6/1灰色			
S10 36	石 用途不明	長さ11.5 幅8.5 厚み5.7	平面形状は五角形、断面形状は丸みのある三角形である。2次焼成をうけ、煤 (N3/0暗灰色) が部分的に付着している。	10BG5/1 青灰色			

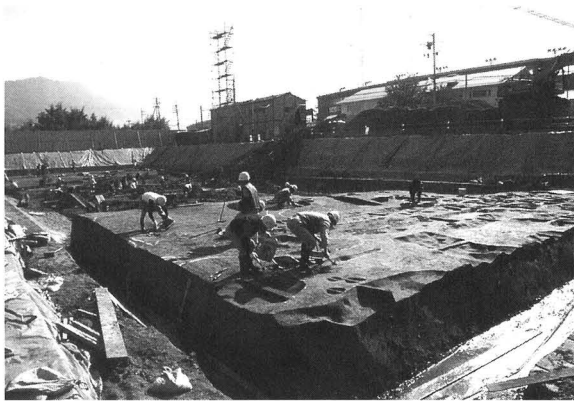


写真19 第6面西部調査状況(北西から)



写真20 第6面西部調査状況(西から)

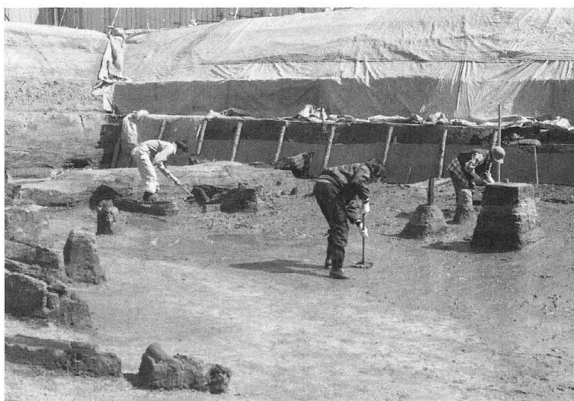


写真21 NR601掘削状況(南西から)



写真22 NR601調査状況(南西から)

第7面（縄文時代晩期～弥生時代中期末）

調査地のほぼ全域で河川1条（NR701）を検出した。

河川（NR）

NR701

本河川は東西の肩が調査区外に位置するため、全容は不明である。検出部の東西幅は60m以上、深さは約3m以上を測る。なお、下層確認の結果T.P. +2.2mまで河川内の堆積を確認したが、確認のトレンチは幅が狭いため、湧水が多く、砂の堆積が崩れてくるなどの事情から本来の川底は確認できなかった。埋土は基本層序のXVI層で、本層は大きく上層と下層の2層に分けることができた。上層は基本層序の第XVI-1層で、下層はXVI-2層である。堆積状況の観察の結果からこの河川は南東から北西方向に流れていたと推測される。

第XVI-1層は、弥生時代中期に堆積した層で、層内からは弥生時代中期中葉～末の土器、石器が出土した。出土した遺物は土器が大半を占める。

第XVI-2層は、弥生時代前期に堆積した層である。調査地の西側にやや細かい砂が堆積している状況があり、この部分から先に陸地化していったと推測される。中央より東側には河川の流れが急速であったことを示す粗い砂が堆積していた。この層内からは縄文時代晩期～弥生時代前期の土器、石器が出土した。出土した遺物は、そのほとんどが破片で、流されてきたため表面が磨耗を受けている。しかし、数点ではあるが、ほとんど割れてなく、完形近くまで復元可能な土器があり、これらの土器は、表面の調整が見えるものが大半であることから、流されてきたとしてもそう遠くない場所からのものと思われる。

第37表 NR701出土遺物観察表(1)

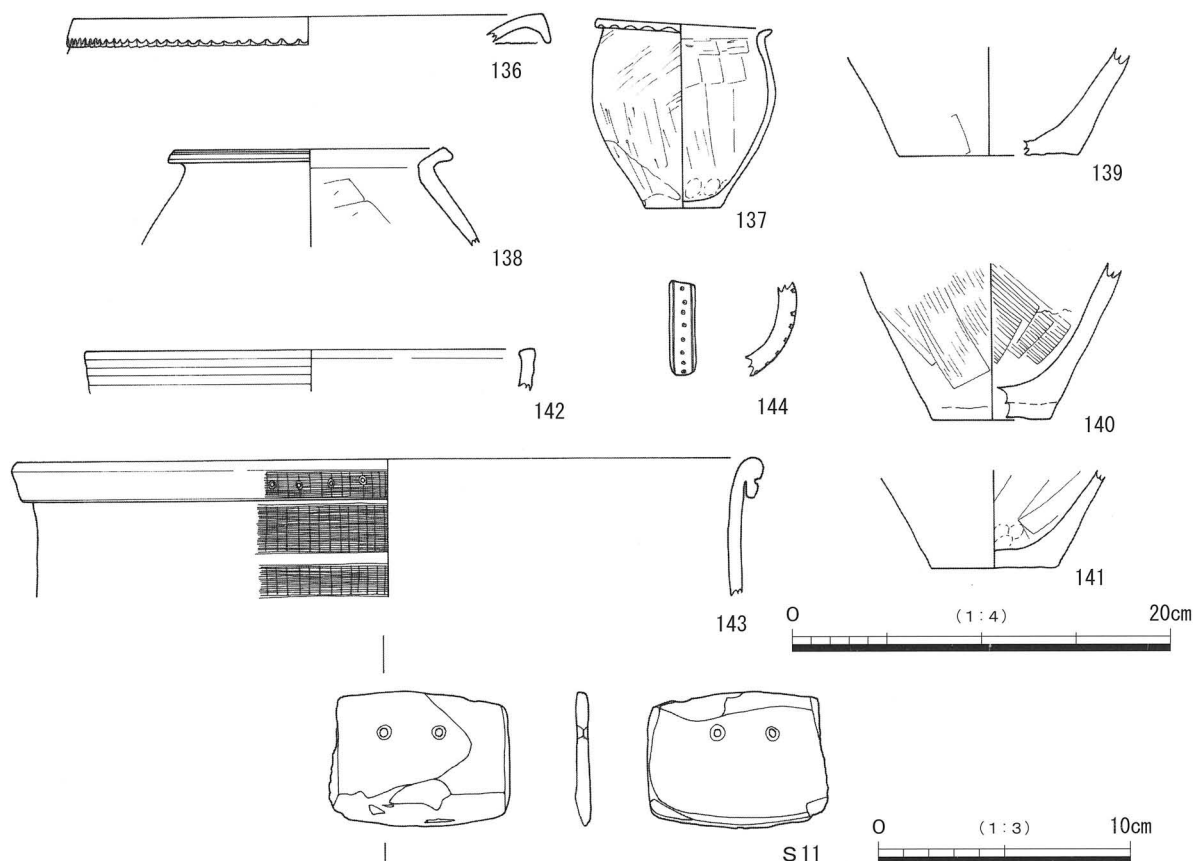
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
136	弥生土器 広口壺 口縁部	口径25.0	口縁部は外上方へ外反して伸びる。口縁端部は下方に垂下させる。端部にキザミ目を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
137 37	弥生土器 甕 完形	口径9.4 器高9.7 底径4.0	平底の底部。体部中位がやや張り出す。外反する口縁部。端部は丸く終わる。体部内外面はヘラケズリを施す。底面にはユビナデを施す。口縁部内外面はヨコナデを施し、端部はユビナデを施す。	2.5YR6/3 にぶい黄色	0.5～1mm の砂粒を含む	良好	
138	弥生土器 甕 口縁部	口径14.0	口縁は屈曲し外反する。端部は下方へやや肥厚する。端面に1条施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリ、外面はナデを施す。	7.5YR4/4 褐色	1～7mmの 砂粒を含む	良好	
139	弥生土器 甕 底部	底径9.6	平底の底部。体部から底部内外面はナデを施す。外面にヘラ状工具による圧痕あり。	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	0.5～7mm の砂粒を含む	良好	
140	弥生土器 甕 底部	底径6.2	平底の底部。体部内外面はヘラナデを施し、内面には粘土接合痕がある。底部内外面はナデを施し、外面には粘土接合痕がある。	5YR4/3 にぶい赤褐色	0.5～2mm の砂粒を含む	良好	
141	弥生土器 甕 底部	底径6.6	平底の底部。内面はヘラナデ、外面はユビナデを施す。一部に黒斑あり。	5YR5/6 明赤褐色	0.5～5mm の砂粒を含む	良好	
142	弥生土器 高杯	口径23.6	やや内傾ぎみに直立する口縁部。上部は面をもつ。外面に2条+αの凹線文を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
143 37	弥生土器 鉢 口縁部	口径39.3	直立ぎみに立ち上がる口縁部。口縁部は下方へ垂下させ面をもつ。端面に簾状文を施した後刺突列点を施している。体部外面に簾状文を施している。口縁部および体部内外面はナデを施す。	7.5YR4/3 褐色	0.5～4mm の砂粒を含む	良好	
144	弥生土器 鉢 把手部		外面に円形竹管を押圧している。内外面はナデを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
S11 37	石器 石包丁	長さ7.2 幅5.3 厚み0.6	左右は欠損しており全体の形状は不明であるが、半月形外彎刃の包丁と思われる。中央やや上よりに2個紐孔をあける。両面ともていねいに磨く。	10Y8/1 灰白色			

遺物のうち図化し掲載したものは、第XVI-1層出土の土器136~144、石器S11と、第XVI-2層出土の土器145~231、石器S12~S20である。

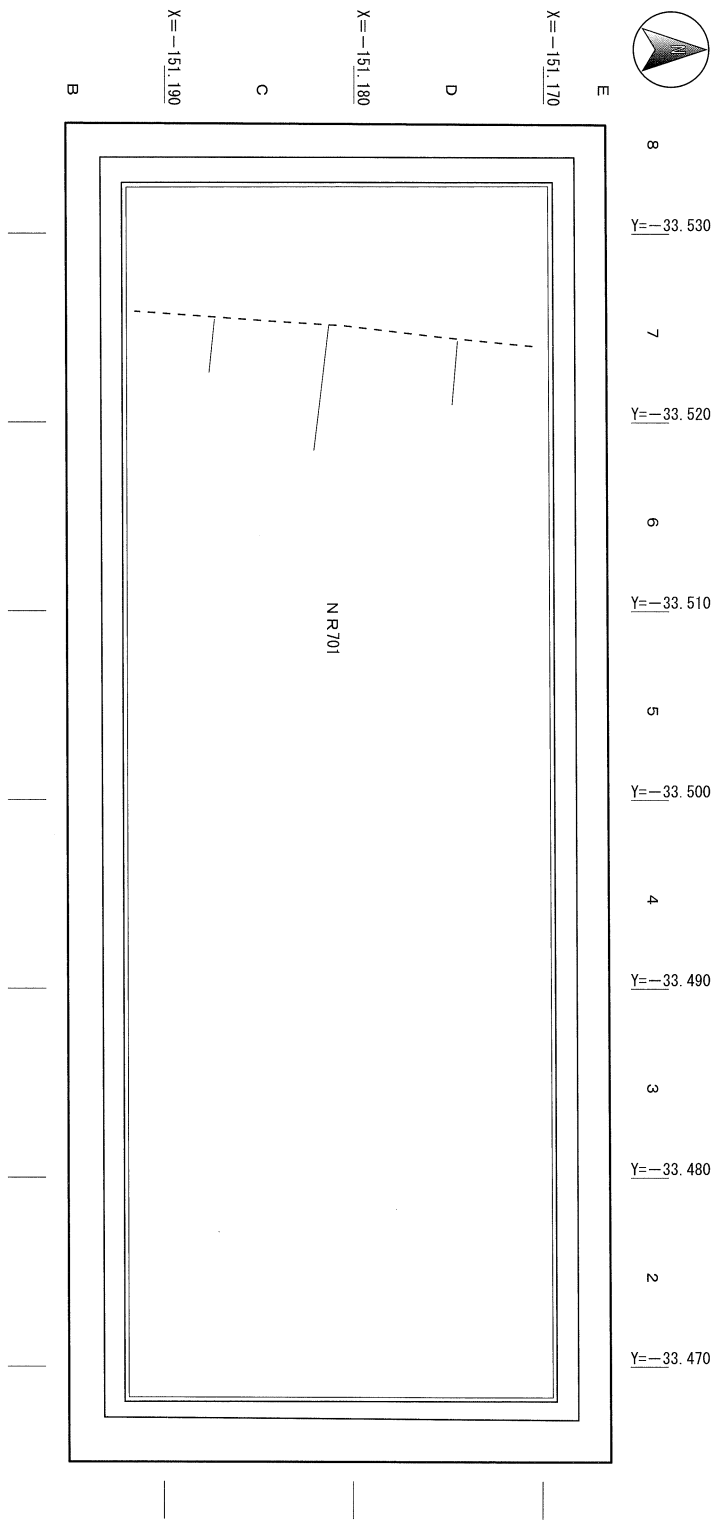
136は広口壺で、端部にキザミ目を施す。137は甕で、体部中位がやや張り出す。体部内外面はヘラケズリを施す。河内IV-2様式頃に比定できる。138は甕で、口縁部は屈曲し外反する。端部は下方へやや肥厚する。弥生時代中期末頃の河内IV-3~VI-4に相当する。139~141は甕の底部。142は高杯で、外面に凹線文を施す。143は鉢で、口縁端面に簾状文と刺突文を、体部に簾状文を施す。144は鉢の把手部分と思われる。S11は石包丁で、左右は欠損しており全体の形状は不明であるが、半月形外彎刃の包丁になると推測される。

145は浅鉢で、内面に突帯がある。縄文時代晩期に相当する。146は深鉢で、端部より少し下がった位置に貼り付け突帯を1条施し、突帯上にはキザミ目を施す。縄文時代晩期の長原式期に比定できる。

147~198は弥生時代前期の壺である。147は頸部に6条、体部上位に9条の沈線を施す。多条の沈線を施すことから前期でも新しい時期の河内I-4様式に比定できる。148は頸部に貼り付け突帯を1条、体部上位に3条の沈線を施す。149は頸部に3条、体部上位に3条の沈線を施す。150は小型の壺。151は頸部に3条の沈線を施し、口縁部内面には、円形の完通しない孔が1箇所ある。152は頸部に2条の沈線を施す。153は短い口縁部で、頸部に2条の沈線を施す。154は短い頸部に2条の沈線を施す。156は口縁端部中央に1条の沈線を、その上下にキザミ目を施す。157は体部中位に貼り付け突帯を1条施す。また、上位には沈線文を施した後、貼り付け突帯を1条施す。突帯上にはキザミ目を施す。158と159は大型の壺で、159は、端面に1条の沈線を施し、頸部には



第43図 NR701出土遺物実測図(1)



第44图 第7面検出遺構平面図

段がある。160は大型の壺で、口径は43.6cmを測る。161は大型の壺で体部上位に2条+ α の沈線を施す。中位に削り出し突帯と沈線を施す。162は体部に2条+ α 、体部と頸部の境に2条、体部上位に2条+ α の沈線を施す。163は頸部に4条の沈線を施し、体部上位に間隔をあけて2条の沈線を施す。164は頸部に4条+ α 、165は10条の沈線を施し、河内Ⅰ-4様式に比定できる。166は体部上位に段があり、段から下に2条の沈線を施す。167は体部上位に2条、168は3条沈線文を施す。169は体部上位に3条、中位に5条+ α の沈線を施す。170は体部上位に2条+ α 、171は3条+ α 、172は3条、173は上位に沈線1条+ α の沈線を施す。174は体部上位に段がある。段の下に2条の沈線を施す。175は体部中位に5条、176は体部上位に3条+ α 、177は3条+ α の沈線を施す。178は上位に貼り付け突帯を1条施し、突帯上はキザミ目を施す。179は上位に貼り付け突帯を2条施し、突帯上はキザミ目を施す。180は体部上位に4条+ α の沈線と、貼り付け突帯を2条施し、突帯上はキザミ目を施す。180は弥生時代前期の河内Ⅰ-4様式に比定できる。181は体部上位に段があり、その下に4条の平行沈線、さらに中位に4条の平行沈線が施されている。また、沈線の間には、X字形を軸にして施す木の葉文がある。木の葉文の左右には、縦方向の平行沈線を施す。182は体部上位に段がある。段より下には2条の沈線を施し、木の葉状の文様と重弧文を施す。183は体部上位に段があり、段より下に2条と、中位に2条の沈線を施す。沈線の間には、山形の平行斜線紋を弧状に施す。184は中位に2条と1条の沈線文と平行斜線文を施す。185～198は壺の底部である。185は底面に沈線を施す。186は底面に靱殻の痕跡がある。

199・200は弥生時代前期の甕用蓋で、199の天井部はくぼむ。

201～219は、弥生時代前期の甕である。201は口縁端部にキザミ目を、体部に4条の沈線を施す。202は体部に4条の沈線を施し、沈線の下に貼り付け突帯を1条施す。203は体部に沈線を3条施す。204は口縁端部にキザミ目を施す。また、体部上位に4条、中位に3条の沈線を施す。205は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線を3条施す。206は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線3条+ α 施す。207は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線を1条+ α 施す。208は体部に沈線を3条施す。沈線は、ヘラの押し付けが弱いため、浅い。209は体部に3条の沈線を施す。210は体部に沈線を3条施す。また、最上位の沈線に重なり平行斜線文を施し、弥生時代前期の河内Ⅰ-2様式に比定できる。211・212は体部に沈線を2条+ α 施す。213は無文で、内外面ハケナデを施す。214は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線を1条+ α 施す。215は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線を6条施す。216は口縁端部にキザミ目を、体部に沈線を1条施す。217は体部に沈線を2条+ α 施す。218は口縁端部にキザミ目、体部に1条の沈線を施す。219は口縁が逆L字に折れ曲がる。

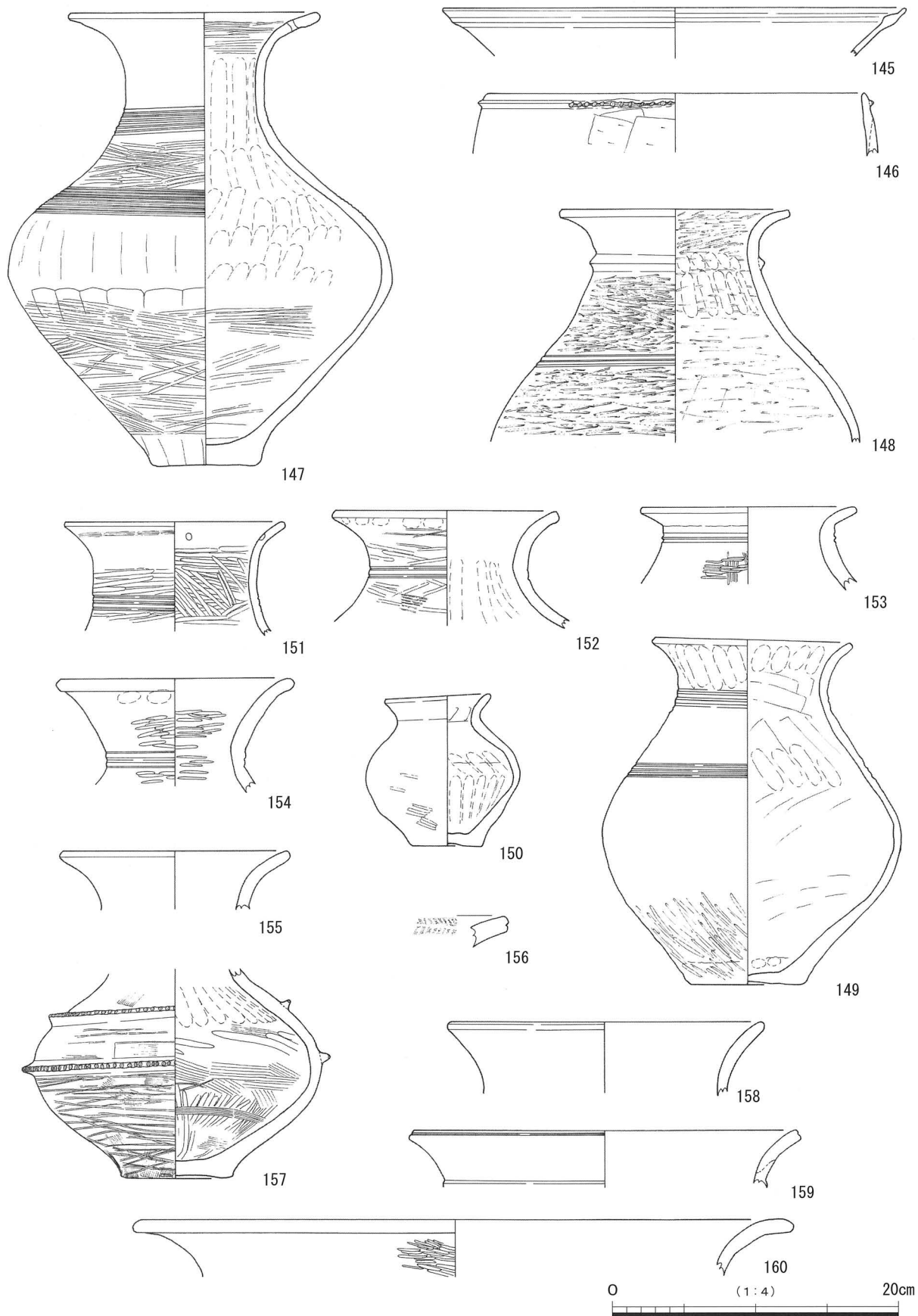
220は弥生時代中期の甕で、体部が張り出す。221～224は甕の底部である。225～227は底部中央に穿孔がある。

228・229は弥生時代前期の鉢で、229は口縁部が内湾する。

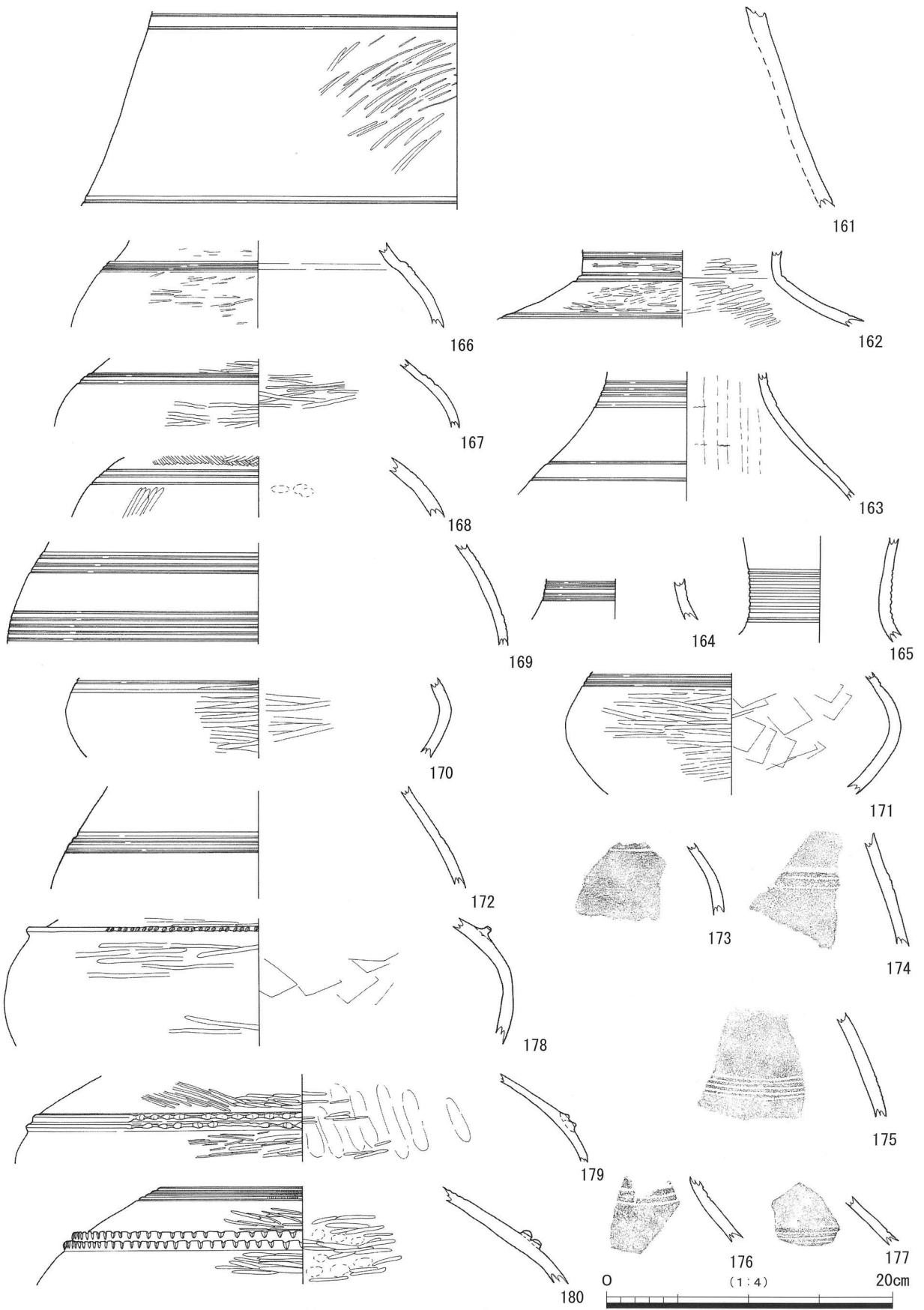
230・231は弥生時代中期の鉢である。230は口縁部外面に簾状文を施し、河内Ⅲ-2様式に比定できる。231は口縁部が下方に折れ曲がり面をもつ。

220・230・231は砂層Ⅰのものが混入したと考えられる。

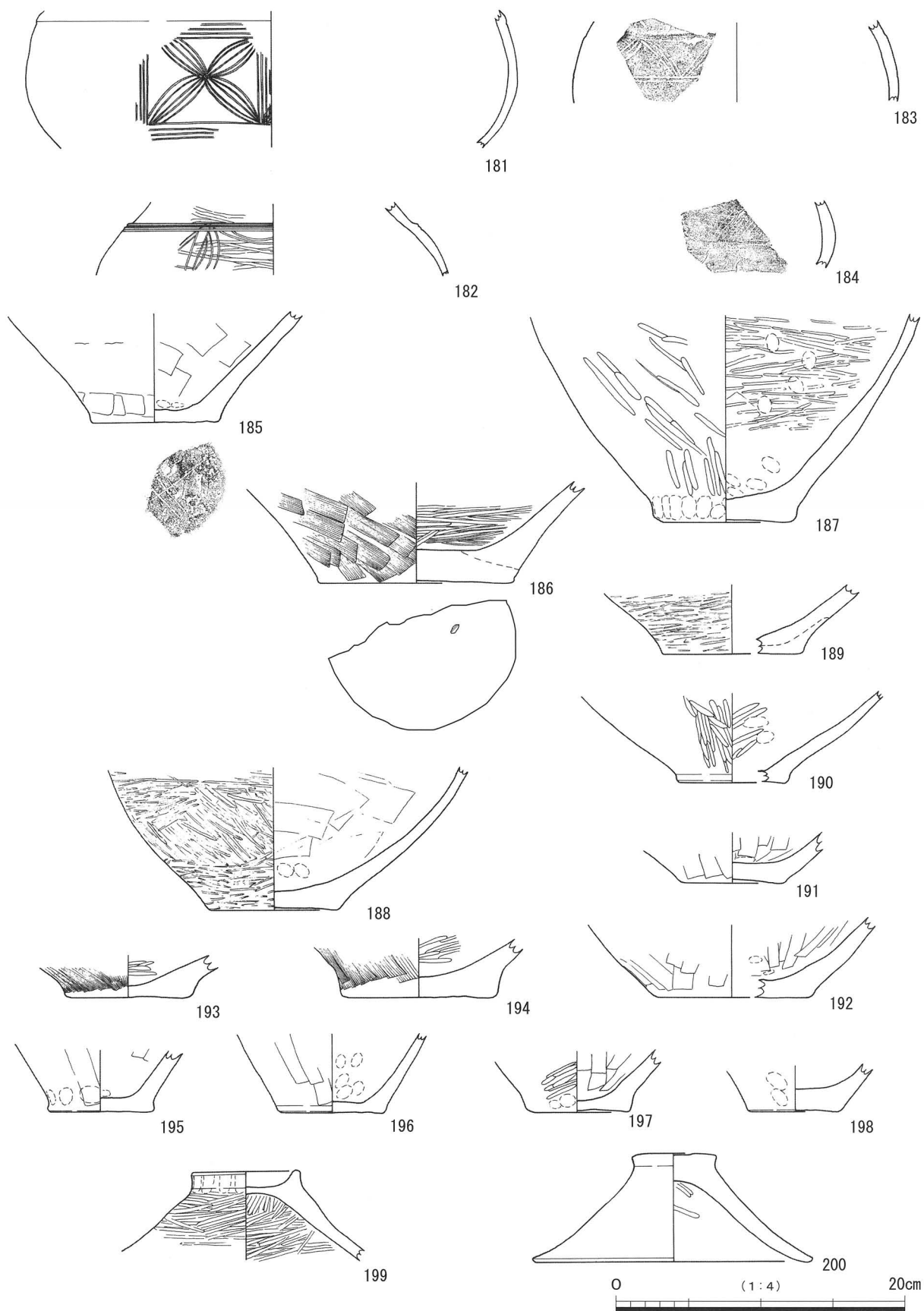
S12～S20はサヌカイト製である。S12は両面とも滑らかに研磨されている。用途不明の石であるが石包丁の破片である可能性が考えられる。S13は削器で、S14～S20は剥片である。(西村)



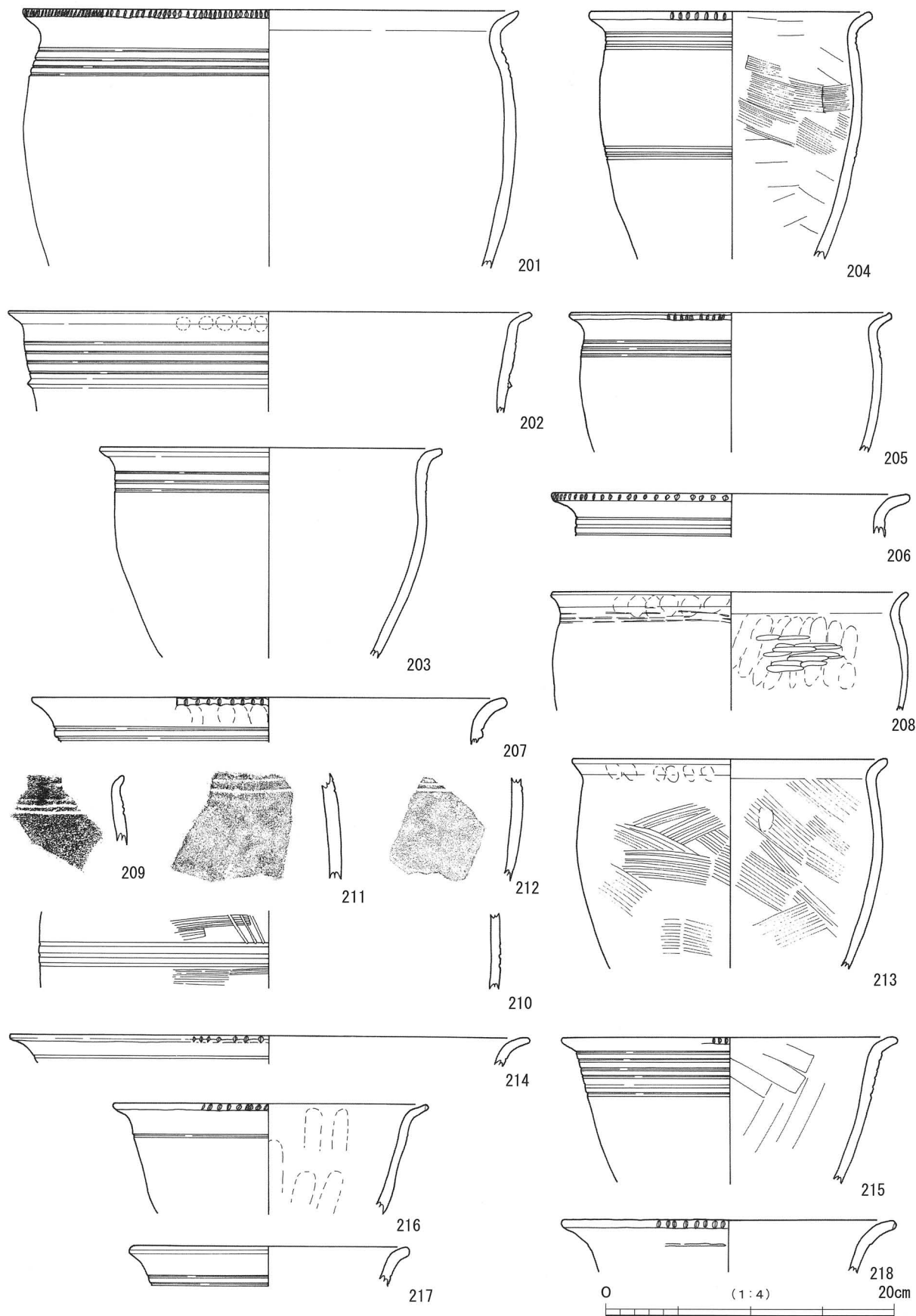
第45図 NR701出土遺物実測図(2)



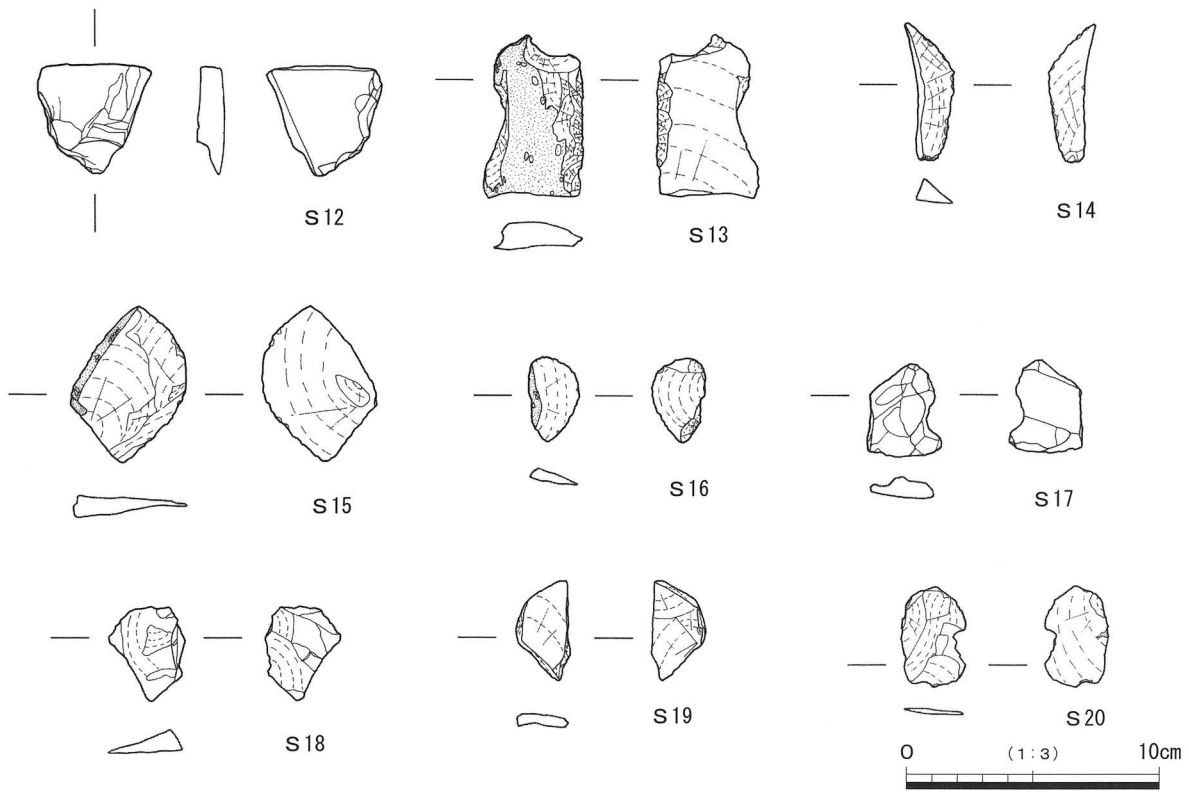
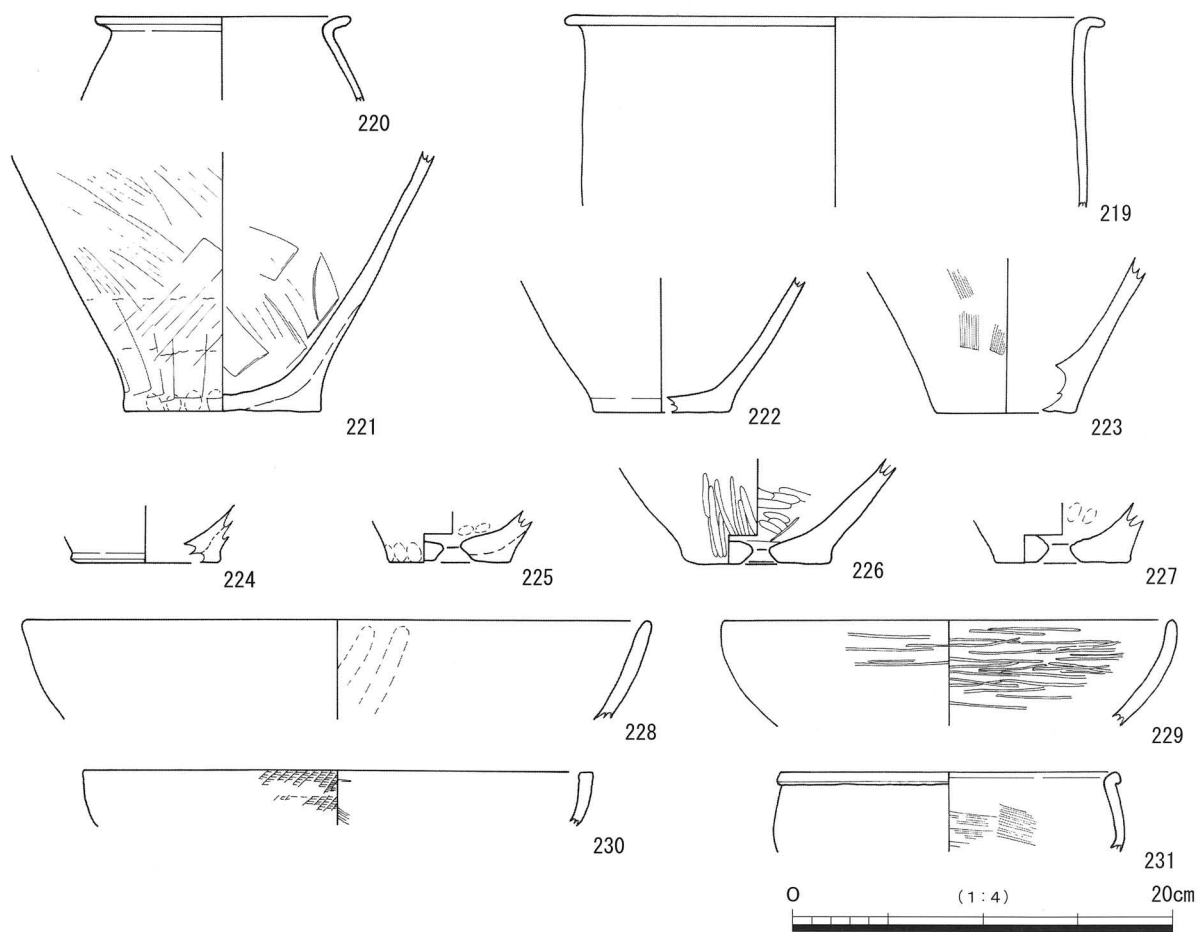
第46図 NR701出土遺物実測図(3)



第47图 NR701出土遺物実測図(4)



第48図 NR701出土遺物実測図(5)



第49図 NR701出土遺物実測図(6)

第38表 NR701出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
145 37	縄文土器 浅鉢 口縁部	口径32.4	やや外反する口縁部。口縁部内面に突帯がある。口縁部内外面はナデを施す。	2.5Y5/1 黄灰色	3mm以下の砂粒を含む	良好	
146 37	縄文土器 深鉢 口縁部	口径26.2	口縁は内湾し丸く終わる。端部より少し下がった位置に貼り付け突帯を1条施す。突帯上には刻目を施す。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリを施す。	7.5YR3/1 黒褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
147 37	弥生土器 広口壺 完形	口径17.1 器高31.7 底径7.6	突出する平底。体部は偏平である。直立し立ち上がる頸部から口縁部は外反し、端部は丸く終わる。口縁部には穿孔がある。頸部に6条、体部上位に9条の沈線を施す。口縁部内面はヘラミガキ、外面はナデを施す。頸部内面はユビナデ、外面はナデを施す。体部内面上位はユビナデ、下位はヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。底部内外面はナデを施す。	5YR4/6 赤褐色～ 5YR3/4 暗赤 褐色	4mm程度の砂粒を含む	良好	
148 37	弥生土器 広口壺 口縁～体 部中位	口径15.7	内傾する頸部からゆるやかに外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。頸部に貼り付け突帯を1条施す。体部上位に3条の沈線を施す。口縁部内面はヘラミガキ、外面はナデを施す。頸部から体部外面は横方向のヘラミガキ、内面はユビナデのちヘラミガキを施す。	5Y5/2 灰オリーブ 色	1mm程度の砂粒を含む	良好	
149 37	弥生土器 広口壺 完形	口径14.0 器高24.0 底径8.0	底部は平底。体部は張り出す。口縁部は外反する。端部は丸く終わる。頸部外面に3条と体部上位外面に3条の沈線を施す。口縁部内外面はユビナデのちヨコナデを施す。体部内面はヘラナデとユビナデ、外面はヘラミガキを施す。一部黒斑あり。底部内面はユビオサエのちナデを施し、粘土接合痕がある。外面はヘラミガキを施し、粘土接合痕がある。	2.5Y8/1 灰白色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
150 37	弥生土器 小型壺 完形	口径7.5 器高10.5 底径4.9	上げ底の底部。体部中位に最大径がある。外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はナデを施す。体部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面はヘラミガキのちナデを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	2mm程度の砂粒を含む	良好	
151 37	弥生土器 広口壺 口縁部	口径15.4	やや外側へひらく頸部。口縁部は外反する。頸部に3条の沈線を施す。口縁部内面に1ヶ所完通しない孔あり。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケナデのちヨコナデを施す。頸部内外面はヘラミガキを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	1.5mmの砂粒を含む	良好	
152 38	弥生土器 広口壺 口縁部	口径15.9	頸部からゆるく外反する口縁部。頸部に2条の沈線を施す。口縁部内外面はナデを施す。頸部内面ユビナデのちナデ、外面ハケナデのちヘラミガキを施す。	7.5YR4/4 褐色	1～6mmの砂粒を含む	良好	
153 38	弥生土器 広口壺 口縁部	口径14.4	やや内傾し立ち上がる頸部。外上方へ外反する口縁部。頸部外面に沈線を2条施す。口縁部内外面はヨコナデを施し、外面に粘土接合痕がある。体部内面はナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
154 38	弥生土器 広口壺 口縁部	口径16.6	外反する口縁部。端部は丸く終わる。短い頸部に3条の沈線を施す。口縁部内面はヨコナデ。外面はユビナデのちヨコナデを施す。頸部内外面はヘラミガキを施す。	7.5YR6/6 橙色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
155	弥生土器 広口壺 口縁部	口径16.1	外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はナデを施す。外面の一部に黒斑がある。	2.5Y5/3 黄褐色	2mm程度の砂粒を含む	良好	
156 38	弥生土器 広口壺 口縁部		外反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。端部中央に1条の沈線を施しその上下にキザミ目を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR5/6 黄褐色	1～4mmの砂粒を含む	良好	
157 38	弥生土器 壺 体部～底 部	底径7.8	突出するあげ底の底部。横に張り出す偏平な体部。体部中位に貼り付け突帯を1条施す。上位に沈線文を施した後貼り付け突帯を1条施す。突帯上にはキザミ目を施す。体部内面下位はヘラミガキのちハケナデ、中位は板ナデとハケナデ。上位はユビナデのちナデを施す。外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	10YR2/2 にぶい黄橙色	3mm程度の砂粒を含む	良好	
158	弥生土器 広口壺 口縁部	口径22.2	外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はナデを施す。	10YR7/2 にぶい黄褐色	2mm程度の砂粒を含む	良好	
159 38	弥生土器 広口壺 口縁部	口径27.4	外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。端面に1条の沈線を施す。頸部に段がある。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	0.5～3mmの砂粒を含む	良好	
160	弥生土器 広口壺 口縁部	口径43.6	外方へ外反して伸びる口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内面はヨコナデ、外面はヘラミガキを施す。	10YR4/4褐色	1～6mmの砂粒を含む	良好	
161 38	弥生土器 壺 頸部		頸部上位に沈線2条+α施す。頸部と体部の境に削り出し突帯と沈線を施す。内面表部が剥離しており全体的に不明であるが、上位は本来の面が残っており、この部分はナデである。外面はヘラミガキを施す。	5Y5/4 オリーブ色	1～7mmの砂粒を含む	良好	
162	弥生土器 壺 体部上位 ～頸部		体部中位が張る。直立からやや外側へひらきぎみに立ち上がる頸部。頸部に2条+α、頸部と体部の境に2条、体部上位に2条+αの沈線を施す。頸部および体部内外面はヘラミガキを施す。	10YR6/6 明黄褐色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
163	弥生土器 壺 体部上位 ～頸部		壺の体部上位から頸部である。頸部に沈線を4条施し、体部上位に間隔をあけて2条の沈線を施す。頸部から体部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面はナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰褐色	1.5mm程度の砂粒を含む	良好	
164	弥生土器 壺 頸部		やや内側から直立きみに上がる頸部。頸部外面に4条+αの沈線を施す。頸部内外面はナデを施す。	2.5Y7/1 灰白色	1.5mm程度の砂粒を含む	良好	

第39表 NR701出土遺物観察表(3)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
165	弥生土器 壺 頸部		直立ぎみに外方へ伸びる頸部。頸部外面に10条の沈線を施す。頸部内外面はナデを施す。	2.5Y8/3 淡黄色	1～5mmの 砂粒を含む	良好	
166 38	弥生土器 壺 体部		体部上位に段があり、段から下に2条の沈線を施す。体部内外面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR7/2 明褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
167	弥生土器 壺 体部		体部外面に沈線文2条施す。沈線の上位は段状を呈す。体部内外面はヘラミガキを施す。	2.5Y4/1 黄灰色	1.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
168 38	弥生土器 壺 体部		やや丸みのある肩のはる体部。外面上位に沈線文を3条施す。体部内外面はユビナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y7/1 灰白色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
169 38	弥生土器 壺 体部		球形の体部。上位に3条と中位に5条+ α の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	5Y5/2 灰オリーブ色	3mm程度 の砂粒を含む	良好	
170	弥生土器 壺 体部		体部中位から上位に沈線を2条+ α 施す。体部内外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	1.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
171	弥生土器 壺 体部		偏平な球形の体部。体部外面に3条+ α 沈線を施す。体部内外面はヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	1.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
172	弥生土器 壺 体部		肩のはらない体部。体部外面に3条の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	4mm程度 の砂粒を含む	良好	
173	弥生土器 壺 体部		偏平な球形の体部。体部外面上位に沈線を1条+ α 施す。体部内外面はナデを施す。	2.5Y5/4 黄褐色	0.5～2mm 程度の砂粒 を含む	良好	
174	弥生土器 壺 体部		体部上位外面に段がある。段の下に2条の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	5YR5/4 にぶい赤褐色	0.5～2mm の砂粒を含む	良好	
175	弥生土器 壺 体部		体部中位に5条の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	2.5Y6/4 にぶい黄色	0.5～3mm の砂粒を含む	良好	
176	弥生土器 壺 体部		体部外面に3条の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	1.5mm程度 の砂粒を含む		
177	弥生土器 壺 体部		体部外面に3条+ α の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	0.5mm程度 の砂粒を含む		
178 39	弥生土器 壺 体部		偏平な球形の体部と思われる。体部外面上位に貼り付け突帯を1条施す。突帯上にはキザミ目を施す。体部内外面はヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y7/1 灰白色	2mm程度 の砂粒を含む	良好	
179 39	弥生土器 壺 体部		偏平な球形の体部。体部外面上位に貼り付け突帯を2条施す。突帯上にはキザミ目を施す。体部内外面はユビナデのちヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。	5Y5/2 灰オリーブ色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
180 39	弥生土器 壺 体部		内傾する体部上位に沈線を4条+ α と貼り付け突帯を2条施す。突帯上にはキザミ目を施す。体部内外面はヘラミガキとユビナデ、外面はヘラミガキを施す。沈線文の部分は縦方向のハケナデを施す。	2.5Y8/2 灰白色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
181	弥生土器 壺 体部		体部上位に段がありその下に4条の平行沈線、体部にも4条の平行沈線が施されている。沈線の間に木の葉文を施す。木の葉状文はX字形を軸にして施している。木の葉文の左右には縦方向の平行沈線を施す。体部内外面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5YR7/4 にぶい橙色	3mm程度 の砂粒を含む	良好	
182 39	弥生土器 壺 体部		偏平な球形の体部になるとと思われる。体部外面に段がある。段の下位には2条の沈線を施し、木の葉状の文様と重弧文を施す。体部内外面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	1.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
183 39	弥生土器 壺 体部		体部外面に段がある。この段より下に2条沈線を施す。中位にも沈線を2条施す。沈線間には山形の平行斜線紋を弧状に施す。体部内外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	1mm程度 の砂粒を含む	良好	
184 39	弥生土器 壺 体部		偏平な体部になるとと思われる。体部外面に2条と1条の沈線文を施しこの沈線文間に平行斜線文を施す。体部内外面はナデ、外面はヘラミガキを施す。	5Y4/1 灰褐色	3mm程度 の砂粒を含む	良好	
185 39	弥生土器 壺 底部	底径9.0	突出する平底。底面にヘラによる記号と思われる沈線を施す。底部内外面はユビナデのちヘラナデ、外面ヘラナデとナデを施し、粘土接合痕と黒斑がある。	2.5Y6/1 黄灰色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
186 39	弥生土器 壺 底部	底径13.6	ややあげ底状の底部。底部内外面はヘラミガキを施す。底面はヘラナデ、外面はハケナデを施す。底面に粉殻の痕跡がある。	10YR6/2 灰黄褐色	3mm程度 の砂粒を含む	良好	

第40表 NR701出土遺物観察表(4)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
187	弥生土器 壺 底部	底径9.8	突出する上げ底の底部。体部内面はユビナデのち横方向のヘラミガキを施す。外面はヘラミガキのちナデを施す。底部内面はナデ、底面はユビナデのちナデを施す。外面はユビナデのちナデを施す。	10YR3/4 暗褐色	0.5～2mm の砂粒を含む	良好	
188	弥生土器 壺 底部	底径8.8	突出する平底。体部内面はユビナデのちヘラナデ、外面はヘラミガキを施す。一部に黒斑がある。	10YR4/6 褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
189	弥生土器 壺 底部	底径9.5	突出する平底。体部内面はナデ、外面は横方向のヘラミガキを施す。	2.5YR6/4 にぶい橙色	0.5～2mm の砂粒を含む	良好	
190	弥生土器 壺 底部	底径7.4	突出する平底。底面は上げ底である。体部内面はヘラミガキを施し、指頭圧痕がある。外面はヘラミガキを施す。	7.5YR5/4 にぶい褐色	1～7mmの 砂粒を含む	良好	
191	弥生土器 壺 底部	底径7.0	少しだけ突出する平底。底面は上げ底である。底部内外面は板ナデを施す。内面には指頭圧痕がある。	2.5Y7/1 灰白色	1～6mmの 砂粒を含む	良好	
192	弥生土器 壺 底部	底径10.2	突出ぎみの平底。底部内外面は板ナデを施す。内面には指頭圧痕がある。	7.5YR5/2 灰褐色	1～7mmの 砂粒を含む	良好	
193	弥生土器 壺 底部	底径8.0	突出する平底。底面はやや上げ底である。底部内面はヘラミガキ、外面ハケナデを施す。内外面には黒斑がある。	10YR6/3 にぶい黄褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
194	弥生土器 壺 底部	底径9.6	突出する平底。底部内面はヘラミガキ、外面はハケナデを施す。内外面一部には黒斑がある。	10YR6/2 灰黄褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
195	弥生土器 壺 底部	底径7.0	突出する平底。底部内外面はユビナデのち板ナデを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
196	弥生土器 壺 底部	底径7.0	やや突出する平底。底部内面はユビナデ、外面は板ナデを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
197	弥生土器 壺 底部	底径6.8	突出する平底。底面は上げ底である。底部内面は板ナデを施し、内面に全体には煤が附着している。外面はユビナデのちヘラミガキを施す。	7.5YR4/4 褐色	1～6mmの 砂粒を含む	良好	
198	弥生土器 壺 底部	底径6.1	やや突出する平底。底部内面はナデ、外面はユビナデを施す。	5YR5/3 にぶい赤褐色	1～5mmの 砂粒を含む	良好	
199 40	弥生土器 甕用蓋 天井部	天井部径 7.5	天井部はくぼむ。端部は丸く終わる。体部内外面はヘラミガキを施す。天井部内面はナデ、外面ユビナデのちナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	3mm程度の 砂粒を含む	良好	
200	弥生土器 甕用蓋 天井部	口径19.3 器高7.6	中央がややくぼむ天井部。「ハ」の字にひらく裾部。端部は丸みのある面をもつ。天井部および裾部内面はヘラミガキのちナデを施す。天井部および裾部外面はナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	4mm程度の 砂粒を含む	良好	
201 40	弥生土器 甕 口縁～体 部中位	口径34.3	倒鐘形の体部。外反する口縁部。端部は丸く終わる。端部に刻目を施す。体部に4条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はナデを施す。一部に黒斑がある。	5Y5/4 オリープ色	0.5～1mm 程度の砂粒 を含む	良好	
202 40	弥生土器 甕 口縁部	口径36.4	外反する口縁部。体部外面に4条沈線を施し、沈線の下に貼り付け突帯を1条施す。口縁部および頸部内面はナデ、外面はユビナデを施す。	2.5Y6/2 灰黄色	3mm程度の 砂粒を含む	良好	
203	弥生土器 甕 口縁～体 部中位	口径23.7	倒鐘形の体部。外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。体部外面に3条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	2.5mm程度 の砂粒を含 む	良好	
204 40	弥生土器 甕 口縁～体 部下位	口径19.6	外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁端部にキザミ目を施す。体部上位外面に4条、体部中位外面3条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	10YR4/2 灰黄褐色	2.5mm程度 の砂粒を含 む	良好	
205	弥生土器 甕 口縁～体 部	口径22.3	倒鐘形の体部。外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。口縁端部にキザミ目を、体部外面に3条の沈線を施す。口縁部および体部内外面はナデを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	2mm程度の 砂粒を含む	良好	
206	弥生土器 甕 口縁部	口径24.8	直立ぎみに伸びる体部。外反する口縁部。口縁端部にキザミ目を施す。体部外面は上位に沈線3条+α施す。口縁部内外面はナデを施す。	5YR6/6橙色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
207	弥生土器 甕 口縁部	口径32.8	外反する口縁部。端部は丸く終わる。端部にキザミ目を施す。体部に1条+αの沈線を施す。口縁部内面はヨコナデ、外面はユビナデのちヨコナデを施す。	2.5Y6/6 明黄褐色	0.5～2mm の砂粒を含 む	良好	

第41表 NR701出土遺物観察表(5)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
208	弥生土器 甕 口縁～体 部上位	口径24.7	やや丸味のある倒鐘形の体部。外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。体部に3条の沈線を施す。沈線は、ヘラの押し付けが弱いため、浅い。口縁部内外面はユビナデを施す。体部内面は横方向のヘラミガキとユビナデを施す。外面はナデを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	1～2mm程 度の砂粒を 含む	良好	
209	弥生土器 甕 口縁部		内傾ぎみに直立する体部。口縁部は外反し端部は尖りぎみに丸く終わる。体部外面に3条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はナデを施す。	2.5YR5/6 明赤褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
210	弥生土器 甕 体部		やや内傾ぎみに直立する体部。体部外面に3条の沈線を施す。最上位の沈線に重なるように平行斜線文を施す。体部内面はナデ、外面はハケナデを施す。	N4/0灰色	1～6mmの 砂粒を含む	良好	
211	弥生土器 甕 体部		直立ぎみから内側に傾き伸びる体部。体部外面に2条+ α の沈線を施す。体部内外面はナデを施す。	7.5YR6/4 にぶい橙色	2.5mm程度 の砂粒を含 む	良好	
212	弥生土器 甕 体部		頸部に2条+ α の沈線文を施す。体部内外面はナデを施す。体部外面には煤が付着している。	10YR4/2 灰黄褐色	0.5～1mm の砂粒を含 む	良好	
213	弥生土器 甕 口縁～体 部中位	口径21.8	倒鐘形の体部。外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内面はヨコナデ、外面はユビナデを施す。体部内面はハケナデのちユビナデ、外面はハケナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
214	弥生土器 甕 口縁部	口径36.4	外反する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。端部にキザミ目を施す。体部に1条+ α の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	7.5YR6/4 にぶい橙色	0.5～1mm の砂粒を含 む	良好	
215 40	弥生土器 甕 口縁～体 部中位	口径23.3	外反する口縁部。端部は丸く終わる。端部にキザミ目を施す。体部に6条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラナデ、外面はナデを施す。外面には煤が付着している。	10YR5/2 灰黄褐色	2mm程度 の砂粒を含 む	良好	
216 40	弥生土器 甕 口縁部	口径22.0	外反する口縁部。端部は丸く終わる。端部にキザミ目を施す。体部に1条の沈線を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外面はナデを施す。外面には煤が付着している。	10YR5/2 灰黄褐色	1.5mm程度 の砂粒を含 む	良好	
217	弥生土器 甕 口縁部	口径19.6	外反する口縁部。端部は丸く終わる。体部に沈線を2条+ α 施す。口縁部内外面はナデを施す。	7.5YR4/3 褐色	1mm程度 の砂粒を含 む	良好	
218	弥生土器 甕 口縁部	口径23.3	口縁部はゆるやかに外反する。端部は丸みのある面をもつ。体部に沈線を施す。口縁部および体部内外面はナデを施す。	10YR6/1 褐灰色	1mm程度 の砂粒を含 む	良好	
219	弥生土器 甕 口縁～体 部	口径28.3	直立からやや外側にかたむき伸びる体部。口縁部は逆L字にゆるやかに曲がる。端部は丸く終わる。口縁部および体部内外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	3.5mm程度 の砂粒を含 む	良好	
220	弥生土器 甕 口縁～体 部	口径19.7	外反する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部および体部内外面ナデ。	7.5YR4/2 灰褐色	2mm程度 の砂粒を含 む	良好	
221	弥生土器 甕 底部	底径10.2	突出する平底。体部内外面はヘラナデを施す。底部外面はユビナデを施す。	5Y5/3 灰オリーブ色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
222	弥生土器 甕 底部	底径7.0	突出する平底の底部。体部および底部内外面はナデを施す。	10YR4/4褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
223	弥生土器 甕 底部	底径7.4	上げ底の底部。体部内面ナデ。底部外面はハケナデを施す。	10YR6/4 にぶい黄褐色	1mm程度 の砂粒を含 む	良好	
224	弥生土器 甕 底部	底径7.2	突出する平底。底部内外面はナデを施す。内面には煤が付着している。外面には黒斑がある。	10YR5/2 灰黄褐色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
225	弥生土器 甕 底部	底径6.3	突出する平底の底部。底面に1個の穿孔がある。底部内外面はユビナデのちナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	1～6mmの 砂粒を含む	良好	
226	弥生土器 甕 底部	底径6.4	突出する平底。底面に1個の穿孔がある。底部内外面はヘラミガキを施す。内面にはヘラ状の工具痕がある。	10YR5/2 灰黄褐色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	

第42表 NR701出土遺物観察表(6)

遺物番号 図版番号	器種	量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
227	弥生土器 甕 底部	底径7.0	やや突出する平底。中央に1個の穿孔がある。。底部内面はユビナデのちナデ、外面はナデを施す。	2.5Y6/4 にぶい黄色	0.5～2mm の砂粒を含む	良好	
228	弥生土器 鉢 口縁部	口径33.2	やや内湾ぎみに立ち上がる口縁部。端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外面はナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1mm程度 の砂粒を含む	良好	
229	弥生土器 鉢 口縁部	口径23.2	内湾する口縁部。端部はやや尖りぎみに丸く終わる。口縁部および体部内外面はヘラミガキを施す。	7.5YR5/3 にぶい褐色	3mm程度 の砂粒を含む	良好	
230	弥生土器 鉢 口縁部	口径26.6	内湾して立ち上がる口縁部。端部は面をもつ。口縁部外面に簾状文を施す。口縁部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	0.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
231	弥生土器 鉢 口縁部	口径18.1	内傾する体部。口縁部は下方へ折れ曲がる。口縁は面をもつ。口縁部内外面はナデを施す。体部内面はハケナデ、外面はナデを施す。	7.5YR7/2 明褐色	2.5mm程度 の砂粒を含む	良好	
S12	石器 用途不明 (石包丁 か?)	長さ4.4 幅4.5 厚み1.1	平面形状は三角形、断面形状長方形。両面とも磨いているようで、なめらかである。材質はサヌカイト。	5B6/1青灰色			
S13	石器 用途不明	長さ6.5 幅4.0 厚み1.1	平面形状長方形、断面形状長方形。材質はサヌカイト。剥片。自然面を残す。	5B3/1 暗青灰色			
S14 40	石器 ナイフ形 石器か?	長さ5.4 幅1.4 厚み1.0	平面形状縦長の三角形、断面形状三角形。材質はサヌカイト。	5B2/1青黒色			
S15 40	石器 剥片	長さ6.1 幅4.5 厚み0.8	平面形状扇形、断面形状三角形。材質はサヌカイト。	5B3/1 暗青灰色			
S16 40	石器 削器	長さ3.3 幅2.1 厚み0.7	平面形状扇形、断面形状三角形。材質はサヌカイト	5B3/1 暗青灰色			
S17	石器 剥片	長さ3.7 幅2.9 厚み0.8	平面形状五角形、断面形状台形。材質はサヌカイト。	5B4/1 暗青灰色			
S18	石器 剥片	長さ3.7 幅3.0 厚み0.8	平面形状不定形、断面形状三角形。材質はサヌカイト。	5B4/1 暗青灰色			
S19	石器 剥片	長さ4.0 幅2.2 厚み0.6	平面形状台形、断面形状長方形。材質はサヌカイト。	5B3/1 暗青灰色			
S20	石器 剥片	長さ4.0 幅2.5 厚み0.5	平面形状不定形、断面形状菱形。材質はサヌカイト。	5B3/1 暗青灰色			

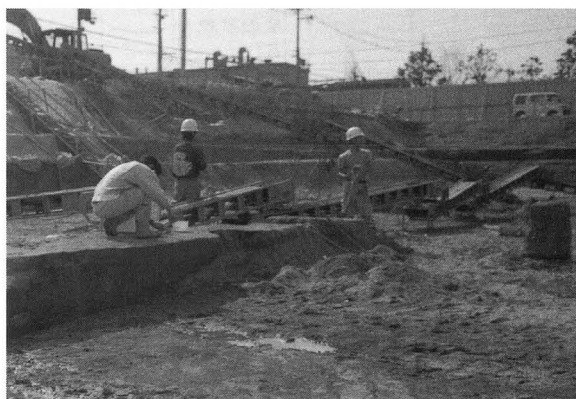


写真23 NR701掘削状況(北東から)

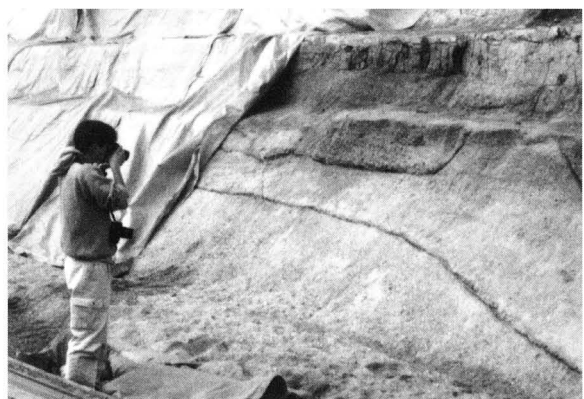


写真24 NR701断面撮影状況(南東から)

遺構に伴わない出土遺物

第V層

第V層からは13世紀～14世紀頃の遺物が少量出土した。このうち図化し掲載したものは232～240、S21である。

232・233は瓦器椀で、233は断面三角形の高台が付く。13世紀のものと思われる。234は瓦器小皿、235・236は土師器羽釜、237～240は土師器皿である。S21は用途不明の石製品である。

第VI層

第VI層からは平安時代後期～鎌倉時代頃の土器が少量出土した。このうち図化し掲載したものは241・242である。

241は瓦器の椀で、12世紀後半頃に、242は瓦質の羽釜で、12世紀後半～13世紀代に比定できる。

第VII層

第VII層からは古墳時代中期～平安時代後期頃の遺物が少量出土した。そのうち図化し記載したものは243～248である。

243は瓦器椀で、12世紀後半の大和型に比定される。244は須恵器壺、245・246は須恵器杯蓋である。244～246はTK47型式で、5世紀末頃に比定される。247は須恵器杯蓋、248は須恵器杯身。247・248はTK43型式で、6世紀後半に比定される。

第VIII層

第VIII層からは古墳時代中期～弥生時代後期の遺物が少量出土した。そのうち図化し記載したものは249～253である。

249は土師器の甕で、5世紀後半頃に比定される。250～253は弥生時代後期の壺。250は端面に凹線と円形浮文を施す。252は河内VI-1様式頃に比定できる。253は長頸壺である。

第43表 第V層出土遺物観察表(1)

遺物番号 図版番号	器種 部位	法量 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
232	瓦器 椀 口縁部	口径11.8	外上方へ直線的に伸びる。端部は丸く終る。口縁部内外面はヨコナデを施す。	N8/0灰白色	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	
233	瓦器 椀 高台部	高台径4.8 高台高0.4	高台の断面は三角形を呈す。内外面はヨコナデを施す。	2.5Y8/1灰白色	0.5mm程度の砂粒を少量含む	良好	
234	瓦器 小皿 口縁部	口径9.6	内湾しながら外上方へ伸びる口縁部。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内外面はヘラミガキを施す。	N2/0暗灰色	0.5mm程度の砂粒を少量含む	良好	
235	土師器 羽釜 口縁部	口径26.4	外上方へ外反し伸びる口縁部。丸みのある面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。	7.5Y6/6橙色	1～3 mm程度の砂粒を含む	良好	
236	土師器 釜 口縁部	口径9.2	外反する口縁部。端部を肥厚させ上端を内側へひきだす。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部には強いヨコナデによる稜がある。	10YR8/3 浅黄橙色	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	
237	土師器 皿 口縁部	口径9.6	外傾する口縁部。口縁部内外面はヨコナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 mm程度の砂粒を少量含む	良好	
238	土師器 皿 口縁部	口径9.2	外上方へ開きぎみに立ちあがる口縁部。端部は丸く終る。口縁部内外面はヨコナデを施す。	2.5Y8/3浅黄色	2 mm程度の砂粒を含む	良好	
239	土師器 皿 口縁部	口径9.1	外上方へのびる口縁部。口縁部内外面はヨコナデを施す。	10YR8/3 浅黄橙色	2 mm程度の砂粒を少量含む	良好	

第44表 第V層出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	器種 部位	法量 (cm)	調整・技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
240	土師器 皿 口縁部	口径8.6	平底の底部から外上方へ伸びる口縁部。口縁部内外面はヨコナデを施す。	7.5YR7/4 にぶい橙色	0.5mm程度 の砂粒を少量含む	良好	
S21	用途不明 石製品	長さ12.4 幅4.4 厚み2.6	断面三角形を呈す。	5B64/1暗青灰色			

第45表 第VI層出土遺物観察表

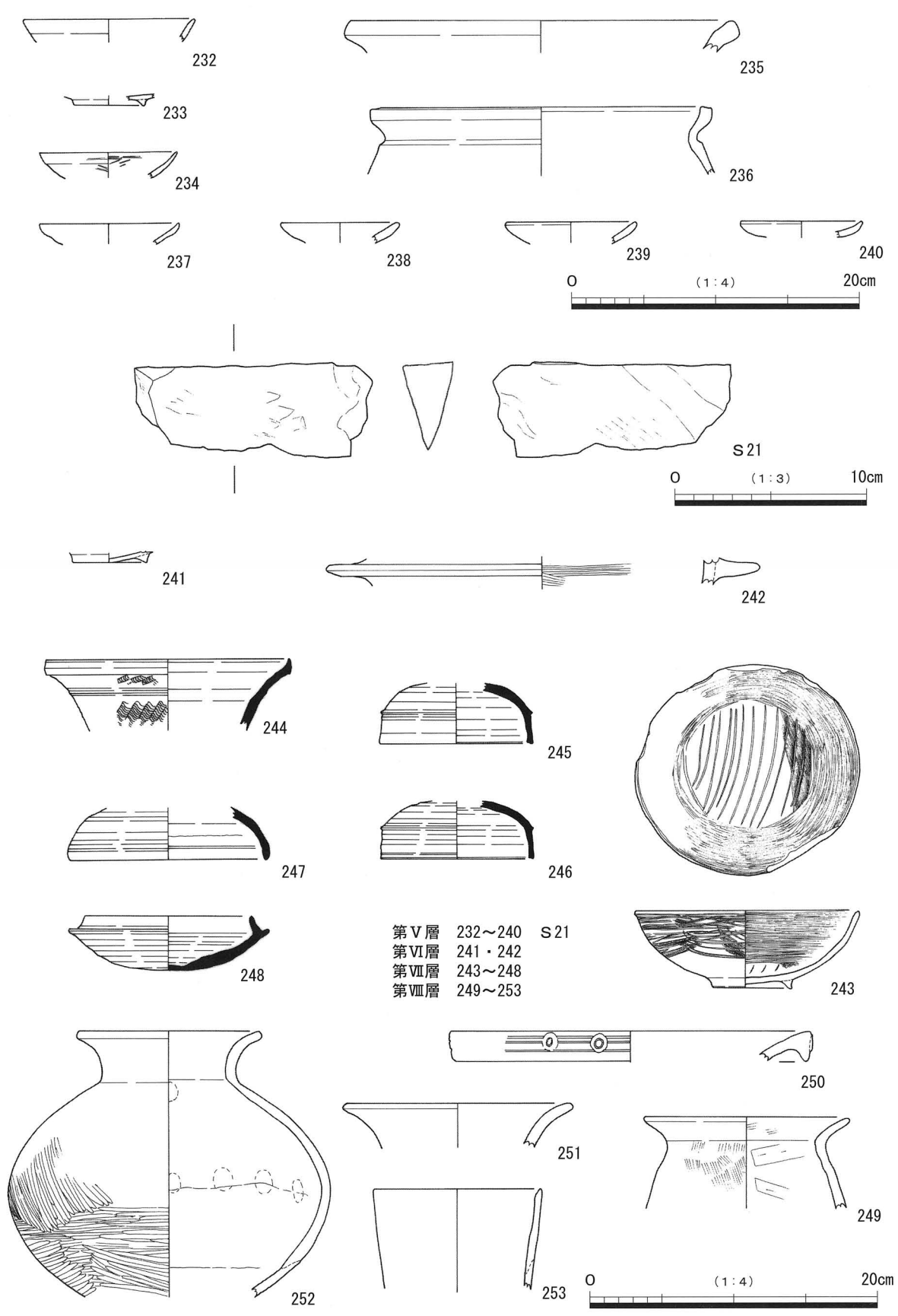
遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整の特徴	色調	胎土	焼成	備考
241	瓦器 椀 高台部	高台径5.1 高台高0.6	高台の断面は三角形を呈す。底部内外面は、ともに磨耗が著しいため不明であるが、ヘラミガキを施すと思われる。	N8/0灰白色	1mm程度の 砂粒を含む	良好	
242	瓦質 羽釜 鏝部	鏝径30.0	水平につく鏝部。体部内面はハケナデを施す。鏝部はヨコナデを施す。		3mm程度の 砂粒を含む	良好	

第46表 第VII層出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整の特徴	色調	胎土	焼成	備考
243 41	瓦器 椀 完形	口径15.5 器高5.4	平底から内湾して伸びる口縁部。口縁部内側に沈線1条を施す。体部内外面ヘラミガキで、外面は5分割で施す。見込みはヘラミガキのち平行線暗文を施す。ミガキの幅は2mm以下で細い。	N5/0灰色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	
244 41	須恵器 壺 口縁部	口径16.8	口縁部は外反し、口縁部は屈曲して短く立ち上がる。頸部外面には凸帯で区切り、波状文を施す。口縁部内外面は回転ナデを施す。	5PB7/1明青灰色	1～4mmの 砂粒を含む	良好	
245 41	須恵器 杯蓋 口縁部	口径10.6	やや丸みを持つ天井部。口縁部は内傾する凹面を持つ。口縁部内外面および体部内面は回転ナデを施す。体部外面上位は回転ヘラケズリを施す。	5PB6/1青灰色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
246 41	須恵器 杯蓋 口縁部	口径10.4	やや丸みを持つ天井部。口縁部は内傾する凹面を持つ。口縁部内外面および体部内面は回転ナデを施す。体部外面上位は回転ヘラケズリを施す。	5PB6/1青灰色	1mm程度の 砂粒を少量含む	良好	
247	須恵器 杯蓋 口縁部	口径13.6	口縁部は丸く終わる。口縁部内外面および体部内面は回転ナデを施す。体部外面上位は回転ヘラケズリを施す。	N8/0灰白色	2mmの砂粒 を含む	良好	
248	須恵器 杯身 口縁部	口径11.6	立ちあがりが短い。受部はやや上向きに外方へ伸びる。口縁部内外面および体部内面は回転ナデを施す。体部外面上位は回転ナデ、下位は回転ヘラケズリを施す。	5B6/1青灰色	1～3mmの 砂粒を含む	良好	

第47表 第VIII層出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
249	土師器 甕 口縁部	口径14.0	体部からゆるやかに屈曲し外上方へ外反する口縁部。口縁部内面はハケナデ、外面はナデを施す。体部内面はヘラケズリ、外面はハケナデを施す。	7.5Y2/1黒色	1～5mmの 砂粒を含む	良好	
250 41	弥生土器 壺 口縁部	口径24.8	外上方に外反する口縁部。端部は下方に肥厚させ面をもつ。口縁部外面に凹線文3条施した後、竹管円形浮文を施す。口縁部内外面ヨコナデを施す。	2.5YR5/8 明赤褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
251	弥生土器 壺 口縁部	口径15.4	外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部内面は板ナデ後ナデ、外面はナデを施す。	10YR6/3 灰黄褐色	1～6mmの 砂粒を含む	良好	
252 41	弥生土器 壺 口縁部	口径12.4	偏球形の体部。ゆるやかに曲線的に外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部外面下位はヘラミガキ、上位はナデを施す。内面はエビナデを施し、粘土合痕がある。	2.5YR5/6 にぶい褐色	1～5mmの 砂粒を含む	良好	
253	弥生土器 壺 口縁部	口径4.5	上外方へ直立してのびる口縁部。端部はとがりぎみに丸く終わる。口縁部内外面はナデを施す。	5YR7/4 にぶい橙色	1～5mmの 砂粒を含む	良好	



第50図 第V層～第VIII層出土遺物実測図

第X I 層

第X I 層からは弥生時代後期前半の土器254~285、中期の土器286が出土した。出土した土器の中には、完形に復元できるものや、完形近くまで復元できるものが多い。

254~269は壺である。254は口縁端部が垂下し、端面に凹線文を施す。255は口縁端部が垂下し、端面には凹線を施した後、竹管押圧円形浮文3個1組を4箇所施し、浮文の間には刻み目を横方向に2段施す。口縁部内外面の一部に赤色顔料を塗布している。256は球形の体部をもつ。外方に立ち上がる頸部から外反する口縁部。内外面ともに粘土接合痕がある。体部が球形化する河内V-2様式に比定できる。257は緩やかに外反する口縁部。端部は下方へ肥厚し平坦面を形成する。河内V-2様式に比定できる。258は口縁に凹線文を1条施す。259・260は長頸壺である。259は頸部外面に二本のへら描きの記号文を施す。河内V-2様式に比定できる。260は頸部外面にへら描き沈線を1条施す。261・262は直立気味に伸びる頸部から外反する口縁部。263は口縁部外面に凹線と半裁竹管文を施す。円形浮文が貼り付けられていたと思われる痕跡を1箇所確認した。264は頸部と体部の境に突帯を1条貼り付け、突帯の下方には爪?の圧痕が残る。265は体部上位に波状文と直線文を施す。266は壺の底部で、内面に粉の痕跡が残る。267・268はわずかに窪む上げ底を呈す。269は底部に沈線を施す。

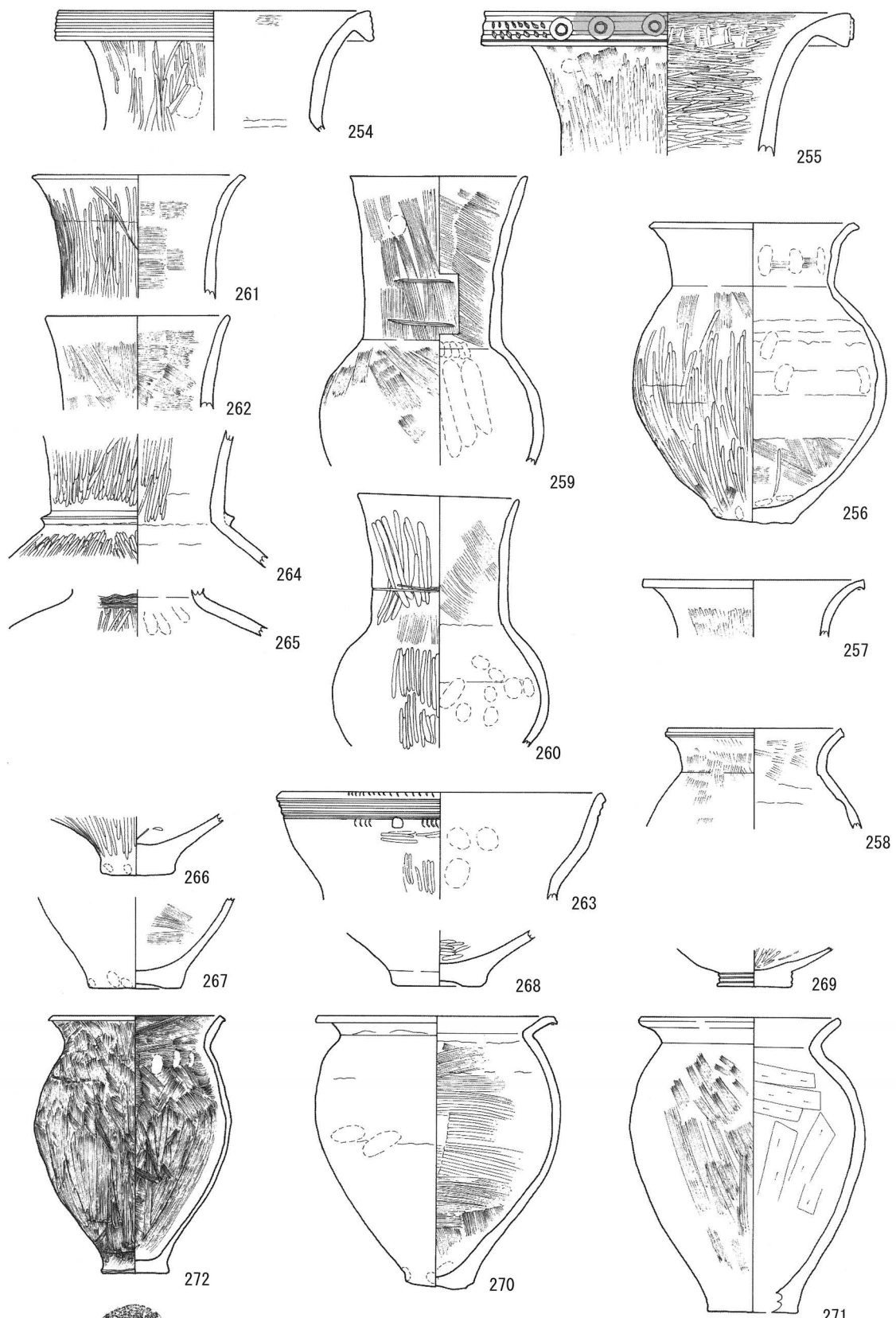
270~280は甕である。271の体部内面はへらケズリを施す。272は内外面ともにハケナデを丁寧施している。底面に木の葉の痕跡がある。273は体部上位が張り出し、口縁部は外反し面をもつ。端面に凹線文を1条施す。体部外面の中位から上位にはタタキの後ハケナデを施し、タタキを消している。タタキの方向は下位と中位以上で異なるが基本的に右上がりである。体部内面はへらケズリである。河内V-2様式頃に比定できる。274は体部外面に右上がりのタタキを施すが、方向は下位と上位で若干異なる。275は体部中位から上位が張り出す。口縁部は外反し端部は面をもつ。外面にタタキのちハケナデを施す。河内V-3様式に比定。276は受口状口縁を呈す。口縁部に外面に櫛描列点文を、体部上位に櫛描直線文を施す近江系の甕と思われる。河内V-3様式に比定できる。277の体部外面には、へらによる記号?が施されている。278~280は突出する底部。280はタタキをハケナデで消している。

281~283は鉢である。281は口縁端面に3条の凹線文を施し、体部外面上位に把手が付く。把手が付く鉢の出土例は高槻市芝生遺跡Aトレンチ土器群にあり、摂津V-2様式(西ノ辻I式併行)と報告されていることから、この鉢もその時期に比定できる。282は受口状口縁で、内外面とも丁寧にハケを施す。「山城のV-3様式には受口状口縁をもつ鉢が急増し、文様を施さないタイプがある。」とされており282も近江から山城地域の特徴を持つものである。283は平底の鉢。

284は外反する口縁をもつ高杯で、平らな杯部をもつものと思われる。

285は器台である。直立する体部からゆるやかに、「ハ」の字形にひろく裾部で、端部は平坦面を形成する。裾部の内面はハケナデとへらケズリを横方向に施す。

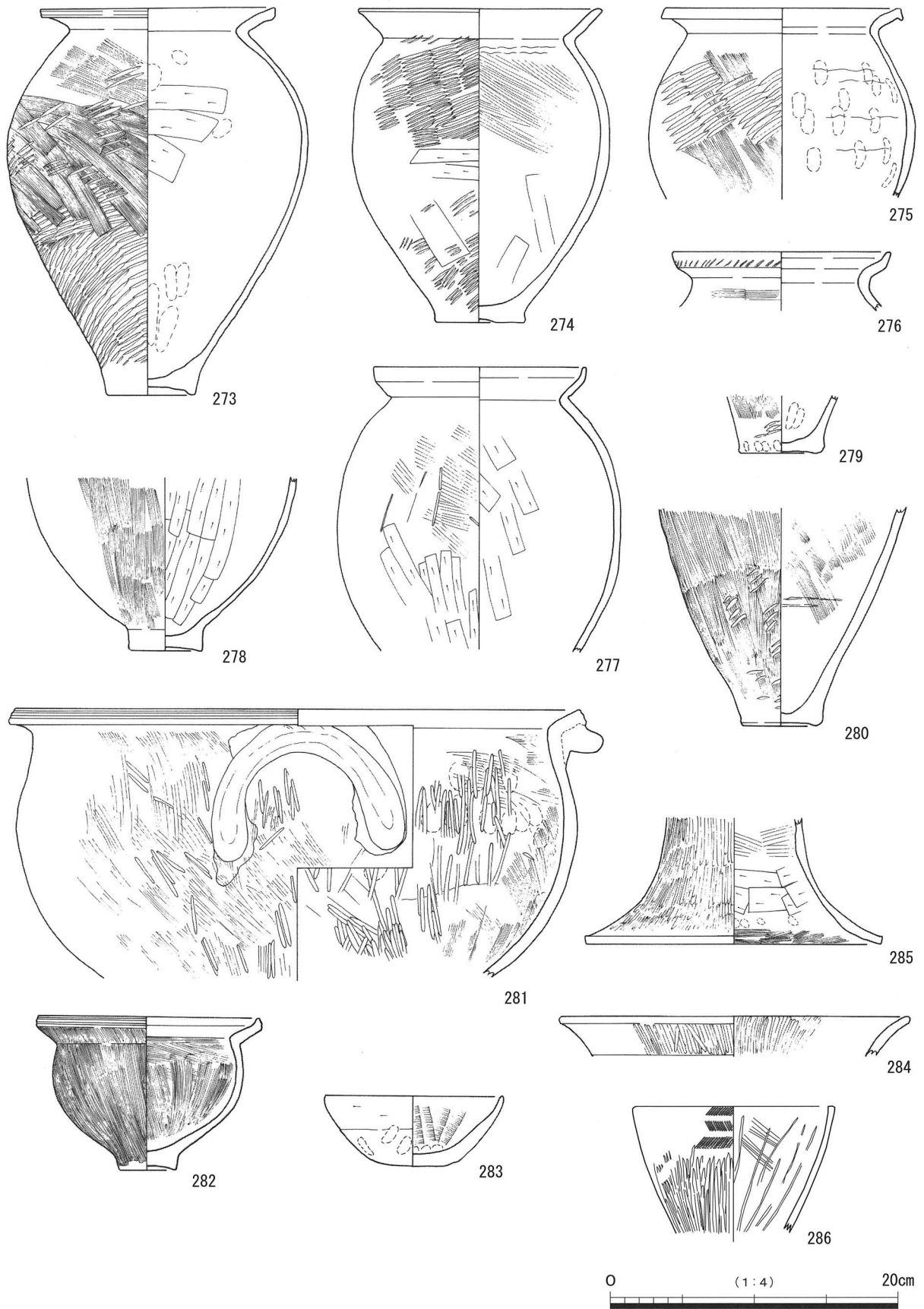
286は弥生時代中期の鉢の口縁と思われる。口縁部外面に列点文を施すが、文様が確認できないほど磨耗している。この土器は取り上げ時点での混入と考えている。



※255のグレートーンは赤色顔料塗布部分

0 (1:4) 20cm

第51図 第Ⅺ層出土遺物実測図(1)



第52図 第X I層出土遺物実測図(2)

第48表 第X I層出土遺物観察表(1)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
254	弥生土器 広口壺 口縁～頸部	口径20.5	直立する頸部から外上方へ伸びる口縁部。端部は下方へ垂下し平坦面を形成する。端面には凹線文4条施す。頸部の断面はていねいに磨かれ、擬口縁を作り出す。器台に転用したと思われる。口縁部内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。頸部内面はナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	5Y4/2 灰オリーブ色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
255	弥生土器 広口壺 口縁～頸部	口径24.2	直立ぎみからやや上外方へのびる頸部から外上方へ外反し下へ肥厚させる。端部は平坦面を形成する。端面には、3条凹線文を施す。また、円形竹管文を押しした円形部浮文3個一組を4ヶ所施す。浮文の間には刺突文を2列施す。口縁部内外面に赤色顔料を塗布している。口縁部内面はハケナデのちヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。頸部内面はヘラミガキ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	2.5YR5/3 黄褐色	5mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	
256 41	弥生土器 広口壺 完形	口径13.2 器高20.0 底径5.0	突出する平底。体部は球形。外方へ伸びる頸部から外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部内面はハケナデのちナデ、外面はヨコナデを施す。体部内面下位はハケナデのちユビナデを施し、ヘラ状工具の痕跡がある。上位はナデを施す。外面はハケナデのち縦方向のヘラミガキを施す。底部外面ユビナデを施す。	2.5Y4/2 暗灰黄色	4mm以下の 砂粒を少量 含む	良好	
257	弥生土器 壺 口縁部	口径14.6	ややゆるやかに外反する口縁部。端部は下方へ肥厚しややとがりぎみに終わる。口縁部内面はヨコナデを施す。外面は縦方向のヘラミガキのちヨコナデを施す。	2.5YR4/4 淡黄色	2mm以下の 砂粒を含む	良好	
258 41	弥生土器 壺 口縁～体部 上位	口径11.4	丸みのある体部から直立ぎみに伸びる頸部。口縁部は外反し端部に面をもつ。口縁端面に凹線文1条施す。口縁部内外面はハケナデのちヨコナデを施す。体部内面はナデを施し、粘土接合痕がある。外面はハケナデを施す。	2.5YR5/2 暗灰黄色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
259 41	弥生土器 長頸壺 口縁～体部 上位	口径11.8	球形の体部。外側へ開きぎみに伸びる頸部から口縁部へ至る。端部は丸く終わる。頸部下位に横方向の2本のヘラによる記号文を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。体部内面はナデ、外面はハケナデを施す。	5YR7/3 にぶい橙色	2mm以下の 砂粒を少量 と3.5mmの 礫を含む	良好	
260 41	弥生土器 長頸壺 口縁～体部 下位	口径10.7	丸みのある体部から直立ぎみに伸びる頸部。口縁部はやや上外方へ外反し、端部は丸く終わる。頸部外面にヘラ描沈線1条施す。一周施した際にずれを生じたと思われる補刻している。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。体部内面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。外面はハケナデとヘラミガキを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	
261	弥生土器 壺 口縁部	口径14.0	直立気味に伸びる頸部。やや外反する口縁部。端部は丸みのある面をもつ。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面はハケナデを施す。外面はヘラミガキを施し、粘土接合痕がある。	10YR5/4 にぶい黄褐色	3～5mmの 砂粒を含む	良好	
262	弥生土器 壺 口縁部	口径12.2	直立気味に伸びる頸部。やや外反する口縁部。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内外面はハケナデを施す。	10YR5/2 灰黄褐色	3mm以下の 砂粒を含む	良好	
263 42	弥生土器 壺 口縁～頸部	口径21.2	内湾する口縁部。端部は面をもつ。口縁部外面3条の凹線文を施す。端面と凹線と半裁竹管文を施す。円形浮文が貼り付けられたと思われる痕跡あり。口縁部内外面はヨコナデを施す。頸部内面ナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5YR5/8 明赤褐色	1.5～3mm の砂粒含む	良好	
264	弥生土器 壺 頸部		体部上位から「く」の字に屈曲し、上外方へ直線的にのびる頸部。体部と頸部の界に突帯を一条貼り付ける。頸部内外面はヘラミガキ。体部内面はナデを施し、粘土接合痕がある。外面はヘラミガキを施す。突帯部分はヨコナデを施し、突帯の下方には爪?の圧痕が残る。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
265	弥生土器 壺 頸部～体部 上位		体部上位から緩やかに曲がり直立ぎみに立ち上がる頸部。体部上位に波状文と直線文を施す。体部内面はナデ、外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	10YR6/2 灰黄褐色	1～3mmの 砂粒を少量 含む	良好	
266 42	弥生土器 壺 底部	底径4.8	突出する平底の底部。底部内面ナデを施し、ヘラ状の工具痕と刳殻の痕跡がある。外面は縦方向のヘラミガキを施す。	5Y4/2 灰オリーブ色	1～2mmの 砂粒を少量 含む	良好	
267	弥生土器 壺 底部	底径6.0	突出する平底。上げ底である。底部内面はハケナデ、外面はユビナデを施す。	10YR6/3 にぶい黄褐色	1～2mmの 砂粒を含む	良好	
268	弥生土器 壺 底部	底径5.5	突出する平底。上げ底である。底部内面はヘラミガキ、外面はナデを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	0.5～1mm の砂粒を微 量に含む	良好	
269	弥生土器 壺 底部	底径4.8	突出する底部。底部外面に3条の沈線文を施す。底部内面はヘラミガキを施し、黒斑がある。外面はナデを施す。	10YR6/3 にぶい黄褐色	6mm以下の 砂粒を含む	良好	

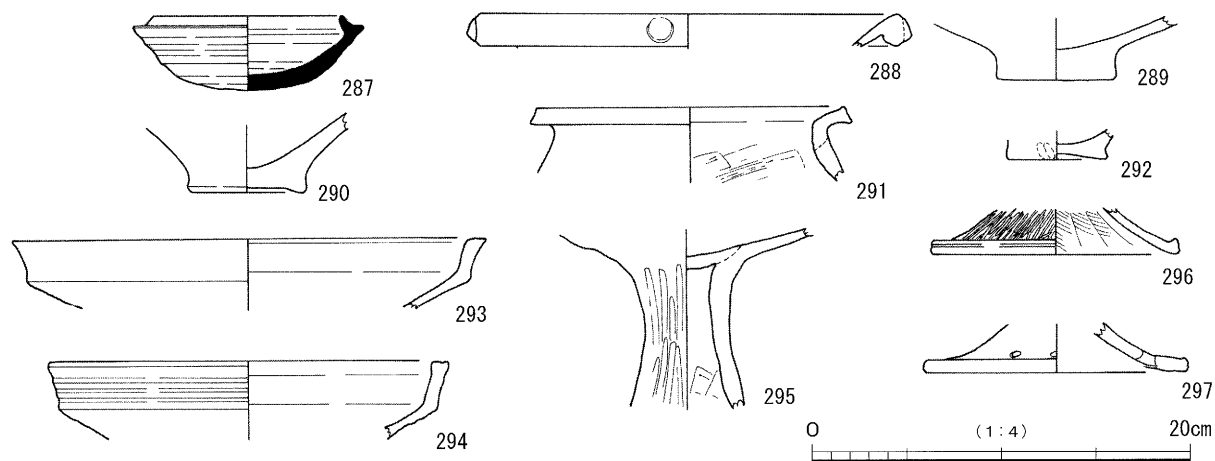
第49表 第X I 層出土遺物観察表(2)

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態	色調	胎土	焼成	備考
270	弥生土器 甕 完形	口径15.6 器高18.1 底径5.5	突出する平底。体部上位に最大径をもつ。外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施し、外面は粘土接合痕がある。体部内面はハケナデを施し、粘土接合痕がある。外面はユビナデを施し、粘土接合痕がある。底部内外面ユビナデを施す。	5YR5/6 明赤褐色	3 mm 以下の 砂粒を微量 に含む	良好	
271	弥生土器 甕	口径13.0 底径6.0	突出する平底。体部上位に最大径をもつ。外反する口縁部で、端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリ、外面ハケナデを施し、黒斑がある。	10YR4/2 灰黄褐色	1 ~ 4 mm の 砂粒を含む	良好	
42	口縁~底部						
272	弥生土器 甕 完形	口径11.0 器高17.1 底径5.0	突出する平底の底部。縦長の体部から屈曲し外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。体部内外面は縦方向のハケナデを施す。底面に木の葉の痕跡がある。	5YR6/8 橙色	1 mm 程度の 砂粒を含む	良好	
42	口縁~底部						
273	弥生土器 甕 完形	口径16.1 器高26.9 底径6.0	突出する平底。底部はあげ底である。体部上位に最大径をもつ。口縁部は外上方に外反する。端部は面をもつ。端面に凹線文を1条施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデとヘラケズリ、外面はタタキのちハケナデを施す。	7.5YR5/4 にぶい橙色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む	良好	
42	口縁~底部						
274	弥生土器 甕	口径16.6 器高21.8	突出する平底。底部はあげ底。体部中位に最大径をもつ。口縁部は外上方へ伸びる。端部は丸くおわる。口縁部内面はヨコナデ、外面はタタキのちヨコナデを施す。体部内面はハケナデを施す。外面は底部から体部中位まで右よりのタタキ、中位付近以下はタタキのちヘラケズリ。中位より上は下位よりゆるやかな右よりのタタキを施す。体部外面にはほぼ全体に煤が付着している。	10YR4/3 にぶい黄褐色	7 mm 以下の 砂粒を含む	良好	
42	口縁~底部						
275	弥生土器 甕	口径16.2	体部は中位から上位にかけてやや張り出す。口縁部は外反し端部は下方へつまみ出す。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外面右よりのやや太いタタキのちハケナデを施す。	5YR5/6 明赤褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む	良好	
42	口縁部						
276	弥生土器 甕	口径15.0	受口状口縁である。口縁外面に櫛描列点文、頸部下位に櫛描直線文を施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。	5YR7/6 橙色	1.5mm以下の 砂粒を含む	良好	
43	口縁部						
277	弥生土器 甕	口径14.8	受口状口縁である。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリのちナデ、外面下位はヘラケズリのちナデ、上位はハケナデを施す。外面にはヘラによる記号?がある。	7.5YR5/3 にぶい褐色	1 ~ 5 mm の 砂粒を含む	良好	
43	口縁~体部 下位						
278	弥生土器 甕 底部	底径5.2	突出する平底。底部はあげ底である。外面はハケナデを施し、中位には煤が付着している。内面はヘラケズリを施し、下位には黒く焦げている痕跡がある。	5YR3/2 暗赤褐色	5 mm 以下の 砂粒を多量 に含む	良好	
279	弥生土器 甕 底部	底径5.8	突出する平底。内面ナデ。指頭圧痕あり。外面はタタキのちハケナデを施す。	7.5YR4/2 灰褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む	良好	
280	弥生土器 甕 底部	底径4.9	突出する平底。底部はあげ底である。体部内面はハケナデを施し、ヘラによる工具痕がある。外面はタタキのちハケナデを施す。	10YR3/2 黒褐色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む	良好	
281	弥生土器 鉢	口径39.0	内湾ぎみの体部から外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。端面には凹線文を3条施す。体部外面上位に把手が付く。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はハケナデのちヘラミガキを施し、粘土接合痕と黒斑がある。外面はハケナデのちヘラミガキを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	1 ~ 6 mm の 砂粒を含む	良好	
43	口縁~体部 下位						
282	弥生土器 鉢 完形	口径15.1 器高10.6 底径3.8	受口状口縁。突出する平底で、底部はあげ底である。外反する口縁部で、端部は上方へつまみあげて丸く終わる。口縁部外面に凹線文を2条施す。口縁部内面はヨコナデ、外面はハケナデを施す。体部内外面ハケナデを施す。体部外面には煤が付着している。	10YR5/2 灰黄褐色	1 ~ 4 mm の 砂粒を含む	良好	
43	口縁~底部						
283	弥生土器 鉢	口径12.2 器高4.9	平らな底から内湾する体部。口縁部は尖りぎみに丸く終わる。体部内面はハケナデとユビナデ、外面ナデを施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。外面にやや強めにヨコナデを行った結果、石の動きが確認できた。ヘラケズリではなく、強いヨコナデで動いたものと思われる。	2.5Y5/2 暗灰黄色	2 mm 以下の 砂粒を含む	良好	
43	口縁~底部						
284	弥生土器 高杯	杯径24.2	外反する口縁部。端部は下方へ肥厚し丸く終わる。口縁部内外面は縦方向のヘラミガキを施す。	7.5YR6/4 にぶい橙色	1 mm 以下の 砂粒を含む	良好	
43	口縁部						
285	弥生土器 器台 裾部	裾径20.4	柱状部は直立し、「ハ」の字ひらく裾部に至る。端部は上方へ肥厚し面をもつ。柱状部内面はハケナデ、外面ヘラミガキを施す。裾部内面はハケナデとヘラケズリを施す。外面はヨコナデを施す。	2.5Y6/2 灰黄色	1.5mm以下の 砂粒を含む	良好	
43	口縁部						
286	弥生土器 鉢	口径13.4	内湾する口縁部。外面に列点文を施す。口縁部内外面はナデを施す。体部内面はハケナデのちヘラミガキ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/3 黄褐色	3 mm 以下の 砂粒を含む	良好	
43	口縁部						

第XIV層

第XIV層は第6面を覆う堆積層で、層内からは弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺物が少量出土した。このうち図化し掲載した遺物は287～297である。

287は須恵器杯身で、TK209型式の6世紀末～7世紀初頭に比定できる。288は壺で、端面に円形浮文を施す。289・290は壺の底部。291は甕で、端面は凹線状にくぼむ。内面にケズリを施す。292は甕の底部。293～297は高杯で、293の口縁端部は平坦面を形成する。294の口縁部外面には3条の凹線文を施し、端面は凹線状にくぼむ。295は杯部から脚部、296・297は裾部である。(西村)



第53図 第XIV層出土遺物実測図

第50表 第XIV層出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	法量 (cm)	形態・調整	色調	胎土	焼成	備考
287 43	須恵器 杯身 口縁部	口径9.8 器高3.9	立ちあがりは短く内傾し端部は丸い。受部は水平方向に外へ伸びる。口縁部内外面および体部内面は回転ナデを施す。体部外面下位は回転ヘラケズリを施す。	5B5/1青灰色	1～4mmの砂粒を含む	良好	
288	弥生土器 壺 口縁部	口径21.0	やや外反する口縁部。端部は垂下する。端面に円形浮文を施す。口縁部内外面はナデを施す。	7.5YR6/8 橙色	1mm程度の砂粒含む	良好	
289	弥生土器 壺 底部	底径5.9	突出する底部。底部内外面はナデを施す。	10YR5/3 にぶい黄褐色	1～3mmの砂粒含む	良好	
290	弥生土器 壺 底部	底径5.8	やや突出する上げ底の底部。底部内外面はナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1～3mmの砂粒を多く含む	良好	
291 43	弥生土器 甕 口縁部	口径17.0	外反する口縁部。端部は上下へ拡張し平坦面を形成する。張りが少ない体部をもつものと思われる。端面は凹線状にくぼむ。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部内面はヘラケズリ、外面ナデを施す。	5YR4/3 にぶい赤褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
292	弥生土器 甕 底部	底径5.0	突出する上げ底の底部。底部内面はナデ、外面コヒナデを施し、黒斑がある。底部の端は赤く変色している。	7.5Y5/4 にぶい褐色	1～3mmの砂粒を含む	良好	
293 43	弥生土器 高杯 口縁部	口径25.0	屈曲しやや外側へ外反する口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部内外面はヨコナデを施す。杯部内外面はナデを施す。	2.5YR6/6 橙色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
294 43	弥生土器 高杯 口縁部	口径21.2	屈曲し直立ぎみにやや外側へひらく口縁部。端部は平坦面を形成する。口縁部外面に3条の凹線文、端面に凹線状のくぼみを1条施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。杯部内外面はナデを施す。	10YR4/3 にぶい黄褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	
295	弥生土器 高杯 杯部～脚部		裾がゆるやかに開くものと思われる。杯との接合部分は円板充填である。杯部内外面はナデを施す。脚部内面上位はナデ、下位はヘラケズリ、外面はヘラミガキを施す。	5YR5/6 明赤褐色	1～5mmの砂粒を含む	良好	
296	弥生土器 高杯 裾部	裾径13.0	ゆるやかに広がる裾部。端部は上方へつまみあげ平坦面を形成する。端面は凹線状にくぼむ。内面はハケナデ、外面はヘラミガキを施す。	2.5Y5/2 暗灰黄色	0.5～1mmの砂粒を含む	良好	
297	弥生土器 高杯 裾部	裾径13.7	裾部はゆるやかに開く。端部は上方へつまみあげ丸く終わる。裾部に2個スカシ孔を穿つ。裾部内外面はナデを施す。	5YR4/3 にぶい赤褐色	0.5～2mmの砂粒を含む	良好	

第4章 自然科学分析

第1節 大竹西遺跡出土の鑄造鉄剣の保存処理

(財)元興寺文化財研究所 村田忠繁

1. はじめに

一般、大阪府八尾市内の大竹西遺跡から出土した鉄剣の保存処理を実施する機会を得、当研究所保存科学センターが中心となり、保存処理及び分析調査を行った。

脱酸素剤を用い密封容器に保管され当研究所に搬入された鉄剣は、出土時の残存状態が良く、目釘穴や鏝が目視できる状況であった。この鉄剣は近畿地方では最古の資料例であることから、(財)八尾市文化財調査研究会や八尾市教育委員会とともに随時、保存処理・分析の方法を確認し、作業を実施した。その保存処理の概要と分析知見の報告をする。

なお、X線透過試験を村田忠繁が、分析を菅井裕子が、保存処理を尾崎誠が中心に行った。

2. 保存処理作業

出土金属製品の保存処理は通常右図の工程表により行う。しかし、処理前調査でのX線透過経においてこの鉄剣が鑄造品であることが判明した。

そこで本来ならば、防錆のために錆の原因の一つである塩化物イオンを除去するために脱塩を行うが、一般に鑄造遺物は脆くて崩壊しやすいこと、本例の場合は保存状態が良く形状も非常にはっきりと残っていることなどの理由から脱塩工程を省略することとした。同様に樹脂塗布は、遺物に負荷がかからないように樹脂含浸後の作業を避け、接着・復元後の1回に留めた。

これらは形状保存の立場からの措置で、保管時の防錆を管理できるように保管ケースの作成をすることとした。

保存処理の各工程の概要を以下に記す。

【処理前調査】

写真撮影ならびに以下の条件でX透過試験を実施した。

装置：フィリップス社製X線透過試験装置MG225型

フィルム：Fuji X-ray film Ix100

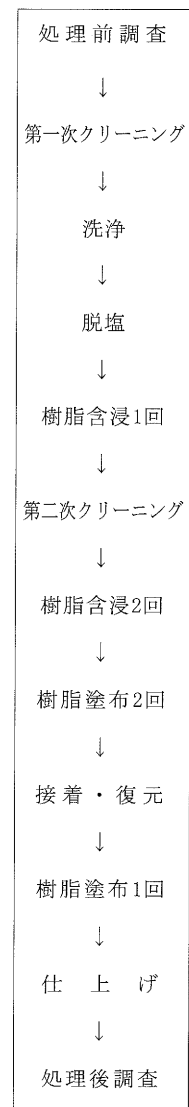
増感紙：鉛増感紙 LF0.03

焦点距離：100cm

X線透過試験の結果、鉄剣に鬆が認められた。他に類例を見ないケースでもあり、奈良国立文化財研究所においてX線CT撮影を行った。

【第一次クリーニング】

遺物表面の土や砂、錆などをX線フィルムで確認しながらメス・エアブラシ(パワーブラスト50N/岡本齒研)、小型グラインダー(ミニター社)等を用いて除去した。



【洗淨】

有機溶剤(キシレン・アルコール・酢酸エチル)に浸漬して表面に付着する油脂分や土などの不純物を除去した。

【樹脂含浸】

遺物強化と防錆のため、フッ素系アクリル樹脂(25%Vフロン・ナフサ溶液/大日本塗料(株))による減圧含浸を1回実施した。この樹脂は、従来のアクリル樹脂に比べ遺物表面の質感を損ねにくく、防錆効果も良好である。

【第二次クリーニング】

遺物に強度を一定程度持たせたので、前回除去しきれなかった錆などの除去を実施した。

【樹脂含浸】

前述のフッ素系アクリル樹脂による減圧含浸を2回実施した。

【復元・整形】

遺物はほぼ完形であったので復元のための接合は必要なかった。しかし、空隙部分や欠損分には、エポキシ系樹脂(アラルダイトS V426/チバガイギー社)を充填して復元を行った。復元部分は小型グラインダーを用いて周囲と違和感のない程度に整形を行った。

【樹脂塗布】

防錆効果を上げ遺物を保護するため、外気との接触を可能な限り少なくするように、含浸時の2倍に薄めた樹脂を遺物に1回塗布した。

【仕上げ】

樹脂の含浸や塗布による遺物表面の光沢をナフサで抑え、復元部には水溶性アクリル絵具(アクリラ/ホルベイン社)を用いて周囲と違和感のない程度に補彩を行った。

【処理後調査】

経過観察ならびに写真撮影を行って保存処理を完了した。遺物は安定した保存のために調湿剤を組み込める支持台・保管ケースに収納した。併せて、レプリカも作成した。

3. 結果・考察

保存処理は順調に進んだ。これは、刃部も含めて形状がしっかりしていたこと、錆も硬く表面剥離を起こすものではなかったこと、表面は植物の根と思われるものの付着や痕跡はあったが、一次情報としての有機物が無かったことなどがあげられる。

鉄剣の調査・分析は非破壊検査法とすることが確認された。そこで、X線透過試験・保存処理中の表面観察・ケイ光X線分析を実施した。さらに、調査過程でX線CT装置による撮影も奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に依頼し検討材料とした。

また、クリーニング時に取り除いた微小な破片を京都大学原子炉実験所の高田実彌氏に依頼し中性子放射化分析を試みた。

【X線透過試験・X線CT撮影】

鉄剣(写真1)とX線フィルム(写真2)を比較して観察すると、刃部や鋒も含め全体に劣化が進まず安定していることが判った。同時に、鬆と思われる楕円形の孔が鉄剣中央から関付近にかけて

点在している様子が読み取れた。これは他に類例のないことでもあり、X線CT撮影を依頼し、その結果を待つこととした。

奈良国立文化財研究所のX線CT装置で撮影されたX線断層写真(写真3)からは、楕円形の孔は、錆とは考えにくい深さのある孔であることが確認できたので、鉄剣鑄造時に発生する髭と結論づけた。

【表面観察】

保存処理のクリーニングの過程で、鬚から茎にかけて、鑄型のずれによるものと思われる段差や甲張りが確認できた。(写真4・5) 二つの目釘孔(写真6)は、双方とも上下の径が異なっていた。これは、鑄型によるものなのか、鑄造後に鑿等で穿孔されたものなのかは断定できなかった。鑿の痕跡と思われるものも確認できたが、鑄型により開けたものを後に調整された可能性もあるので検討を要する。

表面の錆は硬くて取れにくかったので、研磨痕は確認できなかった。柄や紐などの有機質も確認できなかった。

【ケイ光X線分析】

ケイ光X線分析はX線分光法の一つで、試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素の固有のケイ光X線を検出することにより(ナトリウムより重い元素が検出可能である)元素の同定をすることができる。

非破壊で測定可能な鉄剣の両面計7ヶ所について、定性分析を下記の条件で実施した。

装置：エネルギー分散型ケイ光X線分析装置(セイコー電子工業(株)製SEA5200)

測定時間：100～120秒

試料室雰囲気：真空

コリメータ：φ0.1mm

管電圧：50kV

電流：1.000mA

分析結果は、鉄(Fe)以外に検出された元素として、マンガン(Mn)・ケイ素(Si)・カルシウム(Ca)・アルミニウム(Al)・チタン(Ti)・カリウム(K)等であった。ケイ素以下は土壌成分に由来すると考えられる。

比較的Mnを多く含む部分が2ヶ所あったがこのMnが鉄剣に含まれていたものなのか、土壌成分に由来するのかは不明である。(図1)

青色を呈する部分はリン(P)が含まれており、色調から判断するとリン酸第一鉄八水和物(藍鉄鉱) $\text{Fe}_3(\text{PO}_4)_2 \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ であると推定される。(図2)

【中性子放射化分析】

クリーニング過程で採取した表層からの微小な破片を、京大原子炉KUR(出力5000kW)で、中性子放射化分析した。

分析方法は、気送管で資料を炉心に送って20秒照射した後、直ちに開封し、Ge半導体測定器とマルチチャンネル波長分析器を用いて短寿命核種(測定時間：200秒)の定量を行った。自然減衰を終えて再び60分照射後、1週間の冷却期間を経て中寿命核種(測定時間：700秒)を、その後1カ月冷却し長寿命核種(測定時間：40000秒)を定量した。

この分析は原子炉内で試料に中性子を照射し、原子核反応を起こさせ、生じた γ 線を測定して多元素を高感度に定量分析する方法である。須恵器でのランタン (La) 等の元素を定量して相互識別を試みたり、銅鍍中の塩素 (Cl) の有無により進行性錆の判断を行ったりするなど、微量元素分析に有効であることから微量分析法とも呼ばれている。

出土鉄製品の錆のように酸化鉄の生成などで、本来の金属鉄の性質とは異なったものになるため、鉄資料の分析は錆との区別を厳密にする必要がある。今回の資料は極めて微量であり、錆や土壌成分などの不純物も含まれていると考えられるので、分析結果が遺物本体の成分の定性・定量を示すものではないと思われる。

分析結果の特徴としては、腐食の要因となりうるハロゲン (Cl・Br) が検出されていないこと、Mn・Al・Laが1%前後の割合で検出されていることが上げられる。

放射化分析の結果

元素	測定値 (ppm)
Fe	264000
Na	5450
Sc	3.61
Cr	13.9
Mn	16300
Co	11.5
Al	14500
As	33.4
¹²² Sb	13.1
¹²⁴ Sb	11.5
La	9530
Sm	1.66

4. おわりに

畿内では最古の鑄造鉄剣の保存処理を無事終了することができた。今回は形状維持を中心に考え、必要最小限の化学処理に留めている。遺物の安全な保存のために、調湿剤を組み込んだ保管ケースに収めることにした。遺物の保管では他に、窒素噴入による保管ケースや脱酸素剤を利用した保管も提案されているが、いずれもコストや遺物の取り扱い方法の点で課題が残る。今後ともケースも含めた遺物や保管環境の定期的な点検を欠かさず、保存科学とのより一層の連携が肝要と言える。

保存科学の原則の一つは可塑性である。その立場から分析も非破壊による方法を使った。当然一定の限界もあり、この結果を最終結論にするわけではない。これから先、多くの学兄により批判検討されることを望むものである。

最後になりましたが、今回報告の機会を与えていただいた財団法人八尾市文化財調査研究会には記して感謝いたします。



写真 1

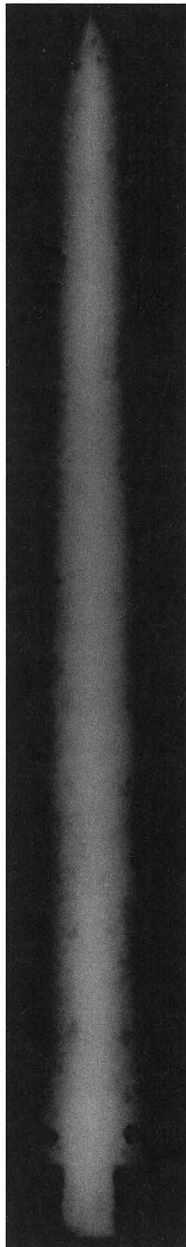


写真 2

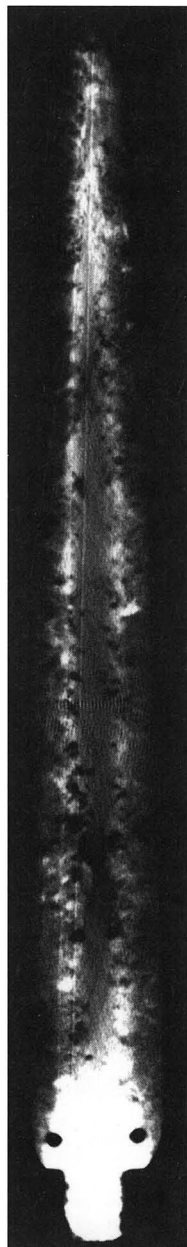


写真 3

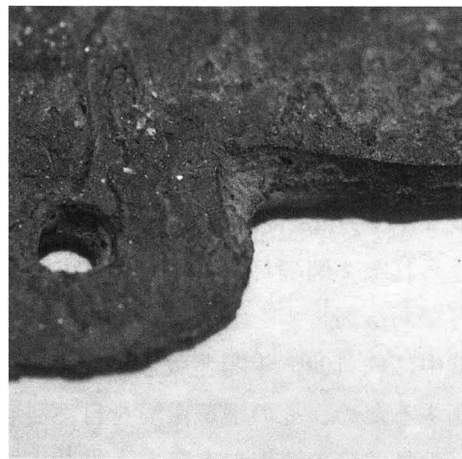


写真 4

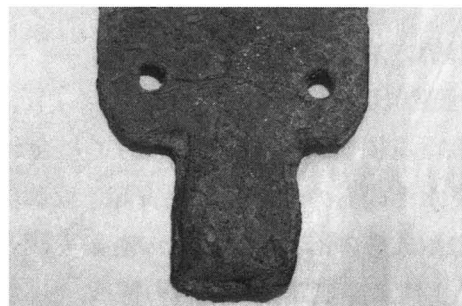


写真 5

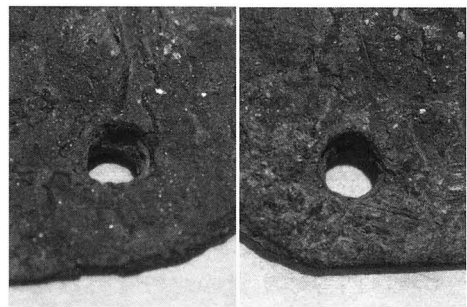


写真 6

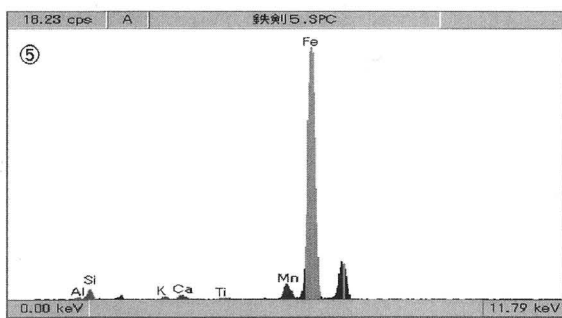


図 1

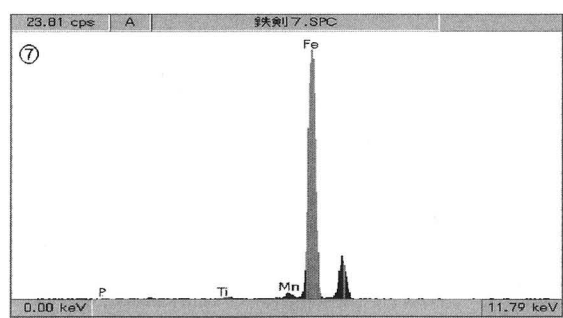


図 2

第2節 大竹西遺跡出土鉄剣の埋蔵環境に関する自然科学的解析

核燃料サイクル開発機構 三ツ井誠一郎・住友金属鉱山(株) 永井 巖

1. 目的

平成9年1月28日に出土した弥生時代後期初頭のものとして推測される鉄剣は、同鉄剣の関(まち)に開けられた2個の目釘孔や錆(しのぎ)等の特徴もよく観察できる程に、その保存状態は極めて良好であった。

土壌中に約1900年間埋蔵されていた鉄製品がなぜこのように良好な状態で保存され得たのかを推測するため、その埋蔵環境を自然科学的手法により解析した。また、埋蔵環境における鉄剣周辺への鉄成分の溶出の有無も、併せて検討した。

解析の方法およびその結果を報告する。

2. 解析方法

2.1 埋蔵環境試料採取

埋蔵環境調査試料は、2つの目的に合わせて採取した。その1つは、鉄剣を埋蔵する土壌および地下水そのものの組成・性質等、埋蔵環境を調査するためのものであり、もう1つは、鉄剣周辺への鉄成分の溶出(移行)の有無を調査するためのものである。

2.1.1 埋蔵環境調査用試料の採取

(1) 土壌

試料採取時、鉄剣に接する上面の土壌は完全に除去されており、また鉄剣が置かれていた板材は、土坑底部に接する状態であった。従って、鉄剣埋蔵位置周辺の土坑内土壌そのものの採取は不可能であったので、埋蔵されていた状態の鉄剣の茎(なかご)方向約45cmの、土坑内であってかつ鉄剣埋蔵環境と同じ層とみなされる位置(垂直断面(a))から、約4cm×4cm、深さ約4cmの試料(湿重量約60g)を小型スコップを用いて採取した。採取試料は直ちにポリエチレン袋に移し入れ密封した。

また、土坑内外の土質の比較を行うため、土坑境界線の内(b)および外(c)の水平面からそれぞれ約9cm×9cm、深さ約5cmの試料(湿重量約300g)、埋蔵されていた状態の鉄剣の切先(きっさき)方向約120cmの、土坑外であってかつ鉄剣埋蔵環境と同じ層とみなされる位置(垂直断面(d))から約6cm×6cm、深さ約6cmの試料(湿重量約300g)を小型スコップを用いて採取し、採取試料は直ちにポリエチレン袋に移し入れ密封した。

採取位置(a~d)を、写真に示す。

(2) 地下水

鉄剣埋蔵位置が地下水面より下であったことは確かであるが、試料採取時には埋蔵位置周辺からは地下水の湧出がほとんど見られなかったため、埋蔵環境位置をほぼ水平に約12m南東に延長した法面から湧出する地下水を注射器を用いて採取した。採取した地下水は中蓋付きポリエチレン瓶(100ml)に、空気の空間を作らないよう一杯に移し入れた。採取試料の1つには濃塩酸(12規定(N))約1mlを添加し、溶解している鉄成分の加水分解析出と酸化防止を図った。採取時の地下水は、無色透明であった。



写真 試料採取位置

2. 1. 2 鉄成分溶出（移行）有無調査用試料の採取

(1) 鉄成分の分布調査用試料（不攪乱試料）

採取の起点を鉄剣が置かれていた板材の中心部とし、板材を取り除いたのち、その中心部から土坑境界線に向けて、下記方法により 2 個の試料を連続的に採取した。鉄剣の埋蔵位置から下方約 20 cm、同位置から外周に向けて放射状に約 30 cm・幅約 5 cmの土壌を、試料として採取したことになる（写真中の e）。

採取には、縦 20 cm、横 15 cm、厚さ 0.1 cmのアルミ板 2 枚を用い、その 2 枚を 5 cmの平行間隔をあけて土中に垂直に挿入し、板の間に挟まれた試料を崩さないよう注意してアルミ板と共に抜き取り、試料の姿がそのまま保てるよう、ポリ塩化ビニリデンフィルム（通称サランラップ）でラップし輪ゴムでしっかり固定し、変質を防ぐためポリエチレン製の袋に脱酸材（酸素除去材）と共に密封した。

(2) 鉄剣付着試料

鉄剣が置かれていた板材の鉄剣接触部と見られる位置に、僅かな土壌付着が認められたので、金属製葉さじを用いて採取し、ポリエチレン袋に移し入れ密封した。その量は、湿重量で約 10gであった。

2. 2 解析方法

採取試料の「土壌分析」、「鉍物分析」、「化学成分分析」を行って、埋蔵環境および鉄成分溶出の有無を調査した。

「土壌分析」では、水素イオン濃度（pH）、酸化還元電位（Eh）、粒度分布測定等をはじめとする一般的な土壌分析を、「鉍物分析」では、エックス線回折法による鉍物組成分析を、「化学成分

分析」では、鉄をはじめとする約 20 成分の組成分析を行った。各分析方法の詳細は省略する。

3. 解析結果

3. 1 埋蔵環境

鉄剣が埋蔵されていた土坑内および土坑外の土壌について、2. 2 の解析を行った。

同解析の結果、両者に明らかな差が認められたのは粒度分布であった。土坑内の試料については、粒径 2~4.75 mm の砂礫分が 0%、0.425~2mm の粗砂分が 26%、0.075~0.425mm の細砂分が 40%、0.005~0.075mm のシルト分が 22%、0.005mm 以下の粘土分が 12%であった。それに対し土坑外の試料では、細礫分が 9%、粗砂分が 43%、細砂分が 26%、シルト分が 12%、粘土分が 9%であり、土坑内つまり鉄剣が埋蔵されていた土壌の方が、土坑外の土壌に比べてやや細粒であったと言える。

土坑外の試料についてエックス線回折法により鉱物組成を調査したが、一般的に検出される石英等の珪酸塩鉱物や緑泥石等の粘土鉱物等が検出されただけであり、特異な鉱物の存在は認められなかった。

鉄剣の腐食に大きな影響を及ぼすと考えられる水素イオン温度 (pH) は両者とも約 6 で極僅かに酸性、また酸化還元力を示す酸化還元電位 (Eh) は両者とも約 380mV であり適度に酸化の進んだ一般土壌並であった。これら数値から、埋蔵環境としての土壌は、特に酸化性の強いものではないことが分かる。

最も興味ある成分である鉄分についても土坑内外差があるとは言えず、約 2.7~2.9%であった。この含有率は一般土壌の含有率範囲 (0.7~55%) にあるものであり、一般土壌の平均値 (3.8%) に比べ若干低い程度である。含有する鉄の約半分は酸化の進んでいない状態 (2 価の鉄 (Fe^{2+})). 酸化が進むと 3 価の鉄 (Fe^{3+}) となる) であり、この土壌が酸化性の強くない環境にあったことを裏付けている。

また、その他の成分については、土坑内・外の差はなく、鉱物組成の結果と併せて考えると、同一起源の土壌であると言える。

発掘前の埋蔵環境は、常に地下水に覆われた状態であったと考えられる。その地下水の酸化力を示す酸化還元電位 (Eh) の現地測定値は約 90~100mV であり、大気と平衡状態にある水の値 (500~600mV) と比べて大幅に低く、これは大変酸化性の低い、むしろ還元性の水質であったと言えそうである。水素イオン濃度 (pH) はほぼ中性であり、腐食を進める要因とはならない。また、溶存酸素 (DO) の測定値も大気中での飽和値の約 1/1000 の値 (数 ppb) であり、この値も極めて酸化性の低い環境であったことを裏付けている。

約 20 成分の化学成分分析を行い、その結果を六甲山地、生駒山地の湧水の水質と比較してみたが、鉄を除いては特に際立った差異は認められなかった。一般河川水の鉄分は 0. nmg/1 であるが、発掘現場で採取した地下水には約 10mg/1 の鉄分が含まれていた。深層の還元状態の地下水では、最大 10mg/1 の濃度に達することもあるようであるが、この地下水中の鉄分の濃度はその最大値を示しており、この結果からも同地下水が還元状態にあったことが証明された。

ポリエチレン瓶に密閉保存した時点では極めて清澄であった地下水から、数時間後には赤緑色の水酸化鉄の沈殿が発生した。これは地下水中で還元状態にあった鉄が空気に触れて酸化され、

加水分解によって沈殿となって析出したものである。この現象は採水地点周辺の法面の赤い着色帯の存在として示されており、この事実からも地下水が還元状態にあったことが裏付けられる。

3. 2 鉄成分溶出の有無

2. 1. 2 (1) の試料を用いて鉄成分の移行の状態を解析した。

鉄成分を含む其他成分の分析を行ったが、その含有率は他の箇所から採取した試料とほぼ同じであり、土質としての差異は無かった。

上記試料を形を崩さないよう注意しながら 50mm 間隔で分割し、そのそれぞれを別試料として分析した。深さ方向に 4 区分、水平方向に 3 区分となり、採取した 1 試料あたり 12 試料が調製されたこととなる。その 12 試料の鉄成分の結果を鉄剣位置を起点として比較し、その成分の分布を解析した。

鉄剣からの鉄分の溶出（移行）があれば、鉄成分の分布は鉄剣近傍が最も高く、鉄剣から離れるに従って減少する傾向が認められることが予想された（図-A）。しかし、その分布状態には多少のばらつきは認められるものの、ほとんど変化が認められないと言っても良い結果となった（図-B）。この結果からは鉄成分の溶出があったと云うことはできない。土壌そのものに約 3%の鉄成分が含有されているので、そのバックグラウンドの中に移行による変化が隠されている可能性がないとは言えないが、今回の調査状現においてそれを検知することは容易ではない。

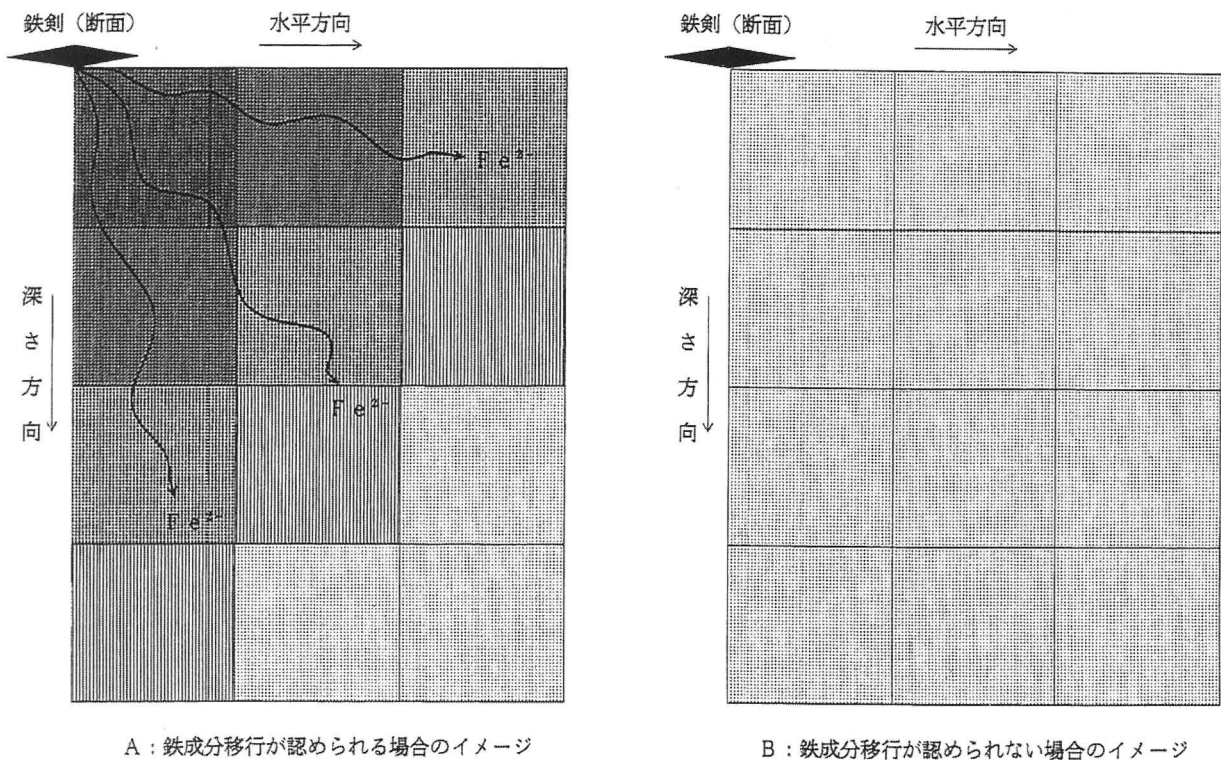


図 鉄成分移行有無のイメージ

2. 1. 2 (2) の試料は直接鉄剣に接触していたと推測できる試料であり、もし鉄成分の溶出があれば最もその含有率が高いと考えられるが、結果は約 1.9%と他の試料と比べむしろ低い値となった。同試料は木片とも接触していたものであり、その影響も考慮する必要があるのかもしれないが、少なくとも鉄剣に最も近い試料中に鉄成分が多いとは言えないと結論することはできそうである。

以上の結果を総合すると、鉄剣は大気と遮断された環境に埋蔵されていたため著しい腐食は進行せず、埋蔵環境への鉄剣からの鉄成分の溶出はほとんどなかったと言っても良いのではないかと考えられる。

4. まとめ

極めて保存状態の良かった鉄剣の腐食状況の詳細（例えば腐食層の厚さ）については、同鉄剣自体の表面解析等を行って明らかにする必要があるが、今回の調査結果からは以下の結論を得ることができた。

- ① 埋蔵環境としての土壌の土質には一般土壌と比べ特別の差異は認められなかった。しかし鉄剣が常に接触していた可能性が高い地下水の水質の酸化性は極めて低く、むしろ還元状態にあったと考えられる。
- ② 鉄剣から埋蔵環境中への鉄分の溶出（移行）を示す傾向は認められなかった。

以上

I 土器の表面に見られる砂礫

1. はじめに

八尾市大竹西遺跡から出土した弥生時代後期の土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。肉眼で観察するのみであるため、粒が細かい砂や粘土粒の組成は識別できない。観察時、砂礫の種類、色、粒形、粒径、量等について配慮した。粒形は角、垂角、垂円、円に、粒径は目測により裸眼ではmm単位で、鏡下では0.1mm単位で測定した。また、量については非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの6段階に区分した。観察できた砂礫種を基に砂礫の源岩を推定し、同じような砂礫が遺跡近くで分布する地域を砂礫の採取地と推定した。

2. 砂礫の特徴

同定できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、安山岩、砂岩、泥岩、チャート、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。各砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、暗灰色、茶灰色、赤桃色で、粒形が角、粒径が最大10mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母、長石・黒雲母、石英・黒雲母が噛み合っている。片麻状を示すものもある。

閃緑岩：色は灰色、暗灰色、灰白色で、粒形が角、垂角、粒径が最大7mmである。長石・角閃石、石英・長石・黒雲母・角閃石、石英・角閃石、石英・長石・角閃石が噛み合っている。角閃石には針状で自形を示すものもある。

斑糲岩：色は暗灰色、黒色で、粒形が垂角、粒径が最大6mmである。長石・角閃石、角閃石・輝石、角閃石・橄欖石が噛み合っている。61、72、114の資料にみられる。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、黒色、茶褐色で、粒形が角、垂角、粒径が最大3mmである。石基はガラス質で、石英や黒雲母の斑晶があるものもある。

安山岩：色は灰色、赤褐色で、粒形が角、粒径が5mmである。石基がガラス質で、輝石の斑晶がみられるものもある。

砂岩：色は灰色、粒形が垂角、円、粒径が最大1mmである。細粒砂からなる。45、46、121の資料にみられる。

泥岩：色は暗灰色、粒形が垂角、粒径が最大0.7mmである。105の資料にみられる。

チャート：色は灰白色、暗灰色、赤色、赤茶色、茶褐色、褐色で、粒形が垂角、垂円、粒径が最大4mmである。

火山ガラス：無色透明、黒色透明で、粒径が最大0.7mm、粒形が束状、貝殻状である。

石英：無色透明、赤茶色透明で、粒形が角、粒径が最大4mmである。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：白色、灰白色、灰白色透明、無色透明で、粒形が角、粒径が最大10mmである。

黒雲母：金色、黒色、褐色、茶色、灰白色で、金属光沢がある。粒径が最大 6mm で、板状、粒状をなす。

角閃石：黒色、黒褐色、褐色で、粒形が角、亜角、粒径が最大 8mm である。粒状、柱状をなす。結晶面が見られるもの、自形をなすものがある。

輝石：暗緑色、緑色透明、青銅色透明、褐色透明、黒色透明で、粒形が角、粒径が最大 0.3mm である。柱状をなす。自形をなすものがある。

3. 類型区分と傾向

砂礫構成をもとに源岩を考慮して類型に区分する。源岩を推定する場合、砂礫構成から主とする源岩を推定して主類型を設定し、推定される主とする源岩構成以外の砂礫種をもとにして源岩を推定して亜類型を設けた。

観察した土器資料は僅か140資料であるが、表面に見られる砂礫種構成は花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅠ類型、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅡ類型、斑糲岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅢ類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅣ類型、安山岩質岩起源と推定される砂礫を主とするⅤ類型である。細分すれば、Ⅰb類型、Ⅰbd類型、Ⅰbdg類型、Ⅰdn類型、Ⅱa類型、Ⅱac類型、Ⅱad類型、Ⅱadg類型、Ⅱae類型、Ⅱag類型、Ⅱb類型、Ⅱc類型、Ⅱd類型、Ⅲa類型、Ⅳae類型、Ⅳagn類型、Ⅳe類型、Ⅴad類型、Ⅴd類型となる。各類型の特徴について述べる。

Ⅰb類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に大竹西（在地）と河内平野（大和川の水が運んできた砂礫からなる沖積地）に区分される。

Ⅰbd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅰbdg類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅰdn類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫、他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅱa類型；閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。角閃石には結晶面が見られるものもある。砂礫相的に河内恩智、河内水越、楽音寺北東、吉備、讃岐？、河内恩智・楽音寺北東に区分さる。吉備とした砂礫の閃緑岩には柱状で自形を示す角閃石が含まれる。

Ⅱac類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・斑糲岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅱad類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に河内恩智、吉備、讃岐、楽音寺北東？に区分される。吉備とした砂礫の角閃石には柱状で自形を示す角閃石が含まれる。

Ⅱadg類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅱae類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅱag類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、チャートの砂礫を僅かに含む砂礫からなる。砂礫相的に河内水越、河内恩智か楽音寺北に区分される。

Ⅱb類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

Ⅱc 類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、斑糲岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅱd 類型：角閃石質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅲa類型：斑糲岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

Ⅳae類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅳagn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩や泥岩、チャート 他形の角閃石の砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅳe類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅳad類型：安山岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ⅳd 類型：安山岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4. 砂礫の採取推定地

土器が出土した大竹西遺跡は河内の平地部に位置し、大和川の水流によって運ばれてきた砂礫で形成された沖積地に位置するが、生駒山地よりであるため、大和川の水流により流されてきた砂礫のみではなく、山地から供給された砂礫の影響も大きな地であるといえる。当時、北には河内湖がひらけ、西に上町台地、東に生駒山地があり、河川は南から北へと流れていた。東方の山地には変成岩からなる花崗岩類や閃緑岩類、斑糲岩類が分布し、平地部や台地部には砂礫層や粘土層が分布する。生駒山地に分布する岩石には地域性がある。暗峠から高安山にかけては片麻状黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布し、高安山から南方の黒谷にかけては縞状をなす細粒の片麻状黒雲母花崗岩が分布し、その南に斑状黒雲母花崗岩が分布する。柏原市の高雄山から平尾山にかけては黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩が分布する。このような岩石分布の中に岩体として斑糲岩や閃緑岩が分布する。生駒山付近から暗峠にかけて斑糲岩が、八尾市楽音寺付近や高安山の北方、恩智神社の東方、柏原市平尾山にはループペンダント状に閃緑岩の岩体が分布する。山麓には段丘が発達する。

以上のような岩石・地層の分布の影響を受けて、河川に見られる砂礫や沖積層の砂礫には特色がある。河川には後背地の岩石や地層の分布面積に関係した量の砂礫が供給されていると推定される。大東市から東大阪市の石切にかけては、花崗岩が媒乱した花崗岩片、石英、長石、黒雲母

からなる砂礫を主とし、僅かに他形の角閃石が含まれる。このような砂礫は八尾市の神立付近や高安山から平尾山にかけての山麓にもみられる。八尾市大窪や恩智付近では角閃石の量が多くなり、閃緑岩片や輝石がみられることもある。東大阪市客坊谷の後背地は斑糲岩の分布地であるため、長石、角閃石、輝石を主とし、ごく僅かに橄欖石や黒雲母、石英が含まれる。大和川は奈良盆地周辺の山々を後背地にもち、比較的長い距離を流れているため、長石が比較的少なく、石英が多い。また、チャートや自形の石英も僅かに含まれる。このような砂礫分布を基にして、土器に含まれる砂礫とを比較する。

河内平野とした砂礫はⅠb類型に属する。この砂礫は比較的粒が揃っており、粒の角が滑らかになっている。角閃石は少なく、粒状である。東郷遺跡から中田遺跡付近にかけての砂礫に似ている。

大竹西（在地）とした砂礫にはⅠb類型、Ⅰbd類型、Ⅰbdg類型に属するものがある。砂礫構成は花崗岩質岩起源と推定される角ばった砂礫が多く、比較的長石と角閃石が多い。また、砂礫の表面が滑らかで、粒が揃っていることから平地にまで流れ出した砂礫と推定される。鉄剣が出土した地山の砂礫と砂礫構成が同じである。

河内恩智とした砂礫にはⅡa類型、Ⅱad類型に属するものがある。他形の角閃石が多く、粒度が揃っていない、閃緑岩質岩が媒乱したような砂礫である。八尾市恩智付近が砂礫の採取地と推定される。Ⅱad類型に属する砂礫は、Ⅱa類型の河内恩智の砂礫種構成に似ているが、砂礫が水洗されたように表面がきれいで、やや粒が揃っている。また、自形の石英を含むことから、大和川と恩智から流れ出した谷川とが合流する付近の砂礫と推定される。

河内水越とした砂礫にはⅡa類型、Ⅱag類型、Ⅱb類型に属するものがある。一見角閃石が多いようにみえるが、粒状をなす黒雲母が多い。角閃石よりも黒雲母が多くみられ、長石も粗粒のものから細粒のものまでである。八尾市水越付近の閃緑岩の媒乱砂の砂礫構成に似ている。Ⅱag類型とした砂礫は角が円くなったチャート等の砂粒が含まれることから段丘の砂礫か大和川の砂礫の影響をうけるような地の砂礫と推定される。水越の平地部により近い砂礫と推定される。

楽音寺北とした砂礫にはⅡa類型、Ⅱac類型、Ⅱc類型に属するものがある。角閃石が多く、粒が比較的揃っている場合が多い。八尾市楽音寺の北部から東大阪市横小路にかけての付近の砂礫と推定される。

河内恩智か楽音寺北とした砂礫にはⅡa類型、Ⅱag類型に属するものがある。河内恩智とした砂礫構成と楽音寺北とした砂礫構成の中間的な砂礫相を示す。

生駒西麓とした砂礫はⅢa類型に属するものがある。他形の輝石が比較的多く含まれ、斑糲岩の砂礫も含まれることから、東大阪市客坊谷の砂礫に似ているが、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が含まれることから、山麓というよりも平地部付近の花崗岩質岩起源の砂礫が混じる付近が推定される。

吉備とした砂礫はⅡa類型とⅡad類型に属するものがある。花崗岩質岩か閃緑岩質岩起源の砂礫を主とし、自形の石英が含まれ、閃緑岩に柱状で自形の角閃石が含まれる。このような砂礫は岡山市足守川中流の加茂付近の砂礫に似ている。Ⅱa類型のものは自形の石英が認められないが、加茂付近の砂礫相に似ている。

讃岐とした砂礫はⅡad類型、Ⅱadg類型、Ⅱd類型に属するものがある。結晶面がある角閃石が多く含まれ、砂礫粒が水洗されたように美しい。流紋岩質岩起源の砂礫が含まれ、比較的黒雲母が多い場合もある。高松市岩清尾山南方付近の砂礫に似ている。風化して黒雲母は灰白色や金色を呈する場合が多い。岡山方面で雲母土器と言われているものには、この砂礫構成を示すものが多い。

讃岐？とした砂礫はⅡa類型に属するものである。河内恩智とした砂礫に似ているが、砂礫の表面が滑らかで、美しいことから媒乱した砂礫ではなく、河川により流されて水洗されたような砂礫である。高松市岩清尾山南方付近の砂礫か。桜井市寺川下流域の砂礫の可能性もある。

因幡とした砂礫はⅣe類型、Ⅴd類型に属するものがある。流紋岩質岩起源と推定される砂礫と安山岩質岩起源と推定される砂礫からなる。砂礫相的に因幡西部付近の砂礫と推定される。因幡か伯耆とした砂礫はⅤad類型に属するものである。自形の角閃石が多く、輝石も含まれ、花崗岩質岩起源と推定される砂礫も僅かに含まれる。このような砂礫は安山岩質岩起源の砂礫が広く分布し、花崗岩質岩も分布する地域が推定される。大山を挟んだ東西の地に当たる米子市か倉吉市付近の砂礫と推定される。

和泉南部とした砂礫はⅣae類型に属するものである。砂礫の粒形が比較的円く、砂礫の表面はザラザラしたものが多い。流紋岩粒が比較的多いことから、熊取町から岸和田市付近にかけての平地部の砂礫と推定される・海岸付近の砂丘の砂礫ではない。

和泉北部とした砂礫はⅠdn類型、Ⅳagn類型に属するものがある。砂礫の粒形が比較的円く、砂礫の表面が磨滅を受けて、ザラザラしているようなものが多い。花崗岩質岩起源の砂礫が比較的多く、自形の石英も比較的多い。砂礫相的に堺市付近の丘陵地から段丘付近にかけての砂礫と推定される。

区分不能とした272資料には、非常に多くの焼土塊が含まれ、細粒の角閃石が多く含まれる。砂礫粒を粘土に混ぜ合わせるのではなく、焼土塊を混ぜ合わせた土器は掛川市付近で見たことがあるが、当地は砂岩や泥岩からなる砂礫の地であり砂礫構成が異なる。他形の角閃石と黒雲母が見られることから、深成岩あるいは片麻岩が分布する地域の砂礫と推定される。関東や山陰、北陸、四国や九州や紀伊半島の太平洋側の砂礫とは考えられない。

砂礫相的に河内水越、楽音寺北、河内恩智、河内恩智か楽音寺北と推定される砂礫を含む土器が約8割を占める。また、遠地である讃岐、因幡、吉備、和泉南部と推定される砂礫を含む土器も僅かであるがみられる。これに比べ、大竹西遺跡付近の砂礫を含む土器は約1割と非常に少ない(表2参照)。

II 石材の石種とその採取地

大竹西遺跡から出土した石材の石種を裸眼で同定した。石種は流紋岩、石英安山岩、輝石安山岩 A、輝石安山岩 B、輝石安山岩 C、斑糲岩 A、斑糲岩 B、砂岩 A、砂岩 B、弱片麻状柘榴石黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、変輝緑岩である。各石種の特徴とその採石推定地について述べる。

流紋岩：加工石？か円礫？（S8）色は黄灰白色で、板状の石である。流理面があり、その面に沿って剥がれている。石英、黒雲母の斑晶が散在する。石英は無色透明、粒径が1~1.5 mm、量が僅かである。黒雲母は黒色、六角形板状で、粒径が0.5 mm、量がごくごく僅かである。石基は灰白色で、やや粒状である。細粒の長石が多い。

灰白色で、流理が顕著な流紋岩は耳成山や畝傍山 二上山雌岳等にみられる。しかし、当石材は石英の斑晶が中粒で少なく、長石の細かい斑晶が目立つことから岩相的に異なる。また、礫形が自然石とすれば円である。採石地については推定しがたい。

石英安山岩：割った石（S21）色は灰緑色で、角ばっており節理面で割れている。長径が30 mmに及ぶ石英安山岩の捕獲岩がみられる。捕獲岩の色は黄灰緑色で、粒形が円である。細粒の石英、長石、輝石が含まれる。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母、輝石である。石英は無色透明、自形であるが周囲がやや円く融食されている。粒径が1~5 mm、量の中である。長石は灰白色、粒径が1~5 mm、量の中である。短柱状の自形をなすが、周囲はやや融食されて円い。黒雲母は黒色板状で粒径が0.5~1 mm、量がごくごく僅かである。輝石は黄緑色透明、短柱状、粒状で、粒径が0.1~0.7 mm、量が僅かである。石基はガラス質、灰色である。

このような岩相を示す石英安山岩は猪名川流域に分布する石英安山岩の岩相の一部に酷似する。場所としては池田市付近が推定される。節理面が顕著に残っていることから露出地から採石されたものであろう。同質の石材は猪名川から淀川流域にかけての前期古墳の石室材に多くみられる。

輝石安山岩 A：加工片（S12~S20）色は黒色で、ガラス質である。風化面では、流理面に沿った風化の差により、縞状の凹凸がみられる。長石、輝石の斑晶が散在する。長石は白色、無色透明、短柱状で、粒径が0.1~0.3 mm、量の中である。輝石は黒色、短柱状で、粒径が0.1~0.2 mm、量が僅かである。石基は黒色で、ガラス質である。

加工面のみのももあるが、風化面が残るものをみれば、地層中の礫にみられるような風化の様相を示す。二上山西方の原川累層や大阪層群には同じような風化の様相を示す輝石安山岩の礫が見られる。このような礫を採石したのであろう。

輝石安山岩 B：石包丁（S11）色は灰色で、内部は黒色である。板状節理が顕著である。斑晶鉱物は長石である。長石は無色透明、粒径が0.1~0.2 mm、量が僅かである。基質はガラス質である。細粒の輝石、長石がみられる。輝石は粒径が0.01 mm、量が多い。長石は0.01~0.03 mm、量が多い。

このような岩相を示す安山岩は二上山西方の春日山に分布する春日山火山岩に酷似する。加工品であるため、採取時の原形が不明であり、採取地が限定できない。春日山の岩か大和川の礫であらう。

輝石安山岩 C：割った石（S1）色は淡茶灰色で、内部は暗灰色である。板状節理が顕著である。石英の捕獲晶が散在する。捕獲晶の石英は褐色透明で、粒形が亜角、粒径が1～5 mm、量のごく僅かである。斑晶鉱物は長石、輝石である。長石は白色、短柱状、粒状で、粒径が0.5～3 mm、量が中である。輝石は黒色透明と暗緑色透明のものがある。黒色透明の輝石は柱状で、粒径が0.5～1.5 mm、量のごくごく僅かである。暗緑色透明の輝石は粒状で、粒径が0.3～0.5 mm、量のごくごく僅かである。石基は灰色、やや粒状で、微粒の輝石と長石が散在する。

このような岩相を示す輝石安山岩は柏原市峠付近の亀ノ瀬に分布する輝石安山岩の岩相の一部に酷似する。石材が板状節理の節理面を利用して切り出したような石であることから亀ノ瀬付近に露出する石を採石したと推定される。

斑礫岩 A：自然石？（S10）焼けているのか色は黒い。割れた石である。長石、輝石、角閃石が噛み合っている。長石は白色、白色透明で、粒径が0.3～1 mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が0.3～1.5 mm、量が非常に多い。輝石は暗緑色透明、粒径が0.3～0.5 mm、量の中である。

このような岩相を示す斑礫岩は八尾市楽音寺付近にも分布する。遺跡付近に流出した礫であろう。

斑礫岩 B：自然石（S3）色は灰緑色で、粒形が亜円である。長石、角閃石、輝石が噛み合っている。長石は白色、粒径が0.5～2 mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が0.5～2 mm、量の中である。輝石は灰緑色、粒径が0.5～2 mm、量が多い。

このような岩相を示す岩石は生駒付近や楽音寺付近にも分布するが、礫形が円いため、石川や大和川の礫ではない。海岸か淀川の礫であろう。

砂岩 A：石棒？（S2）加工されていて原形を留めていない。色は淡灰緑色、構成粒径が中粒である。構成粒は花崗岩、閃緑岩、石英、長石、角閃石である。花崗岩は、灰色、粒形が亜角、粒径が0.5～0.7 mm、量のごくごく僅かである。石英と長石が噛み合っている。閃緑岩は灰色、粒形が亜角、粒径が0.5～0.7 mm、量のごく僅かである。石英・角閃石、長石・角閃石が噛み合っている。石英は、無色透明、粒形が角、亜角、粒径が0.2～0.5 mm、量が多い。長石は灰白色、粒形が角、粒径が0.2～0.5 mm、量が僅かである。角閃石は、黒色、粒形が亜角、粒径が0.3～0.5 mm、量のごくごく僅かである。

このような岩相を示す砂岩は、和泉層群に分布する砂岩層の砂岩の一部に酷似する。礫としては石川の川原石や和泉地方の海岸の石に多くみられる。原形が不明のため、採取地を限定できない。

砂岩 B：石皿？（S9）周囲が加工されていて、採取時の原形を留めていない。色は灰色、粒径が中粒である。構成粒は花崗岩、石英、長石、黒雲母である。花崗岩は、灰白色、粒形が亜角、粒径が0.5～0.7 mm、量が僅かである。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.2～0.3 mm、量が多い。長石は白色、粒形が角、粒径が0.2～0.3 mm、量が多い。黒雲母は、黒色板状、粒径が0.2 mm、量のごくごく僅かである。

このような岩相を示す砂岩は、和泉層群に分布する砂岩層の砂岩の一部に酷似する。礫としては石川の川原石や和泉地方の海岸の礫に多くみられる。原形が不明のため、採取地を限定できない。

弱片麻状柘榴石黒雲母花崗岩：自然石（S7）色は灰白色で、礫形が垂円である。微かに片麻状を示す。石英、長石、黒雲母、柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～2 mm、量が僅かである。長石は、灰白色、粒径が1～5 mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が1～3 mm、量が僅かである。柘榴石は、赤褐色、粒状で、粒径が0.5～2 mm、量のごく僅かである。

このような岩相を示す岩石は、遺跡東方の山地や桜井市竜王山付近にもみられる。生駒山地から流出した岩石と言うよりも、大和川の川原石の方が礫形としては似ている。

弱片麻状黒雲母花崗岩：自然石（S4）色は灰白色で、礫形が垂角である。微かに片麻状を示し、黒雲母が片麻状の方向に並ぶ。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5 mm、量が僅かである。長石は、白色、粒径が1～2.5 mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色板状、粒径が0.5～1 mm、量が僅かである。

このような岩相を示す岩石は八尾市神立の水呑地蔵付近に分布する岩石に似ている。礫形が垂角であり、当遺跡近くで採取できる石であると推定される。

変輝緑岩：自然石？（S5、S6）色は灰緑色、礫形が垂角、垂円である。角閃石と長石の斑晶が部分的に集合して、散在する。斑晶をなす長石は灰白色、球状で、粒径が1～4 mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が2～10 mm、量が僅かである。形は不定形である。基質をなす長石と角閃石は細粒である。基質の長石は白色、粒径が0.5 mm、量が多い。角閃石は黒色、短柱状、粒径が0.5 mm、量が多い。

このような岩相を示す岩石は、八尾市神立の水呑地蔵付近にレンズ状に分布する変輝緑岩の岩相の一部にみられる。このような岩相の岩石が当遺跡付近に流出したものを採石したのであろうか。

表1. 土器の表面にみられる砂礫

その1

報告番号	試料番号	器種	岩										鉢					物		海綿の骨片	類型								
			花崗岩	閃緑岩	流紋岩	安山岩	砂岩	泥岩	チャート	片岩	火山ガラス	石英	長石	雲母	角閃石	輝石	燧石	燧石	燧石										
014	大竹西 P. 209	壺	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	II a 楽音寺北
015	大竹西 P. 210	甕	L-稀 角								L-稀 亜円 亜角											M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	II a g 河内水越	
030	大竹西 P. 235	壺	L-僅 角																			M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	II a 河内水越	
031	大竹西 P. 236	壺	L-微 角																									II a 楽音寺北	
032	大竹西 P. 223	壺	M-稀 角																			S 中 板	S 中 板	S 中 板	S 中 板	S 中 板	S 中 板	II a 河内水越	
033	大竹西 P. 240	壺	L-微 角																			M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	M-中 板	II a 河内恩智	
034	大竹西 P. 237	壺																										II a 楽音寺北	
035	大竹西 P. 226	壺	L-稀 角																			M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	II a 楽音寺北	
036	大竹西 P. 245	壺	L-僅 角																			M-僅 角	M-僅 角	M-僅 角	M-僅 角	M-僅 角	M-僅 角	II a 楽音寺北	
037	大竹西 P. 239	壺	L-微 角																									工 b 大竹西	
038	大竹西 P. 230	壺	L-稀 角																			L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	II a c 楽音寺北	
039	大竹西 P. 211	壺	L-微 角																			M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	II a 河内恩智	
040	大竹西 P. 241	壺	M-僅 角																									II a 河内恩智	
041	大竹西 P. 215	壺	L-僅 角																									II a 河内恩智	
042	大竹西 P. 216	壺	L-稀 角																			L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	II a g 恩智楽北	
043	大竹西 P. 227	壺	L-稀 角																			L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	L-稀 角	II a 河内恩智	
044	大竹西 P. 242	壺	L-稀 角																									II a 楽音寺北	
045	大竹西 P. 246	壺用蓋	M-稀 亜角																			M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	M-稀 板	II a 河内恩智	
046	大竹西 P. 247	壺	M-稀 角																			M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	IV a g n 和泉北部	
047	大竹西 P. 248	甕	M-稀 角																			M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	II a 楽音寺北	
048	大竹西 P. 221	甕	L-微 角																									I b 河内平野	
049	大竹西 P. 224	甕	L-僅 角																									II a 河内水越	
050	大竹西 P. 213	甕	L-微 角																			M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	M-稀 角	II a 楽音寺北	
051	大竹西 P. 229	甕	L-僅 角																									I b 大竹西	
052	大竹西 P. 220	甕	L-稀 角																			M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	M-微 角	I b 河内平野	

表 1. 土器の表面にみられる砂礫

報告番号	試料番号	器種	岩										鉢				物		海綿の骨片	類型							
			花崗岩	閃緑岩	流紋岩	安山岩	砂岩・泥岩	チャート	片岩	火山ガラス	石英	長石	雲母	角閃石	輝石	燧石	燧石	燧石			燧石						
053	大竹西 P. 214	甕	裸眼	L-微角	M-僅角	裸眼	裸眼	裸眼	30倍	裸眼	M-中	30倍	M-中	裸眼	M-中	L-僅板	L-僅	L-多	裸眼	L-多	30倍	裸眼	30倍			II a 恩智楽北	
054	大竹西 P. 252	高杯		M-稀角	M-稀角											M-中板	M-僅	M-非		M-非	M-中板	M-中	M-非			II a 河内恩智	
055	大竹西 P. 232	高杯																								II a 楽音寺北	
056	大竹西 P. 253	高杯																								II a 河内恩智	
057	大竹西 P. 251	高杯	L-僅角	L-稀角	M-微角											M-中板	M-微板	M-僅		M-中板	M-中	M-僅				II a 河内水越	
058	大竹西 P. 222	高杯	L-稀角	L-稀角	M-稀角																	M-多	M-非	M-非			II a 吉備?
059	大竹西 P. 228	高杯																									I dh 和泉北部
060	大竹西 P. 250	高杯																									II a d 吉備
061	大竹西 P. 233	高杯																									II c 楽音寺北
062	大竹西 P. 254	高杯																									I bd 大竹西
063	大竹西 P. 257	高杯	L-稀角	M-稀角																							II a 河内水越
064	大竹西 P. 258	高杯	L-稀角	M-稀角	L-僅角																						II a 河内水越
065	大竹西 P. 219	鉢																									I b 河内平野
066	大竹西 P. 235	鉢	L-微角	M-稀角	L-稀角																						II a 河内恩智
067	大竹西 P. 256	鉢																									II a d 河内恩智
068	大竹西 P. 231	鉢	L-微角	M-微角																							II a 河内恩智
069	大竹西 P. 212	鉢																									II a 河内恩智
070	大竹西 P. 234	器台																									II a 楽音寺北
071	大竹西 P. 225	器台	L-微角	L-僅角	M-稀角																						II a d 吉備?
072	大竹西 P. 238	器台	L-稀角	M-微角																							I b 大竹西
073	大竹西 P. 262	壺																									II a 楽音寺北
074	大竹西 P. 263	壺	L-稀角	L-微角																							II a d 讃岐
075	大竹西 P. 260	壺																									II a 恩智楽北
076	大竹西 P. 261	甕																									II a 楽音寺北
077	大竹西 P. 264	甕	L-稀角	L-微角																							II a d 讃岐

その2

表2 類型と器種

類型		器種	甕	壺(壺用蓋・水差形土器含む)	器台	高杯	鉢	他	合計
I 類型	b	大竹西(在地)	1	5	1				7
		河内平野	2	1			1		4
	bd	大竹西(在地)	1	1		1			3
	bdg	大竹西(在地)		2					2
	dn	和泉北部				1			1
II 類型	a	楽音寺北	7	12	1	5			25
		河内水越	10	17	1	4	2		34
		河内恩智	3	15		3	2	1	24
		河内恩智か楽音寺北	3	3			1		7
		吉備				1			1
		讃岐?		1					1
	ac	楽音寺北		1					1
	ad	河内恩智					1		1
		吉備	1		1	2			4
		讃岐	2	3		3			8
	adg	讃岐		1					1
	ae	?		1					1
	ag	河内恩智か楽音寺北		1					1
		河内水越	1						1
	b	河内水越				2			2
c	楽音寺北				1			1	
d	讃岐	1						1	
III a類型		生駒西麓		1					1
IV 類型	ae	和泉南部		1					1
	agn	和泉北部		3					3
	e	因幡	1						1
V 類型	ad	因幡か伯耆		1					1
	d	因幡		1					1
区分不能			1						1
合計			34	71	4	23	7	1	140

第4節 大竹西遺跡第3次調査(OTN96-3)に伴う花粉分析(概報)

川崎地質株式会社 渡辺正巳

はじめに

大竹西遺跡は、八尾市上尾町七丁目地内に立地する遺跡である。本報は遺跡周辺の古植生変遷、堆積環境変遷などの古環境変遷の推定、出土鉄剣の埋積時期および埋積過程の推定などのために、財団法人八尾市文化財調査研究会が川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析調査の概報である。

分析試料について

分析した試料は財団法人八尾市文化財調査研究会と川崎地質株式会社が協議の上、図1に示す7地点で川崎地質株式会社が採取したものである。図2～8左側に各地点の柱状図を示す。また試料番号を柱状図右脇に採取深度に対応させて示し、左脇に層名を示した。

分析方法および分析結果

(1) 分析方法

渡辺(1995)に従って花粉分析処理を行った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。

(2) 分析結果

花粉分析結果を図2～8の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

花粉分帯

花粉組成の特徴、および各層の対比から、以下のように地域花粉帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示す。

(1) III帯(No.1地点試料No.16～6、No.4地点試料No.4～2、No.5地点試料No.4～2、No.6地点試料No.1、No.7地点試料No.3～1)

アカガシ亜属が卓越し、スギ属、ヒノキ属、シイノキ属-マテバシイ属、コナラ亜属を伴う。No.1地点試料No.6ではアカガシ亜属が特に高率になり、他の種類は低率になる。このことから、No.1地点試料No.6をa亜帯、その他の試料をb亜帯とした。

(2) II帯(No.1地点試料No.1、No.2地点試料No.1、No.3地点試料No.6～4、No.4地点試料No.1)

マツ属(複維管束亜属)、アカガシ亜属が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。

(3) I帯(No.3地点試料No.3～1)

マツ属(複維管束亜属)が卓越する。試料No.3では他の種類が低率であるのに対し、試料No.2ではスギ属が高率になる。このことから、試料No.3をb亜帯、試料No.2をa亜帯とした。また、試料No.1ではアカガシ亜属が卓越し、珪藻化石の概査では汽水棲珪藻が認められる。これらのことと周辺地域の花粉層序から、試料No.1は中部完新統を利用した盛土であると考えられる。したがっ

て、a 亜帯と同時期の「盛り土」ということで仮に a' 亜帯とした。

鉄剣埋納坑の埋土について

今回の大竹西遺跡第3次発掘調査では、近畿地方最古(弥生時代後期初頭)の鉄剣が出土した。鉄剣埋納坑(S K 501)の埋土は、今回分析したNo.6 地点試料No.1 である。

鉄剣埋納坑はNR 601 の埋土を掘込み、NR 501 で埋納坑上部を切られていた。

前節で示したように、No.6 地点試料No.1 はⅢ帯 b 亜帯に対応する。一方、No.1 地点では、最下位でNR 601 上部の試料No.16 からSD 402 下部の試料No.7 までが同じⅢ帯 b 亜帯に対応している。したがって花粉組成のみからは、埋納坑の掘られた層準を確定するには至らなかった。

検鏡したプレパラートの状態は、No.1 地点試料No.9~13、15 では量の多少はあるものの黒く不透明な炭片が卓越する。これに対しNo.1 地点試料No.14、16、No.6 地点試料No.1 では、色が薄く半透明の植物片が目立つ。このほかNo.1 地点試料No.9~13、15 では、孢子化石総数が花粉化石総数のおよそ2倍程度、出現している。これに対しNo.1 地点試料No.14、16、No.6 地点試料No.1 では、孢子化石総数は花粉化石総数の数%に過ぎない。したがって植物遺体の検出状況から、埋納坑の埋土はNo.1 地点の試料No.14(NR 501)、16(NR 601)と似ていることが判る。

これらのことから、埋納坑内の土は「NR 601」に由来する可能性が高い。NR 601 の埋積後、NR 501 内が埋積するまでの状況を略図で示すと図9の様になる。

各花粉帯の時期について

(1) 出土遺物からの推定年代

今回分析した各試料の堆積年代は、出土考古遺物より以下の様に推定されている。

第1面(VI層: No.1 地点試料No.1 層準・No.2 地点試料No.1 層準・No.3 地点試料No.6 層準・No.4 地点試料No.1 層準の上面): 平安時代末~鎌倉時代の生活面

第3面(IX層: No.1 地点試料No.4、5 層準の上面): 弥生時代後期後半の生活面

SD 301 (No.1 地点試料No.2、3 層準): 弥生時代後期後半

SD 402 (No.1 地点試料No.6~8 層準): 弥生時代後期前半

第5面(XII層: No.1 地点試料No.15 層準の上面) 弥生時代後期初頭の生活面

NR 601 (No.1 地点試料No.16 層準): 弥生時代後期初頭

NR 701 (No.5 地点試料No.1~3 層準): 弥生時代中期末まで

(2) ¹⁴C年代測定

No.7 地点試料No.2 層準では、縄文時代晩期に相当する¹⁴C年代(2630±90y. B. P. : I-18727)が得られている。一方、No.7 地点試料No.3 層準は、標高から大竹西遺跡北方の池島・福万寺遺跡の弥生時代前期の層に対比されている(担当者談)。

今回得られた¹⁴C年代測定の対象となった試料が腐植質粘土であることから、腐植の多が再堆積した物であり、実年代より古い値が得られた可能性を否定できない。

以上のことから、No.7 地点試料No.2 層準は縄文時代晩期~弥生時代前期頃に堆積した可能性がある。

(3) 花粉帯の対比

八尾市南部の志紀遺跡では、川崎地質株式会社(1996)により縄文時代晩期以降現代までの花粉組成変遷が明らかにされている。今回得られた花粉帯と志紀遺跡での花粉帯を対比し、各花粉帯の年代観を推定する。以下の文章では、志紀遺跡の地域花粉帯をS-I～IV帯、今回(大竹西遺跡)の地域花粉帯をI～IIIとして示す。

III帯：アカガシ亜属が卓越し、スギ属を伴うことから、S-III帯あるいはS-IV帯に相当する。両遺跡とも、出土遺物、あるいは¹⁴C年代測定値から得られる年代観が一致する。

II帯：マツ属(複維管束亜属)、アカガシ亜属が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴うことから、S-II帯に相当する。志紀遺跡では、古墳時代前期～鎌倉時代頃の植生を表していると考えられている。

I帯：マツ属(複維管束亜属)が卓越することから、S-I帯に相当する。また、スギ属の出現傾向からb亜帯にb亜帯が、a亜帯にa亜帯が相当する。志紀遺跡では、b亜帯が中世、a亜帯が近代の植生を表していると考えられている。

(4) 各花粉帯の推定年代

上記の(1)～(3)の事を踏まえ、各花粉帯の表す時期を以下のように推定できる。

III帯 : 縄文時代晩期～弥生時代前期以降弥生時代後期後半まで

II帯 : 古墳時代前期以降鎌倉時代頃

I帯 b 亜帯 : 中世以降

I帯 a 亜帯 : 近代以降

古環境変遷

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

(1) III帯期(縄文時代晩期～弥生時代前期以降弥生時代後期後半)

最下部のNo.7 地点試料No.3 からも、高率でイネ科(40ミクロン以上)が検出されることから、III帯期の初期から遺跡内および周辺には水田が広がっていたと考えられる。この時期には河川の氾濫や流路移動が相次ぎ、水田を次々に覆っていったと考えられる。

遺跡東方の生駒山地や、南方の金剛・葛城山地の山麓から山腹には、カシ類、シイ類を要素とする照葉樹林が広く分布していたと考えられる。山地の中腹から山頂には、スギ、モミ、ツガを要素とする、温帯針葉樹林(中間温帯林)が分布し、金剛・葛城山地の山頂部にはブナ林(冷温帯林)も分布したと考えられる。

(2) II帯(古墳時代前期以降鎌倉時代頃)

イネ科(40ミクロン以上)が高率で検出されること、ほぼ水平な堆積状況であること、遺構が検出されていることなどから、遺跡内および周辺には水田が広がっていたと考えられる。水田はいわゆる「掻き上げ田」であり、深い部分ではヒシやコウホネなどが生育していたと考えられる。一方浅い部分ではソバの栽培も行われていたと考えられる。また遺跡内では、西部ほどイネ科(40ミクロン以上)の出現率が高く、東部ほどカヤツリグサ科など雑草の出現率が高い。したがって、東部と西部で利用形態が異なっていた可能性も指摘できる。

前時期に山麓から中腹に広く分布していた照葉樹林は、おそらく人間により伐採され、アカマツ林(二次林)に変わっていったと考えられる。

(3) I 帯 b 亜帯(中世以降)

遺跡内から周辺の低地(あるいは、河内平野の大部分)では水田が広がっていたと考えられる。また、休耕田や畦を利用してソバやナタネも栽培されていた可能性がある。一方、「河内木綿」のもととなる「ワタ」の花粉は検出されなかった。

生駒山地、金剛・葛城山地の山麓から山頂近くまで、現在認められるようにアカマツ林(二次林)で覆われていたと考えられる。

(4) I 帯 a 亜帯(近代以降)

平野部の景観は b 亜帯期と大差がなかったものの、山地部ではアカマツ林が伐採され、スギの植林が行われたと考えられる。

まとめ

花粉分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集を I ~ III 帯の 3 花粉帯に分帯できた。さらに I 帯、III 帯をそれぞれ a, b 亜帯に細分した。

(2) 鉄剣埋納坑の埋土について検討した結果、埋納坑内の土は「NR601」に由来する可能性を指摘した。

(3) 各花粉帯の示す時期について以下のように考察した。

III 帯 : 縄文時代晩期~弥生時代前期以降弥生時代後期後半まで

II 帯 : 古墳時代前期以降鎌倉時代頃

I 帯 b 亜帯 : 中世以降

I 帯 a 亜帯 : 近代以降

(4) 縄文時代晩期頃以降の古植生変遷を推定した。

引用文献

川崎地質株式会社(1995)志紀遺跡(93-西区)における花粉・珪藻分析. 志紀遺跡 一大阪府営志紀住宅建て替えに伴う発掘調査報告書一, (財)大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書, 91, 67-76.

中村純(1974)イネ科花粉について, とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 1 87-197.

渡辺正巳(1995)花粉分析法. 考古資料分析法, 84, 85. ニュー・サイエンス社

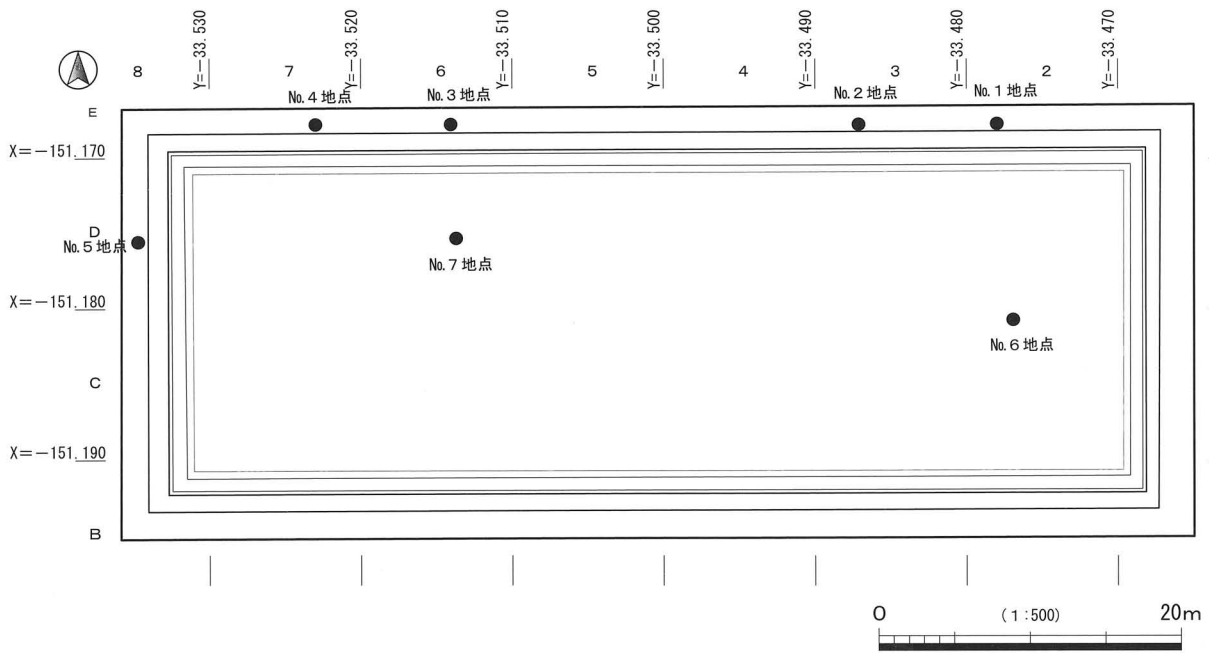


図1 花粉分析試料採取地点

大竹西遺跡No. 1地点

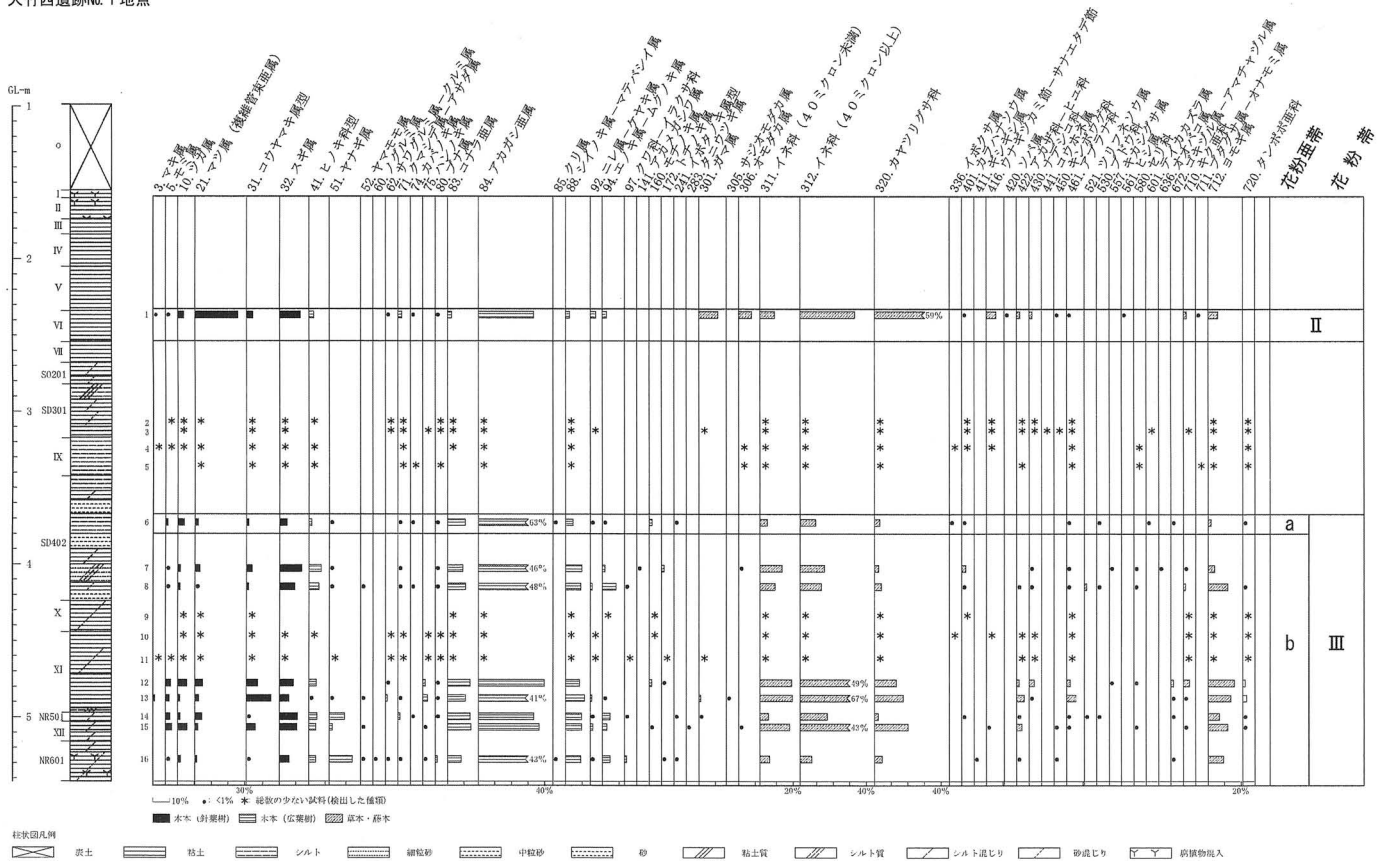


図2 No. 1地点の花粉ダイアグラム

大竹西遺跡No.2地点

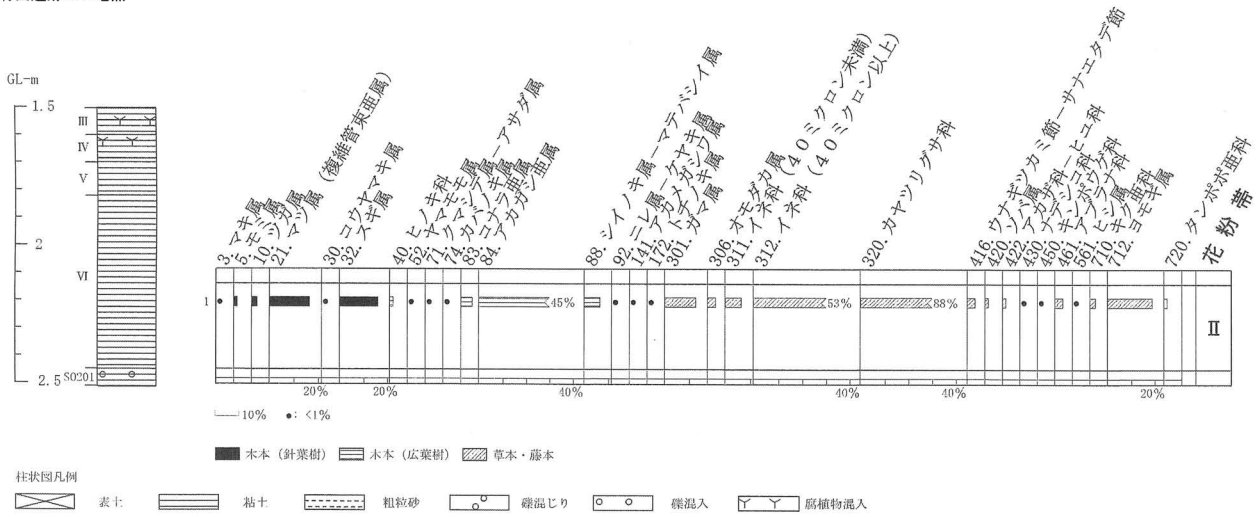


図3 No.2地点の花粉ダイアグラム

大竹西遺跡No.3地点

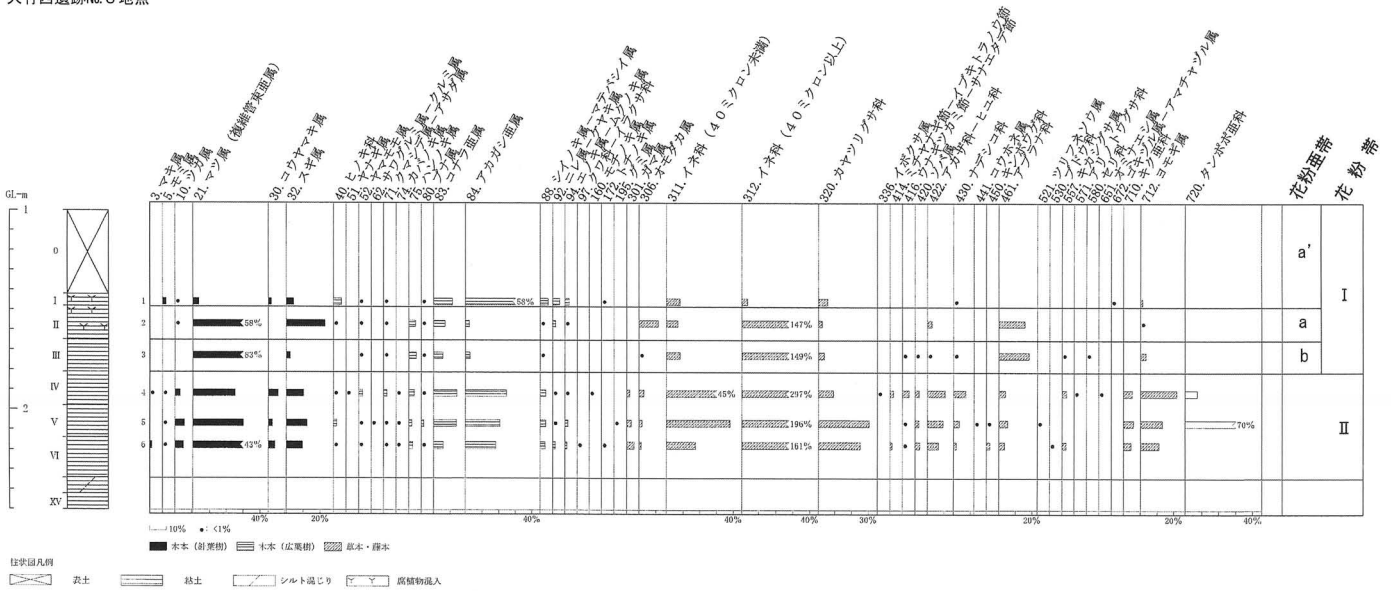


図4 No.3地点の花粉ダイアグラム

大竹西遺跡No.4地点

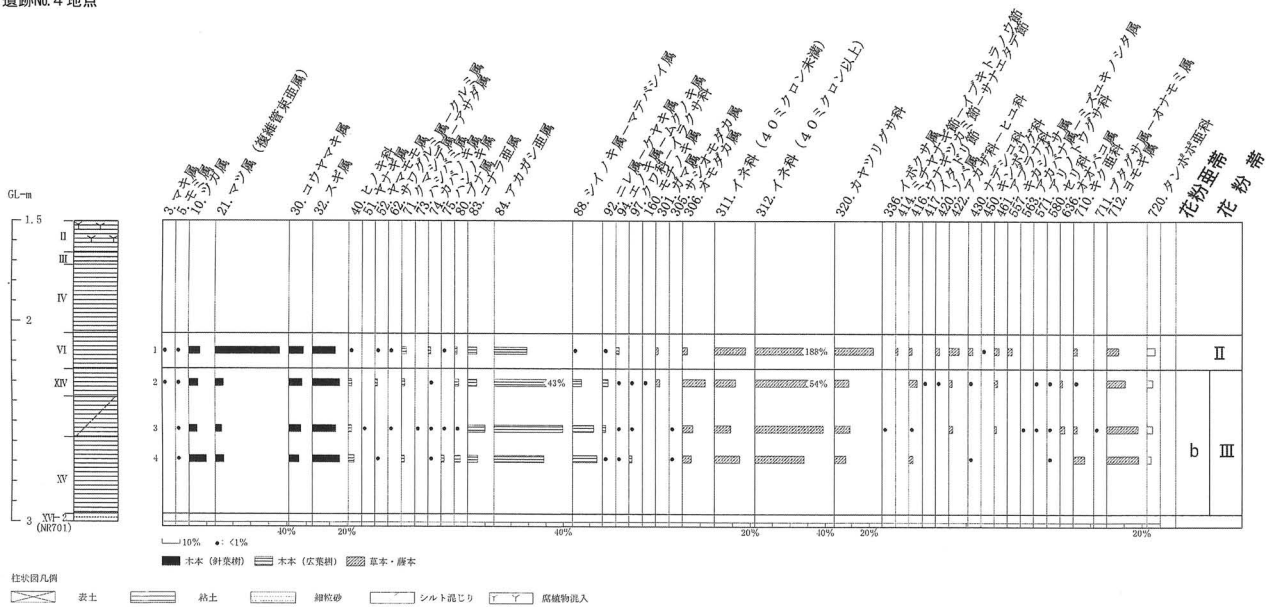


図5 No.4地点の花粉ダイアグラム

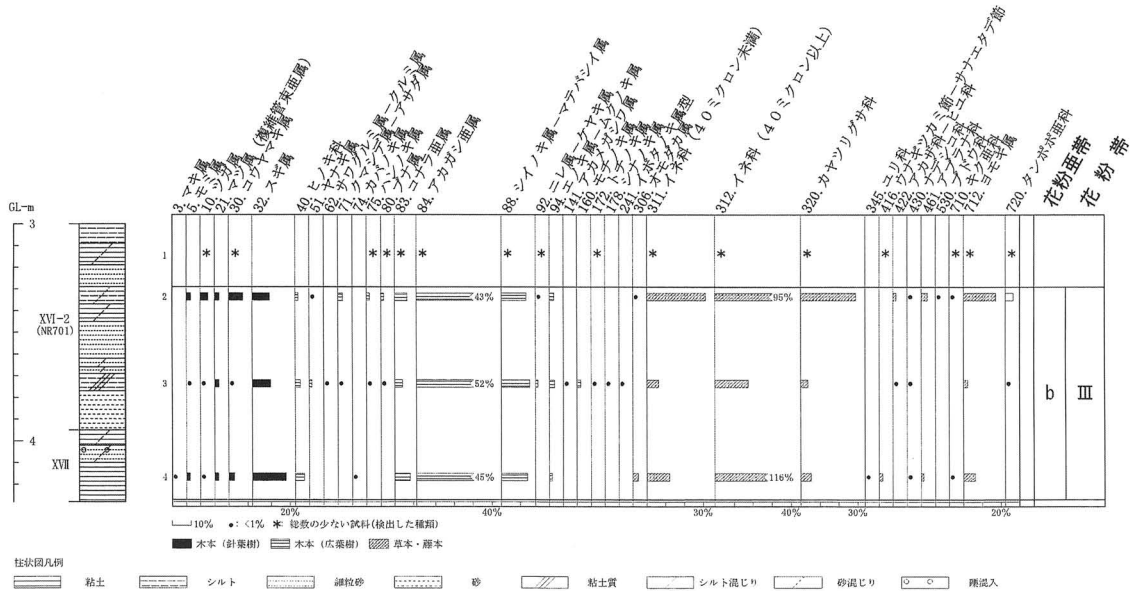


図6 No.5 地点の花粉ダイアグラム

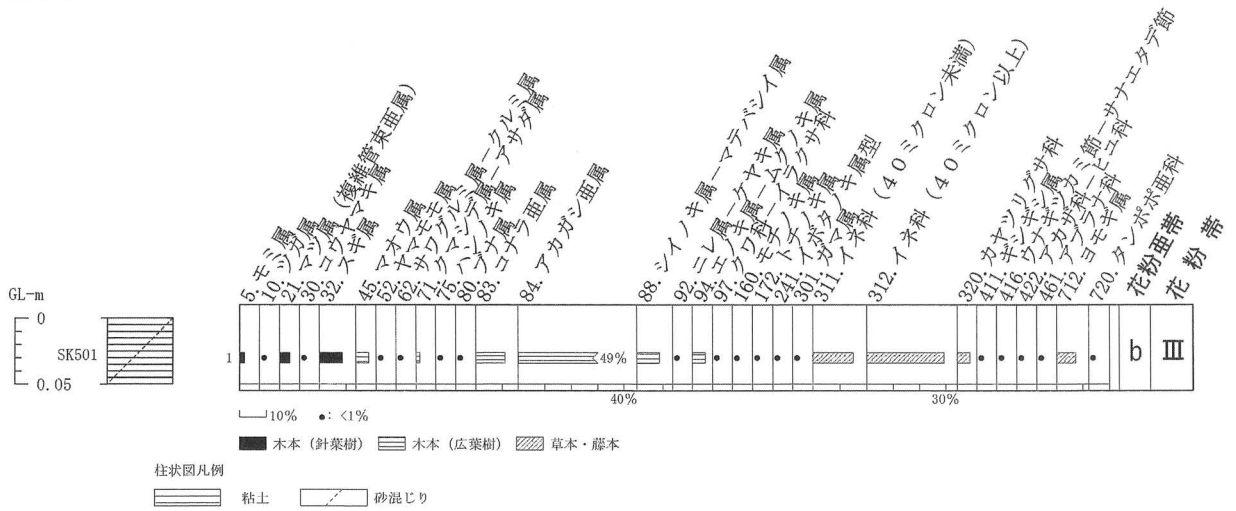


図7 No.6 地点の花粉ダイアグラム

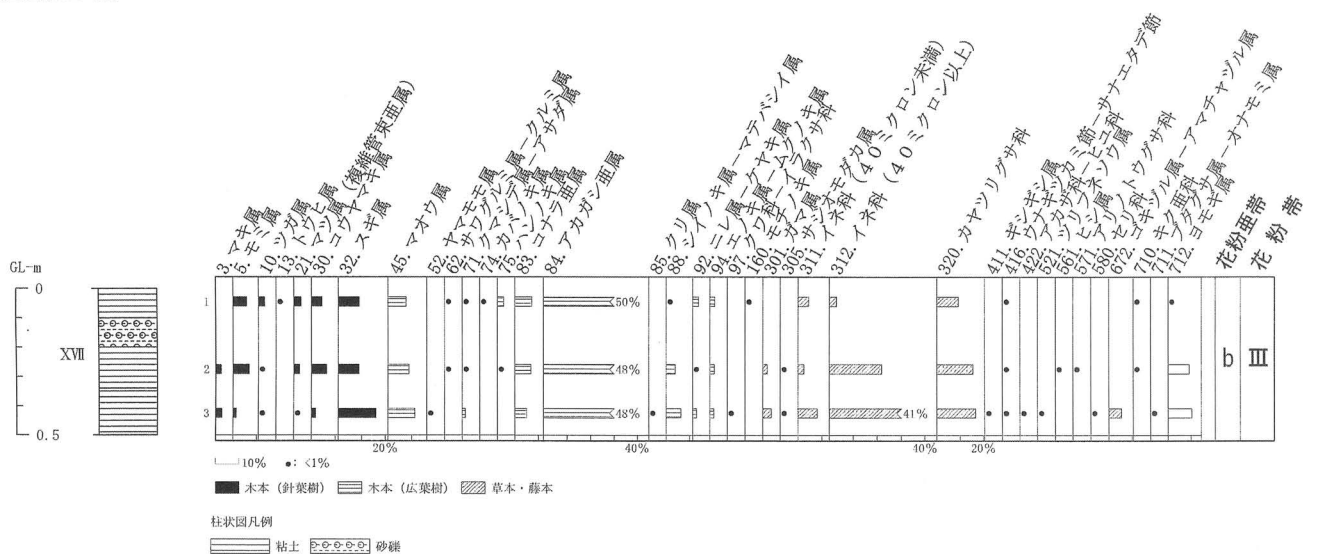


図8 No.7 地点の花粉ダイアグラム

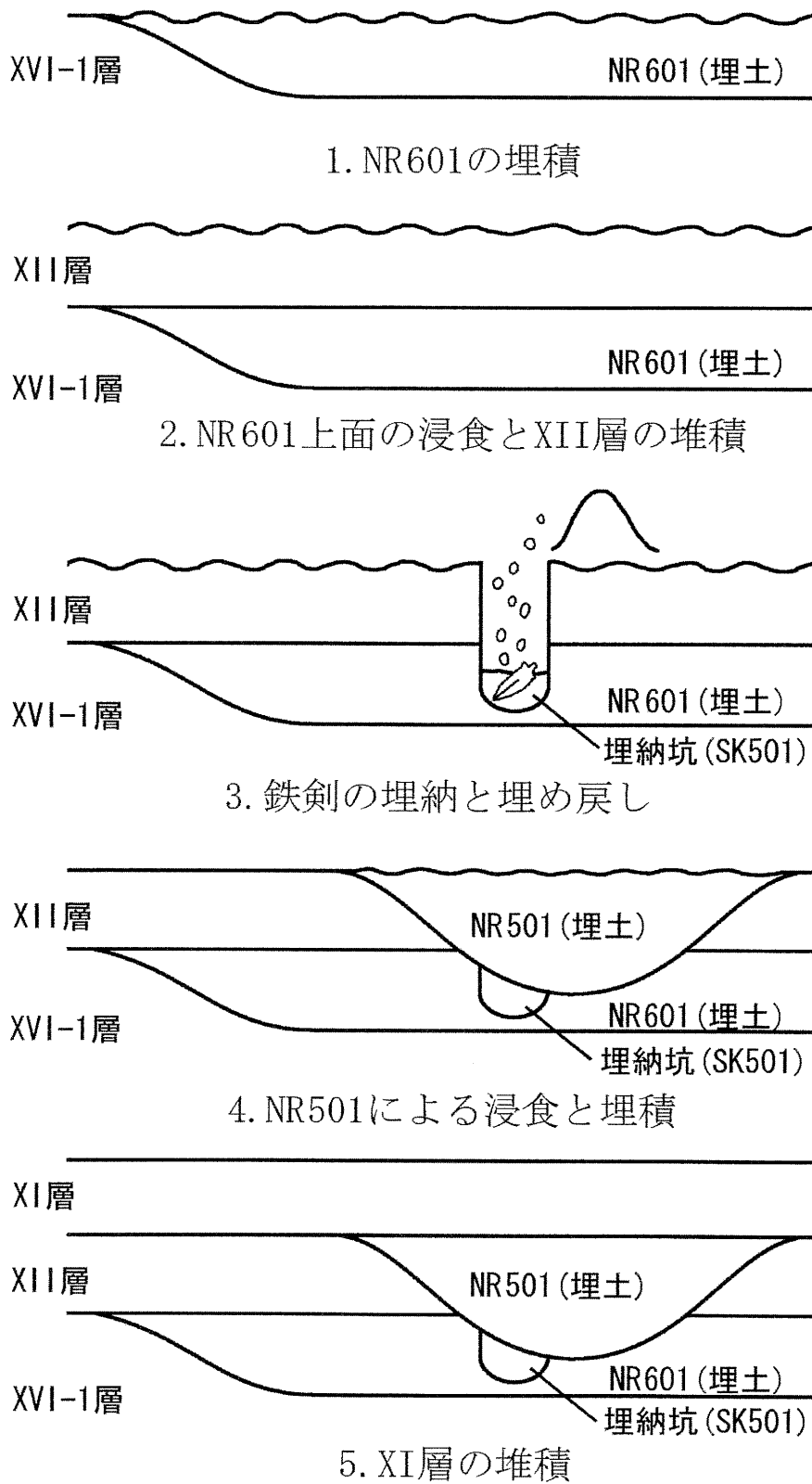


図9 鉄剣埋積過程推定図

第5節 大竹西遺跡の弥生—古墳時代埋没河道堆積物と河川地形

(財)東大阪市文化財協会 松田順一郎

1. はじめに

大竹西遺跡第3次発掘調査では、弥生時代前期から古墳時代中期までに形成された埋没河道が検出され、現地表面の起伏にあらわれた旧地形からは推測できない過去の河川地形を観察することができた。この発掘成果は、局地的な地形発達のみならず、氾濫原全体の古環境復元にとって重要な意義をもつと考えられる。本稿ではこの埋没河道を構成する河川堆積物とその累重様式を検討し、同遺跡における河川堆積作用と河道形態の変遷を推測する。本稿は、粒度分析を含む堆積物の検討、発掘担当者との意見交換などを経て、すでに発表した論文(松田, 1998)の内容を修正し、加筆したものである。

なお、ここで河川堆積物とは、流路充填堆積物、ポイントバーなどの流路縁の側方堆積物、自然堤防やクレバスプレーを構成する越堤および破堤堆積物を指す。

2. 調査地の位置と周辺の微地形、表層地質

大竹西遺跡は河内平野沖積低地の南東部に位置し、八尾市北東部の大竹、西高安町、上尾町一帯に広がる(図1)。本遺跡では1990年以來の発掘調査によって、弥生時代前期から室町時代までの遺構、遺物が検出されている(八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会, 1991; 高萩千秋, 1992; 西村・樋口, 1997)。

調査地の西方約1kmには、旧大和川の分流路の一つであった玉串川のもっとも新しい河道跡・自然および人工堤防跡の高まりが南北にのびており、東方には生駒山地西麓南部の扇状地扇端部の緩斜面が近接している。遺跡範囲はこれらに挟まれた後背湿地に含まれ、現地表面の標高(以下T.P.とする)は約7mである(図1)。

調査地近傍(図1・図2のLoc. a)のボーリング資料(河野ほか, 1992)によると、T.P.約-7m以下に更新統上部の沖積基底礫層および埋没低位段丘相当層がみとめられ、その上位に層厚約4mで薄い砂層が2枚挟まれる沖積中部泥層、層厚約2mの沖積上部砂層が累重する。沖積上部砂層を海域を直接埋積した堆積物(三角州前置層)とし、頂部陸成層をその上位の自然堤防帯を発達させた湖沼を含む陸域の堆積物(三角州頂置層)(井関, 1983)とすれば、T.P.0m付近の粘土層以上が後者に相当すると思われる。これまでの発掘調査で得た知見から判断して、この粘土層の上部は、水平層理をなし、ヨシの根や匍匐茎の痕跡をとどめ、しばしば植物遺体、腐植などの有機物に富むことから、後背湿地ないし湖沼の静水域で堆積したと考えられる。その堆積時期は出土遺物から縄文時代晩期から弥生時代前期(約3000~2300年前)であろう。また、この上位にみられる砂泥互層のうち、おおむね砂は河川堆積物、泥は後背湿地の静水域の堆積物(上部では水田耕作土を含む)である。

別のボーリング資料(図1・図2のLoc. b)によると、遺跡の西南西方で、玉串川分流路跡の西側では、弥生時代に堆積し、沖積頂部陸成層の下部に相当すると思われる層準に、層厚2~3mの厚い砂礫層がみとめられ、河川堆積物とみなされる。これらのことから、弥生時代に本遺跡付近

を流下していた河川は、現在の玉串川分流路跡付近を北流していた比較的大規模な河川と並行して、一定期間に機能していたと考えられる。

いっぽう、北東方の扇状地下位面で、T. P. 10~15mの地表下 2~3mには後背湿地の泥層が広く分布し、同層中から弥生土器が出土することから(東大阪市内楽音寺遺跡第 1・2 次発掘調査、報告書未刊行)、弥生時代には現地表面でみられる扇状地の末端はより山地寄りに位置し、扇状地下位面の中・下部(T. P. 約 15mより下位部分)が形成されるのは弥生時代後期から古墳時代以後である。これらのことから、山地側から直接流入する河川ではなく、旧大和川の分流路のひとつが調査地付近を南から北へ流下するのに十分な後背湿地の領域があったと考えられる。また、この分流路は玉串川分流路跡付近を流下していた河川から分岐したものである。ただし、その支流には、山地斜面を集水域とするものがあつた可能性もある。このことは、後節で述べる河道充填堆積物の岩石種にも反映してる。

3. 河川堆積物の観察方法

大竹西遺跡第 3 次調査区は、東西約 60 m、南北約 20mの矩形をなし、この調査区ほぼ全域の、T. P. 約 5~2.5m間に、弥生時代前期から古墳時代中期までの河川堆積物が分布した。埋没河道は、おおむね南南西方向から調査区にはいり、わずかに屈曲して北に向きを変えていた。そのため調査区北壁では、埋没河道の直交断面を観察することができた。堆積物の観察は、堆積層断面全体が明らかになった調査終了直前に行い 7 か所で堆積層の粒径組成や堆積構造を記録するととも

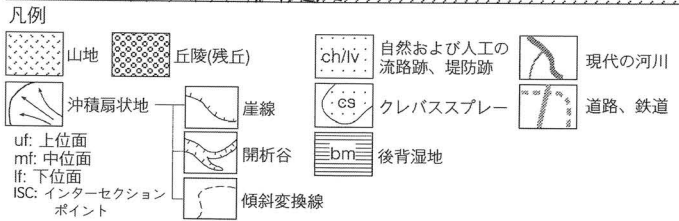
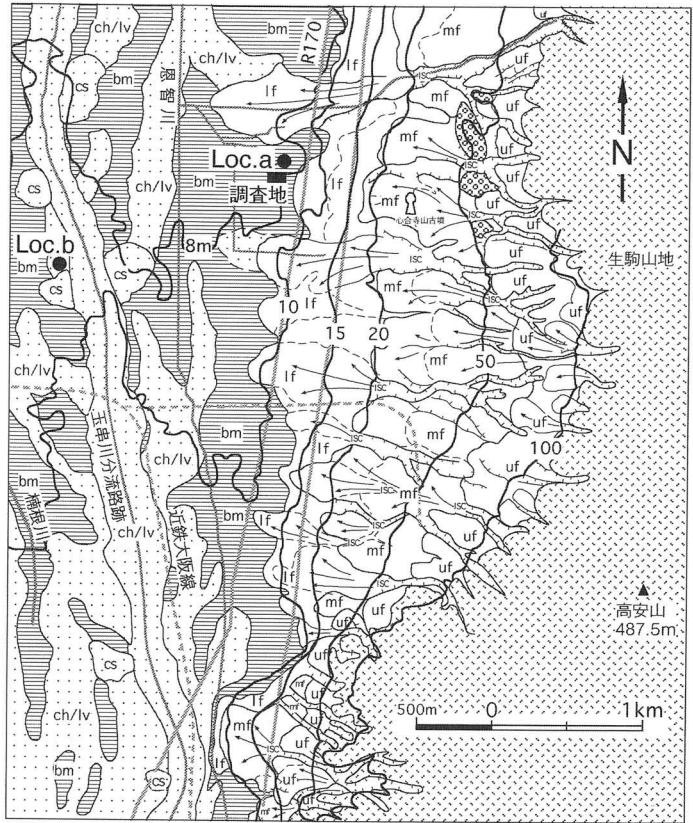


図 1 大竹西遺跡周辺の地形

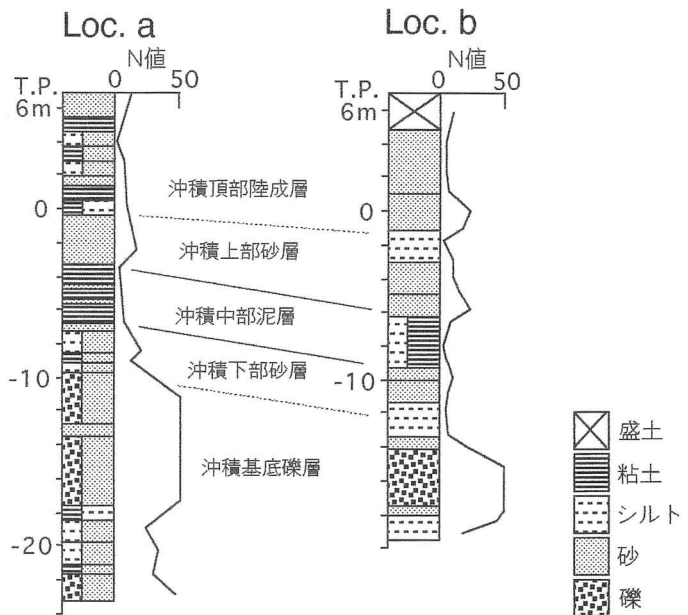


図 2 調査地点近傍と玉串川分流路跡西側のボーリング柱状図(河野ほか, 1992による)

に、室内での検討に備えて堆積物試料を採取した。これらのうち、5 か所の試料については粒度分析をおこない、現地での観察結果と合わせて、いくつかの堆積相を認定した。粒度分析では、細礫以上の粒径の礫は試験篩を、極粗粒砂以細の砂については沈降管分析装置を用いて 1φ ごとに重量の出現頻度を調べた。シルトと粘土については、ピペット法により 4~6φ (粗粒のシルト)、6~8φ (細粒のシルト) および 8φ 以細(粘土)の各粒径階の出現頻度を求めた。

断面全体にわたる堆積層の累重関係については、発掘調査において作成された断面実測図を参考に、現地での観察結果と写真記録のトレースによって、考古学的な分層にとらわれず復元を試みた。この結果、後述する堆積ユニットが区分された。以上の作業にもとづいて河川堆積作用と河道形態を推測した。

4. 河道充填堆積物の岩石種

調査地の埋没河道は、すでに述べたように旧大和川の分流路であったと推測されるが、河道を充填する砂礫が同川起源のものであるかを確かめるため、粗略ではあるが、岩石種の出現頻度を調べた。ここでは各時期の堆積層ごとの結果ではなく、断面中央部東寄り、弥生時代中期のいくつかの堆積層からまとめて採取した試料を対象にした。試料は細粒の中礫 (fine pebbles, 4~8mm) 以上の粒径の礫、岩石種の同定は肉眼観察による。岩石種の分類項目は、黒雲母カコウ岩、有色鉱物をほとんど含まないカコウ岩、閃緑岩、安山岩、砂岩、チャート、その他の堆積岩 (凝灰質砂岩、凝灰岩など) である。これらの出現頻度を図 3-a に示す。検出された埋没河道充填堆積物では、カコウ岩類と砂岩、チャートが大きな割合を占める。とくに砂岩の出現頻度が高い。

この結果を現在の大和川・石川合流点付近と、生駒山地から流下する箕後川の河床 (調査地の北方約 500m) で採取した砂礫試料の岩石種構成 (松田 1994) と比較した (図 3-b)。比較試料はおおむね粗粒砂より粗粒の砂礫について観察されたもので、大竹西遺跡の試料はこれらより粗粒の礫を含む。そのため前者では運搬中で破碎されて細粒化しやすい風化の進んだカコウ岩、閃緑岩の出現頻度が相対的に高く、堆積岩類の出現頻度は低い。このような点に留意して、石川合流点より下流に流入する堆積岩類の割合と、生駒山地から流入するそれを比べると、前者のほうがはるかに高い。

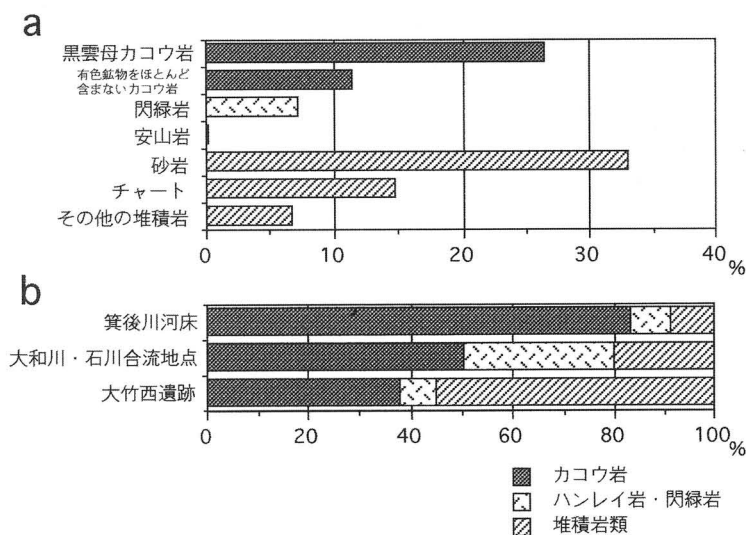


図 3 河道充填堆積物の岩石種構成

さらに箕後川試料中の堆積岩類は山脚に残丘として分布する大阪層群下部からのもので、本遺跡東方にも分布するが (図 1 の丘陵部分)、このことを考慮しても、大和川流域からの堆積岩類の流入量は多く、大竹西遺跡の試料も同川によって運搬され堆積したと判断される。ただ、大和川・石川合流点の試料と本遺跡の試料では、閃緑岩に対するカコウ岩の割合が後者のほうが相対的に高く、本遺跡より上流で東方の山地に分布する黒雲母カコウ岩体から供給された

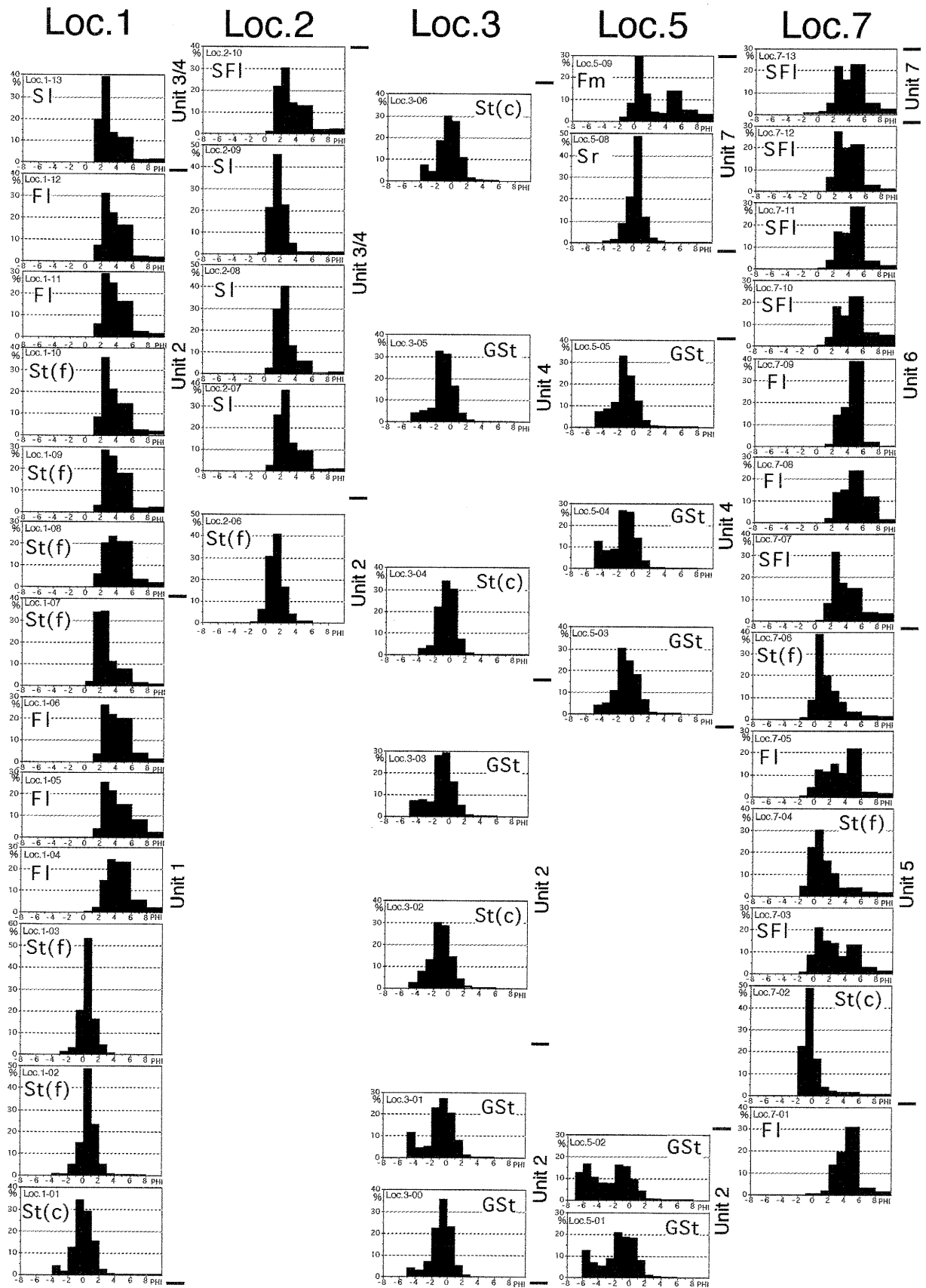


図4 河川堆積物資料の粒径頻度分布と堆積相

可能性がある。供給源についてはより詳細な鉱物分析が必要である。

5. 堆積相

Miall(1996)の河成堆積相の分類にもとづき、さらに細分のため一部変更・追加して、調査地の堆積相を以下のように区分した。各堆積相に対応する粒径頻度分布を図4に示す。

GSt:トラフ型斜交葉理・層理をなす砂礫で、ひじょうに礫がちである。極粗粒の中礫(very coarse pebbles, 64~32mm)以細の礫を含むが、細礫と極粗粒砂が卓越する。層理のセット高は10~30数cmで、デューンやラージリップルが卓越する河床形 bedform)であったと考えられる。

St(c):トラフ型斜交層理・斜交葉理をなす砂礫で、極粗粒の中礫以細の礫を含むが、おもに細礫~中粒砂からなる。層理のセット高は5~20数cmで、ラージリップルが卓越する河床形であったと考えられる。

St(f):トラフ型斜交層理・斜交葉理をなす砂で細礫を含むが、おもに粗粒砂~極細粒砂からなる。また、粗粒のシルトを含むことがある。層理のセット高は2.3cm~10数cmで、ラージリップルおよびスモールリップルをなす河床形であったと考えられる。

Sp:プラナー型(あるいは平板状)斜交層理・斜交葉理をなす砂礫で、中粒の中礫(medium pebbles, 16~8mm)以細の礫を含むが、極粗粒砂~中粒砂が卓越する。粒径頻度分布は、St(c)に似る。

Sr:スモールリップル葉理をなす細礫まじりあるいはシルト質の粗粒砂~細粒砂からなる。砂の淘汰は良い。スモールリップルの波長は数cm~20cm前後、高さは5cm以下である。

S1:低角度ないしは水平の平行葉理をなす砂からなり、細粒の中礫(fine pebbles, 8~4mm)以細の礫がしばしばまじる。ひじょうに浅いトラフ型斜交葉理をともなうことがある。中粒砂~細粒砂が卓越し、淘汰が良い。

SF1:おおむね水平葉理をなすシルト質の中粒砂~極細粒砂で、有機物に富む泥や、木本および草本の植物遺体破片の葉層が挟まれることがある。浅く幅の狭いトラフ型斜交葉理やスモールリップル葉理がまれにともなう。

F1:有機物に富む砂質シルト~シルト質粘土で、中粒砂~極細粒砂の葉層が挟まれることがある。また、しばしば木本および草本の植物遺体破片の葉層が挟まれたり、葉理の互層をなす。流水~静水が交替する堆積環境下での堆積相と考えられるが、上記のSF1に薄層として挟まれることがある。これまでに述べたS1、SF1、F1は、泥・砂の割合で、S1、St(f)は堆積構造の違いで区別した。

Fm:塊状でしばしば有機物に富む砂まじりシルト質粘土。塊状を呈するのはおもにヒトを含む生物の擾乱による。本調査地の河川堆積物より上位にみられる耕作土層も本相に含める。

以上の堆積相は、現地で観察した7か所の柱状図とともに図5-bに示す。

6. 堆積ユニット

トラフ型斜交層理や平行層理など、一連の堆積構造のグループからなり、侵食面や再活動面(reactivation surface)に境される coset を堆積層断面の層理から検出しさらにこれらを、一時

期の河川堆積地形あるいは堆積的アーキテクチャをなすと考えられる coset のグループ(側方の同時異相を含む composite set。McKee and Weir(1953)の定義による。)としてまとめ、記載上の堆積ユニットとした。その結果、7つの堆積ユニットが区分された。各堆積ユニットの時代・時期は、出土遺物の相対年代から推定した(図 5-a)。各堆積ユニットは形成期間と河川堆積物の累重の規模からみて、Miall(1996)の定義した、 $10^2 \sim 10^3$ 年に一回の変化で区分される第4オーダーの堆積ユニットに相当し、 $10^0 \sim 10^1$ 年に1回の流況や河川形態の変化で区分される第3オーダーの堆積ユニットを含む。以下に堆積相と堆積層の累重様式からみた各堆積ユニットの特徴を記載し、河川の堆積作用や河道形態を推測する。

堆積ユニット1(Loc.1の下部、Loc.2の最下部、約2300年前)

本堆積ユニットは上位の堆積ユニット2に流路側の堆積物が侵食されており、断面西端からLoc.2までの間約7mに限って観察された。西端部では、河川堆積物の基盤をなすF1の上に、St(c)-St(f)-F1, St(f)の順に、1~1.3mの厚みで累重する。下部のSt(c)は基盤をなすF1をほとんど侵食しておらず、その最下部には洪水堆積物の特徴である逆級化成層(増田・伊勢屋, 1985)がみとめられる。クレバスチャネルが延長されて発達した流路の堆積物であろう(Farrel, 1987, 115-116)。上部の水平の層理をなすF1, St(f)は、洪水時に堆積し、流路側壁を構成した自然堤防堆積物と考えられる。これらはF1の薄層によって流路側に傾斜して切られており、緩やかな凹凸をなして流路底に続いている。自然堤防の流路側が河流によって侵食され、その侵食面に洪水ピーク後の水位低下時にF1がドレイプしたものであろう。さらに、その上位層準にあたる流路側(Loc.1)にも同様の自然堤防堆積物の累重が側方に付加されたかたちでみとめられる。Loc.1では、F1とSt(f)の互層が上方粗粒化する2回のサイクルがみとめられる。St(f)は逆級化成層をなす。

自然堤防堆積物のF1はひじょうに泥がちであることや、流路側壁にドレイプしたF1が流路底に連続し、あまり侵食されていないことから、増水時の浮流荷重の割合が高い河流であったと考えられる。また、流路縁に泥質堆積物が堆積することによって、河岸の侵食が妨げられるため、蛇行の波長は長く、屈曲度は小さい河道形態が発達したと考えられる(Schumm *et al.*, 1987, 177-178; Schumm, 1981, 24)。新たな自然堤防の累重が明瞭な侵食面に境されて側方に付加されることから、侵食と堆積作用が交替し、間欠的に流路が移動したと考えられる。これらのことから、本堆積ユニット上部なす河道は、クレバスチャネルが一旦放棄された後に形成された、後背湿地の排水流路で、流量が増し、流路縁が大きく侵食された際にのみ側壁が明瞭な形態をなすような流路であったと推測される。流路側の新しい自然堤防堆積物の累重も斜交するF1で切れ、堆積ユニット2の流路側壁と自然堤防の堆積物が載る。

堆積ユニット2(Locs.1・2の中・上部、Locs.3~5の下部、弥生時代前期後半、約2200年前)

本堆積ユニットは、東西両端部を除き断面中央の下部に連続する。東部と中央部では、基盤をなすF1に浅い洗掘の跡が数か所でみとめられ、そのもっとも深いLocs.3・4間で厚さ1~1.2mである。下位より、GSt(局所的Sp)-St(c)-Sp-St(c)あるいはGSt-Spの順で累重し、上方細粒化する流路充填堆積物の層相を示す。上面は、堆積ユニット3~5に侵食されている。断面西部のLoc.2では、堆積ユニット1が侵食されて生じた流路側壁斜面上に載るF1の上に、SF1, St(f)-St(f)が

累重し、上方粗粒化する累重が2回みとめられる。Loc.1 付近以西では、堆積ユニット1の自然堤防頂部に載り、厚みを減じてF1が累重する。以上のLoc.3から1への堆積相の変化は、流路内から流路側壁、および自然堤防への側方の細粒化を示している。

上述した基盤の洗掘とGs(t)の堆積は、堆積ユニット1の堆積環境が一変し、掃流荷重の割合が高まり、流路幅が増大したことを示す。洗掘の断面形には右岸側に急な斜面をなす非対称形のものがあり、曲流外側の攻撃斜面の侵食をとまなう流路の側方移動が推測されるが、充填堆積物の層理には顕著な側方堆積作用がみとめられない。そのため侵食をとまなう大きな流出の後に、時間間隙をおいて砂礫が堆積しはじめたと考えられる。流路内の上方細粒化する累重中で、下部のGStは3Dラージリップル、上部のSpは舌状砂州(linguoid bar)ないし横断砂州(tranvers bar)や砂原(sand flat)をつくっていたことを示唆する(Cant and Walker, 1978, 644-646)。また、このような河床形にとまなう、滯筋が分岐した網状流路が発達し、河道形態は直線的で不安定であったと考えられる(Miall, 1985, 67-68; Schumm, 1981, 24)。

本堆積ユニット最上部で、Loc.2 以東の数mの間では、流路側壁をなすSF1と、流路充填堆積物でSpの上位のSt(c)が指交している。前者の累重はポイントバーの側方堆積作用を示し(Miall, 1985, 55-58)、後者はそれにとまない、滯筋の分岐がかなり減少して、北北東から北に緩やかに屈曲する流路に堆積したものと考えられる。河道形態は、掃流荷重が卓越するため、顕著な蛇行流路ではなかったであろう。本堆積ユニット上部の堆積時期から始まる流路内の側方堆積作用は、上位の堆積ユニットでさらに顕著となる。なお、流路側壁の平行層理が指交部分で見かけ上屈曲しているのは、洪水ピーク後の水位低下時に付加されたSF1が、その後側壁基部が侵食され、下方にずり落ちて、トラフ型の斜交層理に挟み込まれたためである。変形構造の一種だが、堆積時には当然液性限界をこえていると思われ、地震動ほどでない外力によっても流動化したり、それ自体の重さでずり落ちる。

堆積ユニット3(Loc.3 中部、弥生時代前期後半、約2200~2100年前)

本堆積ユニットは、断面中央部から西部にかけて分布する。流路充填堆積物の層相はSt(c)、GStで、50~80cmの厚みをなす。そのトラフ型斜交層理は東側の層理が西側の層理を切るかたちで重なる。また、流路側壁には、堆積ユニット2から継続してSt(f)、SF1が累重し、ポイントバーが発達する。流路側壁を越えた堆積物はLoc.2やLoc.1付近の上部にみられ、S1、St(f)、SF1である。これらの層相が上方細粒化して累重し、自然堤防堆積物を構成する。このうちS1は高い流れ領域(upper flow regime)の堆積相(Davis, 1992, 232-233)とみなされ、流路縁から溢れた河流の流速が大きく、相対的に多量の堆積物を運び出したことを示している。この自然堤防堆積物の上面は後世の人為的な削平によって本来の形態が失われている。なお、断面図loc.1,2以西のT.P.4.7~5mには、一見本堆積ユニットの堆積物が載っているようだが、堆積ユニット4や場合によっては5と同時期の堆積物の可能性がある。土壌化しているため明確な分層ができなかった。

自然堤防堆積物とポイントバー堆積物の厳密な区別は困難であるといわれる(Reineck and Singh, 1980)が、ここでは前者を流路縁の外側にはほぼ水平の層理をなして上方に累重するものとして区別する。

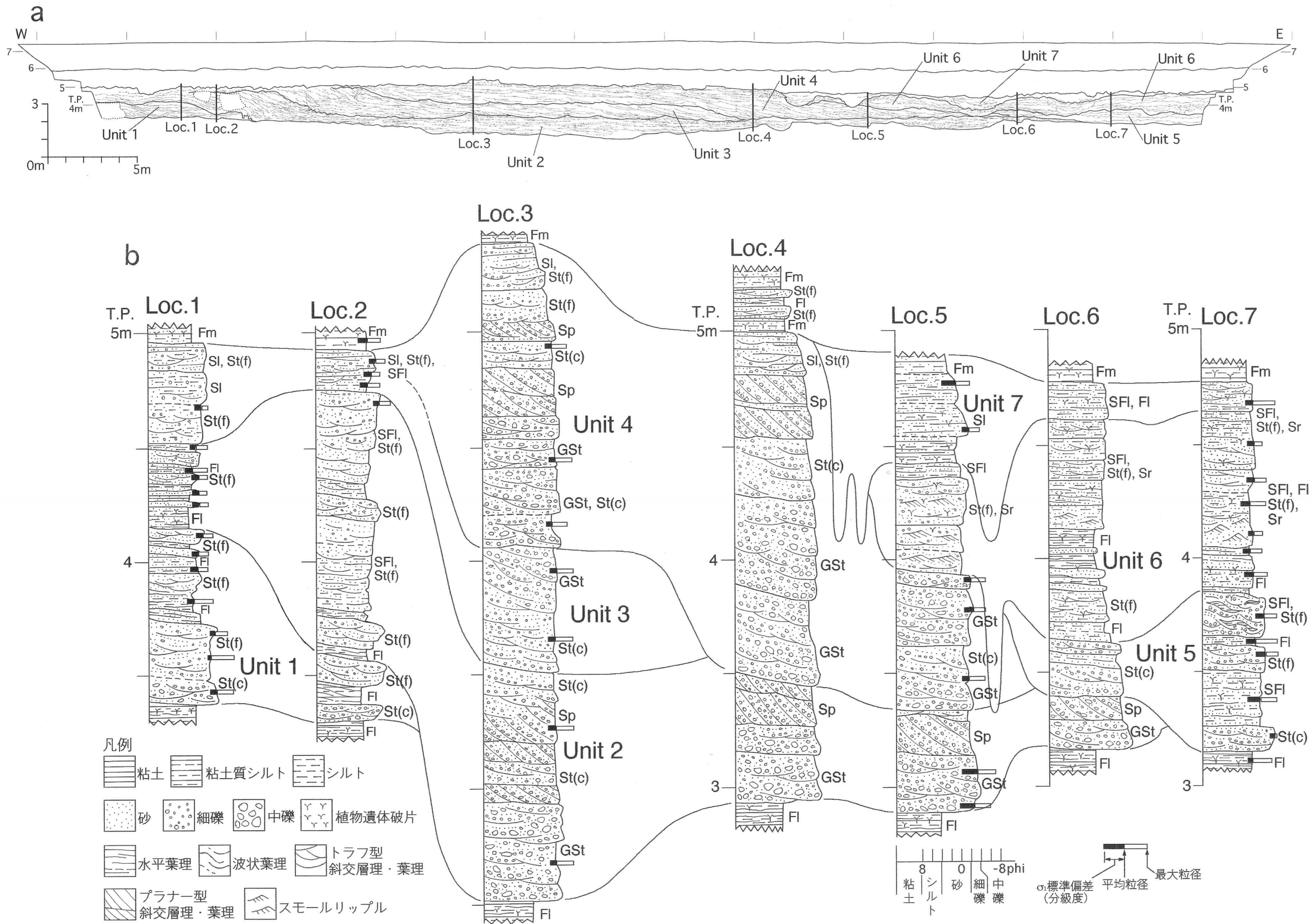


図5 大竹西遺跡第3次調査区北壁の堆積層断面と柱状図

堆積ユニット4 (Loc. 3 上部・Loc. 4・Loc. 5 下部、弥生時代中期、約 2100～2000 年前)

本堆積ユニットは、東西両端部を除く断面中央部に連続してみられる。東半部では深く、堆積ユニット2の上部を侵食しており、Loc. 4での厚みは約1.5mである。西半部では薄く、下底は浅くなる。一連の河川堆積層の最上部が削平をまぬがれているLoc. 3での厚みは約1.3mである。Loc. 3では、下位より GSt, St(c)-Sp-St(c)-Sp-St(f)-S1, St(f)、Loc. 4では GSt-St(c)-Sp-S1, St(f)の順で累重し、ともに上方細粒化する流路充填堆積物とその上位の自然堤防堆積物からなる。上部の自然堤防堆積物 St(f)中にも細粒の中礫に細の礫に富む葉層がみられ、浅い洗掘の跡を充填している。

流路充填堆積物の層理の切り合いから判断すると、堆積ユニット3上面のテラス状の浅い部分が充填された後、Loc. 4以東の深い部分が充填されている。このことから流路は同地点以東に移動し、Loc. 4付近の上方細粒化する累重がポイントバーを構成したと考えられる。本堆積ユニット上部にみられる Sp は Loc. 4以東に滞筋が移動する過程で、浅くなった西側の滑走斜面あるいは小規模な平坦な侵食面上に生じた横断砂州の堆積構造と考えられる(Stewart, 1981, 14-16)。

上述した堆積ユニット2上部および堆積ユニット3・4は、さかんな側方堆積作用、ポイントバー形成と自然堤防形成を特徴とする、緩やかな曲流河川の堆積物と推定される。また、これらの堆積過程では掃流荷重が粗粒化あるいは増加するとともに川幅水深比が増大し、より不安定な河道形態に変化したと思われる(Schumm, 1981, 24; Schumm *et al.*, 1987, 137)。

堆積ユニット5・6 (Loc. 5 中部～Loc. 7、弥生時代後期初頭～後期前半、約 2000～1900 年前)

本堆積ユニットは、断面東部にみられる。Loc. 6では、下位より St(c)-F1-St(f)-F1-SF1, St(f), Sr、Loc. 7では下位より St(c)-SF1-St(f)-F1, St(f), SF1-F1-SF1, St(f), Srの順で累重する。堆積ユニット5の下底は、堆積ユニット4と2を侵食しているが、前者との境界は再活動面(reactivation surface)で、粒径が一段と細粒化する以外は、むしろ漸移的な印象を受ける。そのことから、堆積ユニット4で側方移動してきた河道がわずかに侵食され、その後荷重を急激に減少させつつも、堆積ユニット5が充填され始めたと考えられる。Loc. 7、堆積ユニット5下部の St(c)はおおむね一時期の滞筋を充填するもので、同地点上方の St(f), SF1とLoc. 6の St(c)とが同時異相をなしており、滞筋がLoc. 6(西側)に移動している。以上のことから、この分流路はその上流で本流から切り離され、放棄河道となりつつあったことがわかる。

ユニット6の左岸側(Loc. 5)ではSt(f), Srが下位の堆積物をいくらか侵食して堆積しているが、流路の最深部にあたるLoc. 6ではこれらと指交して泥がちのF1が卓越する。堆積ユニット5・6のF1やSF1に含まれる砂は、葉層として挟まれることが多く、多量の植物遺体細片のほか、増水時に運搬されてきた樹木の幹が堆積層中に挟まれることもある。同時に、主として増水時に流路内に運び込まれる堆積物が、すでに周辺で陸化し、植生をともなう自然堤防や後背湿地起源のものを含んでいること、すなわちこの河道が、後背湿地の排水流路になりつつあり、埋積が進んでいたことを示唆する。さらに、外水氾濫の際の水位・流速の増減にともなう堆積と、静水に近い状態での堆積が繰り返されたと考えられる。堆積ユニットと同様に流路の定向的な移動はみとめられない。堆積ユニット5・6の堆積時期から、河床や自然堤防上で遺構形成が始まる。

堆積ユニット7 (Locs. 5~7 上部、弥生時代後期後半~古墳時代中期、約1900~1600年前)

本堆積ユニットは、堆積ユニット6の上位に分布する。Sr・St(f)などの顕著な流水の影響を示す堆積相を欠き、水平葉理をなすSF1・F1および生物擾乱をこうむったFmが累重する。また、エピソード的な洗掘によって小規模な流路が生じたのち、F1ないしFmで充填されている。堆積ユニット3および4の上部で形成された流路左岸側の自然堤防上面は、この時期にいつそう土壌化が進んだと思われる。以上の堆積ユニット5~7は放棄流路の堆積相で、上方細粒化する一連の累重をなす。このような徐々に掃流物質を減じる堆積相の累重は、蛇行流路のシュートカットオフによって形成される放棄河道の充填堆積物にみられる(Allen, 1965, 155-156)が、類似した累重が、分岐角度の小さい分流路の放棄に際しても形成される可能性を示している。

7. まとめと課題

弥生時代前期から古墳時代中期までの約700年間の河川堆積物の累重中には、多くの時間間隔が含まれる。しかし、 10^2 年オーダーでの堆積作用と地形発達という点では、幅60mにわたる埋没河道の横断面で、氾濫原における一本の分流路の発生から終息にいたる変遷をたどることができた。堆積ユニット1から7までの検討から推測された河川堆積環境と河川地形の変化は、以下のようにまとめられる。

堆積ユニット1：下部一クレバススプレー、クレバスチャネル、あるいはその延長流路。上部一緩やかに曲流する泥質河床・河岸の流路。後背湿地の排水流路。間欠的な河岸浸食と流路の移動。

堆積ユニット2：下部一河床の洗掘。洗掘溝の充填。直線的な河道で、河床には砂州が発達し、滯筋は網状流路をなす。上部一緩やかな曲流河道。ポイントバー、自然堤防の発達が始まる。

堆積ユニット3：緩やかな曲流河道。河道の継続的な側方移動とポイントバー形成による堆積ユニット2最上部の侵食および河道の再充填。

堆積ユニット4：堆積ユニット3上部の侵食、河道の再充填。堆積ユニット3をベースメントにした広いポイントバーのアグラデーションとその自然堤防化。自然堤防の拡大、上昇。流路の東方への移動。蛇行半径の大きな曲流路。

堆積ユニット5：堆積ユニット4の末期の流路の侵食、再充填。荷重の減少と細粒化。間欠的な流量、流速の増大(恒常的な河流の減少)。放棄河道化。自然堤防の土壌化。

堆積ユニット6：放棄流路の充填。荷重の細粒化、流路後背地からのウオッシュロード、植物遺体の流入。後背湿地の排水流路化。旧河道内での狭い滯筋の移動。人工流路の掘削。

堆積ユニット7：堆積ユニット上面の狭い流路充填。荷重の細粒化。流速、流量の低下。人工流路の掘削。堆積ユニット上面で生じた旧河道の埋積終了。

以上の各堆積ユニットから推測される河道形態や水理条件にかかわるパラメータの相対的な変化を図7にまとめた。ただし、パラメータ相互の因果関係は経験的なデータによって導かれており、さらにここでは直観と粗略な計算にもとづく。河岸満水流路幅(W_b)は、各ユニットに含まれるさらに小さな第3オーダーの堆積ユニットに注目し、その左岸流路縁とみなされる位置から最深部までの水平距離を W_b の2/3とみなす方法(Allen, 1966)を目視で適用した。河岸満水深 D_{max} はその最深部の深さである。河床勾配(S)は W_b と D_{max} の積に反比例すること(おもにSchumm(1972)の経験式 $S=0.0020W_b^{-0.06}D_{max}^{-0.91}$)を参考とした。河岸満水流量(Q_b)は、 W_b と D_{max} から想定され

る満水時の流路の断面積および流路勾配に比例すること(たとえばWilliams(1998)の経験式 $Q_b = 4.0 A_b^{1.21} S^{0.28}$ など)を念頭にアレンジした。運搬土砂量(L)は、Sと Q_b の積に比例すると考えられる。ただし、これは河道内の堆積量を示すのではなく、むしろ、ストリームパワーの関数とみなされる(チャーレーほか(1995)。stream power、流れによってなされた仕事量あるいはエネルギー損失。水の単位堆積あたりの重量、河岸満水流量および流路勾配の積。後2者は、川幅、水深、平均流速と流路勾配の積ともみなせる。また $LD_{50} \propto SQ$ 、 D_{50} は粒径頻度分布の中央値)。また、調査地周辺の後背湿地の高さ(H_{fp})は、本遺跡の過去の調査記録(八尾市教育委員会・八尾市文化財調査研究会, 1991; 高萩, 1992)を参照した。

なお、図7には堆積ユニット1下部のクレバスチャネルをプロットしていない。同ユニット上部の後背湿地の排水流路と考えられる河道の幅はその後の相対的な変動から、堆積ユニット5までの流路のなかで最も狭いと判断した。ユニット5以後の実線は、より以前に形成された自然堤

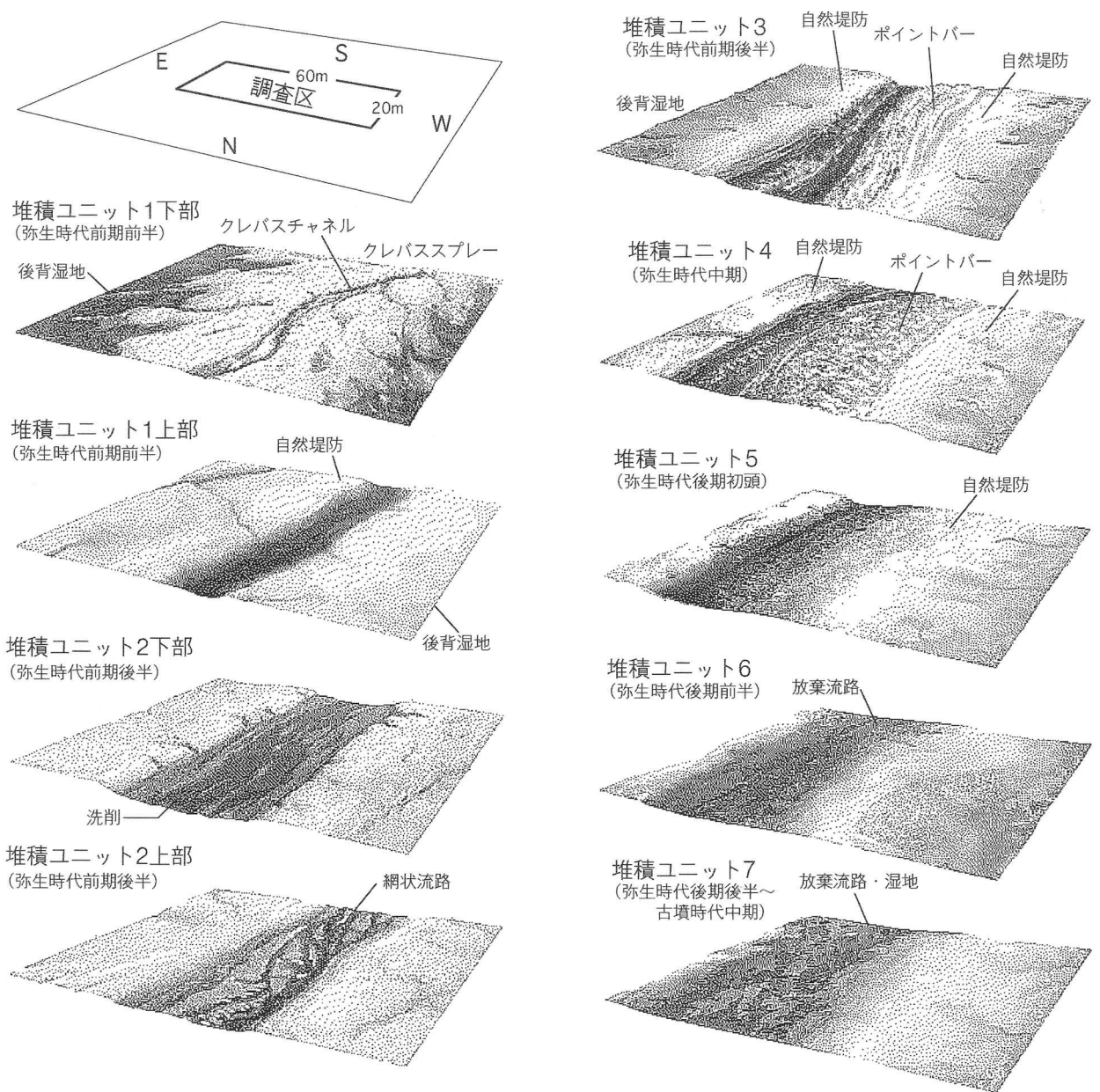


図6 埋没河道の堆積層から復元される河川地形の変遷

防の流路側を満水時の河岸とした場合、破線は河床に形成された狭い河道の流路線を満水時の河岸とした場合を示す。

ごく概念的な図であるため、細部について論述できないが、同図の各パラメータの変動から、まず、弥生時代前期にあたる分流路発生期からその直後の時期(堆積ユニット1~3)とその後の放棄河道となるまでの時期(堆積ユニット4・5)では、河川の挙動が異なると思われる。後背湿地に形成された河道の河口が、延進して堆積ユニット1~3のSが低下することは、河道形態とほぼ調和的である。また、堆積層断面でみると、堆積ユニット2の自然堤防部分がひじょうに速く上昇している。ある運搬土砂量に対して過剰に流路勾配が大きく、さらに間欠的にはあれ、流量の大きかったことを示唆する。この場合、河川の自己調節、あるいはレジーム勾配(regime slope)に近づける応答(White *et al.*, 1982)として、洗掘、網状の滞筋、曲流(ポイントバー形成)を解釈しうる。これらの変化は、堆積作用の再活動を契機に起るのであろう。

堆積ユニット4・5の河道は、側方堆積作用を特徴し、東に流路を拓げて川幅水深比(W_b/D_{max})の大きい不安定な河道となった。断面では、曲流部の内側という局地的な特性もあるが、粗粒な荷重を大量に置き去りにしているという印象がある。Sは、この時期に増加し、いっぽう Q_b やLは計算上はわずかに増加傾向となるが、断面ではむしろ減少傾向にあったように見える。これらのことから、堆積ユニット4の河川は、それ以前の河川とほぼ変化しない容量を保ちながら、土砂を運搬せずに側方に移動していたと考えられる。流路勾配の増加がめだつ図になったが、流量に寄与するのはむしろ流路の断面積なので、それにこだわらなければ、この時期のアーキテクチャと河道形態の変化は、たとえば多雨化にともなう流量と土砂流出の増大といった上流側の制約(upstream control)ではなく、おもに基準面の変化、つまり下流側の制約(downstream control)に原因すると考えられる。

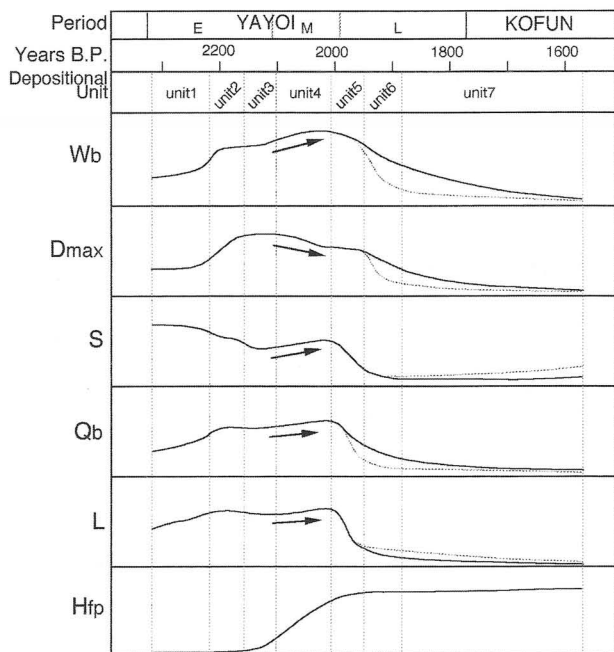


図7 埋没河道断面から推測される水理条件の変化

本遺跡の埋没河道のさらに下流(あるいは河口部)にあたる東大阪市域でのこれまでの調査結果で、縄文時代晩期の初頭にいわゆる「河内潟」の水位が、現在の海水準より低下し、その後、「河内湖」の湖面が縄文時代晩期後半から弥生時代を通じて上昇した後、古墳時代初頭頃に、現在の海水準付近で長期間停滞していたことが知られる(別所, 1996; 別所・松田, 1998)。この基準面の変動は、3000~2000年前のいわゆる「弥生の小海退」(海津, 1994)あるいは「埋積浅谷」の形成と、その後の基準面の上昇に並行する可能性が高い。堆積ユニット4の堆積はこの基準面の上昇期およびその末期にあたり、河道変更(avulsion)の頻度に対して相対的に堆積物の累重速度が卓越するような河川の応答(Todd, 1996)から、とくに河口付近の堆積空間(accommodation

space)の減少にともなう河道堆積ユニットの切り合いの頻度の増加と側方堆積作用の活発化(Emery *et al.*, 1996)への変化とみなすことができる。図7の H_{fp} の増加も、上述のような新たな河川システムのなかで置き去りにされたものと考えられる。このことについてより確かな説明を行なうためには、河内平野における同時期の埋没河道のアーキテクチャを検討する必要がある。なお、河内平野中央部の瓜生堂遺跡周辺でも、弥生時代中期に河川のさかんな側方堆積作用がみとめられる(松田, 1997)。

本調査で検出された埋没河道は旧大和川の主たる分流路から分岐したものである。その本流を高次の分流路とすれば、検出されたそれは、 $(n+1)$ 次の分流路とみなせ、その流路充填堆積物は、堆積作用の異なる 10^2 年オーダーの composite sets から構成されていた。考古学的な調査成果は、人間活動がこうした河川と後背湿地の地形発達とともに変化したことを示している。弥生時代中期には、第1次調査で明らかになったように、西方のさらに低次の分流路沿いで水田が営まれ、河道を横断して杭を打ち並べたしがらみ状の施設が作られていた。後期に、本調査区の分流路が放棄された段階では、その自然堤防に溝やピット、土壙などが残されていることから集落域になったと考えられる。また、堆積ユニット5の上面から土壙が掘り込まれ、鉄剣が埋納された。その後、河床には多数の杭が打ち込まれ、河川にちなむ活動が展開されたようである。この始まりは、あたかも異常な河川の振る舞いが治まるのを待っていたかのようなのである。第1次調査区でも、ほぼ同時期により低次($n+2$ 次)の分流路が放棄・埋積を終了しており、生活域が展開したようである(この放棄流路の充填堆積物とその累重パターンは本調査区のそれとは異なるようである)。このような、土地利用のパターンは、たとえば「乾燥した堤防」「流路縁と後背湿地」「機能中の河道」といった topographic な変異に関連するはずである(Macklin and Needham, 1992)。このような異なる空間的・時間的オーダーで河川地形発達や堆積作用の変化を解明してゆくことは、後氷期の沖積低地における人間活動の歴史の解釈をすすめるうえで重要である。とくに集落と耕作地の立地・開発環境に関する河内平野南部の地域全体にわたるパターンについてはまだ想像の域を出ていない。この問題に関して、河川地形学や堆積学の立場からは、分流路の分岐と堆積ユニットのオーダーの関係に注目し、氾濫原の発達過程を説明する必要があると思われる。

謝辞

(財)八尾市文化財調査研究会には貴重な報告書の一部を割いて本稿を掲載して頂いたことを感謝いたします。また、同会の西村公助・樋口薫の両氏には多くの資料や御教示を賜った。(財)大阪文化財調査研究センターの井上智博氏には現地での河川堆積物を観察する機会を与えていただいた。元岐阜教育大学教授水山高幸先生、関西大学教授木庭元晴先生にも貴重な御教示を賜った。断面の記録と試料採集にあたっては関西大学大学院辻康男氏の協力を、粒度分析には同僚の別所秀高の協力を得た。以上の方々に心よりお礼申し上げます。

付記

最後に述べたことと関連して、近・現代の河川と埋没河道には、それぞれに区別できる名称を与える必要がある。「古」長瀬川や「古」大阪川は位置と地質年代によって限定されるので問題は生じない。しかし、「旧」大和川の埋没した分流路に対して、現代の河川の近傍で検出されたことを

もって「旧」を冠する用法は、古地形や層序と整合を困難にする。また、本遺跡で検出された埋没河道は下部は「旧玉串川」で上部は「旧」恩智川などという混乱に陥る。最初に検出された遺跡名をとって「大竹西分流路A」などとし、位置と年代を限定すべきである。埋没河道の検出例を集成、命名して、漸次改訂してゆく作業が将来必要になるのであろう。その際、現地表面にみられる旧河道やそれにとまなう自然堤防跡については、たとえば「玉串川分流路跡」と呼んで問題はないと思われる。空中写真などによる地形判読などによって、このようなかたちで命名され得る分流路跡はかなりある。

引用・参考文献

- 井関弘太郎(1983):『沖積平野』, 東京大学出版会, 145p.
- 海津正倫(1994):『沖積低地の古環境』. 今古書院, 270p.
- 河野俊宏・本村武史・園辺聡也・松尾秀樹(1992):地盤情報データベースの構築とその活用に関する研究—東大阪地域の地盤を対象として—. 大阪工業大学平成3年度卒業論文, 56-67.
- 西村公助・樋口薫(1997):『大竹西遺跡第3次発掘調査—現地説明会資料—』.(財)八尾市文化財調査研究会, 3p.
- 別所秀高(1996):2章層序および遺跡形成過程. 別所秀高・パリノサーヴェイ『布施駅北口駐車場及び寝屋川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書』,(財)東大阪市文化財協会, 5-19.
- 別所秀高・松田順一郎(1998):大阪府河内平野完新統中・上部の堆積相開析と相対的海水準変動に関する予察. 1998年日本第四紀学会大会講演要旨集. 160-161.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ(1988):“逆グレーディング構造”:自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報, 22/23, 108-116.
- 松田順一郎(1996):池島遺跡第11次発掘調査報告.(財)東大阪市文化財協会『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 1992年度』. 49-68.
- 松田順一郎(1997):大阪府瓜生堂遺跡における弥生時代の河川地形発達と遺構形成過程. 大阪弥生遺跡検討会『大阪の弥生遺跡 I』, 33-40.
- 松田順一郎(1998):弥生・古墳時代の沖積低地河川堆積物—大阪府大竹西遺跡の事例—. 関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相』, 大明堂, 19-36.
- 八尾市教育委員会文化財室・(財)八尾市文化財調査研究会(1991):大竹西遺跡、現地説明会資料—I・II. 財団法人八尾市文化財調査研究会『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』, 34-55.
- 高萩千秋(1992):大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2). 財団法人八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(八尾市文化財調査研究会報告34)』, 99-110.
- Allen, J. R. L. (1965): A review of the origin and characteristics of Recent Alluvial sediments. *Sedimentology*, 5, 89-191.
- Allen, J. R. L. (1966): On bed forms and paleocurrents. *Sedimentology*, 6, 153-190.
- Cant, D. J. and R. G. Walker (1978): Fluvial processes and facies sequences in the sandy

- braided South Saskatchewan River, Canada. *Sedimentology*, 25, 625-648.
- チヨレー, R. J., シャム, S. A., サグデン, D. E. (1995): 『現代地形学』, 大内俊二訳. 古今書院, 316-356.
- Davis, R. A., Jr. (1992): *Depositional Systems*, 2nd ed. Prentice Hall. 222-237.
- Emery, D., M. Keith, G. Bertram, C. Griffiths, N. Milton, T. Reynolds, M. Richards, and S. Sturrock (1996): *Sequence Stratigraphy*. Blackwell, 297p.
- Farrel, K. M. (1987): Sedimentology and facies architecture of overbank deposits of the Mississippi River, False River region, Louisiana. In Ethridge F. G., Flores, R. M., and M. D. Harvey (eds.) *Recent Developments in Fluvial Sedimentology, Society of Economic Paleontologists and Mineralogists Special Publication*, 39, 111-120.
- Macklin, M. G. and S. Needham (1992): Studies in British alluvial archaeology: Potential and prospect. In Needham, S. and M. G. Macklin (eds.) *Alluvial Archaeology*. Oxbow Books. 9-23.
- MCKee, E. D. and G. W. Weir (1953): Terminology for stratification and cross-stratification in sedimentary rocks. *Geological Society of America, Bulletin*, 64, 381-389.
- Miall, A. D. (1985): Architectural-element analysis: a new method of facies analysis applied to fluvial deposits. In *Recognition of Fluvial Depositional System and Their Resource Potential*, Chapter 3, SEPM short course, NO. 19, 33-81.
- Miall, A. D. (1996): *The Geology of Fluvial Deposits: Sedimentary Facies, Basin Analysis, and Petroleum Geology*. Springer, 75-98.
- Reineck, H. -E. and I. B. Singh (1980): *Depositional Sedimentary Environments*, 2nd ed. Springer, 289-291.
- Schumm, S. A. (1972): Fluvial paleochannels. *Society of Paleontologists and Mineralogists, Special Publication* 16, 98-107.
- Schumm, S. A. (1981): Evolution and response of the fluvial system: sedimentological implications. *Society of Paleontologists and Mineralogists Special Publication* 31, 19-29.
- Schumm, S. A., M. P. Mosley, and W. E. Weaver (1987): *Experimental Fluvial Geomorphology*. Wiley, 129-191.
- Stewart, D. J. (1981): A meander belt sandstone of the Lower Cretaceous of southern England. *Sedimentology*, 28, 1-28.
- Todd, S. P. (1996): Process determination from fluvial sedimentary structures. in Carling, P. A. and M. R. Dawson (eds.) *Advances in Fluvial Dynamics and Stratigraphy*, Wiley, 299-350.
- White, W. R., Bettess, R. and Paris, E. (1982): Analytical approach to river regime. *Journal of the Hydraulics Division American Society of Civil Engineers*, 108, 117-1193.
- Williams, G. P. (1988): Paleofluvial estimates from dimensions of former channels and meanders. In Baker, V. R., Kochel, R. C., and Patton, P. C. (eds.) *Flood Geomorphology*. Wiley, 321-334.

第5章 まとめ

1) 遺構の変遷

縄文時代晩期

第XVII層黒色粘土が当該期に相当する。本層は、泥状を呈し炭化物を大量に含んでいたことから、C¹⁴分析を行った。その結果、測定年代は2630±90年である結果を得た。詳細は本書第4章に譲るが、この年代は縄文時代晩期に相当し、本調査地一帯が、湿地帯のような環境下にあったことが明らかになった。

弥生時代前期～弥生時代中期末

川幅60m以上を測るNR701が当該期に相当する。NR701の下層から出土した遺物は、縄文時代晩期に帰属する2点を除くと、前期中段階～新段階のものである。当研究会第1次調査(原田2007)では、前期の墓域を確認していることから、本河川を境に、西側が墓域として利用されていたことが判明した。ただし、この墓域を形成した集団の居住域については未確認である。

一方、中期中葉には、本河川の西側に展開していた墓域は、水田を中心とする生産域に変貌を遂げる。しかし、前期中段階～新段階同様、この生産域を経営していた集団の居住域については、位置は不明である。

弥生時代後期初頭

NR701の西側に形成された自然堤防上に展開する遺構群が当該期に相当する。遺構群は、調査区西端で集中して検出した。この内、SK602・SK603・SK614・SD615の中からは後期初頭の土器が出土した。遺構群の性格は、不確定要素を多分に含むが、概ね、居住域として利用していた可能性が高い。

一方、遺構群の東には、後背湿地が広がっており、NR601が南西―北東方向に流れていた。本河川からは、土器の破片が数多く出土し、なかには赤色顔料を塗布した土器および土製品もあった。また、枝を切り落とした径10cm程度の丸木や径50cm近くもある丸木が出土した。さらに、木杭がまばらに打ち込まれていた。以上のことから、本河川は、祭祀場や、貯木場として利用されていたことが考えられる。

本河川と同じような性格を有する遺構としては、中期末から後期初頭の遺物が出土した東大阪市の巨摩・瓜生堂遺跡の沼状遺構があげられる。同遺構は、中期には河川として機能していたが、その後、流れの変化あるいは水量の低下で沼状に変化したことが推測され、木製品(木製品も含む)が多く出土している(井藤1981)。

NR601がその機能を失い、陸地化が進行した段階において、鉄剣を埋めたSK501が構築される。当時鉄器は貴重品であったと思われるが、この剣を所有する集落がこの地一帯に存在した可能性が極めて高くなった。この頃まで西部では、居住域が存在していた。やがて、SK501を切るNR501が調査地東部を流れ、西部の居住域は廃絶した。

弥生時代後期前半

調査地東部で検出したNR501が埋没後、東部では、第XI層が堆積した。この層が当該期に相当する。同層からは廃棄したと考えられる土器群の出土を見た。この土器群には、時期差が認められないことから、本層は後期前半の比較的短期間に形成されたことが推定される。

弥生時代後期前半～後半

東部で検出したSD401～403とSD301～303が当該期に相当する。

SD401～403は、切り合い関係が存在するものの、出土遺物からは時期差は認められず、ほぼ同時期に機能していたことが明らかである。遺構の性格については不明である。

一方、SD401～403が埋没し、その上位に、IX層が堆積した後に、後期後半に帰属するSD301～303が構築される。SD301～303は並行して伸びるが、SD401～403同様、その性格は明らかでない。

後期中頃～後半にかけては、本遺跡の南東に近接する太田川遺跡において遺構・遺物が認められ(原田他1983)、さらに遺物包含層も確認されている(原田2007)。この結果は、本調査地で検出したSD401～403およびSD301～303の東側に当該期の居住域の存在を肯定するものとして特筆される。この場合、これらの溝は、居住域の西側を区画した環濠であった可能性が推測される。

一方、同時期の生産域については、池島・福万寺遺跡の池島I期で検出されており(廣瀬2007)、その有機的な関係が注目される。

古墳時代中期

東部で検出したSO201および土坑、小穴、溝からなる遺構群が当該期に相当する。

SO201には、南東―北西方向に直線的に並行して杭を打設していた。杭の配列からは、施設の存在を彷彿させるが、上部構造については不明である。

SO201の東側で検出した遺構群は、遺構内からの遺物の出土はなく、また、ほとんどの遺構の深さは0.1m前後と浅く、遺構の配列などの規則性が見出せなかったことから、遺構の性格は不明である。

当該期については、本遺跡の南東に近接する太田川遺跡において、5世紀後半～末の土器とともにフイゴの羽口、金床石、砥石、鉄滓等の鍛冶に関連した遺物が出土した(原田2007)。また、同遺跡の第1次調査でも5世紀末～6世紀初頭の土器とともに滑石の有孔石製品の未製品が出土した(坪田1994)。このことから同時期の居住域は、本調査地の東側に存在していたと推測できる。

古墳時代中期末～平安時代末期

古墳時代中期末～平安時代後期までは第VII層、平安時代後期～末期までは第VI層が堆積した。この層が当該期に相当する。古墳時代中期の遺構が廃絶した後、平安時代末期までは遺構の検出はなく、遺物の出土も極少量であった。当研究会第1次調査(原田2007)では奈良時代の遺構を検出しているが、散発的な検出状況で、居住域の中核からは離れた位置であると推測されている。

平安時代末期～鎌倉時代

第VI層上面で検出した水田および畦畔が当該期に相当する。平安時代末期～鎌倉時代の本調査地は、生産域であったことが判明した。畦畔は、10～12mのほぼ等間隔に構築している。また、畦畔の幅は約2m、高さ約20cmを測り、畦としては幅広で、畑として利用していた可能性がある。この水田は、池島・福万寺遺跡の第6面の条里型水田に相当(廣瀬2007)する。(西村・樋口)

参考文献

- ・原田昌則他 2007 『大竹西遺跡第1次発掘調査報告書』—大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う— (財)八尾市文化財調査研究会報告 94 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・井藤暁子他 1981 『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 (財)大阪文化財センター
- ・原田昌則 成海佳子 1983 「第3章 太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告 3 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則 2007 「1-2 太田川遺跡(2005-473)の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 55 平成18年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・廣瀬時習 2007 『東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在 池島・福万寺遺跡3—恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書—(池島I期地区)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第158集 (財)大阪府文化財センター
- ・坪田真一 1994 「Ⅲ太田川遺跡(第1次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告 42』(財)八尾市文化財調査研究会

2) 鉄剣について

近年、鉄製品については、非破壊分析または破壊分析を行い、鑄造か、鍛造かという判定を行っているものが多くあるが、分析の結果、鑄造品であると判定できる鉄剣はなかった。唯一、佐賀県・久保田出土の鉄剣が、形状や錆の状況などから鑄造ではないか(川越 1993)と述べているが、鑄造品であると断定はしてない。今回出土した本鉄剣は、X線撮影と表面観察の結果、鑄造鉄剣であることが判明した初例となるものである。

本鉄剣は長剣の中でも短茎式で、剣身下端に2個の目釘穴を持つ長剣B2型に分類(川越 1993)される。長剣B型は、中国にはみられず、南部朝鮮に類例があることから朝鮮製と推測されている。ただし、目釘孔を持つB1・B2・B3型の製作地は判らなく(川越 1993)、目釘孔は日本国内であけたとも考えられている。このことから本鉄剣は朝鮮半島から持ち込まれ、国内で目釘孔をあけた可能性がある。しかし、鑄造鉄剣の出土例は中国大陸および朝鮮半島にはないことから、国内のどこかで作った可能性も考えられる。

「有樋鉄戈が鑄造品であるならば、鉄・青銅の双方に通じた地域(北部九州)であるだけに試行錯誤の過程において製作された可能性は否定されるものではない(村上 1999)。」と述べていることから、北部九州の青銅器生産地のどこかで有樋鉄戈は作られたかもしれない。本鉄剣も国内の青銅器を鑄造する集落で作られたと考えることも可能である。

本鉄剣と同じ分類に属す例は、佐賀県横田遺跡の箱式石棺から出土した弥生時代後期の鉄剣がある。また、後期初頭に出土する鉄剣で、目釘孔を2個あけている例は、長崎県対馬シゲノダン遺跡の石蓋土壙墓から出土したものがあつた。さらに関から茎部分の平面形状が比較的類似し、2個の目釘孔を持つものは、福岡県門田北遺跡の中期後半のK24号甕棺、佐賀県みやこ遺跡の後期後半のSK405号土壙墓、熊本県下山西遺跡の終末期の箱式石棺出土例(川越 1993)があげられる。本鉄剣の類例は北部九州地域に多く見られ、それらの鉄剣は、大半が墓に副葬されている。

畿内における中期～後期初頭の鉄剣の出土例は本鉄剣のほかに、兵庫県有鼻遺跡の中期後半の居住域から出土した鉄剣(長濱 1999)がある。本鉄剣や有鼻遺跡の鉄剣は、墓以外の場所に埋められている。しかし、同時期の北部九州では墓に埋められており、埋める場所には違いがあったと指摘できる。

西日本(主に瀬戸内海沿岸、日本海沿岸)の主な遺跡からは、弥生時代中期～後期の鉄製品や青銅製品が出土している。ここでは、遺跡から出土する金属(主に鉄)に関連するものを取り上げ、本鉄剣が本遺跡に持ち運ばれたルートについて考えてみたい。

中国地方や四国地方の瀬戸内海沿岸では、弥生時代中期後半～後期の鉄剣の出土は稀である。

福岡県安武・深田遺跡の 50 号住居(鍛冶工房)からは、後期初頭の吉備系の土器が出土していることに注目し、畿内よりも吉備地方がより早くに北部九州の鉄器加工技術を摂取する動向を見せていた(野島 1996)と述べている。同住居から出土した吉備系の土器は、備中からの搬入である可能性が高く、吉備地方との併行関係から、1 世紀前半に相当(平井 1997・2002)する。

岡山県上東遺跡では後期初頭の波止場状遺構から貨泉が 1 枚出土(下澤 2001)し、同県高塚遺跡からは後期初頭の袋状土壇 18 から貨泉が 25 枚出土(江見 2000)した。また、高塚遺跡からは後期初頭の銅鐸埋納壇から突線鈕 2 式の銅鐸が出土(江見 2000)し、銅鐸を保有していた集落であったことも判明している。さらに、広島県小丸遺跡からは、弥生時代後期の製錬炉を検出しており、鉄生産が後期にはあったとされている(松井 2001)。

徳島県矢野遺跡では、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡 S B 1035 から鍛冶炉が確認され、鍛冶滓、三角鉄片、鍛造剥片、鉄素材が出土(湯浅 1995)した。鍛冶炉は、長楕円形で、炭化物と粘土を互層にして築く地下構造で、九州的な鍛冶遺構であると指摘(村上 1999)している。

一方、山陰地方の特に日本海沿岸における弥生時代中期～後期の主な遺跡からは、数多くの鉄製品が出土している。代表的な遺跡には、鳥取県西部の妻木晩田遺跡、同県中部の青谷上寺地遺跡、島根県上野 II 遺跡があげられる。

妻木晩田遺跡では後期前葉～終末期にかけての鉄器が出土している。その数は 250 点を超える。小型工具が多くあるが、機能の不明な鍛造の板状品や棒状品も多く出土した。これらは、鉄製品に加工するための鉄素材の可能性が考えられている(高田 2004)。青谷上寺地遺跡では、鉄器が合計 297 点出土した。そのほとんどは弥生時代中期～後期のものであり、このうち 13 点が鉄製武器で、また鍛冶関連の鉄製遺物は 129 点あり、集落内での鉄器生産が想定されている(野田 2006)。上野 II 遺跡では、後期後葉の竪穴建物 S I 06 から鍛冶炉を検出し、ヤリガンナや板状の鉄素材が出土している(久保田 2001)。

また、鳥取県宮内第 1 遺跡の第 1 号墓から後期後半の鉄剣が出土(池淵 2003)している。

山陰地方東部の日本海側にある京都府の丹後や兵庫県の但馬地域では、中期の遺跡から鍛冶遺構が検出され、後期の墓からは数多くの鉄製品が出土している。

京都府奈良岡遺跡では、弥生時代中期の鍛冶遺構が見つかり、鉄製品や鉄素材、鉄切片、針状工具が出土(河野 1997)している。後期初頭には、墳墓の中に素環頭鉄刀を副葬する同府三坂神社墳墓群(肥後 1999)があり、後期前葉の同府大山墳墓群 3 号墓からは、鉄鏃や河内地域から搬入された壺の出土(平良 1983)があった。後期中葉頃の同府古天王 5 号墓からは鉄剣と、河内地域から搬入された壺の出土(丸山 2001)がある。また、後期後半の同府大風呂南墳墓群の 1 号墓には、鉄

剣およびガラス釧や銅釧が副葬(白須 2000)されていた。さらに、後期末葉の同府赤坂今井墳丘墓では、鉄製武器や鉄製工具、玉製品、ガラス製品などを副葬(石崎 2004)している。

畿内、特に大阪府における弥生時代後期の鉄器が出土する遺跡は、高槻市の古曾部・芝谷遺跡、和泉市の観音寺山遺跡、八尾市の亀井遺跡などがあげられる。また、枚方市の星ヶ丘遺跡では後期後半の鍛冶遺構を検出(村上 1995)している。

古曾部・芝谷遺跡では、丹後系の土器 264 やヤリガンナと考えられる鉄器 5007 が出土した後期初頭の墓が検出(宮崎 1996)されている。土器は、棺内に破砕された状況で出土し、破砕土器供献と呼ばれる北近畿に共通する葬送儀礼が行われていたと指摘している(肥後 1998)。

観音寺山遺跡は標高 60~65m の丘陵上に環濠を巡らす弥生時代後期の集落で、住居や溝の中から弥生時代後期前葉~後葉の土器とともに鉄斧や鉄鏃が出土(辰巳 1999)している。

亀井遺跡では、S D 3036 から後期初頭の土器とともに鉄斧が出土(堀江 1980)し、N R 3001 からは後期初頭の土器とともに板状鉄斧が出土(赤木 1987)している。また、第IV~V様式の土器とともに銅鏃と貨泉が出土(堀江 1980)している。同遺跡では貨泉が合計 4 枚出土しており、後期初頭は紀元 1 世紀前半になる可能性が高いと推測できる。さらに、同遺跡から出土した後期初頭の高杯 23(宮崎 1984)は、中部瀬戸内地域から搬入されたもので、香川県小山西谷遺跡から出土した高杯 15(片桐 1994)と類似し、さらに福岡県板付周辺遺跡で出土した高杯 58(杉山 1986)とも類似する。これらの高杯を比較検討し、河内-瀬戸内-北部九州における土器の併行関係が明らかにされている(杉本 1996、平井 2002、森岡 2002、濱田 2006)。

これらのことから、中期~後期の鉄製品などは、北部九州から瀬戸内海を通り、河内、摂津、和泉などの各遺跡に持ち運ばれたと考えるのが妥当である。本鉄剣も、北部九州で作ったと仮定するならば、瀬戸内海を通り搬入されたと言えるかもしれない。しかし鉄製品の中でも特に鉄製武器が後期初頭~末葉の丹後地域の墳墓から出土していることや、古曾部・芝谷遺跡の例から推測すると、日本海側から鉄製品が搬入されたと考える必要もある。

最後に、本鉄剣が鑄造鉄剣であることで、「国内における鉄の鑄造はいつ頃、どこで開始したか?」「鑄造鉄剣はどこで作られたか?」などの課題があげられることになった。しかし、現時点での結論はでていない。今後、類例が増えることによって解決していくことに期待したい。(西村)

参考文献

- ・川越哲志 1993 『弥生時代の鉄器文化』雄山閣
- ・村上恭通 1999 『倭人と鉄の考古学』青木書店
- ・長濱誠司 1999 『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書IV-有鼻遺跡(1)-』兵庫県文化財調査報告第185冊 兵庫県教育委員会
- ・野島 永 1996 「近畿地方の弥生時代の鉄器について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集-創立十五周年記念誌一 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・平井典子 1997 「弥生時代後期における中部瀬戸内と北部九州の交流」『古代吉備』第19集 古代吉備研究会
- ・平井典子 2002 「中・四国から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会 2002 年度 榎原大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2002 年度 榎原大会実行委員会

- ・下澤公明 2001 『下庄遺跡 上東遺跡』主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 岡山県教育委員会
- ・江見正己 2000 『高塚遺跡 三手遺跡2』山陽自動車道建設に伴う発掘調査18 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 岡山県教育委員会
- ・松井和幸 2001 『日本古代の鉄文化』 雄山閣出版
- ・湯浅利彦 1995『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 6 1994年度 (財)徳島県埋蔵文化財センター
- ・高田健一 2004 「妻木晩田遺跡における鉄器生産に関する覚え書き」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2003』鳥取県教育委員会
- ・野田真弓 2006 『青谷上寺地遺跡出土品調査報告書2 鉄製遺物の自然科学的研究』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告9 鳥取県埋蔵文化財センター
- ・久保田一郎 2001 『上野Ⅱ遺跡』一弥生後期集落及び鍛冶関連遺跡の調査一 中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10 島根県教育委員会
- ・池淵俊一 2003 「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」考古資料大観 第7巻 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品 小学館
- ・河野一隆 1997 「(2)奈具岡遺跡(第7・8次)」京都府遺跡調査概報第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- ・肥後弘幸 1998 『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府中郡大宮町〔北部マスターズビレッジ整備事業関連遺跡発掘調査報告書〕(京都府大宮町文化財調査報告書 第14集)大宮町教育委員会
- ・平良泰久 1983 『丹後大山墳墓群』京都府丹後町文化財調査報告 第1集 丹後町教育委員会
- ・丸山次郎 2001 『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』京都府弥栄町文化財調査報告第19集 弥栄町教育委員会
- ・白須真也 2000 『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書 第15集 岩滝町教育委員会
- ・石崎善久 2004 『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第24集)峰山町教育委員会
- ・村上泰通 1995「星ヶ丘遺跡の鍛冶遺構について-近畿地方における鉄器供給問題-」『みづほ 第15号』大和弥生文化の会
- ・宮崎康雄 1996 『古曾部・芝谷遺跡』-高地性集落の調査-本文編 高槻市文化財調査報告書 第20冊 高槻市教育委員会
- ・辰巳和弘 1999 『大阪府和泉市 観音寺山遺跡発掘調査報告書』同社大学歴史資料館調査報告書第2冊 同社大学歴史資料館
- ・宮崎泰史他 1984 『亀井遺跡Ⅱ』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ (財)大阪文化財センター
- ・堀江門也他 1980 『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪文化財センター
- ・赤木克視他 1987 『亀井(その3)』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 (財)大阪文化財センター
- ・片桐孝浩 1994 『小山・南谷遺跡』平成5年度 県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

- ・杉山富雄他 1986 『板付周辺遺跡調査報告書(11)』下水道工事に伴う調査(1984・85年度)福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集 福岡市教育委員会
- ・森岡秀人 2002 「近畿から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会 2002年度 榎原大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2002年度 榎原大会実行委員会
- ・杉本厚典 1996.10 「東部瀬戸内と北部九州の弥生時代後期初頭の土器編年の平行関係」『香川考古 第5号』香川考古刊行会
- ・濱田延充 2006 「弥生時代後期初頭の実年代に関する覚書」『喜谷美宣先生古希記念論集』喜谷美宣先生古希記念論集刊行会

3) 弥生時代後期初頭の土器について

NR601 から出土した後期初頭の土器の中には、特異な文様を施す壺 102~104 および、吉備の胎土とされた高杯 127、讃岐の胎土とされた高杯 133 など、他地域から搬入された可能性があるものがあつた。これらの土器の類例を示したうえで、河内地域の主な遺跡における土器の搬入例を紹介したい。

壺 102~104 は外面に鋸歯文、渦巻文、貼り付け突帯などを施す。類例には、巨摩・瓜生堂遺跡の沼状遺構上層(河内V-0様式)から出土した壺(巨摩・瓜生堂P.L.20資料1・2 動態Ⅲの図IV-1-126 1448)がある。この壺は、生駒西麓産の胎土で、頸部に断面四角形貼り付け突帯、以下、斜線文、三重竹管文を半截竹管直線文でつなぎ渦巻文風にみせたもの、櫛描き直線文、さらに渦巻文、波状文、直線文を施し、突帯部分および竹管で描かれた渦巻文部分には赤彩を施している。同遺構上層からは吉備地域から搬入された土器(巨摩・瓜生堂第62図1)も出土し、また、同遺構上層と同時期の後期V(Ⅲ)遺構面からは、後期初頭の讃岐系と思われる土器(動態Ⅲの図IV-1-26 7)が出土している。さらに後期V(Ⅲ)遺構面からは、貨泉も出土(井藤 1981・村上(富)1996)しており、後期初頭が紀元1世紀前半になる可能性が高いことを指摘しておきたい。

高杯 127 は吉備の胎土(本書第4章)で、同じ形状および文様を施す例には若江北遺跡SD560(93)があげられる。この遺構からは中期末から後期初頭の土器が出土(中井 1983)している。

高杯 133 は讃岐の胎土(本書第4章)で、中位がややふくらむ円筒状の脚部である。裾部外面に赤色顔料を塗布している。赤色顔料を塗布する例は、亀井遺跡のSD3008の高杯(14)(若林 1999)がある。この土器も河内V-0様式に比定されている。また、同遺跡では、後期初頭の時期に中部瀬戸内地域から搬入された土器(亀井遺跡II SD-14 高杯 23)の出土(宮崎 1984)がある。高杯 23 は、香川県小山南谷遺跡から出土した高杯 15(片桐 1994)と類似し、さらに福岡県板付周辺遺跡で出土した高杯 58(杉山 1986)とも類似する。これらの遺物を比較検討し、河内-瀬戸内-北部九州の土器の併行関係を明らかにしている(杉本 1996、平井 2002、森岡 2002、濱田 2006)。さらに、第IV~V様式の土器とともに貨泉と銅鏃の出土(堀江 1980)が確認されている。貨泉は現在までに合計4枚出土している。

NR601 から出土した遺物は、これらの河内地域から出土するものと比較した結果、後期初頭に比定できることが判明した。

この他、後期初頭の遺物が出土する河内の主な遺跡には、池島・福万寺遺跡や岩滝山遺跡、久宝寺遺跡などがあげられる。

本遺跡の北東側に近接している池島・福万寺遺跡福万寺 I 期地区の第 11b 面溝 30 からは後期初頭から前葉の遺物が出土しており、同面検出の土器埋納遺構 85 からは第 V 様式の中部瀬戸内系の甕が出土している。さらに同面では掘立柱建物(建物 37・38)が検出(井上 2002)され、居住域の存在が明らかになっている。第 11b 面溝 30 から出土した甕 3 点は、炭素年代測定を行っており、紀元前後になる可能性が 90%以上という結果を得ている(廣瀬 2007)。また、後期の土器に施す連続渦文の考察があり、吉備より搬入される土器との関連を述べている(後藤・井上 1991)。

本遺跡の北東側約 2.0km にある岩滝山遺跡では、後期初頭を中心とした短い期間に数棟の堅穴住居が存在(芋本 1999)していたことが判明している。この遺構は、生駒山地の尾根上の標高 60～100m 付近で検出されている。同遺構からは、長頸壺 35 など他地域から搬入されたと考えられる土器の出土があった。しかし、全体的には、生駒西麓産の土器の割合が高く、他地域の土器はあまり持ち込まれていないという結果を得ている。

一方、河内平野に存在する上記亀井遺跡や久宝寺遺跡でも、中部瀬戸内地域から搬入された土器の出土がある。久宝寺遺跡の 07056 堅穴建物からは後期初頭の多量の遺物と共に、讃岐産の壺が搬入(亀井他 2007)されている。

以上のことから、河内地域の主な遺跡は、後期初頭の時期に中部瀬戸内の特に吉備や讃岐地域と盛んに交流を行っていた可能性が高いと考えられる。(西村)

参考文献

- ・井藤暁子他 1981 『巨摩・瓜生堂』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(財)大阪文化財センター
- ・村上富喜子 1996 「第 IV 章 第 1 節 土器」『河内平野遺跡群の動態 III』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一北遺跡群 弥生時代中期編一 大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・中井貞夫 1983 『若江北』近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書(財)大阪文化財センター
- ・若林邦彦 1999 「第 II 章 土器・土製品」『河内平野遺跡群の動態 VII』近畿自動車道天理吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一南遺跡群 弥生時代後期～古墳時代前期編一 大阪府教育委員会 (財)大阪府文化財調査研究センター
- ・井上智博他 2002 『八尾市・東大阪市所在 池島・福万寺遺跡 2 (福万寺 I 期地区) 一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書一』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 79 集 (財)大阪府文化財センター
- ・廣瀬時習 2007 『東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在 池島・福万寺遺跡 3 一恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書一(池島 I 期地区)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第 158 集 (財)大阪府文化財センター
- ・後藤信義・井上智博 1991 「池島・福万寺遺跡の連続渦文を有する土器をめぐって」『東大阪市池島町・八尾市福万寺町所在 池島・福万寺遺跡 発掘調査概要』一 89-1～6 調査区の概要一 (財)大阪文化財センター
- ・芋本隆裕 1999 『岩滝山遺跡第 5 次調査発掘調査概要』(財)東大阪市文化財協会
- ・宮崎泰史他 1984 『亀井遺跡 II』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 III (財)大阪文化財センター

- ・片桐孝浩 1994 『小山・南谷遺跡』平成5年度 県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- ・杉山富雄他 1986 『板付周辺遺跡調査報告書(11)』下水道工事に伴う調査(1984・85年度)福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集 福岡市教育委員会
- ・杉本厚典 1996 「東部瀬戸内と北部九州の弥生時代後期初頭の土器編年の平行関係」『香川考古 第5号』香川考古刊行会
- ・平井典子 2002 「中・四国から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度 橿原大会 研究発表資料集』日本考古学協会2002年度 橿原大会実行委員会
- ・森岡秀人 2002 「近畿から見た併行関係と実年代資料」『日本考古学協会2002年度 橿原大会 研究発表資料集』日本考古学協会2002年度 橿原大会実行委員会
- ・濱田延充 2006 「弥生時代後期初頭の实年代に関する覚書」『喜谷美宣先生古希記念論集』喜谷美宣先生古希記念論集刊行会
- ・堀江門也他 1980 『亀井・城山』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)大阪文化財センター
- ・亀井 聡他 2007 『八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅷー寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他ー』(財)大阪府文化財センター調査報告書 第156集 (財)大阪府文化財センター

圖 版



調査地遠景(南東上空から)



調査地遠景(東上空から)



調査地近景(東上空から)



調査前の状況(西から)



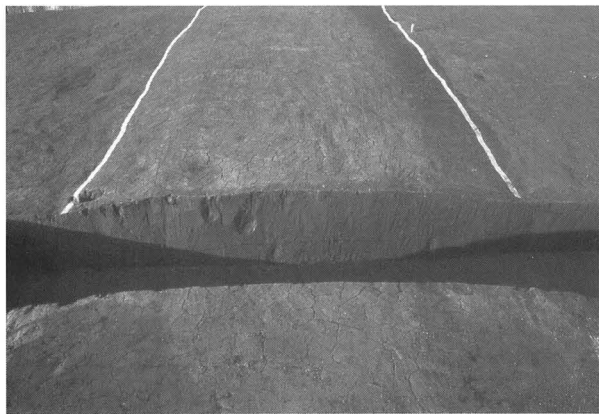
第1面全景(東から)



水田106内足跡検出状況(西から)



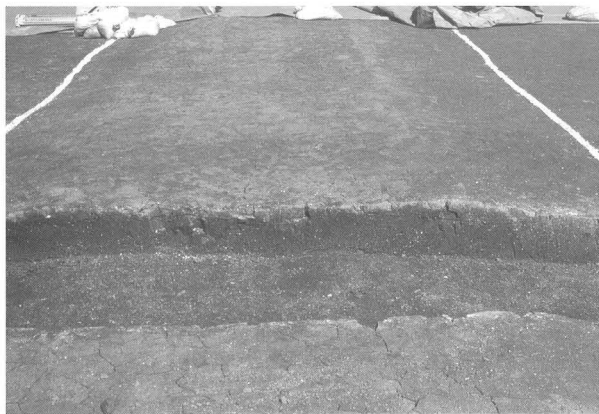
畦畔101断面(南から)



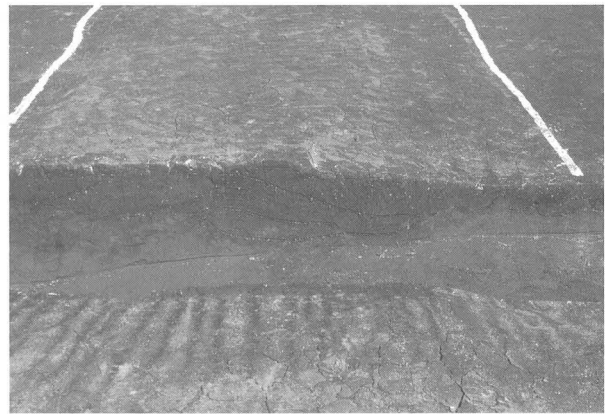
畦畔102断面(南から)



畦畔103断面(南から)



畦畔104断面(南から)



畦畔105断面(南から)



第2面東部全景(上空から 上が北)



第2面東部全景(東から)



S O201 杭検出状況全景 (北東から)



S O201 杭検出状況 (南東から)



S O201 杭 1 ~ 杭 11 検出状況 (南西から)



S O201 杭 16 ~ 杭 20 検出状況 (南西から)



S O201 杭 31 ~ 杭 34 検出状況 (南西から)

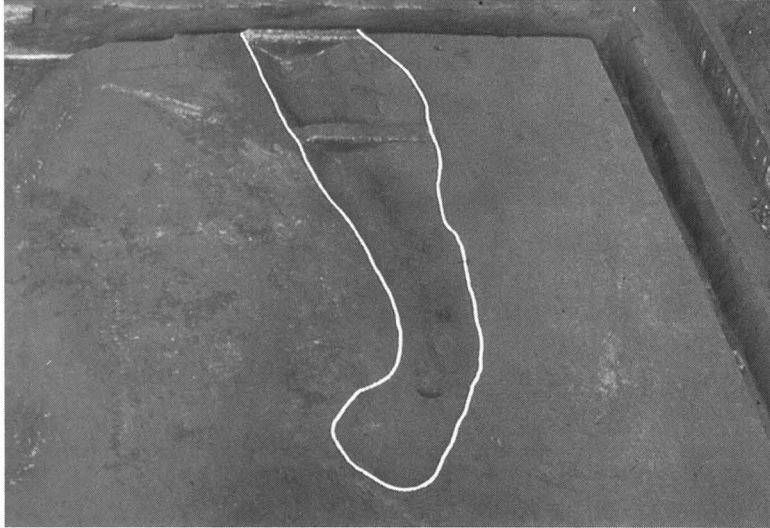


第3面東部全景(北から)



第3面東部全景(南から)

図版
8



S D301 (南から)



S D301遺物出土状況【遺物番号14】(南から)



S D301遺物出土状況【遺物番号15】(南から)



第4面全景(東から)



S D401~S D403(上空から 左が北)

図
版
10



S D401断面(南西から)



S D401遺物出土状況【遺物番号52・S3・S5】(北西から)



S D401遺物出土状況【遺物番号59】(南から)



S D402断面(南西から)



S D402杭1～杭5検出状況(西から)



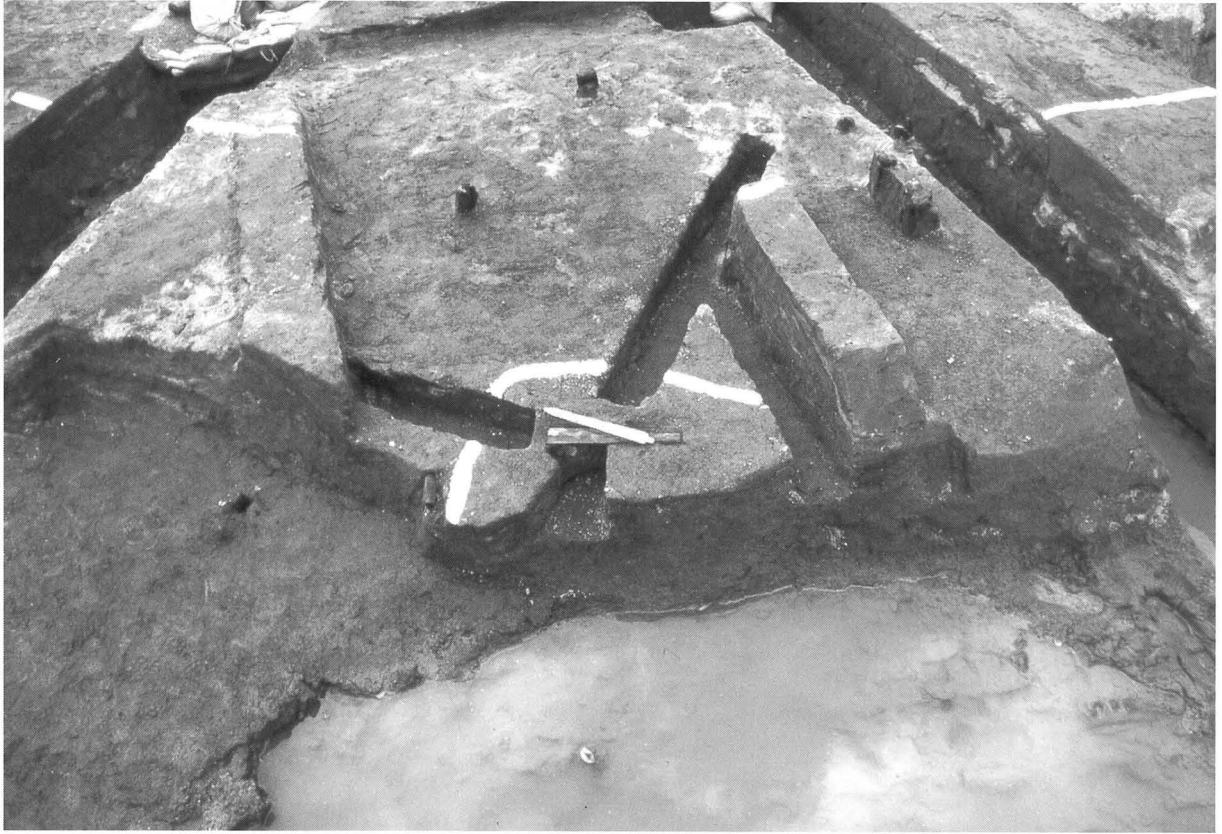
S D403遺物出土状況【遺物番号77】(南から)



第5面東部全景(東から)



第5面東部全景(南西から)



S K501 (東から)



S K501 (西から)



S K501断面A-A' B-B' (南から)



S K501断面A-A' (南から)



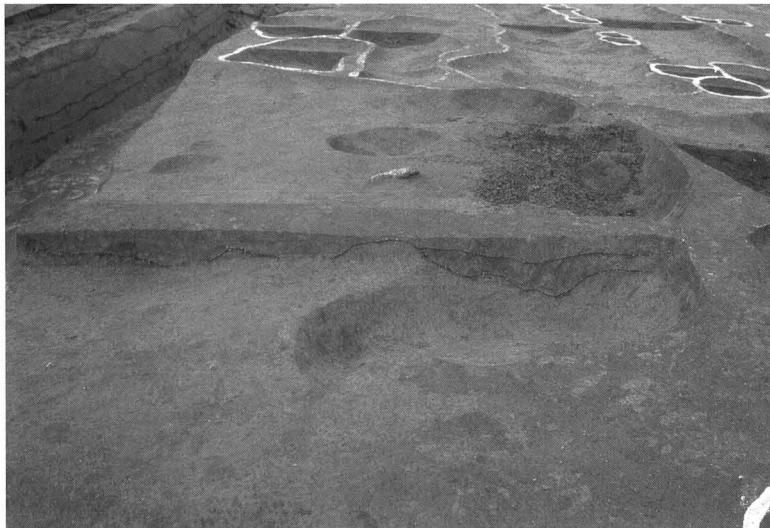
S K501断面 B-B' (南東から)



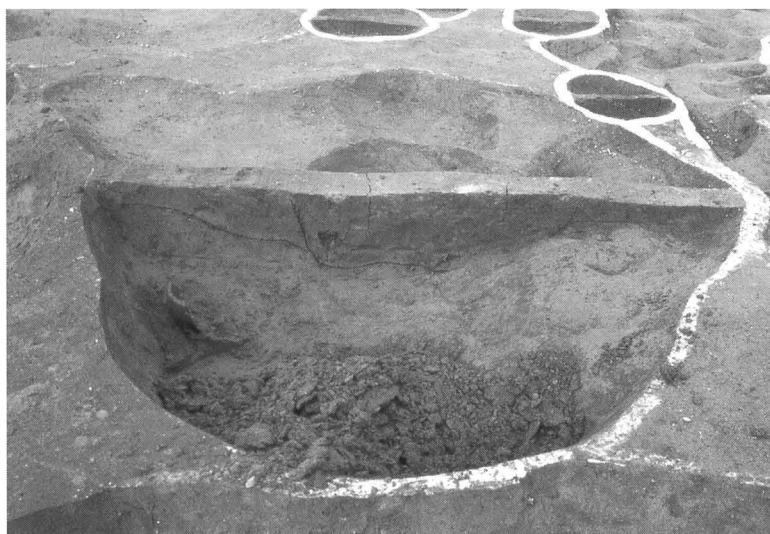
第6面西部全景(上空から 上が北)



第6面西部全景(西から)



S K 602断面(南から)



S K 603(南から)



S K 603遺物出土状況(南から)



第6面東部全景（東から）



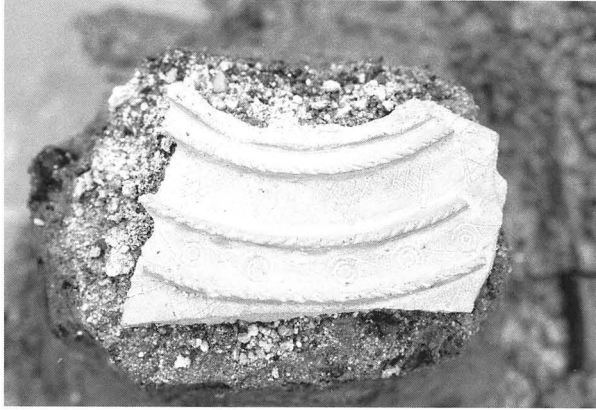
NR601全景（南から）



NR601西部断面(南から)



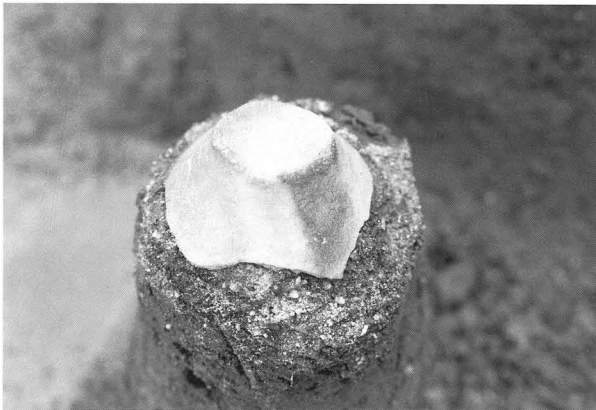
NR601東部断面(南から)



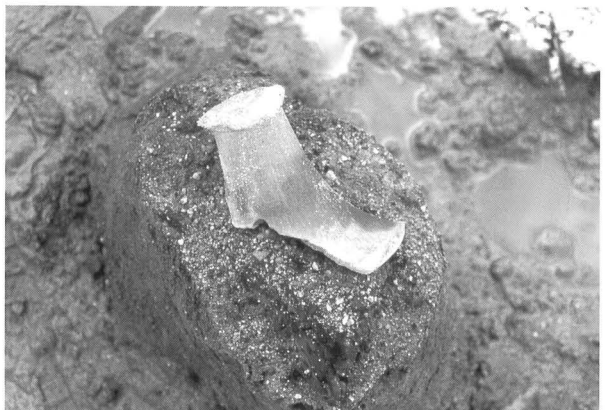
N R601遺物出土状況【遺物番号102】(南西から)



N R601遺物出土状況【遺物番号108】(西から)



N R601遺物出土状況【遺物番号112】(北から)



N R601遺物出土状況【遺物番号132】(北から)



N R601遺物出土状況【遺物番号135】(南東から)



N R601北西側杭検出状況(南東から)



N R601杭10検出状況(南から)



N R601杭11～杭13検出状況(南から)



第7面全景(東から)



NR701遺物出土状況【遺物番号147】(南から)



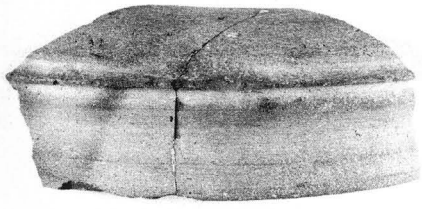
NR701遺物出土状況【遺物番号148】(南から)



NR701遺物出土状況【遺物番号157】(西から)



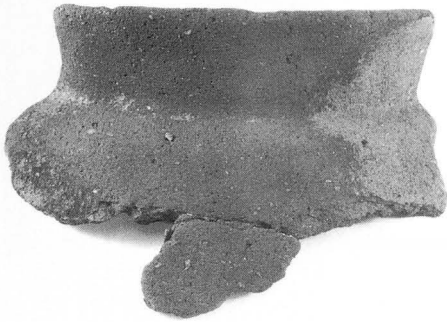
NR701遺物出土状況【遺物番号137】(南から)



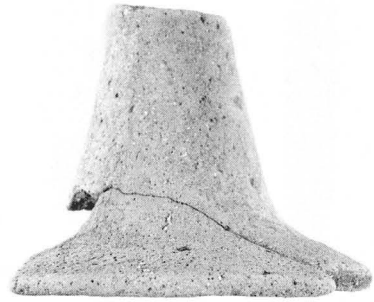
1



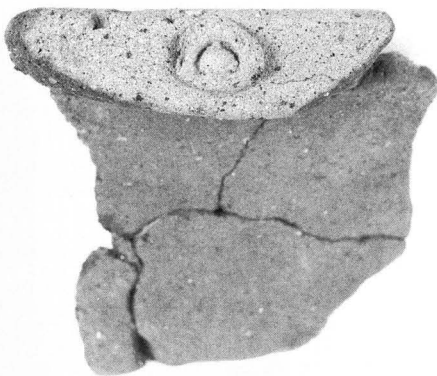
2



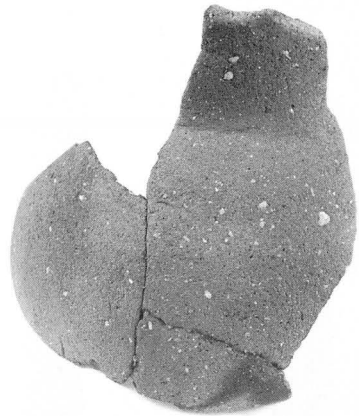
4



6



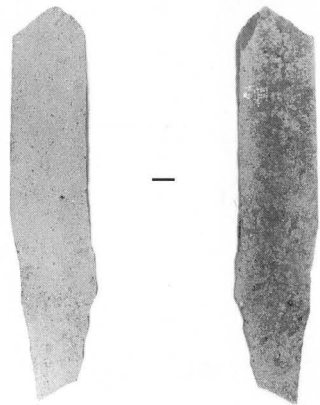
7



9



12



S 1

SO201出土遺物(1)

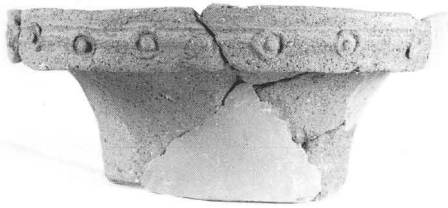




14



15



17



18



20



22



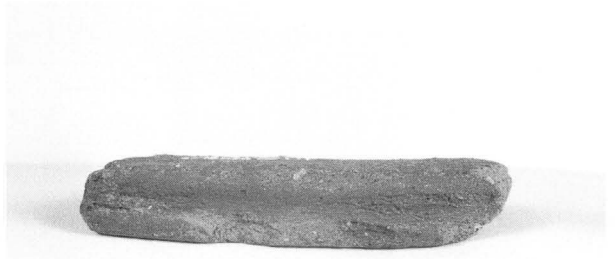
23



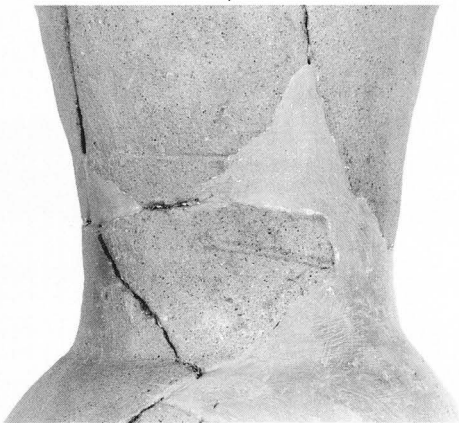
26



31



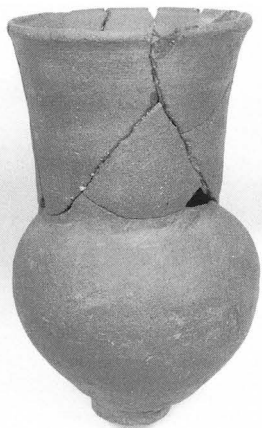
34



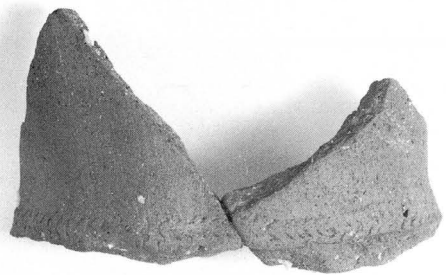
35



36



38



39



40



44



45



46



47



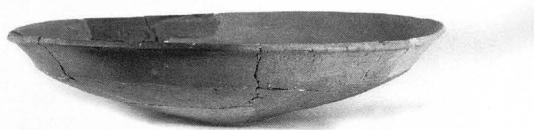
48



49



53



55



59



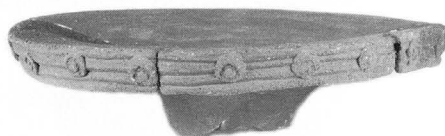
65



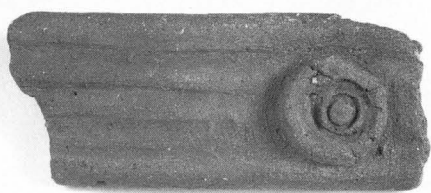
68



70



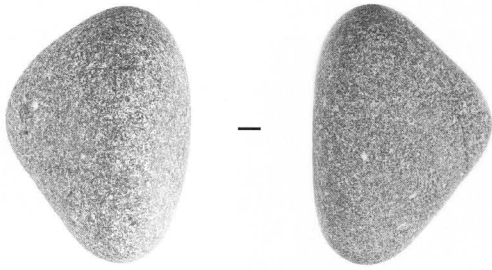
71



72



S 2



S 3



S 6



W11



W12



W13



W14



W15



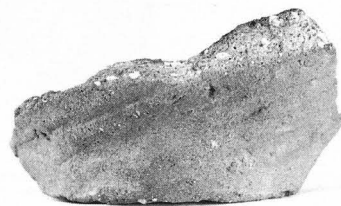
77



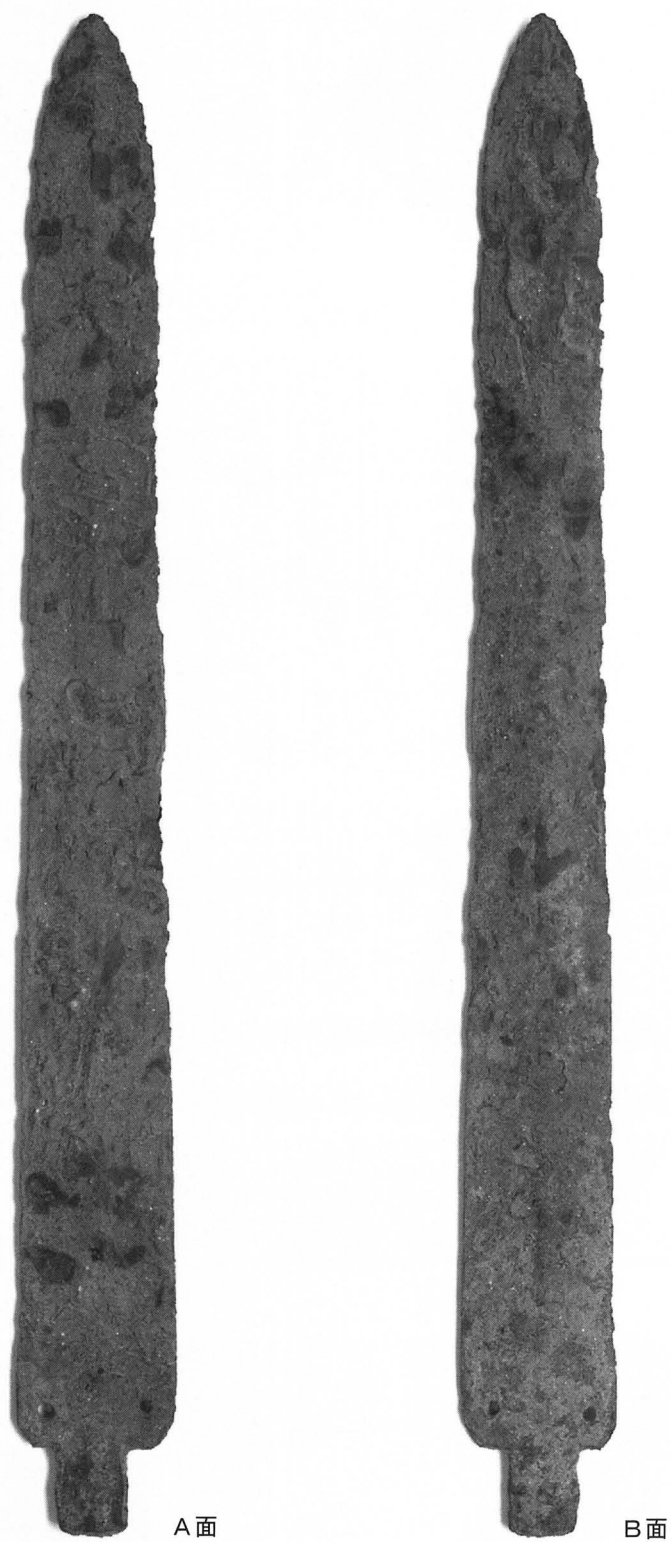
78



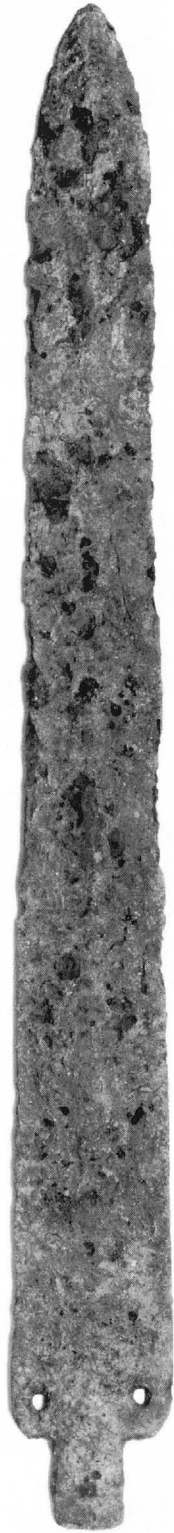
79



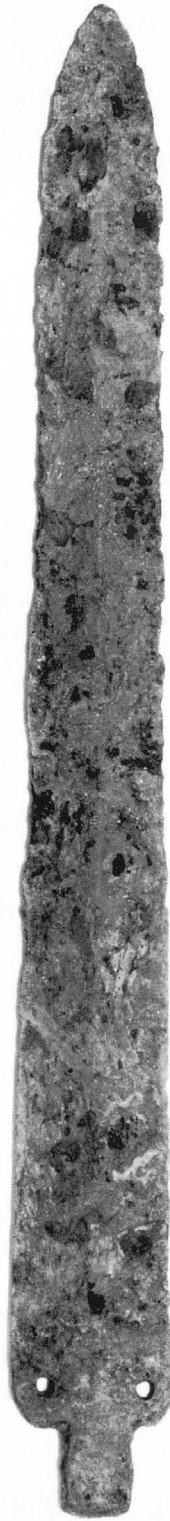
80



F 1
保存処理前



A面



B面

F 1
保存処理後

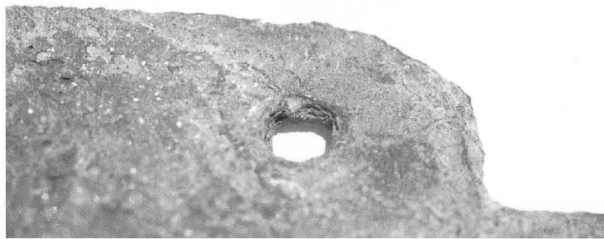
S K 501 (F 1) 出土遺物



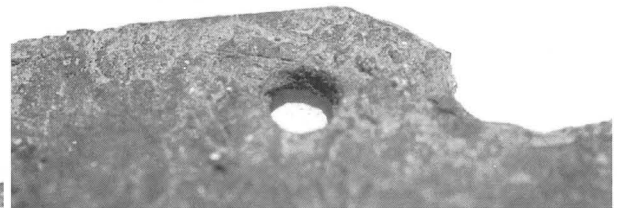
A面基部



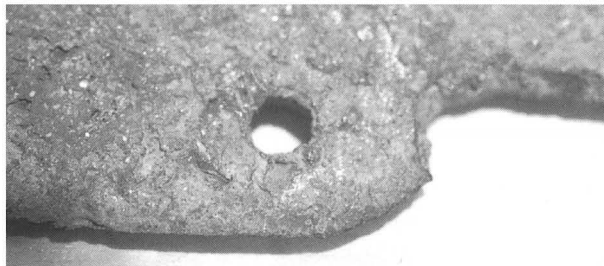
B面基部



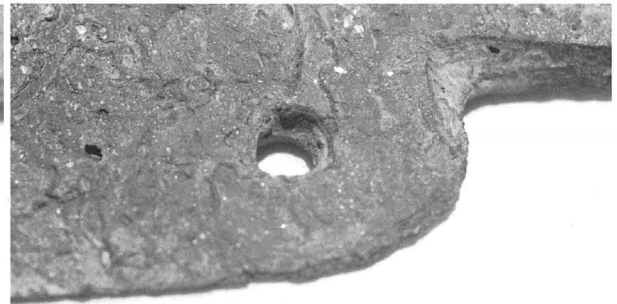
A面右関部



B面右関部

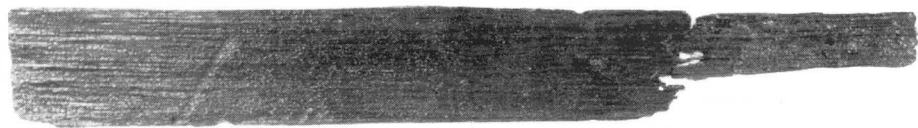


A面左関部

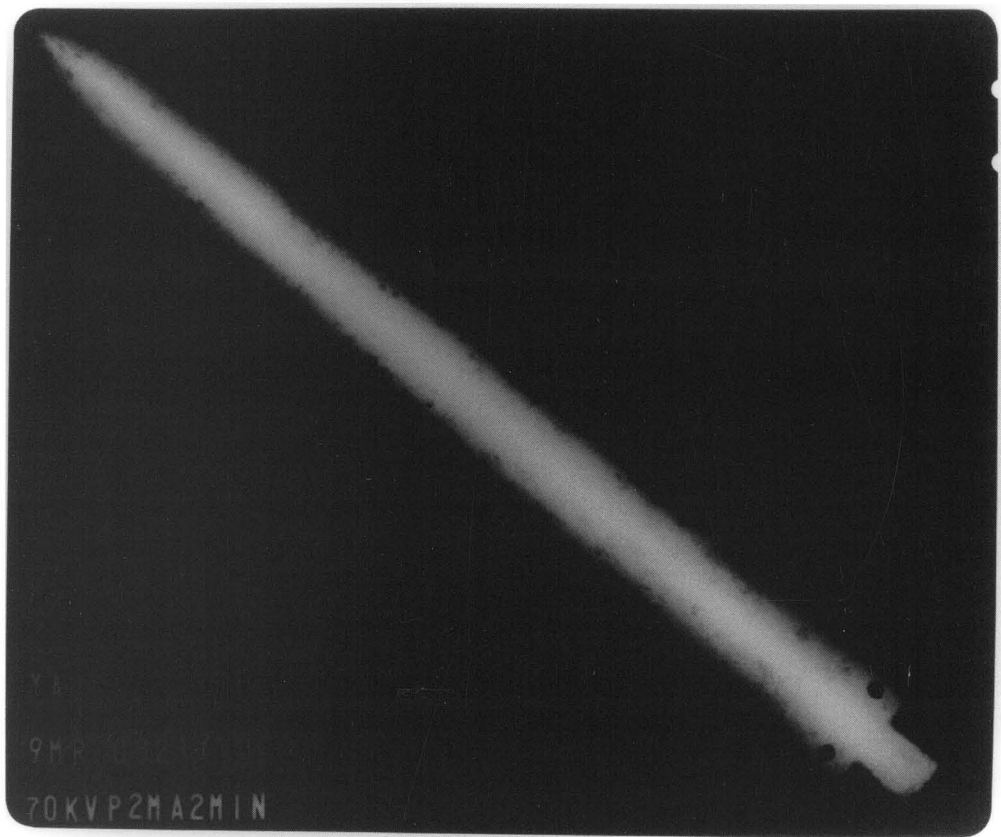


B面左関部

F 1

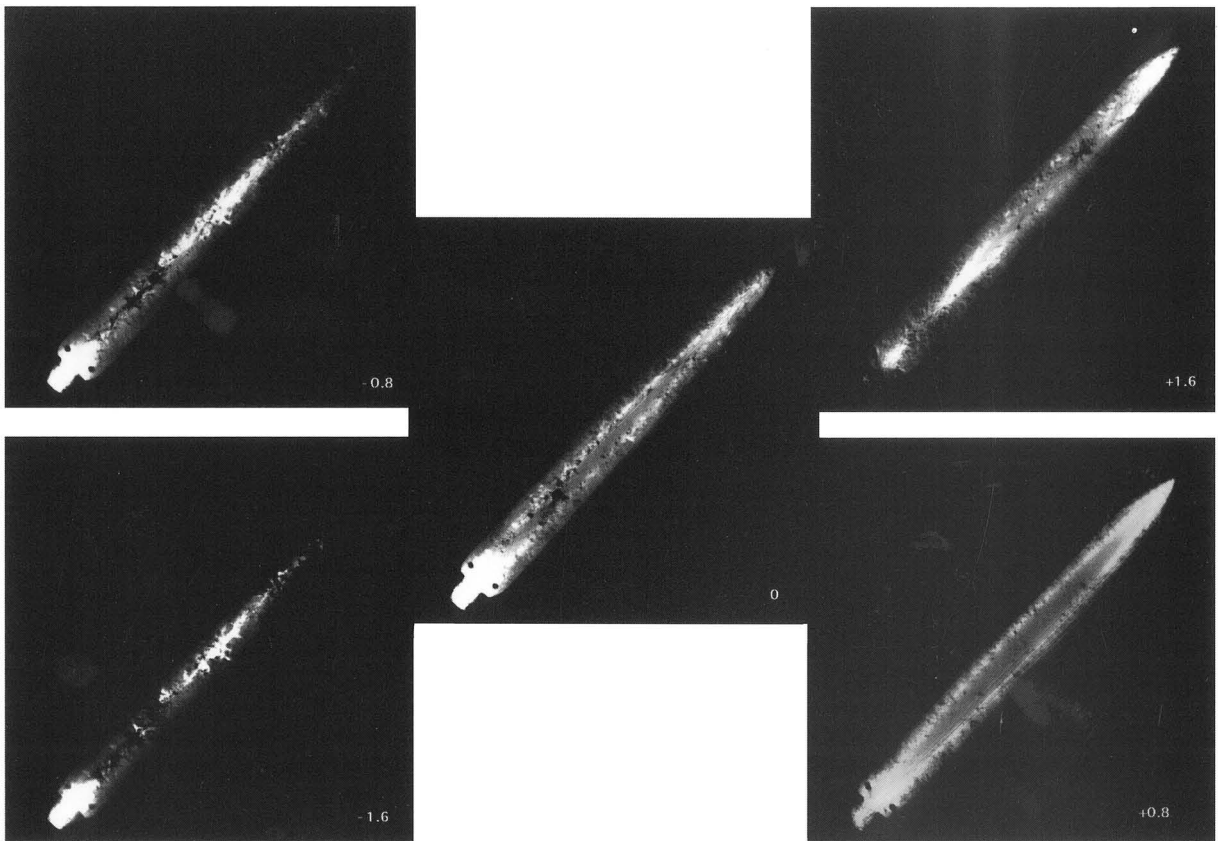
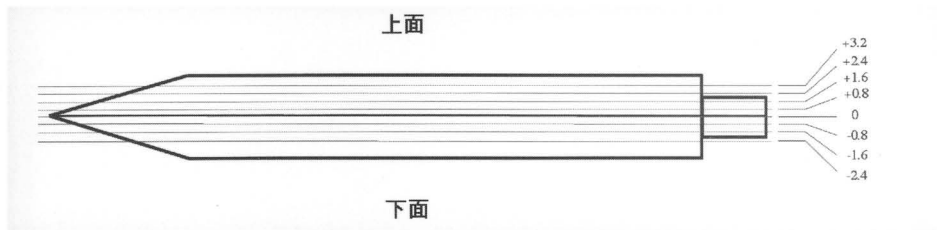
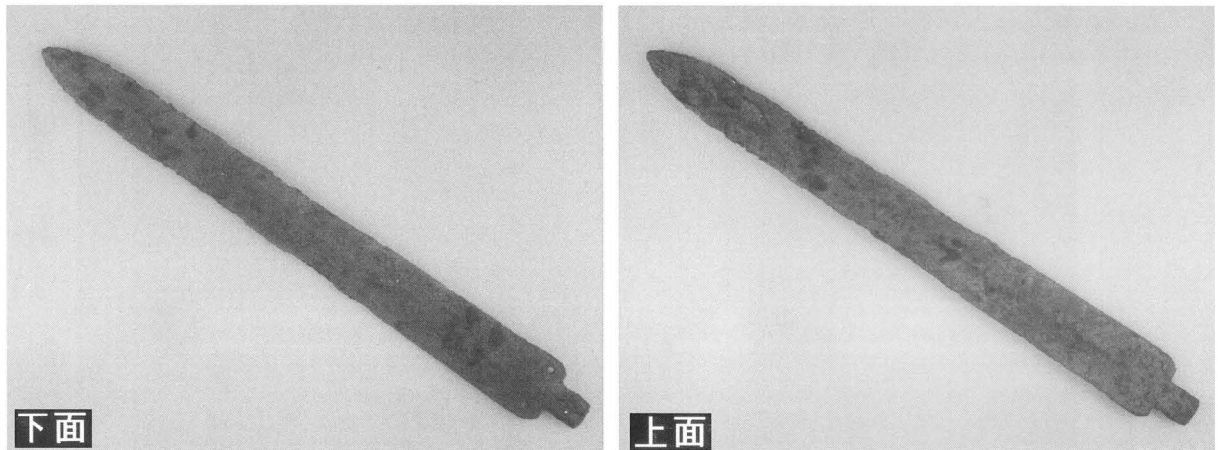


W16



鉄剣 X線透過 (財)元興寺文化財研究所撮影

S K501出土遺物



鉄剣 X線CT 奈良国立文化財研究所撮影

S K501出土遺物



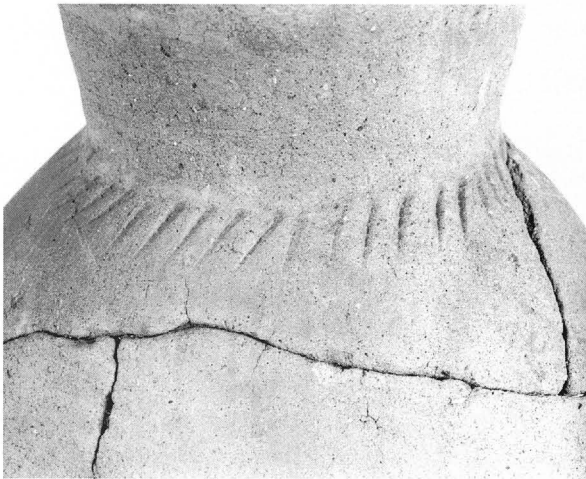
82



|



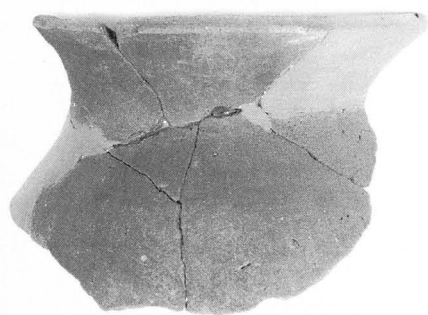
84



83



85



91



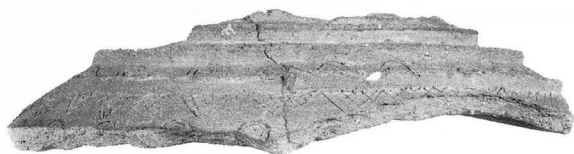
95



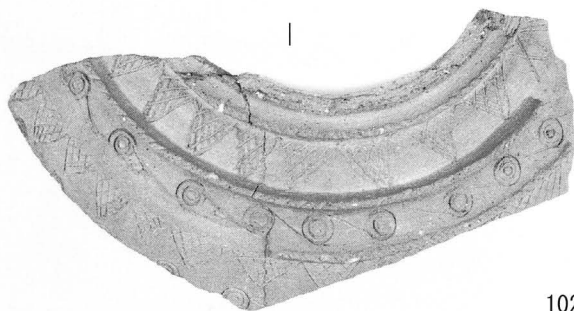
98



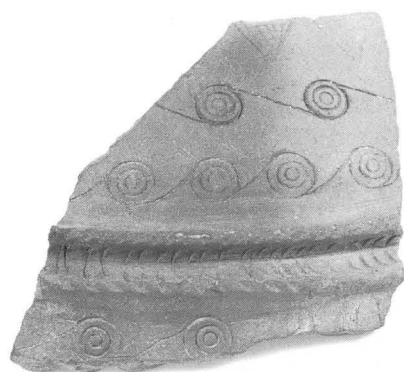
99



101



102



103



104



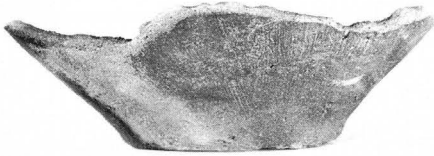
105



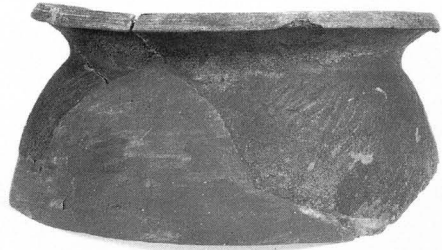
106



108



112



116



117



119



125



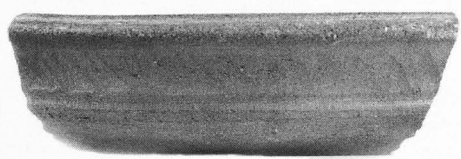
126



125



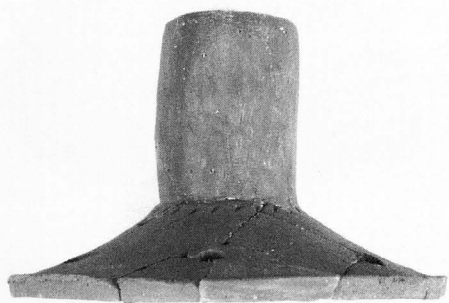
126



127



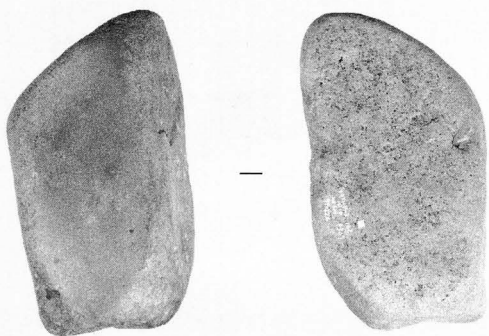
132



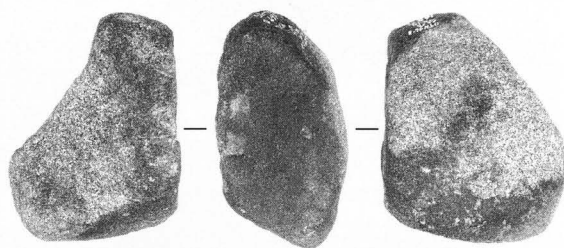
133



135



S 9



S 10



W17



W18



W19



W20



W21



W22



W23



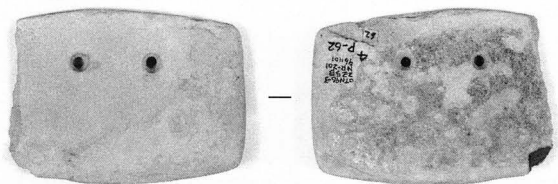
W24



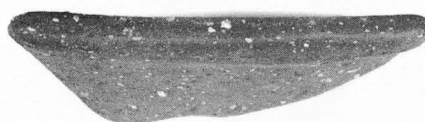
137



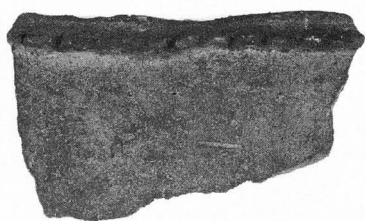
143



S11



145



146



147



148



149



150



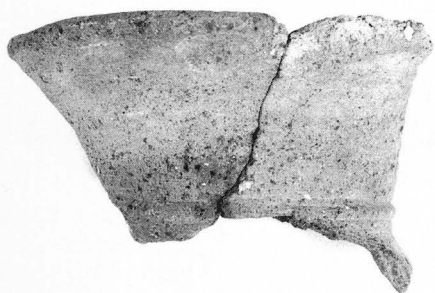
151



152



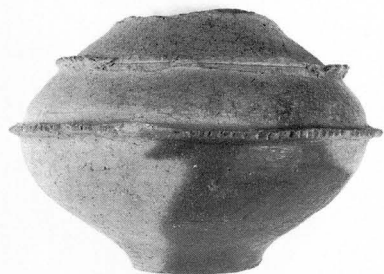
153



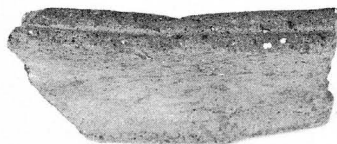
154



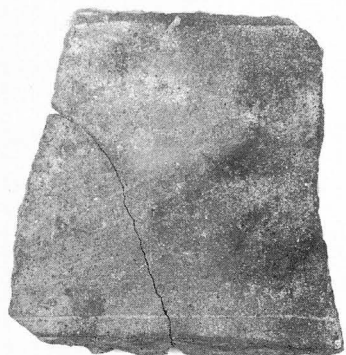
156



157



159



161



166



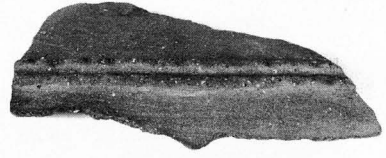
168



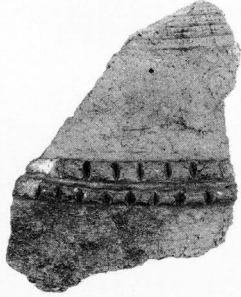
169



178



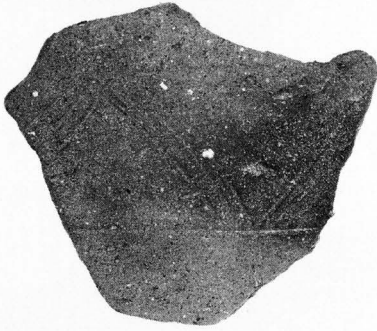
179



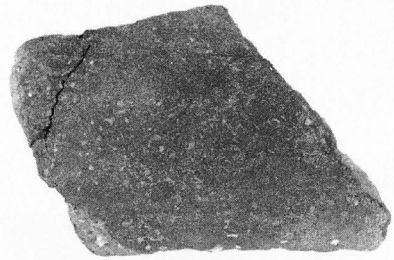
180



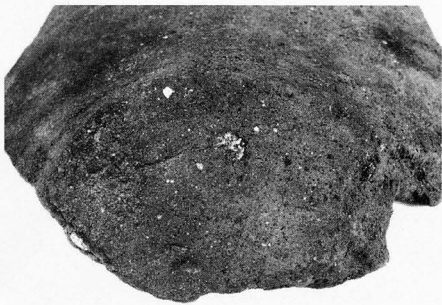
182



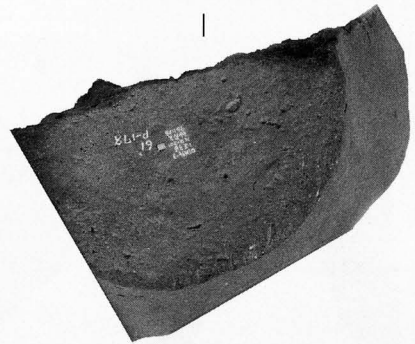
183



184



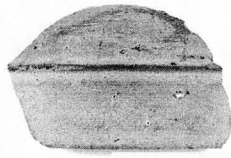
185



186



244



245



246



1



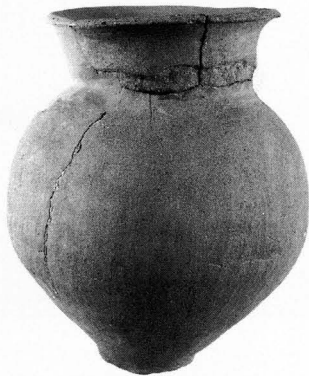
243



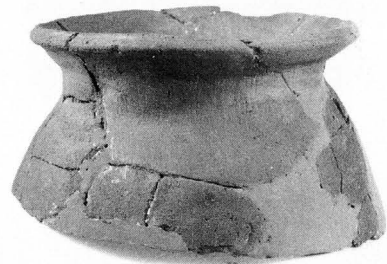
250



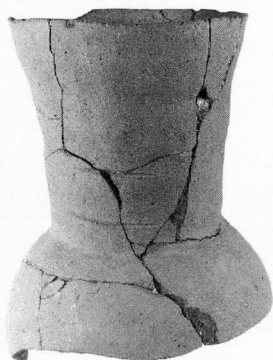
252



256



258



259



260

第Ⅶ層(243~246) 第Ⅷ層(250・252) 第ⅩⅠ層(256・258~260)出土遺物



263



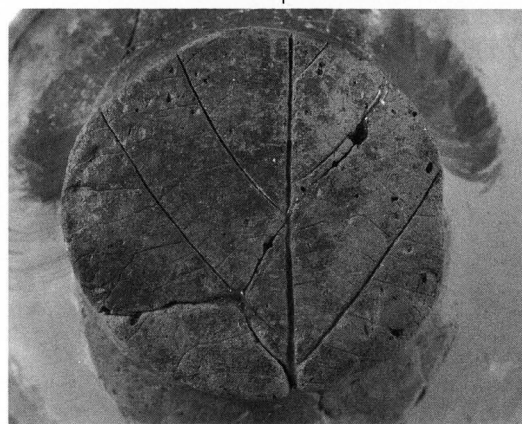
266



271



273



272



274



275



276



277



281



282



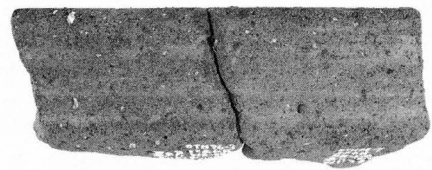
287



291



293



294

報 告 書 抄 録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく106
書 名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告106
副 書 名	大竹西遺跡 第3次調査 -八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告-
巻 次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	106
編著者名	西村公助 樋口 薫 村田忠繁 三ツ井誠一郎 永井 巖 奥田 尚 渡辺正巳 松田順一郎
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2008年1月31日

ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
おおたけにしせいせき 大竹西遺跡 (第3次調査)	おおさかふやおしかみおちよう7ちようめ 大阪府八尾市上尾町七丁目	27212	54	34度35分 47秒	135度42分 17秒	19960819 ~19970331	約2,000	八尾市 立屋内 プール 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大竹西遺跡 (第3次調査)	集落	縄文時代晩期～弥生時代 中期末 弥生時代後期初頭 弥生時代後期前半 弥生時代後期後半 古墳時代中期 平安時代後期～鎌倉時代 前期	河川 土坑 小穴 溝 河川 溝 溝 土坑 小穴 溝 落ち込み 水田 畦畔	縄文土器 弥生土 器 弥生土器 鉄剣 弥生土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦器	弥生時代後期初頭に埋納 した鉄剣が出土した。
要 約		第1面では、平安時代後期～鎌倉時代前期のほぼ等間隔に並ぶ南北方向の畦畔で区画された水田を検出した。この水田は条里に伴うもので、本調査地一帯は生産域であったことが判明した。第2面では、古墳時代中期の落ち込み内で、列を成す杭を確認した。何らかの施設が存在していたと推測できる。第3面では、弥生時代後期後半の南西～北東方向の溝を、第4面では、弥生時代後期前半の同方向の溝を検出した。3・4面で検出した溝は、環濠の可能性が考えられる。第5面では、弥生時代後期初頭の土坑から鉄剣が出土した。第6面では、西部で弥生時代後期初頭の居住域を、東部で同時期の河川を検出した。第7面では、縄文時代晩期～弥生時代中期末まで機能していた河川を検出した。この河川は、埋没の過程が追え、埋没した後、自然堤防が形成され、この堤防上に弥生時代後期の居住域を構築している環境であったことが判明した。			

財団法人 八尾市文化財調査研究会報告106

大竹西遺跡

第3次調査

－八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告－

発行 平成20年1月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821

大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2

TEL・FAX 072 (994) - 4700

印刷 服部印刷株式会社

〒578-0903

東大阪市今米一丁目16番1号

TEL 072 (961) - 1634 FAX 072 (961) - 8481

表紙 レザック66 〈260kg〉

本文 ニューエイジ 〈70kg〉

図版 マットアート 〈110kg〉

